
IS 「白を纏いしHeaven Sword」

クロワッサン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 「白を纏いしHeaven Sword」

【Nコード】

N6683S

【作者名】

クロワッサン

【あらすじ】

彼は一度戦うことをやめた。自分の罪に悩みながらも仲間を支えられて考え方が変わっていく。彼が本当の意味で理解した時、彼は一步前へ踏み出す。運命は彼を選び、世界の存亡をかけた戦いに引きずり込む。レギオスの要素を組み合わせた作品です。なおこの作品では主人公がテレシアで働いています。ISのキャラが一部変わっていますが、それでもいい方はどうぞ。

第一話 世界で唯一ISを使う男(前書き)

はじめまして！クロワッサンです。

昔そう呼ばれてました。(〓〓〓)

主人公がまじめで面白くないかもしれませんが
よろしく願います!!

第一話 世界で唯一ISを使える男

IS 正式名称は『インフィニット・ストラトス』。

それは宇宙空間での活動を目的として作られたマルチフォーム・スーツ。

しかしその願いはかなわず、世界を揺るがした「白騎士事件」以来それは世界最高の兵器となり

結果的にスーツという形になった。しかしここで重要になってくるのは「女性にしか使えない」

ということである。ここにいる一人の男子を除いて・・・

「この状況は流石にまずいと思うんですが・・・」

織斑一夏（おりむら いちか）は動揺していた。

ここはIS学園。IS操縦者の育成機関。当然周りにいるクラスメイトは全員女子。

一番前で真ん中の席の彼には視線が集まる。どこかのパンダもビツクリである。

「織斑一夏君、大丈夫ですか？自己紹介をしてくれると先生は助かるんですけど、ダメかな？」

よほど顔に出ていたのだろうか、気遣ってくれた。ああ、優しさが身に染みる。

山田真耶（やまだ まや）。このクラスの副担任である。

背は小さく、胸は大きく、服はダボダボ。なんてアンバランスなんだろう。

「自己紹介はちゃんとしますから落ち着いてください、山田先生」

笑顔でそういうと山田先生は頬をわずかに朱色に染めていた。なぜ？
とりあえずクラスのみんなに自己紹介をしようとおもって振り返るとクラスメート全員の視線が一夏に集まる。うう、これはつらい。
偶然見つけた幼馴染の篠ノ之箒（しののほづき）に視線を向けるが無視された。まずい、涙が。とりあえず挨拶だが、やるしかない！

「織斑一夏です。趣味は家事全般、あと機械いじりもやってます。体を動かしているのが好きです。世界で唯一ISを動かせる男子とされていますがあまり気にしないでください。みんなと一緒にこれから学んでいけたらいいなと思ってます。よろしくお願いします」

一礼してバイト先で培った営業スマイルをした。あれ反応がない・・・。
ん？あそこにいる女子達は鼻血を出してるけど、大丈夫なのか？

「なんで教室が血で汚れているんだ？」

「っ！姉さん？」

スパアン！出席簿が襲ってきたが左腕でガードした。すごく痛い。なんて威力だ。まずい。腕が痺れてる……

「よく防いだな。だが、ここでは織斑先生と呼べ。わかったな？」
「わかりました。織斑先生……しかし出席簿で殴るのはどうかと思うんですが」
「安心しろ。折れるような叩き方はしていない」

あれだけ強く叩いたのに姉さんはいったいどうやったんだか。この人が姉の織斑千冬（おりむら ちふゆ）である。

「あ、織斑先生。もう会議のほうはいいんですか？」
「会議のほうは終わった。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな、山田君」
「いえいえ、これぐらいはしないと」

いつになく優しい姉。普段からこうしていればいいのに……

「諸君、私が織斑千冬だ。君達を一年間で使い物にするのが私の仕事だ。私の言うことは絶対に守れ。でなければ命はないと思え、いな」

なんとういう恐怖政治。いや、恐怖授業か。しかしクラスの女子の反応はというと……

「キヤアアアアアアアア！本物の千冬様よ！」

「私ずっとファンでした！」

「私は千冬様に会うために北九州から来ました！」

「お姉様のためなら死ねます！」

黄色い声が教室を埋め尽くす。姉さんはこつこつこの嫌いだろつな。

「毎年よくこれだけの馬鹿者が集まるものだ。もしかして私のクラスだけか？」

実際、姉さんは本当にうつうつしそうに溜息をついていた。

「キヤアアアアアアアアアア！お姉様、もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰けをして〜！」

どこの宗教だよ。この学園は大丈夫なんだろうか。いろんな意味でどうでもいいことを考えていると、姉さんがあきれた顔で聞いてくる。

「で、おまえはなにをしたんだ、織斑？」

「いえ、普通に笑顔で挨拶しただけですけど？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

姉さんはなぜかそこでこめかみ押さえてを考え込んでしまった。挨拶は基本だから何の問題もないはずだが。

「まあいい。SHRが終われば休み時間の後にすぐ授業にはいる。お前達くれぐれも遅れないように」

こうして学校の初日は始まるのであった。

SHRが終わって休み時間なんだが今度は廊下から視線が・・・・・・・・・・もはや珍獣扱いである。どっかの鮫人間が青い珍獣とか言ってたけどそれ以上だ。た、助けて・・・・・・・・

「ちょっといいか？」

誰かと思い振り向けばそこには幼馴染も篠ノ之箒がいた。六年ぶりの再会である。

「いいですが屋上に行きましょう。廊下だと人が多すぎるので」

とういうことで今は屋上。お互いに言葉が出てこない。久しぶりにあったが少し気まずいという雰囲気だった。多分あっちもあっちで気まずいのだろう。よし、こっちから話しかけよう。

「お久しぶりです、篠ノ之さん。六年ぶりですね」

話しかけたのはいいが篠ノ之さんはどこか不機嫌だった。

「一夏、おまえ変わったな」

「六年もあれば人は変わると思いますが。まあ篠ノ之さんだとすぐにはわかりましたけどね」

「そ、そうか。どうしてだ？」

「髪型が昔と変わってませんから。知り合いがいるとわかったときは少し安心しました」

「そうか。私を見て安心したんだな？」

「はい」

そついうと篠ノ之さんの表情は和らいでいた。よかった、正直悪い意味で張り詰めた空気は苦手だ。でもこれならもう大丈夫かな。

「しかし一夏、どうしてそんな口調になった？」

「いろいろとあつたんですよ」

「そうか……」

また沈黙。そしてどこか表情が暗い。うーん、何か話題はないのか……これだ！

「去年の剣道の全国大会での優勝おめでとございます」

「ど、どうしてそのことを知っているんだ？」

「新聞で見たんですよ。写真に写ってた篠ノ之さん、とっても綺麗でしたよ」

「そうかそうか。わたしは綺麗だったか。フフ」

まあ、綺麗と言われて気を悪くする女性はいないだろう。

キンコーンカーンコーン

こうして話しているうちに予鈴がなった。

「篠ノ之さん、急ぎましょう。」

遅れたら織斑先生からなにを言われるかわかりませんから」

「そうだな。では行くとしようか」

久しぶりの会話はとても楽しかった。篠ノ之さんの機嫌もよくなっ

ているのでとりあえずよしとしよう。

一時間目。IS学園の授業はかなりハイレベルだった。一応学校に来る前に予習はしておいたがやっぱり難しい。これ以上はついていけないか不安だ。一時間目が終わりそうな頃に山田先生がどこか分からないところがあったら教えてくれるそうなので放課後に予習を兼ねた補習をしてくれるようになった。ありがたい。放課後だからって変なイベントはないよ？

二時間目が終わりもう視線は無視することにした。
気にしたら負けだ、うん。

「ちょっと、よろしくて？」

「はい、何でしょう？」

そこには金髪でロールがかかった女性がいた。しかし、腰に手を当てた格好は自分から貴族ですといってるようなものだった。ああ、こういう女性もよくお店に来るなあ。いつも対応にこまる。

「聞いてますの？」

「はい。ちゃんと聞いてます。

えっと、たしかセシリア・オルコットさんでしたよね」

「そうです。わたくしが入試主席でイギリスの代表候補生のセシリ

ア・オルコットですわ!」

「代表候補生って確か国を代表するエリート中のエリートだったはず……」

「そう! エリートなのですわ! 本来ならわたくしのような選ばれた人間と同じクラスになるだけでも奇跡。そこをあなたはやんと理解していらっしやるのかしら」

本当に対応に困る典型的な女性だ。正直これ以上もうしゃべりたくない。

「それにしても世界で唯一ISを使える男と聞いていましたが、たいた人ではありませんね。期待して損しましたわ。それでもわたくしは優秀ですから、ISのことなら何でも教えて差し上げますわよ。」

何せわたくしは入試で唯一教官を倒したエリートなのですから!」

その『唯一』のところに違和感を覚えた。

「僕も教官を倒しましたよ?」

あとで思い出したことだけどその時の試験官は山田先生だったとか先生。生徒の見本になるような操縦をして下さい……

「わたくしただだと聞きましたか?」

「女子だけでという可能性は？」

「あなたも教官を倒したって言うの？」

そついうと机を叩いて聞いてきた。怖いですって。

「お、落ち着いてくださいオルコットさん！」

「これが落ち着いていられるはずがありません！！」

キンコーンカーンコーン

「話はまた後でしますわ。」

次の休み時間は全力で逃げよう、うん。

第一話
終

第一話 世界で唯一ISを使う男（後書き）

いかがでしたか？

初心者なのでいろいろとアドバイスお願いしますm（| |）m
できれば罵声は少なめで・・・

次回は一夏の設定にしたいと思います。応援よろしくお願いします
！！

設定 主人公（前書き）

タイトル通り主人公の設定です。

設定 主人公

名前：織斑おりむらいちか一夏

15歳

世界で唯一ISを動かせる男。顔よし、成績優秀、スポーツ万能。

趣味は体を動かすこと、家事や機械いじり。『製作者』しか扱えないといわれているISのコアもその気になれば改造できる。

喫茶店でバイトしていたがその高すぎる能力が評価され高級ホテル『テレシア』一（IS七巻参照）から直々にスカウトされた。

レストランで接客もすれば、シェフとして自ら厨房に立つことも。

メニューは彼のオリジナル。

IS学園に通うことになったので忙しくて仕事にいけなくなるのがしばしば。

お客様から文句が来るとか？

中学のころはある道場で数人の達人から技を教わり、全て自分のも

のしている。

生身なら常人を遙かに凌ぐ戦闘能力である。地上でならISを抜き去る程の速さ。

しかしある事件がきっかけで今は一切力を使っていない。

それでも日々の鍛錬は怠っていない。これは彼がまじめであることもそうだが、

一番大きいのは師達を尊敬しているからである。

設定 主人公（後書き）

レギオスのレイフォンが力の誤って使ったところを
反映させてます。ISに関しては出してからという事で
では、時間があったらまた書きます。

第二話 クラス代表に・・・なぜ？（前書き）

前回の終わりあたりの一夏が自分が思い描いているのとだいぶ違ってました。

書いてると不思議なものですね。一話ですが本当に原作通りです。では、どうぞ！

第二話 クラス代表に・・・なぜ？

三時間目の授業の担任は姉さんだった。

三時間目はISの装備についての授業だが他にやることがあるようだ。

「来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めようとおもつ。代表者は簡単に言えばクラス長だ。IS学園のあらゆる行事に参加してもらつ。一年間変更はないから決まったものは責任を持って取り組むように」

姉さんがそういうとクラスで誰がいいかの、自分はちょっとなどい
るんな声が聞こえてくる。正直僕はやりたくない。面倒だとい
うこともあるが力を振るうのはもうゴメンだ。

「はいつ。織斑君を推薦します！」

は？待ってください。僕はやりたくないなんて一言も・・・

「私もそれがいいと思います！」

なっ。僕はもう戦いたくないのにこれはまずい。姉さんに相談しなくちゃ。

「織斑先生！！僕はクラス代表なんてやりたくないです。取り消してください！！」

そついうと姉さんは考え込んでしまった。確かにこのまま取り消せば理由を聞かれる。それだけは絶対に避けたい。くそつ。どうにかしないと……

「待つてください！実力からしてみればわたくしがクラス代表になるべきです！それをISに関して全く経験のないサルにクラスの見本になるべき代表を任せてはなりませんわ。そもそも文化としても後進的なこの国で暮らさなくてはいけないこと自体わたくしには耐え難いことですので……」

「だまれ」

自然と声が出ていた。ここまで言われては反論しないほうがおかしい。

「そついうイギリスはどうなんです？世界一まずい料理で有名なのはどこだったか。」

「あなた！わたくしの祖国を侮辱しますの？」

「先に侮辱したのはあなたです。僕はなんと言われようがかまいま

せん。しかしこれだけは言わせてもらいます。あなたは代表としてふさわしくない！」

「なっ。」

なぜこんなことを言われたいいけないのかという顔してるオルコットさんだったが知るか。

「クラス代表はあなたの言う通りみんなの模範でなくてはいけません。ですが他人を侮辱し、他国まで侮辱するような人が国の代表候補？面白い冗談だ。そんな人を他人がクラス代表としてあなたを認めてくれると思いますか？支持してくれると思いますか？あなたみたいなのが国の代表になれるわけがない！」

「っ！」

オルコットさんは落ち込んでしまった。知るか。こうでもしないと彼女の将来にも影響が出てくる。国の外交問題にでもなったら大事だ。この会話でクラスの雰囲気少し悪くなってしまった。どうにかしようと口を開こうとしたが姉さんの言葉でさえぎられてしまった。

「お互い言いたいことがあるなら勝負したらどうだ？ここはIS学園。ISがあるだろう」

「姉さん！」

なぜなんだ姉さん？僕は戦いたくないといってるのに。

「お待ちください、織斑先生！彼は専用機をお持ちではありません。量産機に勝つてもわたくしの国の威厳が示せませんわ」

「安心しろ。織斑には専用機を用意する」

『え？』

クラス全員が驚いた。当然である。専用機はIS学園に入つてすぐに手に入る代物ではない。ISの核であるコアの数は現在467個。ISの開発者である篠ノ之束（しのののたばね）はそれ以上作っていない。

そうなると国はなにが何でも手に入れようとする。それを一人の人間に与えるなどそれこそ選ばれた人間だ。いわゆる国家代表である。代表候補生は文字通りその見込みがあるエリートだ。オルコットさんみたいな女尊男卑になる女性が出てきてもおかしくない。

「これで話はまとまったな。そろそろ三時間目が終わる。お前ら全員前を向け」

「待ってください！姉さん」

キーンコーンカーンコーン

授業終了のチャイムがこの話は終わりだと告げた。

放課後。

山田先生の講習が終わって帰りの準備をしていると先に帰ったはずの山田先生が戻ってきた。忘れ物でもしたんだろうか？

「織斑君まだいますか？あ、よかったあ。言い忘れてたことがあったんですよ」

「なんですか？」

「織斑君にはこの一週間寮で生活してもらいます」

「あれ？その一週間は自宅から通学だったはずでは？」

「そうだったんですけど、織斑君は事情が事情なので政府の特命で寮生活になってしまったんですけど、聞いてませんか？」

なるほど。絶滅危惧種は保護下にといいことか。まあ、他にいないけどね。

「わかりました。でも荷物のほうが・・・」

「荷物なら私が手配しておいた」

姉さんがいつの間にか来ていた。相変わらず準備が早い。

「ありがとうございます」

「一応確認しておくがあこのウエストポーチだけでいいんだな？」

「はい。それだけあれば十分です」

「まったく、お前は何を毎回のように作っているんだか」

「え？織斑君の荷物ってウエストポーチ一個で足りるんですか？」

「足りませんが、何か問題でも？」

山田先生はわからないという顔をしている。無理もないかもしれない。携帯やカメラを持ち歩くためのポーチならまだわかる。しかしこの場合服はどうするのかということところが問題である。

「山田先生。僕の左手首につけてるこのブレスレットはISの量子変換と同じで服を量子変換すればすぐに着替えることができます。ちなみに服のサイズは自動調整なので全く問題はありません」

山田先生は信じられないという顔をしていた。まあ、こんなのを作れる人は世界中どこを探しても数人だろう。それより……

「姉さん、あとで話があります。いいですよね？」

「別にかまわんが」

そういつて姉さんは教室を出ていった。僕が姉さんと呼んでいいのは学校の外か大事な話のときだ。

今は後者の方だ。そのあと山田先生にお礼を言って別れた。

寮の部屋に行く前に姉さんに二人だけで話せる場所につれてきてもらった。屋上だ。しかし姉さんは星空を見上げるだけでこっちを向いてくれない。

「姉さん。どうして僕がISを使わなくちゃいけないんだ」

「ここにいる限りISを使ってもらわないと困るのでな」

教員としてだろうか。しかしそこはどうでもいい。

「僕はもう二度と姉さんの悲しい顔はみたくないんだ。だからもう力は使わないって決めたのにどうして姉さんは専用機なんて用意するの？」

「私がお前に使ってほしいからだ、一夏」

そういつて振り向いた顔はとても心配そうに僕を見ていた。そんな顔をしないでほしい。だから力は使わないといってるのに。

「すまないな、一夏。正直私もこの話はあまりしたくない」

また空のほうを向いてそう言った。多分今の自分の顔を見せたくない

いからだろっ。

「わかったよ、姉さん。どついう事情かは知らないけど、この話は終わりにしよう。でも僕はよほどのことがない限りISを使わない。それでいいよね？」

「ああ」

「じゃあ僕は寮に行くよ。忙しいだろうけどちゃんと睡眠はとつてね」

「わかっている。さっさと行け」

「はいはい」

そついつて僕は階段を下りていく。

「一夏、私は力の使い方をもう一度考えてほしいんだ。だから・・・」

その咳きは空に散っていった。

第二話 終

第二話 クラス代表に・・・なぜ？（後書き）

千冬さんが弱気なところもいいじゃないかと思って書きました。
作者は皆さんのコメント待ってます。

また来週あたりに更新します。

次回は寮の部屋からクラス代表決定戦まで書きたいです。
それでは、また来週。

第三話 自分の力（前書き）

前回は書いてたら原作から少しずれてました。

スイマセンm(| |) m

第三話一夏はまじめな対処をします。
どうぞ。

第三話 自分の力

姉さんとの会話が終わって自分の部屋である1025室に向かっていた。しかし今の自分の頭の中はさっきの会話のことでぐちゃぐちゃである。姉さんの意図がわからない。あの惨劇を見たのは姉さんだ。またあれを繰り返すなんて僕はしたくない。じゃあ、なぜ？

「考えるだけ無駄か」

そうこうしているうちに部屋に着いた。鍵でドアを開けるとそこは豪華な部屋だった。多分そこらへんのビジネスホテルよりもいい部屋だろう。国立の学校にはお金をかけすぎではないだろうか。それでも……

「さすがに『テレシア』ほどではないかな」

一度手が足りなくなっただけということと清掃の仕事までやった。高級ホテルの部屋だからそれは別次元だった。部屋のありとあらゆるものが白く輝いていた。一般人が泊まれば間違いなく破産だ。カジノで一発当てたぐらいでも無理だろう。そんな部屋だったから徹底的に掃除をした。まあ、綺麗になりすぎてお給料はプラスされました。イエイ！さてこの部屋も暇があったら掃除でもしましょうか。

「誰かいるのか？」

突然シャワー室のほうから声が聞こえてきた。ずいぶん聞き覚えのある声だと思った。まさか……

「同室なつたものか？今シャワーを浴びていたところでな、バスタオル一枚だが気にしないでくれ。私の名前は篠ノ之……」

「篠ノ之さん！待ってください！！」
「篤……だ」

シャワー室から出てくる瞬間に背を向けた。まずい少し見えた。言った通り確かにバスタオル一枚だった。

「一夏か？」

「はい。織斑一夏です。世界で唯一ISを使える男です」

この自己紹介は何回目だろう。ここはIS学園。迂闊だった。ルームメイトが女子であることは容易に想像できたはずなのに。それにしてもなんてタイミングが悪いんだ。神様にでも嫌われてるんじゃないだろうか。

「見たか？」

「いえ、見てません」

「本当か？」

「神に誓ってもいいです」

実際嫌われているなら誓いたくないが。

「とりあえず僕は外に出ます。着替えが終わったら呼んでください。どういふ事情か説明したいので」

「………わかった。」

そういつて篠ノ之さんは部屋の隅にある自分のバックから着替えを出して着替え始めた。自分は当然部屋から出て呼び出しを待った。待っているといつの間にか女子が集まっていた。

「ん？織斑君、なにしてるの？」

「あつ！もしかしてここが織斑君の部屋？」

「いい情報ゲット！」

みんなラフな格好をしている。もう少し人目を気にしてほしいものである。無理か。この学園には男子がない。いや、いるか。今ここに。

「一夏、いいぞ」

あ。終わったのかな。周りの女子に挨拶して部屋に入った。

「さつきは誠に申し訳ありませんでした」

とりあえず一礼して謝る。何事も姿勢からでないとし紳士は務まらない。

「まあ、反省しているのならかまわん。それでどうい事情があるのだ?」

「実は政府の方々がなるべく僕の位置を把握しておきたいとのことで、一週間寮で生活してくれと言われました」

「断ることは出来なかったのか?」

「織斑先生に言われて反抗できると思いますか?」

篠ノ之さんが苦笑いしている。どうやら理解してくれたようだ。助かる。

「あのな、一夏。頼みたいことがあるんだが」

「はい。なんででしょう?」

どこか言いずらそうにしているがどうしたんだろ。叶えられるものだったら何でもするつもりだが。

「篠ノ之さんはやめてくれないか。なんだか違和感があつてな」

そのことか。昔は箒と読んでたっけ。でも今は仕事場の口調が板についてしまっている。

「わかりました。箒さん」

これで大丈夫だと思つたが箒さんはどうも納得がいかないという顔をしていた。

「やっぱり変わったな、一夏」

「それは何度目ですか？」

笑顔でそう言うとおつちも笑つてくれた。まあこれでいいだろう。そのあとは部屋でのルールを決めた。さっきのアクシデントで何か言われるかと思つたが特に問題はなかった。でも今日は疲れた。そのあとですぐに僕は眠りについた。

次の日。

授業が終わって放課後。ちゃんと勉強はしてるから授業も九割ほどわかるようになった。残りの一割は山田先生の放課後の講習をして

るから問題ない。山田先生は用事があるということと今日の講習はなし。まあ今日の授業の内容は全て理解できたからいいけど。

部屋に戻って勉強でもしようかと思いい廊下を歩いていると箒さんに会った。胴着を着ていて他にもいろいろと荷物を持っている。

「箒さんはこれから剣道部ですか？」

「ん？一夏か。その通りだがお前は部屋に戻って勉強か？」

「はい。そうするつもりだったんですけど・・・」

「どうした？」

「その荷物を運ぶのを手伝うことにしました。貸してください」

「べ、別にかまわん！自分で持つ！」

「僕が持ちたい、じゃダメですか？」

「か、勝手にしろ」

正直荷物は重かった。多分着替えや飲み物、へたすると防具まで入っているんじゃないだろうか。まあ自分が役に立ったならそれでよし。剣道場についたがこれはまた立派な道場だ。

「ところで一夏。お前は剣道を続けているのか？」

唐突にそんなことを聞かれて僕は返答に困った。続けてないといったら何か言われそうだ。

「剣道というより今は武術をしてません」

「なっ！なぜだ、一夏！？」

「いろいろあつたんですよ」

「この前から何か言わずらそうなことがあればそればかりだ。昔はあんなに剣道に打ち込んでいたではないか。なにがあつたか教える！」

そんなに聞かれても答えたくないものは答えたくない。さてどうするか。

「必要性を感じなくなつたんです。やつても無意味だと、ただそれだけです・・・」

「なんだと！」

言い方が悪かつただらうか。でも事実だ。

「構えろ一夏。お前がそんなことを言えるような立場の人間ではないことを私が証明してやる！」

一夏が剣道を続けてないと聞いた時、私はひどくショックを受けた。姉である篠ノ之東がISを作ってから私は重要人物の関係者として政府から監視がつくようになった。何度か引越しもあり知らないうちに私は一人になっていた。何より一夏と離ればなれになったのが大きかったのか、私の心は疲れ果て、気がおかしくなりそうな時もあった。しかし剣道だけは続けた。一夏との思い出でもあり、続けていれば一夏が傍にいたという感じがしたからだ。だから大事にしてきた。しかし一夏は剣道を否定した。本人はそのつもりはないだろうが思い出はもう要らないといわれている気がした。私の頭の中は赤一色に染まり気づけば防具をつけていなければ竹刀も持っていない一夏に竹刀を向けていた。

「ちょっと待ってください！ 篝さん！！」

そうやって一夏は竹刀をよけるが私はかまわず一夏に向けて竹刀を振り下ろした。

「剣道がもう必要ないというなら私を難なく倒して見せる！ 一夏ああああ！！」

Side out

自分の発言がこんなことを招く結果になるとは思いもしなかった。確かに全国大会で優勝したともなればそれは彼女の強さだろう。誇りでもある。それを否定されたとあっては怒りをおぼえても仕方が

ない。

「剣道がもう必要ないというなら私を難なく倒して見せる！一夏ああああ！！」

「そんなことを言われても僕は戦いたくないんです！」

「なにを言っている！」

「あなたにとって剣道は誇りなのかもしれない。でも僕からしてみれば自分のために振るう暴力みたいなものなんです」

また僕は言葉を選んでいない。幸い今は他に剣道部の人はいない。こんな会話と今の状況を他に人になど見られたくない。今は箒さんが何度も竹刀を振り下ろし僕がそれをよけている。

「それはお前がそう思っているからだろう！そんなはずあるわけがない！お前はただ自分の力に怯えてるだけだ。私だって自分の力に悩む時だってある。だが考えを変えろ一夏！逃げるな！！目をそらすな！！！！」

その目からはゆるぎない意思がとって見れた。ああ、うらやましい。自分もこれだけまっすぐに突き進むだけの意思があればいいのに。でも僕にはもうそれはない。あの日に捨ててしまったからだ。だからその目を向けないでほしい。自分がひどく惨めに思えてくる。そして僕は箒さんの荷物から竹刀を取り出した。

(さて、どうしようか)

竹刀と竹刀がぶつかり合う。近くにいとすさまじい気迫だ。さすがは全国優勝者といったところである。

「私はお前のその逃げ腰が気に食わんだ！昔のお前は違った。前を向き、自分が信じた道に行く。そんな男だった！」

箒さんがものすごい速さで迫ってくる。

「今のお前を見ているとイライラする。そんなお前は私がけしてやる！」

多分これで決めるつもりだろう。ならそれに答えよう。僕は一度目を閉じ居合いの構えをとる。そして感情を閉じ込めた光のない目で彼女を見る。相手を戦闘不能にすればいいだけだ。

S i d e 箒

一夏が居合いの構えで迎え撃とうとしている。今の私は負ける気がしない。だから私は迷わず竹刀を渾身の力で振り下ろした。だが私は一夏の暗く冷たい目を見た。ただ目の前の敵を抹消することだけを考えている目。そして一夏は小さく呟いた。

サイハーデン刀争術『焰切り』

「なっ？」

次の瞬間私の竹刀は自分の手から離れていた。そして轟音と共に壁に当たった。

「くっ！」

あまりの衝撃に私の手は震えていた。目視できないほどの速さで振りぬかれた一夏の竹刀からは煙が上がっていた。それだけ居合いの速さが早かったということだ。だが一夏はそこから竹刀を上段に構え振り下ろそうとしていた。よく見ると竹刀の一部が焦げている。私は手の痺れで全く動けなかった。

サイハーデン刀争術『焰重ね』

一夏の竹刀が防具にあたったかと思うと私は強い衝撃と共に吹き飛ばされた。声が出ず息も出来なかった。そして壁に激突した。

「がはっ。うっ……」

強制的に肺から息が出た。よく見ると防具に亀裂が入っていて胴

着が見えていた。一夏が握っている竹刀は黒焦げになって折れていた。今日の前にいるのが幼馴染に見えない。何か実態を持たない恐怖の塊に見えた。その恐怖の塊が近づいてくる。逃げようとしたが私の意識はそこで闇に落ちた。

S i d e o u t

外が少し暗くなっていた。篤さんはまだ起きない。壁に背を預け意識を失っている。友人相手に僕はひどいことをした。彼女が今まで頑張ってきたものを否定した。また自分の力で誰かを傷つけてしまった。もう力は振るわないと誓った師匠に申し訳ない。そう思うと罪悪感で体中が埋め尽くされる。自己嫌悪になっていた。

「うっ。」

「篤さん！大丈夫ですか？本当に申し訳ありませんでした！」

謝っても誤りきれない。土下座じゃ物足りなくらいだ。土下座の次であるのか？

「一夏か。私はどれだけ気を失ってたんだ？」

「30分ほどです」

「そうか」

どうしよう、気まずい。でもこの空気を作ってしまったのは自分だ。

どうしようもない。

「やっぱりなにがあつたか教えてくれないのか？」

そう聞いてくるが今の僕の答えはひとつだ。

「すみません。話したくないんです」

「そうか。まあいいだろう。なにがあつたかは聞かん、だが頼みがある」

「はい。なんででしょう？」

「防具と竹刀を倉庫に入れてくれ。壊れたものは仕方がないから気にするな。それでだな……」

顔を赤くして篤さんは何か言わずらそうにしている。

「他に何か？」

「き、着替えが入ったバッグを持ってだな……わ、私を部屋まで運んでほしい」

まだ体がうまく動かせないのだろう。こんなふうにしたのは僕だからそうする責任がある。

「わかりました」

「うむ」

そして道場の後始末をして手でバックを持ち箒さんをおんぶで運んだ。なぜか廊下に人は全くおらず沈黙が続いた。

「一夏」

「はい？」

「いつか教えてくれるか？」

少し考えた。いえる日が来るだろうか。言ってしまったら自分は軽蔑されるかもしれない。そう思うと怖くて、怖くて。だからこんな答え方しか出来ない。

「いつか」

「そうか」

こうして一日が終わった。

第三話 自分の力（後書き）

書いてたら止まらなくて。てごめんなさい。

やっとレギオスネタが出せました！やっと出来ました。

（T T）

クラス代表戦は出来ませんでした。スイマセン。

m () m

次回はちゃんとしてます。

ではまた。

第四話 クラス代表決定戦（前書き）

どうも。クロワッサンです。

今回はセシリア戦です。

戦闘描写がうまく書けないです。

それでも頑張ります！

どうぞ。

第四話 クラス代表決定戦

今日はクラス代表を決定する大事な試合の日だ。今までなにをしてたかというと勉強していた。山田先生からはISのシステムなどの説明を受けた。そして篤さんからは本来なら予約がいっぱいで使えなかった量産機であり、彼女が使う予定だった『打鉄^{うちがね}』を使わせてもらった。正直戦いたくなくけど、

ここまでしてもらって出たくない、勝てませんでしたなんて言いたくない。やるだけだ。しかし問題が起きた。僕の専用機がまだ来てない。

「このまま不戦敗になってしまったらさすがに泣けますね」

「そうだな。さすがに冗談では済まないな」

そんな会話をしていると山田先生が走ってこっちにやってきた。だいぶ走ったのか肩で息をしている。

「大丈夫ですか山田先生？これスポーツドリンクです」

「あ、ありがとうございます織斑君。これもらっていいんですか？」

「いいんですよ。またあとで買いますから」

「ダメです！悪いですよ。あれ？でも今どこから取り出したんですか？先生見えませんでした」

「ちよつとしたマジックです。気にしないでください」

嘘は言ってない。実際テレシアに来たお坊ちゃんたちにやって見せ

た。親の都合で来ている子供がつまらなさそうにしていたからだ。今でも評判がいらしい。また新しいのを考えなくては。

「そういうのは暇なときにやれ織斑。さっさと始めるぞ。準備しろ」
「はい。わかりました、織斑先生」

まあこんなことをしている暇はない。アリーナの使用時間は限られている。

「これが織斑君の専用ISの『白式』ひやくしきです！」

「これが白式か・・・」

少し触れただけで理解した。これは自分のためだけに用意されたものだと。しかしこれを本当に手にしてしまったら僕はまた戦わないといけないかもしれない。そう思うとあまりいい感じはしなかった。

「一夏、大丈夫か？」

顔に出ていたんだろうか。篝さんが気を遣ってくれた。今の自分にとってはそれが何よりも嬉しい。

「大丈夫ですよ。ちょっとびっくりしただけです」
「そうか。無理はするなよ?」
「はい」

これ以上は何も言う必要はないだろう。

「織斑、時間がない。フォーマットとフィッティングは実戦でやれ。試合中にその機体をお前のもにしないと負けるぞ。いいな」
「はい」

姉さんが最終確認をとるように聞いてくる。

「気分はどうだ一夏?」
「正直に言うとあまり気がすすまないよ、姉さん」
「そうか。聞いたのが悪かったな。スマン」

今は姉として心配してくれているのだろう。早く安心させてあげないと。

「篤さん、織斑先生、山田先生・・・行ってきます」
「ああ、行ってこい一夏」

篤さんの言葉を背に受け僕は飛び立った。

ピットを出たらそこには青い機体を纏ったオルコットさんがいた。機体名は『ブルー・ティアーズ』。特徴的なのは腰につけている四枚のフィンアーマーと六十七口径特殊レーザーライフル《スターライトmk?》。データを見てみれば全て遠距離武器と見ていいだろう。

「遅くなって誠に申し訳ありません」

試合開始の鐘はもうなっていた。実際遅れてきたわけだからこれぐらいは言わないと。

「よく来ましたわね。戦いたくないと言っていましたから、わたくしはてっきり逃げたのではないかと思いましたが」

「実際今も戦いたくないですよ」

出来るだけ早く終わらせたい。

「それはそうでしょう。わたくしが勝つのは自明の理。ですから今ここで謝るなら許してあげないこともなくつてよ」

「そこまで言うなら、二つだけお願いを効いてもらってもいいですか?」

「なんですの？」

「今から五分間何もしないでください」

「あなたはわたくしに負けてくださいとでも言ってるのですか？」

さすがにこれは少し怪しまれるか。

「安心してください。その間僕は武器を出しますがオルコットさんには指一本触れません。それともうひとつ・・・」

これが一番言いたかったことだ。

「もし僕が勝つたらあんな態度をとった事をクラスメイト全員に謝ってください」

オルコットさんは驚いているようだったがすぐにいつもの自信たっぷりの表情に戻って言った。

「わかりましたわ。あと三分、せいぜい私に謝る言葉でも考えておくといいですわ」

かつ自信があるのか。僕は手や足を動かしたり唯一積んであった近接ブレードを出して軽い素振りをした。約束通り、お互い攻撃は一切しなかった。

「時間ですわ。覚悟なさい！」

そう言つてスターライトmk?を向けてくる。僕も戦闘態勢に入る。一切の感情を捨て光のない暗い瞳に。

オルコットさんはビームライフルを雨のように降らせてきた。それでも僕は冷静に最小限の動きでかわす。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

そういつて正確にこつちを狙つて打ってくる。いいだろう。好きなだけ打てばいい。絶対に当たらないから。ビームを避けながらも僕は徐々にオルコットさんとの距離を詰めていく。相手を傷つけるつもりはない。武器を全て壊せばこの戦闘は終わるはずだ。まずはあのビームライフルからだ。

「なんで一発も当たりませんか?これでISの操縦が三回目だなんてありえませんか!」

無視だ。そして十分近づいて僕はビームライフルに切りかかった。

「くっ」

オルコットさんは自分が切られると思ったのか、後ろに退避した。もともとビームライフルを狙っていたため掠っただけで終わった。

「まさかここまで出来るとは思っていませんでしたわ。でもこれならー」

そういうと腰にあった四枚のフィンアーマーが動き出した。四機のビットが独立した動きでレーザーを打ってくる。かわすことはできるけど距離が縮まらない。しかもこの状態でビームライフルを撃たれたら正直苦しい。

「ふふ。さすがにブルーティアーズ四機ではかわすことしか出来ないようにすわね」

ビームライフルがいつきてもいいように最小限の動きで避けているが撃ってこない。いや・・・もしかして撃てないのか。

「なるほど。このビットの制御に意識を集中させてるから他の攻撃

は出来ないのか」

オルコットさんの顔が引きつっている。どうやら凶星のようだ。さてビットはどうしよう。

「すごいですね、織斑君。ISを動かすのがこれで三回目だとは思えませんね」

ピットのリアルタイムモニターで見ていた山田真耶は感心していた。

「あいつは見ただけでそれを自分のものに出来る化け物だな。最初は頭で理解し最後は体に無理やりおぼえさせることが出来る。そしてそれを短時間で出来るのがあいつの最大の武器でもある」

千冬は真耶に織斑一夏がどうという人間か説明した。しかし真耶はそれが信じられなかった。

「それじゃあどこかの達人に教わったらすぐ出来ちゃうんですか？」

「そういうことになるな」

「それってちょっと反則ですね。でも実の弟を化け物呼ばわりするのはどうかと思うんですけど……」

「事実だ」

そう言った千冬に真耶は苦笑いするしかなかった。その二人の傍らですつとモニターを見ていたのは箒だった。しかしそこには心配している顔しかなかった。今戦っている幼馴染の目はあの道場の時と同じ目をしていた。その時は感情が高ぶって見えなかったが今はその目をちゃんと見ることが出来る。そこに感情は見えないはずだったが悲しみが滲んでいるように見えた。

「一夏……」

そう呟くと試合は動いた。

さて避けてるだけじゃ終わらないな。どうしょっか。

「試合が始まってから三十分以上たっているのに一発も当たらないなんておかしいですわ!」

そう言ってビットで撃っては一度止めてライフルを撃って攻撃に緩急をつけてきた。早く終わらせたいと言っておきながらも既に三十分もたっているとは思ってなかった。それだけ集中してたってこ

とか。でもこのまま続けたら僕の集中力が先に切れるのは火を見るより明らかだ。まあ、二三日ぐらいなら耐えられると思うけど。でもこのままじゃ埒が明かない。やってみるしかなさそうだ。そして僕は意識を集中させて・・・

「な、なんですって!?!」

観客席からも喝采が湧き上がった。全身を使って僕は四機のビットからくるレーザーをブレードでそのままビットへ撃ち返し破壊した。撃ったレーザーをそのまま発射装置にそのまま返せる奴など滅多にいないだろう。姉さんならやりかねないが。

「これで決める」

僕は今出せるフルスピードでオルコットさんに向かった。狙うのはライフル。壊せば終わる。

「かかりましたわ」

オルコットさんがにやりと笑った。そして腰部にあった黒い筒状の物がこつちを向いた。まさか・・・

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機ありましてよ!」

そこから『ミサイル弾道型』が放たれた。一発目はギリギリ回避できた。でも二発目は避けることが出来ないと思った。だから・・・切るしかない。

「くっ捕らえましたわ!」

二発目に切り掛かろうとしたら一発目がすぐ後ろまで来ていた。避けられない・・・

「くっ!」

そして僕は爆風に飲み込まれた。

「一夏つ・・・!」

モニターをずっと見ていた筈は思わず叫んでしまった。あの目をした一夏なら勝てるかどうかでそう思ってたからだ。

画面は爆発の黒煙で埋まっていた。誰もが真剣に画面を見ていた。しかし一人だけ悲しそうにしていた。

「やってしまったな」

そして煙が晴れるとそこには無傷の一夏がいた・・・

『フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください』

目の前に「確認」と書かれてあるボタンがあった。迷わず押す。やっとか・・・そして機体は一度粒子に戻り再構築された。機体を見てみると最初の工業的な凸凹は消え、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な中世の鎧を思わせるデザインに変わっていた。

「ま、まさか・・・ファースト・シフト一次移行？あ、あなた、今まで初期設定の機体だけで戦っていたって言うの!？」
「そういうことになりますね」

僕は自分が握っていたブレードを見ようとした。こっちにも何か変化があったのかもしれない。でも見た瞬間僕は何も言えなくなつた。

雪・・・片・・・

その刀の名前は雪片^{ゆきひら}。かつて姉さんが振るっていた専用IS装備の名称。僕にとっては最も忌み嫌う武器。今僕が握っているのは雪片式型だ。

「いよいよ姉さんが考えていることがわからない」

「……は？あなた、何を言って……」

「僕はこんな物見たくもないのに……」

見るだけで自分がいやになってくる武器。この雪片だけはもう二度と見たくなかった。もういい。早く終わらせよう。

「ああもう、面倒ですわ！」

またミサイルが飛んでくる。でも今の自分の中には憤りしか感じられない。雪片を握り締めると刀身が開き、青白いエネルギーが剣の形をしていた。確か『零落白夜^{れいらくひゃくや}』だったか……。自分のシールドエネルギーを攻撃に転化してあらゆるエネルギー兵器を無効化する諸刃の剣だったはずだ。相手のシールドエネルギーすら無効化し本体に直接ダメージを与えて「絶対防御」を発動させることによって相手のシールドエネルギーを大幅に削る。三年に一度のISの世界大会「モンド・グロツソ」で姉さんを優勝に導いた武器。僕にとっては僕の過去の過ちに最も関係している物。だから僕はこの雪片が嫌いだ。大嫌いだ。僕はミサイルを切り落とし爆発する前にその場から移動した。この「零落白夜」を当てれば終わる。

「これで終わりだ！」

「くっ」

オルコットさんに切り掛かろうとした時、目の前が一瞬真っ赤になった。昔の記憶。僕が戦いたくない理由。血塗られた罪。僕は切る対象を残りのブルー・ティアーズに変えた。そして雪片をオルコットさんの目の前で止めた。

「まだ・・・続けますか？」

「・・・っ！」

相手に何も言わせないような気迫と殺意を含んだ冷たい目でオルコットさんを見る。その時彼女の目に見えたのは恐怖だった。これでもいい。これで終わる。

「参りましたわ・・・」

やっと終わった。僕はすぐに雪片をしまってピットに戻る。そこでは篝さんが待ってた。とても心配そうな顔をしてる。

「一夏！大丈夫か？怪我は・・・ないのか？」

「大丈夫ですよ。ISの絶対防御がありますから」

「そ、そうか。ならいいんだ」

「とりあえず今日はもう帰りましょう。僕疲れたので」

「そうだな、そうしよう」

僕達が帰ろうとしたところで笑顔の山田先生と暗い顔をしている姉さんに会った。

「織斑君、おめでとうございます！先生ずっと見てましたけど本当にすばらしかったです！！」

「そ、それはどうも」

はつきり言っておくとあまり嬉しくない。元々戦いたくなかったんだから。それは姉さんが一番わかっているはずだ。現に姉さんだけ雰囲気が違う。

「……………」

「……………」

「一夏？」

僕は無言で姉さんの横を通り過ぎた。話すことは今はない。篝さんがついてくる。それさえも気づかないほど僕はただ歩き続けた……

「織斑先生、何かあったんですか？」

「……………」

真耶が聞くが千冬は何も答えない。何も言えなかった。

第四話 終

第四話 クラス代表決定戦（後書き）

どうでしょう？

まだまだいろいろと抜けてる部分があると思いますが
いろいろと指摘してくれると嬉しいです。

では。ZZZZZZZZ

第五話 戦わない理由（前書き）

お気に入り件数がちよつとずつ増えてるのが嬉しいです。

（T・T）

書く気力が湧いてきます！
どうぞ。

第五話 戦わない理由

セシリア・オルコットは部屋に戻ってシャワーを浴びていた。そして深く反省していた。彼の言う通り自分は他国とその人々を侮辱していた。そして彼の顔を思い出す。今日の試合で彼が見せた瞳を思い出す。

(わたくしがあんなふうに分けるなんて思っても見ませんでしたわ)

彼女は自分の攻撃を全て見切られ惨敗だった。セシリアにとってそれはショックだった。

名家に婿入りした父。母は女性ながらも多くの会社を経営し、成功を収めた人だった。セシリアにとって理想の強い女性だった。そんな母の機嫌をとるべく父の態度は弱々しいものだった。ISが開発され世界が女尊男卑になってもつと酷くなった。そんな父親を見て幼いながらも『将来は情けない男とは結婚しない』と思っていた。その両親はとある越境鉄道の横転事故で死んだ。手元に残った莫大な遺産。それを守るため勉強し、その一環で受けたIS適正テストでA+を取った。政府から国籍保持のために様々な好条件が出された。これで両親の遺産を守る。第三世代装備ブルー・ティアーズの第一運用試験者に選抜され、稼動データと戦闘経験値を得るため日本にやってきた。そんなエリートのを歩んできたセシリアは負けてしまった。ISを少ししか動かしていない彼に……

「織斑、一夏」

彼の顔を思い出す。彼の目を思い出す。恐ろしくありながらもその瞳には絶対に揺るがない強い意思がどこかで感じられた。そして彼女は理想の男性に出会った。

翌日、朝のホームルームは山田先生の一言で始まった。

「では、一年一組の代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

そうだった。僕はクラス代表になってしまった。これからあるであろうクラス対抗戦などに参加していくことになる。そう思うと気が重い。よくないがサボれないだろうか。

「逃げられると思うなよ、織斑。代表になったんだ。自覚を持って行事に取り組むように」

姉さんがそんなことを言うてくる。いつそこの学校を辞めてしまお

うか。

「クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

はいと僕を除くクラス全員が一丸となって返事をした。溜息しか出てこない。内心は酷く悲しんでいるというのに。篤さんは苦笑いだった。誰かこの状況を助けてください・・・

今は夜。場所は変わって学校の広い寮の食堂。そこでは人の気持ちも知らないで無慈悲にも行われる宴が始まるところだった。

「というわけでっ！織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

クラッカーの音がそこらじゅうで聞こえてくる。僕の周りの女子はもうパーティー気分で盛り上がっているけど僕は暗い気持ちでいた。作り笑顔が醜く思えてくる。

「一夏、いいのか？代表になってしまつてはISを使う機会が増えるということだぞ。お前が最も避けたかったことではないのか？」

篤さんが僕を気遣ってくれる。僕だってこんな展開望んでいなかった。でも代表決定戦で勝ってしまったのだから仕方がない。

「本当はいやですよ。でも今この雰囲気壊すのはどうかと思って・・・」

「そうか。無理はするなよ」

きっと自分は今無理やり笑顔を装っているだろう。それでも篤さんは心配してくれる。

「はいはい、新聞部部长で二年の黛薰子まゆずみかおるこです。よろしくね。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューを申し込みました〜！」

そうやって僕の近くまでやってきたのは二年のリボンをつけた先輩だった。何だろう。メディアの腐敗の話題が今頭の中に突然浮かんできた。

「ではではずばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

そうやってボイスレコーダーを僕に近づけてきた。本当は止めたいだなんていえないし、どうしようか。

「えーと、みんなが誇れるようなちゃんと仕事ができる代表でありたいです」

「うわ！まじめね。もっといいコメントちょうだいよ。僕は新世界の神になる、とか」

僕は殺人ノートなんて持ってないし、今はシャレになってない。僕にとっては・・・

「と、とりあえずみんなが恥をかかないようにがんばります」

「あなたって本当にまじめね。ま、適当にねっ造しておくからいいんだけどね」

僕の悪い予感は当たった。当たってしまった。

「まあ、一夏さんには頑張ってもらわなくては困りますわ」

そこには昨日の試合で戦ったオルコットさんがいた。あの時僕は相
当な殺意を向けたつもりだったがなぜか平然と話してくる。後から
聞いた話だとオルコットさんはわざわざクラスメートの寮室を一つ
ずつ回って謝っていたらしい。さすがにびっくりした。あのプライ
ドの塊だとばかり思っていたオルコットさんがそんな律儀にするな
んて。

「あの・・・オルコットさん？僕は休み時間にみんなの前で謝って

くれるだけでよかったですけど」

「あれは一夏さんの言うとおり、わたくしに非がありましたわ。あれぐらいしないと反省したことにはなりませんわ。あとわたくしことはセシリアで結構ですわよ」

自分に非があったことを恥じているのだろうか、顔が少し赤い。でもまあ、反省してくれてるならいいかな。

「ああ、セシリアちゃん。ちょうどいいわ。注目の専用機持ちだから写真頂戴ね。握手でもしてくれればいいかも」

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

セシリアさんが嬉しそうにしていた。まあ、確かにいい記念にはなる。

「それじゃ撮るよー。35×51÷24は？」

ん？

「74・375？」

「あら正解」

デジカメのシャッターが切られた。気づけば一組の全メンバーが撮影の瞬間に僕とセシリアさんの周りに集結していた。あ、篝さんもいる。いくら計算に気が回っていたとはいえ僕は気づかなかった。恐るべき早さだ。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

そんなこんなでパーティーは夜遅くまで続いた。女子って元気だなあ・・・そして僕は部屋に戻った。

「今日は楽しかっただろう。よかったな」

篝さんがどこかとげとげしい口調でそういう。はて？僕は何か悪いことでもしたかな。

「こういうふうにみんなで集まってはしゃぐ機会は今までなかったのて楽しくなかったと言えは嘘になりますね。でも・・・」

「でも？」

篝さんが聞いてくる。多分僕が言いたいことはあっちもわかってい

るだろうけど言おう。吐き出さないと体に悪いこともある。

「僕は戦いたくないです。ISを使いたくないです」

「やっぱりそうか」

そこで話は終わってしまった。なんか疲れたな。

「すう……すう……」

「一夏？」

一夏は寝ていた。クラス代表決定戦のための準備でここ数日ろくに寝ていなかった。

「私も寝るか」

そう言っで一夏に布団を掛けて電気を消す。箒もすぐに寝た。少し見た一夏の寝顔は純粋なものだった。

次の日の放課後。僕は白式の調整のため整備室に来ていた。この前のセシリアさんとの戦いで感じたのは

『生身で戦っていたほうが早かったかもしれない』である。まあ当然相手が空中に浮いてないということが前提だが。ISを使いたくないのは確かだ。しかし自分の持ち物が不完全であるというのは納得がいかない。なにより……

「世界最高の技術がつまってるんだ。いじらない方がおかしい」

そう言って白式を展開。自分は降りて様々な機械を取り出す。

「It's show time!」

そして一夏の白式の改造が始まる。

「うーん、一番問題なのはスラスタ出力とエネルギーのバランス。後はシールドエネルギーの使い方を考えなきゃ」

一夏の白式の最大の欠点はその燃費の悪さである。一夏にしてみれば加速に使うエネルギーが多い割にはスピードは出てない。そしてシールドエネルギーは零落白夜に消える。

「さてと、イメージは完璧だ。いくぞ!」

数時間後・・・

よし。機体の方は大体終わった。次は・・・

雪片だ・・・

過去の記憶を振り払い改造に集中する。そうしている間は何もかも忘れていられるから・・・

「できた!!」

ついに出来上がった。しかしその喜びは脳天に叩き込まれた衝撃により一時的に消される。

「何時だと思っている、馬鹿者が」

「ね、姉さん？」

姉さんがそこにいた。そして言われて時計を見ると・・・

「11時半？」

「そうだ。この整備室の担当の先生が今日は休みだとすっかり忘れていた。来て見れば使用中の明かりがついたままだったからな」

「す、すみません！」

「まあいい。何かに夢中になるのはかまわん。だがお前はもう少し周りを見る。いいな？」

「はい……」

「一夏、さつさと部屋に戻って寝る。最近まともに寝てないだろう」
「わかったよ。姉さん」

そう言っただけで僕は部屋に戻った。まあ、終わったからいいか……

千冬はパソコンに残っていたデータを見ていた。そこには改造前の白式と改造後の白式のスペックが表示されていた。しかしそこにあったのはとても十五歳の成果とは思えなかった。

「まさか他人の知識まで奪い、発展させるのか」

千冬はすぐにそのデータを消した。

夢を見た。

第二回『モンド・グロツン』

ISの世界大会である。僕は適当に散歩していた。ISのことに関しては姉さんは僕に教えてくれないのでこの試合は見に行っていない。でもこっさり一回目の世界大会のビデオを見たとき、僕は素直に思った。

「綺麗だったな、姉さん」

ISに乗り、その刀を振るう姉さんは美しかった。

「まあ、男の僕にISはのれませんが・・・」

そんなことを考えていたら黒い車が隣で止まった。

「ん？」

そして車の中から明らかに怪しそうな黒いスーツとサングラスを掛けた黒服たちが出てきた。

「なっ！」

そして僕は連れ去られた・・・

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」は

どこかの倉庫のように見えた。腕は縛られていて扉には鍵が掛かっているように見えた。

「なんてベタな展開なんだろう」

紐を解いて周りを見る。脱出に役立ちそうなものは一つもない。ただ待つことしか出来ない。

・・・・・・・・・・・・・・・・

どれだけの時間が経ったかよくわからない。お腹も空いてきた。て、何を言っただろう僕は。一人ツッコミをしても自体は変わらない。鍵を壊すことは簡単だろう。でも見つかってまた捕まるのがオチだ。どうしよう。

バキッ

「え？」

突然倉庫のドアが破られた。そこには・・・

「一夏、一夏！いたら返事をしろ！！」

「ね、姉さん？」

そこには織斑千冬がいた。現在世界大会で戦っているはずの姉さんが駆けつけてくれた。でも嬉しかった。しかしその喜びは一瞬にして消える。

ドオオオオオオン

「え？」

ドサッ

姉さんが倒れた。どうやら後ろにいた僕をさらった奴らが大砲らし

き物で姉さんを撃った。さすがに不意打ちであったため姉さんは僕を庇って被弾した。その時はISの絶対防御も知らず姉さんが死んだんじゃないかと思った。

「姉さん？」

呼びかけても、揺さぶっても、起きてくれない。最悪の事態を考えってしまった瞬間……

「うあああああああああ！」

頭の中が真っ白になった。僕は姉さんが持ってた刀「雪片」を拾った。ISの補助？パワーアシスト？そんなものはいらなかった。そのときの僕を支配していたのはドス黒い感情だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・う、しまった。一夏！どこだ！」

千冬は辺りを見渡した。そして見つけた。返り血を浴びて、血まみれになった雪片を握って、底が見えないほどの闇をその瞳に宿した少年を・・・

「一夏？」

その声で我に返る。見ると姉さんはつらくて悲しそうな顔をしている。次に自分の体を見る。血まみれだ。血で汚れた手、血なまぐさい雪片。

僕の忌まわしき過去、血塗られた罪。

そこで夢は終わった。

ガバッ

「ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・う、うえ」

吐き気が襲ってきた。あの時に感じた血なまぐさい悪臭が蘇る。全

身から脂汗まで出ている。見ると時間は朝の四時。当然誰も起きていない。隣を見ると幼馴染がぐっすり夢の中だった。

「落ち着け」

祈るように自分に言い聞かせて再び眠りにつく。その朝の目覚めは最悪だった。

第五話 終

第五話 戦わない理由（後書き）

Z Z Z Z Z Z

すいません。もう寝ます。

また書きますので。

Z Z Z Z Z Z

第六話 中国から来た友人（前書き）

すいません。

前回はさすがに眠かったので。

今回も頑張つて書きます！

どこまで書けるかはわかりませんが・・・

読んでくれると嬉しいです。

第六話 中国から来た友人

夢を見たその日、僕は朝から頭痛がしていた。ちゃんと授業が受けられるだろうか。

「織斑君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

転校生？ああ、なるほど。だからクラス妙に騒がしいのか。といってもいつものことか・・・

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「中国ですか」

代表候補生か。セシリアさんの次は誰が来るのやら。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

相変わらず腰に手を当てているセシリアさんがいた。いつになく誇らしそうだ。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？騒ぐほどのことでもあるまい」

篤さんも側に来て話しを聞いていた。まあクラスでこんな会話をしていたら誰でも集まってくるのが普通かな。人口密度が増していく。まずい、まだ吐き気が。ちょっと深呼吸でもしたい気分だ。

「一夏、大丈夫か？顔色が悪いぞ」

「そ、そうですね？」

顔に出さないようにしてたはずなのに・・・心配掛けたくないな。

「どこか具合でも悪いのか？」

「いえいえ、なんでもありません」

「そうか」

「はい」

昔から一緒にいたからだろうか。少しの変化でもわかる、みたいな。まあ、いいか。そういえば来月にクラス対抗戦があったはずだ。クラス代表によるリーグマッチ。一位のクラスには優勝商品として学食デザートの半年フリーパスだったか。なるほど、女子がやる気になるのも理解できる。けど、正直今のままじゃ絶対無理だ。体調不良ってことでセシリアさんに代わってもらえないだろうか。最近どうしてもサボる方向に考えがいく。戦いたくないのだから仕方がないが。

「クラス対抗戦に参加してくるでしょうか」

「一夏、おまえは・・・」

「大丈夫ですわ！なんせ一夏さんが出るのですから」

「そうだよ！織斑君がいれば優勝間違いなし！」

え？

「織斑君、がんばってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

ああ、どうしよう。僕が出ることが決定している。箒さんは僕のことを気遣って何か言おうとしてくれたのに。

「その情報、古いよ」

あれ？どこかで聞いたことがあるような・・・

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

そこに立っていたのは鳳鈴音フヤンリンオンだった。中学の友人である。

「鈴……さん？」

「そうよ。久しぶり、一夏。その口調も相変わらずね」

「はは、そうですか？」

「そうよ！あんた中学から……」

なにかを言おうとしたところで鈴さんがこっちに来た。

「一夏、あんたどこか具合でも悪いの？」

「はい？」

バカな。なんでわかるんだろう。そんなに僕は顔に出てるんだろうか。

「僕は至って健康ですよ？」

「嘘ね。あんた顔がいまいち笑ってないわよ」

そう言って顔を近づけてくる。僕はばれないように顔を遠ざけるが裏目に出た。鈴さんはさらに目を細めて怪しいと言っている。何かごまかさないと……あつ。

「鈴さん、そろそろ自分の教室に戻らないと」
「何言ってるのよ、一夏。あんたはいつも自分に何か都合が悪いときはそうやって……」

バシンッ

鈴さんの頭に出席簿が振り下ろされた。当然犯人はこの人……

「だ、誰よ！私の頭叩いたのは！？」
「私だ」

ダー○ベイダー登場、なんて口に出したら殺されかねないから言わないけどね。

「ち、千冬さん？」
「ここでは織斑先生と呼べ。SHRに遅れないようさっさと戻れ」
「は、はい！」

蛇に睨まれた何とやら……である。鈴さんは猛ダッシュで自分の教室に戻……逃げていった。

「おい、一夏」

「は、はい」

「具合が悪いなら保健室に行け。他人に心配を掛けるな。いいな？」
「わ、わかりました」

僕は隠し事が下手なんだろうか・・・

場所は変わって食堂。僕はセシリアさんから尋問を受けていた。

「一夏さん。あの方は誰ですか？妙に親しいように見えたが、
どうなんですか？」

「二人目の幼馴染です。それ以外のなんでもありません」

と言っても納得してくれない。ちゃんと鈴さんの紹介はした。さつきから僕は同じことしか言っていない。まだ頭が痛いし、朝の夢のせいで気持ち悪い。だから昼食も量が少ない。

「セシリア、いい加減にしろ。本人がそう言っているんだ。何もな
いはずだ」

「篝さん！あなたはあの二組の方がどなたか気になりませんか！？」
「わ、私だつて気になる。しかし一夏が困っているだろう・・・」
「あなたは何を言ってる・・・」

セシリアは一夏の昼食を見た。高校生が食べる量にしては随分と少ない。次に一夏の顔を見た。よく見ないと見えないが、顔がひきつっている。それはセシリアに一夏が無理をしているということ伝えるには十分だった。

「すみません、一夏さん。わたくしが悪かったです」

セシリアさんが落ち込んでしまった。僕のせいなんだろうな。

「気にしないでください。僕は誰かに心配を掛けたくないんです」

「馬鹿者！そんなことを言ってしまったら・・・」

「やっぱり無茶をしていましたのね。わたくしとしたことがそんなことにも気づけないなんて」

しまった。余計落ち込んでしまった。もうどうしようも出来ない。

「篝さん、僕どうしたら」

と篝さんに助けを求めたが・・・

「お前が悪い。しかしなんだ。やっぱりお前は無理をしているのか。じゃあさっき私に平気だと言ったのも嘘か？」

「うっ」

ジト目でこっちを見ている。怒っている。絶対に怒っている。なん
でだろう。僕はなるべく迷惑を掛けないようにと思っているのに。

「一夏、あんたそっちの性格も変わってないわけね」

鈴さんが僕らのテーブルまで来ていた。はて、どの性格だろうか。

(注：女性に好かれ、空回りしてしまうところですよ。マイ主人公
)

「その様子だと気づいてないわね・・・はあ」

今ここに僕に助け舟を出してくれる人はいないらしい。

「一夏、午後の授業が終わったら部屋でゆっくり休め。夕食は私が
持ってきてやる」

「はい、すみません篤さん」

本当にありがたい。いくら調子が悪いとはいえ食べなければ免疫力
が落ちる。

「一夏と箒？だっけ、あんたら随分仲が良いわね。あんたらどういう関係よ」

「箒さんは小学生からの知り合いで鈴さんとは実質引越して入れ替わりになった感じです。今は同じ部屋です」

「は？同じ部屋って今言った？」

「はい、そうですけど」

鈴さんの目つきが変わった。あれ？僕また誰かを怒らすようなこと言ったかな。

「箒、今すぐ私と部屋を替わって。今日中に！」

「な、何を？」

「こいつは放っておくとどこまでも無理をするバカなのよ。こいつの面倒は私が見るから部屋を替わって！」

人のことをバカとは何なんですか、鈴さん。さすがの僕でも傷つきますよ。
グスン。

「べ、別に私が面倒を見てもいいだろう！私はこちらが無茶をする奴だというのは昔から知っている。部外者は引っ込んで！」

「部外者じゃないわよ！私もこいつとは長い付き合いなのよ！」

いつの間にか喧嘩になってしまった。二人ともお行儀良く食事をしましょうよ。なんて考えているとセシリアさんが僕の袖を引っ張っ

て何かを言おうとしている。

「あ、あの一夏さん。よろしければわたくしのお部屋で休んでいかれてはどうでしょうか。わたくしの部屋は代表候補生ということもあって、部屋は快適ですよ。ですから・・・」

「一夏に手を出すなあああ！」

「す、すみません」

こんな弱気なセシリアさん始めて見た。て、早くこの二人を止めなきゃ。ええと、なにか話題は。何とか痛い頭で考える・・・そうだ！鈴さんなら中学の頃の話すればいいはずだ。

「鈴さん！そういうえば『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』って言ってましたよね。それで、どうなんですか？」

女子なら料理の話には乗ってくるはずだ。我ながらいい考えである。あれ？鈴さんの顔が真っ赤だ。篤さんとセシリアさんは僕と鈴さんを交互に見ている。

「い、い、い、」

「い？」

「一夏のバカアアアアアアア！」

「え？」

鈴さんは猛スピードでその場から去ってしまった。いまいち状況が理解できない。

「一夏」

「はい」

「今すぐ鈴を追え」

「え？」

「一夏さん。早くしないと鈴さんが行ってしまいます。急いでくだ

さい」

「な、なぜ」

「いいから、行け（行きなさい）！！」

「は、はい！」

僕は鈴さんを追うことになった。

「うう、一夏のバカ！あんな人前で言うなんて・・・」

今鈴は絶賛逃走中である。鈴からしてみればさっきの言葉は『毎日味噌汁を』』という意味だった。箸とセシリアは多分気づいただろう。

「待ってください、鈴さん！」

「い、一夏？」

一夏が私を追っかけてくる。でもそんなの重要じゃない。

「あんなんでああいう事を他人の目の前で言っちゃうのよ！？最低よ！来ないで！！」

「別にいいじゃないですか！他人に聞かれて困るようなことだったんですか！？」

「そんなの言えるわけじゃない！……うわーん！！」

今の会話からして一夏が鈴の言葉の意味に気がついていないということが鈴にはわかった。鈴にとってそれは非常にショックだった。大泣きだ。

Side 一夏

なんでこうなった。もしかしてあの言葉には何か他に意味があるって言うのか？ダメだ。全くわからない。こうなったら直接聞くしかない。

「待ってください、鈴さん！少し話し合いましょ」

「あんと話すことなんて何も無いわよ！うわーん！」

ダメか。それにしてもさつきから走ってるのに距離が縮まらない。いくら体調不良とはなんで追いつかないんだ？

「鈴さ……」

「来るなああああ！」

ああもう！埒が明かない。こうなったら！

サイハーデン刀争術『水鏡渡り』

僕は鈴さんの目の前に立った。

「鈴さん、ストップ！」

「え？あんた今後もろにいたはずじゃ……」

水鏡渡りは超高速移動で達人なら下手すると音速に達する。

「鈴さん、僕が悪いなら謝ります。でもどうして逃げるんですか？理由があるならちゃんと説明してください！」

「言える訳ないでしょうがああああああ！」

ドーン

「グハア・・・」

鈴さんの掌打がもろに入った。体調不良。無理して使った『水鏡渡り』。そして掌打。僕の意識は闇に落ちていく。

「ふん！」

鈴さんが去っていく。ああ、このままだと授業が・・・ガクッ。

後で偶然通った生徒に助けられ、ちゃんと休みました。

第六話 終

第六話 中国から来た友人（後書き）

いやあ、すいません。

自分で何が書きたいのか途中でわからなくなっていました。

僕としてはセシリアの出番がなんとも出しにくいです。

次ほとんど出番ないかも・・・ORZ

まあ、次も頑張って書きます。

次回も読んでくれると嬉しいです。

第七話 今だけは・・・（一巻終了）（前書き）

これからちょっとずつ更新が遅くなるかもです。
すみません。

暇がある時はなるべく書くようにします。

第七話 今だけは……（一巻終了）

クラスリーグマッチ当日。場所は第二アリーナ。戦いたくない。僕は相変わらず力を使うことをためらっている。でも理由は今回もう一つある。

「なんか黒い龍が見えるような……」

アリーナの中央にはIS『シエンロン甲龍』を纏った鈴さんがいる。特徴は肩にある棘が付いた非固定浮遊部位である球体だ。でも見るべきところはそこじゃない。鈴さんの後ろにいる黒い龍だ。多分あまりの怒りで龍に見えるんだろう。

「織斑君、準備をして下さい」

山田先生の指示が出る。僕は白式を展開し鈴さんのところへ向かった。極めてゆっくと……

「よく来たわね、一夏。私が怒ってるのはわかってるわよね？」

「はい。十分承知しております」

「ここはおとなしく話を聞こう。うん、そうするのが一番だ。」

「なんでかわかる？」

「酢豚の件ですか？」

「あなたはあの言葉の意味をわっかてないようね」

「はい」

やっぱりなんかあるのか。

「いいわ、教えてあげるわよ」

「本当ですか？」

「ただし、私に勝てたらね。勝てなかった時は・・・」

「勝てなかった時は？」

鈴さんが不吉な笑みを浮かべる。悪い予感しかしない・・・

「私の言うこと何でも聞いてもらおうからね」

顔が笑ってない。本当に怖い。

そして試合開始のブザーが鳴った。

鈴さんは甲龍の近接用の武器『双天牙月』そうてんがげつを出した。

二本の異形の青竜刀を連結させて両刃状態にしてバトンを扱うよう

に振り回してくる。
僕はそれを紙一重でかわす。

「あんだこれでISを使うのが四回目だっけ？嘘でしょ、それ」
「本当ですよ」

「授業でISは？」

「使ってません」

「千冬さんは怒らないわけ？」

「事情を知ってるので」

「なるほど・・・あんだの器用さは相変わらず化け物並みてわけね」

確かに双天牙月を避けながら余裕で会話してる自分は化け物かもしれないな。

「いいわ、なら私も本気で行くわ！」

鈴さんの肩の球体がスライドし中心が輝きだす。

次の瞬間僕は見えない衝撃に襲われて吹き飛ばされた。

「くっ・・・」

空中で体勢を立て直し、鈴さんを見る。

既に次の攻撃の準備はできているようだ。

「今のは牽制ジャブだからね」

また球体の中心が輝きだす。僕は大きく小刻みに動いて的を絞らせないようにした。

（空気を圧縮して撃ってるのか？）

そんなことを考えてると修行時代のことを思い出した。

（弓では的が動いてないからいいけど、相手が動いているときは相手の先を読むんだ。逆に自分が狙われているときは不規則に動くといいよ）

（一番ウゼエのは相手が動くことなんだよ。待て、こら。動くんじゃねえって言うてんだろぅが！的が絞れねえだろぅが！ああ、ウザ！）

ティグリス師匠とバーメリン師匠の言葉を思い出す。

苦しくも楽しい時間だったと思うと自然と笑みがこぼれる。

おっと、集中しなきゃ。ISのハイパーセンサーからは空間と大気の流れが観測されている。

でも避けるためにはハイパーセンサーでは間に合わないな。今頼りになるのは自分の感覚だけ・・・か

「なんだあの攻撃は!？」

モニターを見ていた篤が声を上げていた。一夏が避けたところにはクレーターが出来上がっていた。

「『衝撃砲』ですね。空間自体に圧力をかけてその余剰でできた衝撃をそのまま砲弾として打ち出す、中国の第三世代型兵器ですね」

セシリアの解説を聞いて篤は納得した。ただの衝撃なら砲身も砲弾も見えないはずだ。モニターを見て一夏の様子を見た。随分と不自然な動きをしている。

「一夏……」

「大丈夫ですわ、篤さん。一夏さんはわかっててあんな避け方をし
てらっしゃるようですから。」

あなたは一夏さんが負けるとでも思ってたらっしゃるの?」

「そ、そんなわけないだろう!」

「なら心配するだけ無駄ではありませんか?」

「……そう、だな」

二人はモニターに目を戻す。鈴が容赦なく龍砲を撃っているが一夏にあたる気配はない。二人はそれを見て安心した。そんな二人とは対照的にずっと一夏を見ている二人の教師がいた。

「織斑君の白式、なにか変わってませんか？ちよつとスリムになったというか・・・」

真耶が千冬を見る。千冬はなんでもないように答える。

「一度整備室に足を運んでな。整備科の先生が休んでいた日だ」

「ああ、確か風邪で休んでましたね」

「その日だ。整備室に鍵を掛けに行ったら織斑が白式をコアごと改造していた」

「こ、コアごと!?!」

真耶が驚くのも無理はない。現在ISのコアは製作者である篠ノ之束しか製造、改造ができないとされている。だがそれが可能な十五歳の高校生がここにいる。

「お、織斑君はコアを作れるんですか!?!」

「その気になればできるだろうな」

世界最高の技術を持った兵器を作れる少年が目の前にいる。その現実が信じられなかった。

「織斑君、すごいですねえ」
「ああ・・・すごいな」

千冬の顔が悲しそうにゆがんだ。何かあったのかと真耶はモニターに目を戻した。
そこには光のない暗い瞳をした少年がいた。

S i d e 鈴

「ああもう！なんでさっきから一発もあたらないのよ！」

鈴は内心あせっていた。龍砲があの一撃以来一発もあたってない。自分が最も信頼をおいている武器が役に立たなくなっては当然いらだつてくる。

そんな中一夏の声が聞こえてくる。
それは一夏のものとは思えないほど感情がこもってなかった。

S i d e 一夏

(さて、そろそろ行くのかな)

既に一夏は龍砲を完璧に避けられるようになっていた。
最初は不規則な動きだけだったが、今は龍砲が撃たれた瞬間に安全な場所まで移動している。あとは相手の戦力を削るだけ。狙うは龍砲。

「鈴さん」

「何よ！」

「いきます」

雪片を出して僕は鈴さんに向かって加速した。そして僕は感情を消した。

龍砲を避けながら鈴さんとの距離を詰めて僕は雪片を振り下ろす。
鈴さんは双天牙月でそれを受け止める。お互い力を込めて鏝迫り合
い状態になる。

「まさかあんたがここまでできるなんて思ってもいなかったわ」

「.....」

「でもね、この距離なら！」

龍砲を当てるために双天牙月にさらに力を込めて逃がさないように
していく。

でもさっきのようにはいかない。

僕は白式に追加した展開型スラスタを支えに双天牙月をはじめた。そして足にも追加したスラスタで上昇する。龍砲はむなしくも空を切った。

「まずは一つ」

「なっ！」

僕は龍砲を雪片で叩き壊した。それを見た鈴さんが双天牙月を振り上げて反撃してくる。

(ここだな)

僕は姉さんから教わった『イケニッジョン・ブースト瞬時加速』で鈴さんの背後に回る。ああ、驚いてるな。でもこれで龍砲は終わりだ。突きの構えで龍砲を狙う。だが突然ISから情報が送られてくる。上から熱源反応？まずい！

「鈴さん！」

「え？」

僕は鈴さんを抱えてその場から脱出した。さっきまでいたところには熱線が降り注いでいた。

「いったい何が・・・」

上を見ている。

そこには頑丈にできているはずのアリーナのシールドに穴が開いていた。

ISのデータを見てみるとレーザーで破られたらしい。セシリアさんのよりも威力が上か。厄介だな・・・

「ちょっと、おろしなさいよ!どこ触ってんのよ、あんた!」

「ああ、これはしつれ」

唐突に鈴さんを突き飛ばす。そしてレーザーが放たれた。

「一夏あああああああ!」

鈴の目の前はレーザーで埋め尽くされていた。

そしてレーザーが消えた後には何も残ってはいなかった。

一夏の姿がない。

「嘘でしょ・・・一夏」

「何がですか?」

「!？」

後ろに一夏がいた。何事もなかったように一夏がいた。しかし今の鈴には安堵よりも・・・

「心配掛けさせんじやないわよ！馬鹿あああ！」
「す、すいません！」

怒りのほうが勝っていた。

鈴さんを落ち着かせてレーザーが来た方向を見る。そこには異形のISがいた。深い灰色で手がつま先よりもしたまで伸びている。頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並んでいて目に見える。何よりも特徴的なのはISなら本来ではありえない『フル・スキン全身装甲』だった。

「織斑君！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生達がISで制圧に行きます！」

山田先生かな。でもこっちはそうも言ってもらえない。

「それは無理です、山田先生」
「え？」

「遮断シールドがレベル4に設定されています。しかも全ての扉にロックが掛かっている。」

おまけに僕は標準でロックされています。これでは外には出れません。」

「ではどうするんですか!?!」

山田先生がだいぶあせっている。でもやるべきことは一つだ。

「僕が足止めします。安心してください、それじゃあ……」

「織斑君!?!おり」

無理やり通信を切った。さて、あとは……

「鈴さん、逃げてください」

「あたしも戦うわよ」

「何を言ってるんですか!危険なんですよ!」

「わかってるわよ、そんなこと。あたしが戦いたいって言うてるのよ。」

少しぐらい言うこと聞きなさいよ、あなた」

「ロックされているのは僕だけなんです!いつまでもここにいたら」

甲龍が未確認ISにロックされました。

ISからそんなことが無慈悲にも伝えられてくる。

「これで私もここから動けなくなったわ」
「くっ」

なんで嬉しそうなんだろう。訳がわからない。

「あたしが龍砲であいつの気を引くからあんたがトドメでいいわね」
「？」

「はい」

それでいくしかないか。

白式、実戦モードに移行。

キイイイン

白式の全エネルギーが回復する。準備完了。

「先生！織斑君たちが！」
「先生！わたくしにIS使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

真耶とセシリアがぎゃあぎゃああと騒ぎ出してしまった。だが千冬はそれを一掃する。

「あいつはやると言ったらやる男だ、心配ない。それよりも山田先生は三年生に早くクラッキングを済ませるように指示を出してください」

「は、はい・・・」

あまりにもまっすぐ言われたので真耶はすぐに作業に移った。

「オルコット。お前に出撃許可はできない。お前のISは一对多向けだ。

多対一では邪魔にしかない。そもそもその訓練をしていないだろっ」

「うぐ、はい。していませんわ」

「なら大人しくしている」

再びモニターに目を戻す。しかしこの時千冬は箒のことをすっかり忘れていた。

彼女がどこに向かっているかも知らずに。

「くっ、キリがないな」

鈴が龍砲で牽制し一夏が切る。そういう作戦だった。

しかし一夏が近づくと未確認ISはスラスターで距離をとって鈴にレーザーを撃ってくる。

それを一夏が零落白夜で消していく。その繰り返しだった。

「一夏！あたしのはいいからさっさと倒しなさいよ！」

「守るだけで精一杯なんですよ」

「そんなことしたらシールドエネルギーがなくなるでしょうが！」

「まだ大丈夫ですよ」

「まだって何よ！？まだって!!」

こんな状況でも話していると突然攻撃が止む。撃ってこないと確認して鈴さん近づいてくる。

「変ね、あのIS」

「そうですね」

「私達が話している間は攻撃を止めるときがあるわね。何か理由でもあるかしら」

「それはわかりません。でも一つ気になることがあって」

「気になること？」

「はい、あいつは僕が鈴さんを庇うのわかっていて撃ってきます。それも同じ間隔で」

「どういうこと？」

「動きが機械的すぎる」

「そりゃあ、ISは機械だから当たり前じゃない」
「そういうことじゃなくてですね・・・」

説明しようと思ったが白式から情報が送られてくる。僕の疑いは確信へと変わった。

「鈴さん」

「なによ」

「あのISは無人機です」

「はあ!?!」

鈴さんが驚くのも無理はない。ISは人が乗って始めて動くのだから。

「信じがたいことだとはわかってます。しかし僕からしてみればあいつから人の気配が感じられない。」

しかも白式からは生命反応がないと出ました」

「まさか、本当に無人?」

「たぶん」

ISを見る。その顔を見ようとするがやはりどこか機会じみてる。

「無人機だったらどうなのよ」

鈴さんが聞いてくる。あまり気がすすまないが今は緊急事態だ。戦いたくないなんて言ってられないな。

「全力でつぶしにいきます」

「あんたまだ本気じゃないの!？」

「はい」

「本気出しなさいよ!馬鹿!こっちは必死なのに!」

「すみません」

素直に謝ろう。確かに僕が悪い。

「私ともう一度龍砲を撃つから今度こそ仕留めなさい、いいわね?」

「了解!」

僕も鈴さんも構える。すると突然聞き覚えのある声が響いた。

「一夏あつ!」

「篤さん!？」

篤さんが中継室から放送で大声を上げていた。スピーカー独特のハウリングが鳴る。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

ああ、なんてことを。僕はいやな予感がして無人ISの方を見る。既にレーザーの発射準備はできていた。狙いは当然……

「箒さん!！」

無人ISが箒さんに向けてレーザーを打とうとしていた。

イグニッション・ブースト
瞬時加速じゃ間に合わない。いけるか？

無人ISがレーザーを撃つた瞬間に加速する、でもただの瞬時加速イグニッション・ブーストじゃない。

117

サイバーデン刀争術『水鏡渡り』

「「一夏!?!」」

鈴の目から見れば一夏がその場から消えたように見えただろう。ISのハイパーセンサーでも追いつけないスピードを出していた。箒の目からはレーザーと箒の間に影が一瞬見えてそれが箒をレーザーから守っていたように見えていた。

「「一夏!！」」

篤と鈴が一夏を心配して声を掛ける。

鈴は一夏の側までやってきた。一夏は今は静かに怒っていた。自分の仲間を狙われて黙ってはいられなかった。

「姉さん」

「なんだ、一夏？」

「あのIS、完全に破壊してもいいかな？」

「!？」

千冬は弟が言っていることが理解できなかった。

ISを完全に破壊する？世界最高の攻撃と防御を持ったISを？

「許可しよう、一夏。ただし条件がある」

「はい」

「コアは残せるか？」

「多分残ります」

「あともう一つ・・・」

それでも弟を信じる。やると言ったらやる男なのだから。

「必ず生きて帰って来い、いいな」

そこで通信が切れる。

今の一夏にとってそれは最高の励みになった。

しかしさっきの水鏡渡りで白式のエネルギーをほとんど使ってしまった。

ワールドエネルギーは無事でもそれを零落白夜に転換するエネルギーがなければ

意味がない。一夏はしばらく考えて答えを出した。

「鈴さん」

「なによ」

「僕に衝撃砲を全力で撃ってください」

「はあ！？あんた何言ってる」

「時間がないんです！」

「っ！」

鈴は無人ISの方を見る。またレーザーを打とうとしていた。

「篝さん」

「な、何だ一夏？」

心配そうな顔でこっちを見てくる。さっきの話を聞いていれば当然か。

「篝さんは逃げてください。今から僕がすることは篝さんに怪我をさせるかもしれませぬ。だからなるべく早く遠くまで逃げてくださ

い。鈴さんも衝撃砲を撃つたらずくに離れてください」

「・・・わかった。そうする」

「わかったわ」

箒はうなずくだけでやっぱり納得していない。自分も一夏の力になりたいのになれない。

それが悔しい。だからこれぐらいしかできない・・・

「一夏」

「はい、何でしょう」

「勝ってこい、いいな！」

「はい」

その一夏の笑顔は今までで一番まぶしかった。だから安心した。そして箒は走っていく。

「鈴さん、お願いします」

無人ISのチャージは既に終わっていた。あっちも全力で来るだろう。

腕の発射口がまぶしく光っている。

「どうなっても知らないわよ！一夏！」

龍砲を背中に受けて僕は『瞬時加速』をする。

『瞬時加速』は一度エネルギーを放出して内部に一度取り込み、圧縮して放出する。

その慣性エネルギーで加速する仕組みだ。当然外部からのエネルギーもよし。

僕はこの時エネルギーを取り込む性質を利用して白式のエネルギーを無理やり回復させた。

（白式、僕は雪片もおまえも嫌いだ。実際今も戦いたくないと思ってる。

力を使いたくないと思ってる。でも今は誰かを守る力を、僕に貸してくれ！）

僕は雪片を上段に構える。

雪片が答えるように中心の溝から外側に展開して青白い光を放つ。

しかしそれはどんどん大きくなっていつて、最終的にはアリーナのフィールドを覆いつくすほどの大きさになっていた。

「え、ちょ……何これ」

鈴が驚いている。これをくらうと想像するだけで寒気が走る。

「鈴さん、早く逃げてください！」

鈴は我に返りその場からできるだけ離れる。

無人ISは危険を察知し、ただでさえ威力の高いレーザーを最大出力で撃ってきた。

だが今はそれさえもちっぽけに見える。

「消えろおおおおおおお！」

『轟剣』

エネルギーの奔流がレーザーを消し去り、次に無人ISを飲み込む。ISのコアは特殊なレアメタルできているから余程のことがない限り

壊れない。今ので壊れてしまうかも知れないと一夏は後悔した。

「く、ぐっぐっぐっ」

巨大なエネルギーが地面に叩きつけられてとてつもない衝撃があり一夏全体を襲う。

一夏には『轟剣』を使った反動が体全体を襲う。

「きゃあ」

「くっ」

「なんて威力ですの・・・」

ピットの方ではそれぞれが何かにしがみついていた。

モニターは青白い光で何も見えなくなっている。

「な、何だ今の地震は」

筈はピットに向かう途中の廊下で壁に掴まっていた。

ピットよりもアリーナに近いこの廊下では立っているのもつらかった。

そしてその揺れはクラッキングをしていた外の三年生も感じていた。

「あはは、はは」

現場で見ていた鈴は笑うしかなかった。あまりの光景に腰を抜かしてしまった。

ドスッ

アリーナの中央を見る。そこには金色に光るキューブがあった。

ISのコアである。宣言どおり一夏はコアだけを残して無人ISを

破壊した。

それを人間が受けたらどうなるか。

ISの装甲は粉々にされ、シールドエネルギーと絶対防御は零落白夜で消滅し、人体は塵と化すだろう。

それを想像すると震えるしかなかった。同じ人間であるはずの一夏に恐怖してしまう。

しかしそんな思いは一瞬で吹き飛ばす。

ドサッ

「一夏あああああ！」

一夏が白式と共に倒れた。

「ここは・・・」

見覚えのない天井が目の前にある。よく見るとここは保健室だ。確か一度保健室に挨拶しに行ったんだっけ。

「よつやく気がついたか」

シャッターとカーテンが引かれる。そういえばもう夜だ。

「姉さん」

「全身に軽い打撲がある上に全身の骨に負担が掛かったようだ。おまえ絶対防御をカットしただろう。よくもまあそんな無茶をしたものだ」

「無意識のうちにはですよ。ああでもしないとエネルギーを回復できなかつたんですから」

「そうか。まあ、無事で何よりだ。家族に死なれては困るからな」

また心配掛けちゃったかな。悪いことした。

「しかしよく寝ていたものだな。最近寝てなかったのか？」

「よくあの日の夢を見るんだ」

「・・・そうか」

雪片を・・・使ってるからかな。

「お前の白式と雪片は修復しておいた。使いたくなったら使え」

姉さんが席を立ってしまう。この話はあまりしたくないのだろう。

「雪片も修復したんですか」

「ああ。数箇所破損が見られた。あんな使い方をするからだ。今後は『轟剣』……だったか、使っなよ」

「え、どうして」

「何度も言わせるな。お前の全身に負担が掛かったと言っているんだ」

「まさか」

「それだけの技だったんだ。わかったら使っな。いいな？」

「はい」

「私はまだ残ってる仕事がある。お前は十分や」

休めと言おうとした瞬間に保健室の扉が開いた。そこに見えた三つの影……

「「「一夏(さん)！」」」

篝さん、セシリアさん、鈴さんがいきなり入ってきてこっちに来た。

「一夏！大丈夫か!？」

「一夏さん！お怪我は!？」

「一夏！全身打撲だつて!？」

皆さん、ここは仮にも病室なんですから静かに……ああ

「皆さん、僕は大丈夫ですから。そろそろ離れないと・・・」
「・・・は？」
「馬鹿者共が」

ゴチーン×3

「・・・いったあああああ！」「」

三人に鉄槌が振り下ろされた。まあ、姉さんの前で騒いだらこうなるか。

「お前らさつさとこの部屋から出る！仮にも病人だぞ！」

「・・・す、すみませんでした！」「」

三人が保健室を去っていく。お見舞いに来てくれたのは嬉しかったけどね。

「一夏、休めよ」
「はい」

そう言って姉さんも保健室を去っていく。さて、寝ようか。僕は沈むように眠りに落ちていった。

次の日の放課後、山田先生が部屋にやってきた。

「お引越しです」

「はい？」

山田先生の言葉で僕らは山田先生の方に向く。

ああ、なんとなくわかった。

「で、どちらが移動なんですか？山田先生」

「えっと、お引越しするのは篠ノ之さんです。

部屋の調整が付い

たので、今日から同居しなくてすみますよ」

「一夏っ」

「は、はい」

「おまえはいいのか」

「えっと何が」

「移動についてだ！」

「僕は賛成ですけど・・・」

何か不満でもあるのだろうか。よくわからない。

「私もお手伝いしますから、すぐにやっちゃいましょう」
「ま、ま、待ってください。それは、今すぐでないといけませんか？」

何を言い出すんだろう、篤さんは。山田先生が困ってますよ。

「それは、まあ、そうですね。いつまでも年頃の男女が同室で生活をするというのは問題がありますし、篠ノ之さんもくつろげないでしょう?」

「い、いえ、私は」

何かを求めるように篤さんがこっちを見てくる。
ううん、正直に意見を言うべきだろうか。

「篤さん」

「な、何だ一夏」

「僕はまだ社会的に死にたくないです」

ピシイ

あれ何かに亀裂が入ったような音が・・・

「そうか。すまなかつたな一夏」

篤さんがすごくがっかりしているように見える。
あれ？僕何か間違った？

こうして僕は一人になった。

シャワーを浴びて部屋着に着替えて寝ようとしたらドアから響いた。

「はいはい、どちらさまです・・・か？」

「私だ」

篤さんがいた。忘れ物でもしたんだろうか。

ここに来たっことはとりあえず何か用かな。

「入りますか？」

「いや、ここでいい」

あらま、そうですか。

「何か話でも？」

「そうなんだ。そ、それでだな」

「はい」

「ら、来月の、学年別トーナメントだが・・・」

確か六月末にやるやつだったけ。自主参加だから僕は出ないけど。

理由は、もう言わなくていいだろう。

「わ、私が優勝したら

」

頬を赤くして篤さんは何かを言おうとしている。しかし優勝とはまた大きな目標だなあ。

「っ、付き合ってもらっ!」

「は、はい?」

付き合ってもらっって、買い物に?

第七話 終

第七話 今だけは・・・（一巻終了）（後書き）

やっと一巻が終わりました。

作者としてはこれからどうやってレギオスを入れていこうか
必死に考えてます。

また更新が遅くなるかもしれませんが、すいません。

読んでくれている読者様には本当に感謝です。

これからも読んでくれると作者は本当に嬉しいです。
では、また今度。

設定 白式(前書き)

タイトル通りです、はい。

設定 白式

白式びやくしき

操縦者：織斑一夏おりむらさちか

一夏が独自に改造したIS。
全体的に装甲が薄くなっており両手両足に展開型スラスタが付いている。

(アニメの白式のスラスタ翼が展開するような感じで)
原作よりもかなりスピード型になっている。

コアは白式を元に彼が発明した システムを組み込んでいる。 実戦モードで使用可能になり、
エネルギーが常に生成され長時間の起動を実現した。 ちなみに システムは彼の発明品の
ほとんどに使われている。(瞬時に服を着替えられるブレスレット
など)

シールドエネルギーは無駄を省くために、 攻撃を受けた時だけ必要
な量を放出し
オート・ガード
自動防御するように改造された。

一夏がイメージすればシールドエネルギーで実弾兵器をはじき返せるシールド
を展開することができるがまだ未完成。

(リヴァース・イージナス・エルメン(以下リヴァース)の金剛剄)

・『実践モード』

一夏が念じることによって発動し、発動した時だけシールドエネルギーを含めた全エネルギーを回復する。システムからエネルギーが供給されるがシールドエネルギーは回復できない。しかしシールドエネルギーは普段の600から2000まで跳ね上がる。

・サイハーデン刀争術『水鏡渡り（みかがみわたり）』

一夏の師匠の一人であるレイフォン・アルセイフ（以下レイフォン）が使っている

高速移動。一夏自身も使える。

白式では全てのスラスターで『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を行い、

ISのハイパーセンサーでも捉えられないほどのスピードを出せる。ただエネルギーの消費が激しい。一度使うとしばらく動けなくなり、システムの

エネルギーの供給を待つことになる。

・『轟剣』
轟剣こうけん

レイフォンが剄を練り上げ刀身を覆うように収束させる技。

一夏の場合は零落白夜を極限まで発動しその巨大なエネルギーをぶつける技。

その威力は一夏自身も想定外で雪片は一部破損し、使っている間はその反動で

強烈な反動が全身を襲う。

設定 白式（後書き）

ISとレギオスがうまく合わさっているか作者は不安です。
今思えば一夏が金剛剉を完成させればほぼ無敵ですねWWW

テレシアにて 山田真耶（前書き）

今回は短いです。

とりあえず仕事してる一夏が書きたかつたんです。

本編を期待していた人たちには申し訳ないです。

山田先生はあまり活躍してません。

すいません。

テレシアにて 山田真耶

第二回モンド・グロツソにて起きた僕の誘拐事件。その夢を何度も見る。

体は休んでいるけど心は疲れ果てている。僕は気を紛らわすために・
・
仕事に行きました。

「さて、マスター元気かな？」

僕のテレシアでやる仕事は三つある。

一つは接客。と言っても、料理を運んだり、そのお客様の話を聞いたり、

それについて意見を言ったりなどかな。たまに娘をどうですか？とか聞かれる。お見合いするためにここにいるわけじゃないのにな。

二つ目は料理だ。自慢じゃないけどなんでも作れる。

メニューにあるものを作ったり自分が考えたものを出しているときもある。

味は保障するよ？でもお偉いさん達が来るときはさすがに緊張するなあ。

最後はホテルのお手伝い。ロビーで手続きや荷物運び、今思うとホテルの仕事をほとんど手伝ってるね。

まあ、給料を見るたびに毎回失神しそうになるのはこの際黙っておこう。

「織斑、ここにいましたか」

「お久しぶりです、マスター」

「お久しぶりです。申し訳ないのですがすぐに仕事に取り組んでくれると助かります」

「いいですよ」

スーツを着て中年なのにすらっとした体をしているのがマスターだ。どの年代の女性にも人気があるらしい。『テレシア』のオーナーでもある。

ちなみに僕をスカウトしに来たのは何を隠そうこの人である。

ある日喫茶店でバイトをしてたら黒服の人たちがやってきたんだ。

お店はもちろんパニックだったよ。

そんな中マスターがお店に入ってきたんだ。

「ここに織斑一夏君はいますか？」

「はい、僕です」

僕は警戒してた。なんせいきなりお店を占領しちゃうような人だったからね。

今思えば結構衝撃的だったなあ。

「君にはうちのホテルで働いてほしい、どうだろうか」

「どこなんですか？」

「自分で言うのも何だが高級ホテル『テレシア』だ」

そして僕はマスターにスカウトされた。

今では周りから正社員でもいいんじゃないかといわれてるぐらいだ。でもIS学園に通うようになってから来る回数が減ったから僕が断つただけだね。

「マスター、土日はなるべく来るようにします。いつも通り午前中はホテルの手伝い、午後はレストランで接客及び厨房に参加でいいですか？」

「土日はいいのですか？」

「僕はここで働いているのが楽しいですから。余程のことがない限り来ますよ」

「それはなにより」

僕は腕のブレスレットで量子変換しておいたこのホテルの制服に一瞬で着替える。

「それでは頼みます」

「はい」

僕の仕事が始まる。

「おや、織斑君。今日は来てくれたのかい？すまないねえ」
「桜木さん、こんにちは」

桜木和子さん、67歳。とは思えないほど
このホテルの仕事をこなしている。最初はこの人にいろいろ叩き込
んでもらったんだ。

いつも優しく笑顔の人だ。今日も働く姿が美しい。

「学校があるので土日しか来れなくなりました。すいません」
「いいんだよ。来てくれるだけでも嬉しいからねえ」
「僕もこのホテルで働くのが楽しいですから」
「嬉しいことを言ってくれるねえ」

笑顔がまぶしいな。やっぱりこの人にいろいろ教わったのは
僕にとっての宝だろう。

「部屋の掃除は僕がやっておきます。桜木さんはシーツの洗浄をお
願います。」

あとで僕が部屋に運んでおきますから」

「いいのかい？織斑君も忙しいんじゃないのかい？」

「忙しいのはお互い様ですよ。桜木さんこれからレストランで下
しらえでしょうし」

「すまないねえ」

自分も少し食べさせてもらった時があっただけど、あまりの美味しさに僕は本気で涙を流した。

「口にあわなかったかい？」

「いえ、とつても美味しいです。こんなに美味しいもの初めてで」

「そうかい、そうかい。もっと食べてもいいんだよ」

「はい、いただきます」

それ以来僕は桜木さんに負けないぐらい料理を頑張ろうって決めた。今ではテレシアで料理を振舞えるくらいに。

しかし桜木さんは本当に働き者だそうだ。マスター曰く

「私よりも早く来て仕事をしている。あの人には敵いませんね」

らしい。いや本当にすごい。働く人の鏡だな。

「じゃあ、僕そろそろ行きまね」

「織斑君、ちよつと待ちなさい」

「はい、何でしょう？」

「これを持って行きなさい」

それはいつも桜木さんが用意してくれている弁当だった。これがま

た絶品である。

「いつもすいません」

「私も作るのが楽しくてねえ。高校生が昼なしはつらいだろうからねえ。」

今度織斑君の料理を食べさせてほしいなあ」

「いいですよ、よろこんで！」

「それじゃあ、いつてらっしゃい」

「はい」

次はレストランだ。

レストランではさつきも言ったように接客と料理が僕の仕事。

ただちょっと変わっていて僕の接客だけを頼む人もいれば、純粋に料理を食べに来てくれる人もいる。もしくは両方。予約制だが後者になると高くなる。

厨房はお客さんが退屈しないように実際料理をしているところを見れるようにしているから人気は減らない。

ただ面白いのはたまにどこかのシェフが来ることかな。どうも僕のメニューの秘訣を盗みに来る。

まあ、こっちは慣れてるから早すぎてあつちは見えないだろうけど。

「織斑、一つ頼む」

「はい、了解しました」

僕のスペシャルメニュー「サマーナイト」。

旬のものを使って僕が自分で考え出した料理である。

当然季節によって味が違うし桜木さんも褒めてくれた。ただ高いらしい。

うん、値段はマスターが決めてるから僕は知らない。

僕が働いてるレストランはこの『テレシア』の最上階にある。

当然絶景でそこで食べる料理は格別である。

今は料理をしているがあと数分で接客と料理を予約した人が来ると聞かされた。

145

「あのお、予約をした山田真耶なんですけど・・・」

は？聞き覚えのある名前と声が聞こえた気がした。

「かしこまりました。では、こちらへどうぞ」

「は、はい！」

山田先生だった。こういうところには来た事がないのだろうか。

すごく緊張しているように見える。さて、いくか。

「ご来店いただき誠にありがとうございます、ミス・山田」

「あ、織斑・・・君」

山田先生が驚いている。まあ、自分の教え子がタキシードを着てたら以外かな。

「食事の時はこのホテル「テレシア」のメンバーの織斑一夏として振舞わせていただきます。」

なお、接客のときはどんなことでもご相談ください。以上です」

「は・・・はあ」

まずは料理だな。

とりあえず「サマーナイト」のフルコースで量は少なめで均一に。どのお客様にも振舞うときは味と量を考えること。桜木さんの教えだ。

そうして山田先生は食事を終えた。

「織斑君、本当にここで働いてるんですね。先生びっくりしちゃいました」

「どこからその情報を？」

「噂で聞いてたんですよ。高級ホテルで15歳の天才が働いていると。」

それでももしかしたらと思って織斑先生に聞いてみたらここに行けと

言われまして」

姉さんか。あまりここで働いていることは他人に言いふらすようなことはしてほしくないんだけどなあ。

「料理とっても美味しかったですよ、織斑君。先生ちょっと自信なくしちゃいました・・・はあ」

「今日はどんな用件で？」

「あ、そうですね。どうしても確かめておきたいことがあったんです」

山田先生が真剣な顔で聞いてくる。そんなに大事なことなんだろうか。

「織斑君、授業ではISを全く使ってませんけどなにかあるんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「織斑君？」

言ったら山田先生はどんな顔をするだろう。それがいやで僕は黙ってるしかなかった。

「今日の御代は僕が払っておきます」

「織斑君！？」

「いつもお世話になってますから」

「待ってください！織斑君！」

僕が去ろうとしたら山田先生が笑顔でこう言った。

「先生はどんなことがあるうといつでも相談にのります。
だからなんでも言ってくださいね、なんせ先生ですから！」
「・・・はい」

テレシアにて 山田真耶 終

テレシアにて 山田真耶（後書き）

短くてすいません。

最近夜遅くまで書いているのでガタがきました。

眠いです。ZZZZZZZZ

二巻の更新は遅れると思います。

土日になるべく頑張ると思いますが。

第八話 やってきた貴公子と軍人（二巻開始）（前書き）

はい、二巻です。

ただこれからちよつと休むかもしれません。

深夜しか書く時間がないので。

楽しみにしている方本当にすみません。

回復したらまた書きますので。

第八話 やってきた貴公子と軍人（二巻開始）

仕事に行った土曜日の朝。

中学の友人である五反田弾ごたんだたんの家に行っていた。

普段は五反田食堂ごたんだたとしてお店をやっている。

と言っても朝早くに行ったもんだからおじさんの厳げんさんしか

起きていなかった。この人は八十を過ぎてもなおも今日も健在だ。人間ってすごいね。

「おう、一夏じゃないか。こんな朝早くにどうした？」

「おはようございます、厳さん。学校から許可が出たので仕事に行こうかと思ひまして」

「たく、お前は相変わらずまじめだな。

弾もこういところ見習ってほしいもんだ」

「はは」

まあ、弾はあれでも結構まじめな方だと思っけど。

口に出したが最後、浮かれちゃうだろうけどね。

「あら一夏君、こんな朝早くからトレーニング？」

「おはようございます、蓮さん。僕はこれから仕事です」

「あら、えらいわねえ。こんな子が家に一人ほしいわ」

五反田食堂の自称看板娘、五反田蓮さん。
実年齢は秘密。というか聞いたら失礼だ。今日も笑顔で美人である。
て、さっきのは冗談ですよ？一家に一台何とやら・・・

「あ、そろそろ行きますね。お邪魔しました」

「おう、たまには遊びにこいよ」

「いってらっしゃい、一夏君」

「いってきます」

このあと弾の妹である蘭が一夏が来たのに
なんで起こしてくれなかつたのかと文句を言っていたという事は
一夏は知らなかった。

「今日はなんと転校生を紹介します！しかも二人です！」
「「「えええええっ！？」「」「」

そんな山田先生の言葉で一日が始まるうとしていた。
転校生が来たら騒ぐのはわかっていたけどまさかここまでとは。
女子って元気だね。

「失礼します」

「……………」

二人の転校生がクラスに入ってきて全員が黙り込んでしまう。
僕自身も驚いている。

転校生のうち一人は

男子だったから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。

この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしく
お願いします」

そう言うのにこやかな顔で一礼する。

人なつっこい顔。礼儀正しい立ち居振る舞いと中性的に整った顔立
ち。

髪は金髪で後ろで丁寧に束ねている。体は華奢といえるくらいスマ
ート。

一言で言うと『貴公子』。
テレシアで働いていても違和感を感じないだろう。仲良くなれそう
だ。

「お、男……………」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「

なるほど世界で二番目にISを使える男というわけか。

「きゃ・・・・・・・・」

「はい？」

なんだろう。いやな予感がする。まさか・・・

「きゃあああああ

っ！」

うわ、耳が痛い。これがソニックブームってやつか。警戒してたのに。

迂闊だった。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなるタイプ！」

「この星に生まれてよかった〜〜〜！」

最後のは少し大袈裟な気がする。この星ってなに？

それにしても女子ってなんであんなに元気なんだろう。

少し分けてほしいくらいだね。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

姉さんの言葉でクラス一同が静かになる。
そんなに怖いのか。まあ、認めるけどね。

「そ、それではもう一人の転校生をします！」

もう一人を見る。でも見た目からして異端だった。

輝くような銀髪。ただ伸ばしっぱなしという感じで腰まである髪。
左目に黒眼帯。右目は燃えるように赤いのに全く温度を感じない。
こっちは「軍人」といったところかな。

本人は腕組をしてクラスの女子を下らなさそうな目で見ていた。
でもすぐに姉さんの方を見ていた。

「・・・挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

敬礼か。やっぱり軍人が軍施設関係者なのかな。姉さんを教官と呼
んでいるから

ドイツなのは間違いない。あの事件で僕の居場所をを姉さんに提供
したのは

ドイツだった。ダメだ、また思い出しちゃったな。

まあ、そのお礼ということで姉さんは一年ほどドイツで軍隊教官と
して

働いていたそうだ。たぶん姉さんの教え子の一人だろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・」

え、終わり？あれだけ騒がしかったクラスもだんまりだよ。

「あ、あの、以上・・・・・・・・ですか？」

「以上だ」

即答か。山田先生泣きそうだな。かわいそうに。
ボーデヴィツヒさんの方を見ると目が合った。

「！貴様が」

そついうとこっちに来る。そして右手を上げて
！？

ガシッ

「女性の挨拶にしては随分と失礼ではありませんか？」

僕はボーデヴィツヒさんの平手打ちを彼女の手首を握って止めた。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

僕を・・・認めない？

もしかして第二回『モンド・グロツソ』のことを根に持つてるのか？

「ふん・・・」

自分の手首を僕の手から外し空いている席に着いた。

教室はいまだに静かなままだった。

「ではHRはこれで終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦を行う。ほら、さっさと動け。一秒でも遅れてみる。特別カリキュラムが待ってるぞ。」

157

姉さんが手を叩いて行動を促す。

さて僕も移動しないとね。ここで女子と着替えるなんて紳士のやることじゃない。

「おい織斑。デユノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「はい、わかりました」

うーん、転校生を案内する・・・か。ベタだね。

「君が織斑君？はじめまして。僕は
「すいません。自己紹介は後にして下さい。ここだと女子が着替え
るので」

僕はそついいながらシャルルの手を取り教室を出た。

「男子は空いているアリーナの教室で着替えないといけないんです。
実習のたびに移動なので早めに慣れてください。」

「う、うん……」

なんか落ちつかないかなそうだな。ああ、手かな。
僕は手を離す。

「すいません。急いでいたもので」

「ち、違うよ。別に気にしてないよ」

「そうですか」

とりあえず急がないと。もたもたしてたら……

「ああ！転校生発見！」

「しかも織斑君と一緒に！」

来た。HRが終わり噂を聞きつけた女子が集まってきた。

このまま質問攻めになったら間違いなく遅刻だ。ああ、姉さんの鉄拳が飛んでくるのが容易に想像できる。

「いた！こつちよー！」

「者ども出会え出会えい」

ちよつと待つてください。いつからここは武家屋敷になったんですか。

僕達捕まるってことですか？・・・間違ってないな。何とかしなきゃ。

「シャルル」

「な、何かな」

「ごめんなさい」

「え、ええ！？」

僕はシャルルに近寄り抱き上げる。お姫様抱っこだね。まあ、気にしない。

僕はその場で回転しシャルルを女子の集まりから超えるようにシャルルを投げる。

そして僕は腰にあるウエストポーチから・・・手榴弾の形をした物体を取り出す。

「みなさん、ごめんなさい！」

「ま、待って！織斑君、まさかそれ本物じゃ・・・！？」

お決まりのあれをやる。口で安全装置を外すやつ。

女子の顔が恐怖で染まる。そして手榴弾を地面に叩きつけた。

「きゃあああああ！？」

朝とは違う叫びが廊下に響く。

しかし爆発はせずただ煙が廊下に充満していた。

僕はその煙の中から跳躍し、空中にいたシャルルをまたお姫様抱っこで

抱いて地面に着地した。そしてシャルルを下ろして再び走り出す。

煙の中では女子の集まりが一斉に倒れた。

「い、一夏！あれ毒ガスじゃないよね！？

ていうか、なんで手榴弾なんか持つてるの！？」

「大丈夫ですよ。あれは即効性の睡眠ガスで害はありません。

手榴弾は作れますけど安全な物しか作ってませんよ」

シャルルはわけがわからないという顔をしていた。うーん、あの中から脱出する

とはいえ少し強引過ぎたかな。シャルルを投げちゃったし。

「シャルル」

「な、なに？」

「シャルルでいいですか？」

「え？」

「そっちも一夏で呼んでましたし」

「あ、ああ。うん、シャルルでいいよ。」

「では、よろしくおねがいます」

「うん。こちらこそ」

お互いに屈託のない笑顔を返す。

こうして僕らは更衣室に着いた。

「うわ、時間が。シャルル急がないと」

「そ、そうだね。着替えるから、あっち向いてて……ね？」

「ああ、すみません」

男子とはいえ着替えをじろじろ見るのは確かに失礼だ。

僕は後ろを向いてプレスレットをISスーツに設定する。

僕の体は光に包まれ量子変換により一瞬でISスーツに着替える。

「一夏、それって？」

シャルルが物珍しそうに見てくる。まあ、無理もないか。

「これは自分が持っている服を量子変換してストックできるんです。」

ちなみに自動で洗ってくれます」

「す、すごいね」

「そういうシャルルはどうなんです？着替えるの早かったし、それ随分着やすそうですけど」

「あ、ああ。デュノア社製のオリジナルなんだよ。フルオーダー品でね」

「デュノアっていったら量産機ISのシェアが世界第三位でしたよね？」

「うん。父がね、社長なんだ。」

「なるほど。その気品も納得です。うらやましいですね」

「どうなんだろうね・・・」

シャルルが視線を逸らす。

ああ、家のことで何かを言われるのが嫌いな方なのかな。

「すみません、シャルル」

「ど、どうして一夏があやまるの？」

「この家のことをあまり言われたくないのかと」

「だ、大丈夫だよ。それより早くしないと織斑先生に怒られちゃうよ？」

「そうですね、急ぎましょうか」

「うん！」

なんでだろう。その時のシャルルの笑顔はかなり無理をしていた気がする。

第八話
終

第八話 やつてきた貴公子と軍人（二巻開始）（後書き）

前回よりだいぶ短い気がします。

オリジナルの展開を考えてたら遅くなっちゃいました。

また書きますので呼んでくれると嬉しいです。

では。 Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z

第九話 強さと優しさ（前書き）

前回は短めだったと思います。スイマセン。

自分は一夏を書いててびっくりしました。

どれだけぶっ飛んでいるのやらWWW

続きを書きます。短いと思った人はどんどん言ってください。

サブタイトルつけました！感想待ってます！

第九話 強さと優しさ

第二グラウンドには無事到着。ふう、走った。

「ずいぶんゆつくりでしたわね」

「そうですね？」

「ええ、普段なら五分前には来てますのに」

姉さんが列に並べと言ったので並んだら隣はセシリアさんだった。まあ、結構ギリギリだったからね。

「いろいろとあつたんですよ」

「また女性関係で問題でも？」

「・・・・・・・・・・」

「一夏さん？」

なんでわかるんだろうね。女性って不思議だよな。

こういふので不倫とかばれるんだろうね。おやっさんたち、ドンマイです。

まあ、僕は絶対にしないけどな。

「なに？あんたまたなんかやったの？」

この声は鈴さんだな。近いから後ろかな。

「後ろで合ってるわよ」

ホント不思議・・・

「今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ！？一夏、あんな今度はなにやったのよ！？」

「・・・・・・・・」

僕は黙るしかない。僕の推測が正しければあのことに関係しているのだから。

考えれば考えるほど気が重くなる。あの夢は毎晩のように見える。まるで忘れるなどとも言つように・・・

「お前ら静かにしている！」

バシーン×2

「「「いったあああ！」「」」

今日は出席簿だったか。鉄拳じゃなかったよ、はは……

ポスッ

出席簿が僕の頭の上に優しく置かれた。

「え？」

「ボーっとするな、一夏」

「あ……はい、すみません」

一礼。どうやら考えていたことはばれていたらしい。
今は気にしても仕方がないか。いつまでも落ち込んだままではいられない。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」
「……………はい！」
「……………」

今日は二組と合同だからよりはっきりと返事が聞こえる。
やっぱり恐怖授業の賜物か。

「今日は戦闘を実演してもらおう。鳳ファン！オルコット！
専用機持ちならすぐ始められるだろう。いけ。」

「なんで私が(わたくしが)！一夏(さん)だって専用機持ちじやないですか！」

なんで僕に振るんですか！僕は無関係でしょ！

「アイツはお前らと違って既にある程度の戦闘はこなせる。

私からしたらお前らはひよっこもいいところだ。さっさと準備しろ。
そして悔しかったら織斑に勝って見せろ」

「うぐっ」

姉さんって僕をそんなふうに見てたんだ。ちょっと嬉しいかな。

「お前ら少しはやる気を出せ。
見せられるぞ？」

アイツにいいところを

あれ？姉さんなんか言った？

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくし
セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

急にやる気になってる。
本当に女の子とってどんな仕組みになってるんだろっね。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞^{せしご}。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は」

キイイイン……。

ん？上から？上を見上げると……

「ど、どいてくださいっ！」

山田先生が落ちてくる。ああ、また操縦ミスかな。さすがにISなしで受け止めるのは

無理があるか。僕は白式を展開し山田先生を待ち構える。

お互いに衝撃がこないように受け止める瞬間、足の展開型スラストで横に回転して

山田先生を受け流すように支える。またお姫様抱っこだ。

今日はお姫様抱っこの日とか……ないか。

「あ、ありがとうございます織斑君。しかしすごいですね。ISに全くダメージがないです」

「そういうふうになりましたから。あと山田先生、いくらISだから
とって安全う」

運転と言おうとしたところで僕の顔の横をレーザーが通り過ぎてい
く。

避けなきゃ死にはしないがおそらくとんでもない衝撃が僕の頭を襲
っていたらう。

恐る恐る撃ってきた方を見る。

「一夏さん？そろそろ山田先生を降ろしたらどうですか？
オホホホホホホホ」

セシリアさんが怒ってることだけはわかる。・・・なぜ？

ガシーン。

今のは双天牙月の連結する音！？

「うおりゃあああ！」

首だけを横に向けて後ろを見る。女性なら絶対に言わないであろう
雄叫びをあげて

鈴さんが双天牙月を投げてきた。まずい・・・反応が遅れた！」

ドンッドンッ！

双天牙月が打ち落とされた。やったのは山田先生だった。その手には五十一口径アサルトライフル《レッドバレット》がある。ただ撃ってる体勢がありえない。山田先生は僕の首に腕を回すようにして撃っていた。こんな体勢であれをやったのか。すごいな。

「織斑君、怪我はありませんか？」

「はい、ありがとうございます」

笑顔がまぶしいね。て、顔近っ！

「いえいえ」

「そろそろ降ろしますね」

「はい！」

僕は山田先生を降ろす。山田先生がこっちを振り向いて僕の顔を見ると

顔を赤くしていた。風邪かな？

「山田先生は元代表候補生だからな。あれくらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生どまりでしたし……」

へえ、そうだったんだ。操縦ミスさえしなければいいのにな。

「さて小娘ども、お前らの相手は山田先生だ。さつさとはじめろぞ」

「え？あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

姉さんも認める実力者……か。

「では、はじめ！」

山田先生、大丈夫……だよね？

試験官のときは足払い一つで終わっちゃったからなあ。

「手加減はしませんわ！」

「さっきの本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

さてどうなるのやら……

「さて、今の間に……デュノア。

山田先生が使っているラファールの解説をしてみる」

「あ、はい」

そういえばこの学園では一般の生徒は
打鉄うちがねかラファールが貸し出されるんだっけ。

「山田先生の使用されている・・・(二巻参照)・・・
参加サードパーティが多いことでも知られています」
「ああ、いったんそこまでいい。・・・終わるぞ」

へえ、さすがデュノア社からだけあるね。ここまで詳しいなんて。
こっちはどうかな。ほとんど避けてる。避けきれないのはシールド
でガード。

山田先生は射撃でセシリアさんを誘導、
鈴さんとぶつかってとどめのグレネード・・・か。
先生すごいな。

「くっ、うっ・・・。まさかこのわたくしが・・・」
「あ、あんたねえ・・・何面白いように回避先読まれてんのよ・・・」
「り、鈴さんこそ！無駄にはかすかと撃つからいけないのですわ！」
「あなたのビットも似たようなもんでしょうが！」
「ぐぐぐぐぐっ・・・!!」
「ぎぎぎぎっ・・・!!」

ダメだなあ、二人とも。

タッグっていうのはお互いが協力し合って初めて成り立つものなの

に、
これじゃあねえ。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。
以後は敬意を持って接するように」

それは当たり前のことなんじゃ・・・

「それでは専用機持ちで分かれて実習を行うように、はじめろ」

とまあ、ISの基本動作を教えて全員に実習をしてもらった。
僕？白式は使わなかったよ。

まあ、それは置いて。いつものメンバーとシャルルを誘って今
は屋上で昼食。
誘ったのは僕だよ。理由は・・・

「お弁当作ってきたんです」

全員分を作ってきた。こういう弁当は自分で作ったことがないから
ね。

しかし桜木さんのお弁当はなんであんなに美味しくできるんだろう。
頑張ってるけど再現するのも難しい。ちなみにレシピを聞くなんて
野暮なまねは

しない。自分で見つけてこそ意味があるんだ。

「ほう、これは」

「おいしそうですわね」

「相変らずレベル高いわね」

「えっと、なんで僕の分まであるの？」

みんな喜んでくれているようだ。シャルルのはいつ作ったって？
昼休みが始まる前だよ。短時間で作ったけど手は抜いてない。
というか全力で作った。

「お、おいしいな・・・」

「専属のシェフレベルですわ・・・」

「なんでこんなにおいしいのよ！」

「ホントだ。おいしい」

うーん、さすがに短時間だと専属のシェフ？レベルなのかな。
もっとスピードを上げないと。

じゃないとテレシアで他のシェフにメニュー知られてしまうから
ね。

あれ？ 篤さん、セシリアさん、鈴さんが落ち込んでる。

女の子って本当にわからないな。

二人の転校生が来てから数日。
授業が終わって寮に帰る途中、ボーデヴィツヒさんに会った。会ってしまった。

「おい」

「・・・・・・・・」

声をかけられた。返事はしない。ただ止まる。

「お前も専用機持ちだそうだな」

「それが？」

「ちようどいい。私と戦え」

「遠慮します」

「貴様に拒否権はない。貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしただろう」

ことは容易に想像できる。だから、私は貴様を
貴様の存在
を認めない」

ああ、やっぱりか。姉さんの強さに憧れ、どこまでも尊敬しているのだろう。

そんな姉さんの経歴に傷を付けた僕が憎い、か。

僕はまた歩き出す。

「貴方と戦っても僕が得るものは何もないですから」

我ながら現金なことを言ったものだ。

「ふん、いずれ戦わざるを得ないようにしてやる」

そんなことを言って彼女は去っていく。一体何をする気だ？

「一夏？」

「シャルル……」

寮の方からシャルルがやってきた。男同士ってことで部屋は一緒になつた。

最近はお茶を振舞ってる。もちろん自分で作ったやつ。シャルルは毎回おいしいと言ってくれるのでこっちも作る気が湧いてくるからよし。

「さつきボーデヴィツヒさんと話してたよね。何かあったの？」

「なんでもありませんよ……部屋に戻りましょう」

僕は無理やり笑顔を作つて寮に向かった。それでもシャルルは僕の作り笑いを見抜いて後ろから聞いてくる。

「一夏が授業でISを使わないのとなにか関係があるの？」

鋭いな。でも言う気はない。このまま寮に戻ろうとしてもずっと聞かれるかな。

「シャルルは先に戻っててください。僕は少し織斑先生に用があるので」

「一夏？一夏！」

無視してまた歩き出す。足が酷く重いような気がした。

シャルルを振り切って再び校舎の方へ向かう。用事があると言ったのは正直嘘だ。ただ聞かれるのがいやだったから。聞かれて否定されるのが怖かったから。だから逃げ出した。

「はは、篤さんにはまた言われちゃうな、はあ……」

（逃げるなああ！）

「さて、どうしたものか」

どこで時間をつぶそうか。そんなことを考えていると聞き覚えのある声が聞こえた。

僕は近くにあった木陰に隠れる。

『殺戮』

物音を一切立てず、心音を抑え、呼吸を最低限にして自分の存在を限りなくゼロに近い状態にする。余程のことがない限り気付かれないだろう。

180

「なぜこんなところで教師など！」
「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それが今ここにあるというだけだ」

ラウラと姉さんか。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。
ここでのあなたの役割は何なんですか？」
「教師だが」

即答。姉さんらしいな・・・

「この学園の生徒など教官が教えたるにたる人間ではありません。
なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションか何かと勘違い
をしている。」

そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど

「

「　　そこまでにしておけよ、小娘」

「っ・・・っ！」

（うっ・・・っ！）

姉さんの声に覇気がある。師匠たちと同レベルの威圧感。
ここまで伝わってきてる。怒ってるんだ・・・

「少し見ない間に偉くなつたな。」

十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は・・・」

ポーデヴィツヒさんが怯えている。僕だって正直怖い。

久しぶりに感じた圧倒的存在を前にして弱者はひれ伏すしかない。

（力がない？そんなもの掴み取れ。ただ相手を徹底的に叩きのめせ
ばいい！

そんなこともわからんのか！）

ああ、ルイメイ師匠の言葉を思い出す。
相手を黙らせるには力で抑える・・・だったか。

「さつさと寮に戻れ、私は忙しい」

「・・・・・・・・」

ボーデヴィツヒさんは黙って寮に戻っていく。その目は泣いていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・一夏、そこにいるんだろう」

「ばれてた？」

「少し動揺が感じられた。その技は感情も抑えろと言われたのを忘れたか？」

「そうでした・・・」

まさか気付かれるとは思わなかった。つくづくこの姉は人間離れしている。

「あれは既に終わったことだ。お前が気に病む必要はない」

「僕は姉さんにあんな顔をさせたことを後悔してるんだけどね」

「そうか」

「・・・・・・・・」

いやな沈黙だな。こんな話はあるべくしないって決めてたのにな。

「お前は休め。授業で寝てみる。容赦なく叩くぞ」
「了解」

姉さんは校舎に、僕は寮へと戻っていく。

第九話 終

第九話 強さと優しさ（後書き）

なにも書けない。

オリジナル展開が思いつかない。

ピンチ！

また書きます。

第十話 シャルルの事情（前書き）

オリジナル展開がうまく書けないです。

今回はシャルルのターン！

誤字脱字などがあれば報告お願いします。
作者もなるべく気を付けます。

第十話 シャルルの事情

現在自分の部屋の前、僕は……悩んでいた。

ああ、そういえばシャルルを無視しちゃったんだ。うわあ……
まずい。

とりあえず入ろうか。入って謝ろう、うん。

「ただいま。シャルル、いますか？」

返事がない。というかシャワー室から音が聞こえる。

なんだシャワーを浴びてたのか。じゃあ少し待とうかな。

ベッドに仰向けになって倒れる。さっきあったことを振り返る。

(あれは既に終わったことだ。お前が気に病む必要はない)

そう言ってくれるのは嬉しいんだけどね。あれは忘れたくても
忘れられないんだ……

(ふん、いずれ戦わざるを得ないようにしてやる)

寒気がした。僕自身が雪片を使うことを想像するとあの光景がよみがえる。

でも何か悪い予感がした。でもその答えは今わからない。

「落ち着け・・・何事にも冷静に対処すれば問題ないはずだ」

（あなたは本当に落ち着きがないですね。まったく、誰に似たのか・・・）

はは、カナリス師匠も厳しい人だったな。

知らないうちに顔が笑ってた。少し元気が出たみたいだ。

そういえば・・・

「シャンプー、切れてたっけ」

僕は棚から新しいシャンプーを取り出す。

シャワールームは洗面所兼脱衣所とドアで区切られている。

脱衣所に置いておけばすぐわかるよね。

謝るのは後かな。

ガチャ。

うん？ シャルルかな。シャンプーを探しに来たのか。

「シャルル、これ替えのシャン・・・プ」
「い、い、いち・・・か・・・？」

シャワールームから出てきたのは『女子』だった。なんでかって？
簡単だよ、

胸がある。こぐらいかな。ただそのスタイルのおかげで妙に際だつ
ている。

目を逸らさないといけないんだけど、

そこにあつたのは一つの完成された『美』だった。

僕が心のそこから美しいと言えるくらいのこと・・・

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

シャルル・・・だよな？後ろの髪をほどいたらあんな感じなのかな。
お互いに見つめ合う。するとシャルルの顔は真っ赤になり、
真っ青になり、後ろに・・・倒れていく？

「シャルル!？」

サイハーデン刀争術『水鏡渡り』

まさか、自分の部屋で水鏡渡りをする日が来るなんて思いもしなかつた。

僕はシャルルが倒れる前に自分の腕に抱いて受け止める。

「シャルル？シャルル！」
「・・・・・・・・・・」

たぶんのぼせたんだろ。とりあえず座らせてシャルルの髪を洗う。すぐにタオルで拭いて髪を乾かす。ナンニモミテナイヨ。できるだけ長い間目を閉じてるからね。

シャルルのジャージを一度ブレスレットに量子変換してシャルルの近くに持つてきてジャージに設定する。できた。そのままシャルルを抱えてベッドに寝かす。

「うわ、寝顔が・・・」

綺麗だとしか言いようがなかった。て、そんなことは・・・どうでもよくないけど、なんでシャルルは男装してたんだろ。わからない。ここ数日のシャルルの顔を思い出す。思い当たる節が一つだけあった・・・

（どうなんだろうね・・・）

今思い出せば悲しそうな顔をしていた。考えられるとしたらそれしかない。

「少し、調べてみますか・・・」

僕は自分のウエストポーチから量子変換機を取り出してパソコンと眼鏡を出す。

そしてあらゆる手段を使って調べる・・・デュノア社について。

「う、ううん・・・」

「あ、起きましたか」

そこにはベッドでパソコンと向き合っている一夏がいた。
シャルルが見たその横顔は別人のように見えた。

「・・・」
「・・・」

また沈黙。そんな中、切り出したのは一夏だった。

「狙いは僕の白式のデータですか？それとも本体ごと？」

「!?!」

ああ、この反応は間違いないな。じゃあ画面に書いてあることも本
当か。

「データ不足により第三世代型の開発に間に合わず、欧州の
統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名。政府からの予
算を大幅に

カットされ、デユノア社は経営危機に……」

「どうして……それを？」

「そしてシャルルは白式のデータと僕のデータを取るために日本に
送り出された

……違いますか？」

「……その通りだよ、一夏」

やっぱりか。だとすると結論は見えてくる。僕はパソコンをしまっ
て眼鏡を取る。

「男子なら注目を浴びるための広告塔。そして僕という
特異ケースに接触しやすくするため……ですか？」

「……」

無言の肯定。

「なぜです？」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

愛人の子・・・だって？

「引き取られたのが二年前。お母さんが死んで、デュノア社に連れて行かれたんだ。」

父に会ったのは二回。会話は数回くらいかな。本妻の人に殴られたよ。」

『泥棒猫の娘が！』ってね。あの時は参ったよ」

シャルルの顔がどんどん暗くなっていく。

「そして色々と検査をする過程でIS適応が高いことがわかったんだ。」

あの人にとって・・・僕は手段でしかないんだよ」

なるほど。使えるものは使う・・・か。

「あとは一夏が言ったとおりだよ。今まで嘘をついていてゴメンね」

深々と頭を下げてる。違う・・・シャルルは何も悪くないはずだ。

「シャルルはこれからどうなるんですか？」

「女つてことがばれちゃったらデュノア社は潰れるか他企業の傘下に入るか、

僕にとつてはどうでもいいけどね。僕は本国に呼び戻されて、良くて牢屋行きかな」

「そうですか」

「でも話したら楽になったなあ。本当に僕はどうなっちゃうんだろ
うね、はは」

その目には涙が浮かんでいた。違う、僕が見たいのはそんな顔じゃない。

誰かの悲しむ顔なんて僕は見たくない。

「シャルルはそれでいいんですか？」

「え？」

「このまま牢屋行きでいいんですか？」

シャルルは俯いてしまう。その目から涙がこぼれた。

「いいわけ……ないよ。でも、僕には何もできないんだよ。う
うえ……」

泣いてしまった。今まで溜めていたものを全て吐き出すように……

「シャルル」

「うつつ」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる

国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は

原則として許可されないものとする」

「何を・・・？」

「この学園にいる限り、シャルルの父親はあなたに手出しできません。

ここにいればいいんです」

これなら三年間は大丈夫なはずだ。三年間もあれば解決策の一つでも見つかるだろう。

「一夏」

「はい」

「よく覚えられたね。特記事項つて五十五個もあるのに」

「なんならここで全部言いましょうか？」

「え！？い、いいよ！」

ああ、やっと笑ってくれた。

「まあ、万が一デュノア社が手を出してきたらこれを使いましょう」

僕はメモリを取り出す。シャルルが不思議そうな目で見てくる。

「一夏、それは？」

「デュノア社の機密情報 + e t c」

「……嘘でしょ？」

「さっきデュノア社のコンピューターにハッキングして

デュノア社に関する全てのデータをこのメモリに記録しました。気付かれてないから

問題ありませんよ。これを世界中に公開すればデュノア社は潰せま
す」

シャルルが考え込んでいる。なんだろう。

「デュノア社が潰れたら、僕はどこに行けばいいの？」

そういえばそうだね。でも問題ないだろう。

「テレシアはご存知ですか？」

「えーっと、確か高級ホテルの……」

「そこに泊まってはどうぞです？」

「ほ、僕そんなお金持ってないよ！」

「僕が払いますよ」

「え？」

シャルルになら言ってもいいかな。

「僕はテレシアで働いています」

「え、ええええ！」

そんなに驚かなくても。

「だから気にしないでください」

「そ、そんな！悪いよ！」

「僕はシャルルを助けたいんです。ダメですか？」

「……」

また考え込んでしまうシャルル。

「一夏はどうして僕を助けてくれるの？」

「誰かを助けるのに、理由がいりますか？」

さすがにもう反論できないだろう。

「……うん、考えとくよ」

「そうですか」

これで解決したな。

「ところで一夏……」

「はい」

シャルルが近くまでやって来る。僕の目の前に。顔を赤くして何かを聞こうとしている。なんだ？

「僕の髪、一夏が洗ったの？」

「はい」

「僕の体、一夏が拭いたの？」

「ハイ」

「見た？」

「ナニモミテオリマセン……ホントウニ」

「……」

「……」

なんだこの沈黙は。今までとは違う意味で気まずい……

「一夏の……エッチ……」

最後は消えそうなくらい小さな声だった。でも聞こえた。

「……………申し訳ありませんでしたあああああ！」

ベッドの上で土下座。誰か土下座の次を教えてください！
死ぬしかないのか！？

「……………プ、アハハ」

シャルルが笑ってた。心の底から楽しそうにしてる、よかった。

コンコン

「「！？」」

「一夏さん、いらつしゃいますか？夕食をまだ取られていないよう
ですけど、」

体の具合でも悪いのですか？」

突然のノック。この声は間違いなくセシリアさんだ。
まずい。今のシャルルを見られたら女だってばれる。なんか僕の命も
危ない気がする。

「一夏さん？入りますわよ？」

僕はシャルルの腕を掴む。

「え？」

僕はその場で上に飛び上がりシャルルを引っ張って
お互いの位置を変える。当然シャルルを安全に着地させる。
そしてすぐに布団をかぶせる。

「何していますの？」

「あのですね、シャルルがどうも風邪っぽいので看病してたんです。
それで布団を掛けてたんですよ」

「そ、そうなんだよ。」

シャルル、そんなんじゃないですよって。

「それはお気の毒ですわね。一夏さんをお連れしてもよろしいです
か？」

「ど、どござい」

何とかなった？

「私も偶然夕食がまだなんですのよ。ご一緒に行きませんか？」

「いいですよ」

「う、うゆっくり〜」

「では、参りましょう!」

そして僕はセシリアさんに腕を持っていかれ廊下に出る。

シャルルにあとで何か持っていかないとね。どうしようか。

とりあえず今は定食でいいかな。今自分で作ったらいろいろとばれそうだ。

「なっ、なっ、何をしている!？」

食堂に向かう途中で篝さんに会った。何か持ってるけど木刀かな？

「あら、篝さん。これからわたしたち一緒に夕食ですよ」

一緒にを強調された。その通りなんだけど何か引つかかるなあ。

「だからといって、腕を組んで密着するう必要がどこにある!？」

「あら、殿方がレディをエスコートするのは当然のことです」

今は僕がされているような・・・

でも言ったらまた何か地雷を踏むような気がする。

「それなら私も付き合おう。今日の夕食は少し物足りなかったので

な

「あらあら、箒さん。食べ過ぎは体重を加速させますわよ」

一日四食は止めた方がいいですよ、本当に。

「ふん、心配は無用だ。これで居合いの練習をして、カロリーの消費をするからな」

そう言っ取れ出したのは・・・うわ、真剣だ。

確か名前は緋宵^{あけよい}。箒さんの実家にあった『女のための刀』。

てっ、そんなことより高校生が真剣を持ち歩いてていいのか？

・・・しまった。さつき自分でこのIS学園はどの国家・組織・団体に

帰属しないと云ったばかりじゃないか。無法地状態と云ってもおかしくない。

「で、では、参るとするか・・・」

箒さんも横に来て腕を組んでくる。どうしてこうなった？

「箒さん、何をしてらっしゃるのかしら!？」

「男がレディをエスコートするのは当然なのだろう?」

「うっ、うっ、うっ、うっ」

否定はしませんけど。二人とも、さっきから引っ張りすぎですよ。痛いです。

「お二人とも、エスコートはしますが一つだけ言わせてください」

「なんだ、一夏」

「なんですの、一夏さん」

「強引な女性は・・・嫌われますよ？」

ビシッ

あれなんか変な音がしたぞ。なぜか箒さんとセシリアさんが離れていく。どうして？

部屋で寝ていたシャルルはずっと考えていた。

一夏はデュノア社を潰すといっていたがテレシアで暮らす話の方が気になった。

（一夏はホテルでどんな仕事をしてるんだろう？あの時食べた弁当はおいしかったから

シェフかな？でもテレシアでシェフってすごいよね。

それとも大体の仕事はこなしちゃうのかな？一夏ならやりそうだけど。）

気が付けばテレシアに行くことを前提に考えていた。そしてある結論に至る。

(一夏と夜景を楽しみながら食事をして、それで……)

ボンッ

シャルルは真っ赤になっていた。

(ぼ、僕は何を考えてるんだろう。でも一夏となら……)

コンコン

「は、はい！」

「シャルル、僕です。夕食を持ってきました」

「あ、ありがとう。いただきよ。」

(一夏の接客も……いいかも)

そんなことを考えながら一夏が持ってきた定食を見るとシャルルの表情が固まった。

「どづかしました？」
「う、うん。いただきます」

どこかぎこちないと思ったなら理由はすぐにわかった。

「あっ……」
ぼろっ

ああ、やっちゃたな。これ……

「箸、苦手だったんですか？」
「うっ。練習してはいるんだけどね」
「すいません。フォークでももらってきます」
「い、いいよ。一夏に悪いよ」

ああ、やっぱりシャルルだ。一に遠慮、二に辞退だ。

「シャルル。今まで周りに頼れる人がいなくなっかたのはわかります。でも僕は事情も知ってるので助けたいと思ってます」
「一夏……」
「他人に手伝ってもらうことも甘えることも、全てが悪いわけでは
ありませんよ」
「……」

しばらく迷ってシャルルは口を開いた。
なにかモジモジしてるけど言いにくいことなのかな？

「じゃ、じゃあね・・・あの・・・」

「はい、何でも言うてください」

「い、一夏が食べさせて」

「・・・はい!？」

今までいろんな人の頼みや願いを聞いてきた。
しかしシャルルの頼みは僕にとって予想外のものだったため
変な声が出てしまった。

「あ、甘えてもいいって言ったから・・・」

なんだろう。精神的に追い詰められた気がする。
そこにシャルルがアゴを引いた上目遣いで最後のトドメをさしてく
る。

「ダメ・・・?」

そんな目を・・・僕に向けないでください。

捨てられた子犬が雨の中、ダンボールの箱から拾ってくださいとい
わんばかりに

送る眼差しを。断れないじゃないですか。

「わ、わかりました。いいですよ」

僕はシャルルから箸を受け取ってシャルルに食べさせていく。

「じゃあ、その……あーん」

「あーん」

シャルルは嬉しそうな顔で食べている。うーん、この笑顔にも逆らえないかもしれない。

「その、次はご飯がいいな……」

「は、はい」

人に食べさせるときって一口の量も気にしないとイケないのかな。

桜木さん、HELP!

最後までシャルルに食べさせてトレイを食堂まで持っていった。時間もちょうど良かったので僕らはベッドに入った。

「一夏」

「はい」

「ありがとう」

「……どういたしまして」

そして僕らは眠りに落ちた。

第十話
終

第十話 シャルルの事情（後書き）

スイマセン。昨日はガッツリ寝てました。

こういうことが続きますが、それでも読んでくれると嬉しいです。作者自身も早く続きを書きたいのですが今日も休みます。感想待ってます！

第十一話 狙われた二人（前書き）

書く時間が・・・ない。

試験が近いので三日経っても更新されなかったら

試験勉強してると思ってください。

スイマセン。

第十一話 狙われた二人

彼女の名前はラウラ・ボーデヴィツヒ。

彼女は闇の中で生まれ、闇と共に生きてきた。自分の中身は空っぽで、名前に意味などない。

そんな空っぽな自分でも、自分が確かに存在しているのだと感じるときがある。

教官に　　織斑千冬に呼ばれるときは、自分は空っぽでないと考えた。

初めて見たときの彼女の強さは、一筋の光のように強く、まぶしかった。

そして願った。こうなりたいた。

自らの師であり、絶対的な力であり、理想の姿。

唯一自らを重ね合わせてみたいと感じた存在。

そして不完全であることが許せない。

（織斑一夏　　。教官に汚点を残させた張本人・・・）

あの男の存在を認めはしない。

（排除する。どんな手を使ってでも。まずは奴を引きずり出してからだ。

そのためには・・・）

シャルルが女の子だとわかった次の日。

一緒に教室に向かっていたら妙に教室が騒がしいことに気付いた。

「そ、それは本当ですか？」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

「本当だってば!この噂、学園中で持ちきりなのよ?月末の学年別トーナメントで優勝したら

織斑君と付き

」

「僕がどうかしましたか？」

「何の話してるの?」

「きゃああっ!？」

おや?普通に話しかけたつもりだったのに。驚かせちゃったかな。

「な、何もないわよ!わ、私は自分のクラスに戻るから!」

「そ、そうですね!私も席に着きませんと、オホホホ」

鈴さんとセシリアさんは教えてくれそうにない。他の女子に聞こうかな。

「何かあつたんですか？」

「な、なんにもないよ!？」

「そうですね。何もなければいいですけど、隠し事をしてもいいことないですよ？」

「ふえ!？」

笑顔で僕はそう言う。人のことを言える立場じゃないけどね。

「あ、あのね・・・じ、実はね・・・」

「はい？」

「「「言っちゃダメエエエ!」「」」

「「「うわっ」「」

突然の大声に僕とシャルルはびっくりしてしまった。何がまずかったんだ？

(どろしてこつなつた・・・)

場所は屋上。箒は悩んでいた。箒が宣言したあの言葉はいつの間にか『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際できる』というものに変わっていた。

(優勝したら一夏と付き合えるのは私だけのはずだ……。と、とにかく、私が優勝すればそれでいいんだ。優勝すれば……。今回は大丈夫だ。もうあの時とは違うのだから)

姉である篠ノ之束がISを作ってから私は重要人物の関係者として私には必要なまでの監視と

聴取を受けた。両親とは別々に暮らし、姉さんは行方知れず。そんな状況の中、中学の剣道全国大会。私は憂さ晴らしの剣道をしていた。

太刀筋は己を映す鏡。私は相手を叩きのめした。優勝を逃した相手は泣いていた。

自分がやったのは暴力だ。だから一夏と勝負したときも私だって悩むといった。

あいつが自分のために振るう暴力というのも自分は否定しきれなかった。

(一夏も……。同じような悩みを抱えているのだろうか)

もう……。強さを見誤らないと決めた。そして勝つ。何よりも己自信に。

現在は放課後。場所は第三アリーナ。そこには鈴とセシリアがいた。

「あら？」

「早いわね」

「てつきりわたくしが一番乗りだと思っていましたのに」

「あたしはこれから学年別トーナメント優勝に向けて特訓するんだけど」

「わたくしもまったく同じですわ」

二人の間に見えない火花が散る。どちらも目指すは優勝。お互いに譲れない戦いである。

「この際どっちが上か、この場ではつきりさせておくのも悪くないわねえ」

「よろしくってよ。どちらがより強く、優雅であるか
この場で決着をつけてさしあげますわ」

ISを展開して二人がぶつかり合う、しかしそれは二人の間に割って入った砲弾により
邪魔される。

「「!？」」

砲弾が飛んできた方向を見る。

「ドイツ第三世代兵器・・・」

「シユバルツエア・レーゲン・・・」

そこには漆黒のISを装備したラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か・・・

ふん、

データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

それは明らかかな挑発であった。だから二人も言い返す。

「何？やるの？わざわざドイツくんんだりからやってきてボコられた
いなんて

大したマゾっぶりね。それともジャガイモ農場じゃそついうのも流
行ってるの？」

「あらあら、鈴さん、こちらの方はどうも共通言語をお持ちでない
ようですから、あまり

いじめるのはかわいそうですわよ？」

しかしそんな言葉を向けられてもまったく動じず、
冷やかな目で彼女達を見下すように見る。

「貴様達のようなものが、私と同じ第三世代の専用機持ちとはな・
・。
数くらいしか脳のない国と、古いだけ取り柄の国はよほど人材不
足と見える」

ここまでコケにされて彼女達は黙ってられるほどお人よしではない。
彼女達はISの装備の最終安定装置を外す。

「この人は、スクラップがお望みみたいよ！セシリア！あたしが先
でいいわよね？」

「かまいませんわ。どちらにせよ、彼女には少々教育が必要なよう
ですから」

「ふん、二人がかりで来たらどうだ？
下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

たぶん、自分が好きな人をバカにされて黙っているような人はいな
い。

「今なんて言った？あたしの耳には、どうぞ好きなだけ殴ってくだ
さいって聞こえたけど？」

「この場にはいない人間の侮辱までするなんて、その軽口二度と叩け
ぬようにしてさしあげますわ」

それでもラウラは余裕の笑みを浮かべて片手を自分に向けて振る。

「とつとと来い」

「上等(ですわ)！」

場所は変わって廊下。一夏とシャルルは特に用事もないので寮に戻ろうとしていた。

「一夏、ちょっといい？」

「はい、なんでしょう？」

シャルルが真剣な顔で聞いてくる。なんだろう？

「一夏が」

「第三アリーナで代表候補生三人が模擬戦やってるって！」

シャルルの質問がそこで遮られる。僕はシャルルの方を見る。

「まさか・・・」

「一夏、行くじい！」

「はい！」

代表候補生と聞いて頭に浮かんでくるのはセシリアさん、鈴さん、ボーデヴィツヒさんだ。

第三アリーナに向かう途中、僕はいやな予感の原因がわかった気がした。

第三アリーナに向かう途中、篝さんと会った。どうやらあっちも様子を見に来たらしい。

アリーナの中央を見ると、そこにはダメージを受けてボロボロになっている

鈴さんとセシリアさんがいた。悪い予感は当たり、二人が相手するのはボーデヴィツヒさんだった。

(まさか、僕をおびき出すために・・・二人を?)

「くらえっ!」

鈴さんが龍砲を撃った。しかしボーデヴィツヒさんは避けようともせず余裕の表情を浮かべる。

「無駄だ。このシュバルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

まるで見えないバリアーでも張っているのか、龍砲の弾丸はそこで音を立てて消滅する。

（大気に乱れが・・・もしかして龍砲と同じで空間に圧力をかけてるのか？）

「AICだ」

「シャルル、AICって」

「シュバルツェア・レーゲンの第三世代型兵器、アクティブ・イナ
ーシャル・キャンセラー」

「慣性停止能力とも言う」

篤さんも説明してくれる。でも言っていることが本当だとしたら・・・

「ほとんどの物理攻撃は・・・無意味ってことですか？」

「そうなるな・・・」

「有効なのは、エネルギー兵器ぐらいですか」

「たぶんそうだと思うよ」

さっきから鈴さんは衝撃砲を撃っているが当たる気配はない。

「く、ここまで相性が悪いなんて・・・」

ポーデヴィツヒさんが動き出す。
両肩と腰部左右に取り付けられた計六つのワイヤーブレードを出した。
最初は避けていたがワイヤーブレードの一つが鈴さんの右足を捕らえた。
そして振り回される形になっていた。

「くっっ」

「ふん、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

セシリアさんは隙を狙って六機のブルー・ティアーズによる視界外攻撃。

ポーデヴィツヒはそれを正確に避けるが、セシリアさんが隙をついて四機のビットを

ポーデヴィツヒさんに向ける。しかし彼女は左右から来るビットを腕を交差させて全て止めた。

「動きが止まりましたわね」

「貴様もな」

セシリアのライフルとラウラの大型レール砲が相殺される。

セシリアは追撃をしようとするが、ラウラはさっき捕まえた鈴さんを振り子の原理のように

セシリアにぶつけ二人を地面に叩きつけた。

「くっ……」
「うう……」

ボーデヴィツヒさんが二人の近くまでやって来る。鈴さんは衝撃砲で反撃しようとする。

ダメだ。衝撃砲じゃ……

「甘いな。この状態でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

衝撃砲は撃つ前に大型レール砲によって破壊され、鈴さんはのけぞる。

しかし鈴さんに集中している隙を狙ってセシリアさんはミサイルを撃った。

ドガアアアアッ

あんな近距離で撃つなんて、僕だったら絶対しないだろうな。

「無茶するわね、アンタ……」
「苦情は後で。けど、これなら確実にダメージが……」

そこにいる全員が煙が晴れるのを待った。しかしそこにいたのは至

近距離での大爆発ですら、
なにもなかったように中に浮いているボーデヴィツヒさんだった。

「終わりか？ならば　　私の番だ」

ワイヤーブレードを出して鈴さんとセシリアさんを捕らえて、自分の下にたぐり寄せる。

そしてその腕に、足に、体に殴り、蹴り続ける。

「ひどい。あれじゃあシールドエネルギーが持たないよ」

「……………」

「もしダメージが蓄積し、ISが強制解除されるようなことになれば二人の命にかかわるぞ」

222

それでもボーデヴィツヒさんは止めない。ISアーマーが破壊され、
機体維持警告域を超え、操縦者生命危険域に到達する。

普段と変わらないラウラの無表情が確かな愉悦に口元を歪めた。

その一方的な暴力は筈には中学の全国大会を、一夏には第二回モンド・グロツソの時の

ことを思い出させる。しかし一夏にとって今の光景はもっと酷い。自分の力を、自分の意思で、

他人を傷つけるために使っていた。

「ふざけるなよ……………」

「い、いち……………か？」

「一夏、お前まさ……か」

シャルルと箒は一夏の横顔を見た。

その目からは激情があふれ出ていて普段の彼からは想像できないほど……恐ろしい顔だった。

彼の意思に答えるように雪片から、右腕から、そして全体に白式が展開されていく。

零落白夜はいつの間にか発動されていた。

「ふざけるなああああ！」

アリーナを取り囲んでいるアリーナのバリアーに叩きつける。そしてできた隙間からアリーナに着地する。

「やっと……来たか」

ボーデヴィツヒさんがさらに顔を歪める。今の自分にはそれがものすごく醜く見えた。

まるで過去の自分がそこにいるようだった。

「二人を離せえええええええ！」

僕は雪片を逆手に持ち、槍を投げるような体勢をとる。

右手のスラスタールだけで瞬時加速を行い、その勢いを利用して雪片を投げた。

そのスピードは普通の大砲にも劣らない。投げたと同時に動く。

「なっ！」

しかしボーデヴィツヒは僕が構えた時から僕が何をしようとしていたかわかっていたようだ。

鈴さんとセシリアさんのワイヤーを外し、そのワイヤーとAICで雪片をギリギリで止める。

「バカな！どこに武器を投げる奴が……何！」

僕はボーデヴィツヒさんのすぐ後ろにいる。雪片を投げたときに『水鏡渡り』で

既にそこにいた。

雪片は囷だ。

そして僕は左足だけで瞬時加速して蹴りを強化、ボーデヴィツヒさんの腹部を蹴る。

ただの蹴りでも装甲が薄いところなら本体に衝撃ぐらいのダメージは与えることができる。

「ぐ………う」

ボーデヴィツヒさんはアリーナの壁まで吹っ飛んだ。
しかしそんなことはどうでもよかった。二人の安否を確認する。

「鈴さん！セシリアさん！大丈夫ですか！？」

「う．．．．．一夏．．．．．」

「無様な姿を．．．．お見せしましたわね．．．．」

「よかった。二人とも意識は　　！」

その続きを言いかけたところで悪寒を感じた。咄嗟に『金剛剉』を
発動させる。

今の金剛系は実弾を弾くことはできなくてもガードすることはでき
る。しかし瞬間的に
作った金剛剉は．．脆い。僕は吹き飛ばされ、倒れる。近くには
大きな実弾が転がっていた。

「貴様ああああ！」

ボーデヴィツヒさんが両手首に装着した袖のようなパーツから超高
熱エネルギーを出す。

プラズマ手刀といったところか。早く起き上がらないといけないのに
二回の瞬時加速、『水鏡渡り』でエネルギーがほとんど残っていな
かった。

そしてボーデヴィツヒさんが飛び出した。ヤバイ！

ガギンッ！

ボーデヴィツヒさんが止まっていた。そこには・・・姉さんがいた。

「姉・・・さん？」

「教官！」

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

その姿をもう一度確認する。普段と同じスーツで、ISどころかISスーツさえ装着していない。

しかし170cmはあるIS用近接ブレードをISの補佐なしで軽々と扱っている。

はは、僕もあんなふうに雪片を使ってたの・・・か・・・。

226

「模擬戦をやるのは構わん。だがアリーナのバリアまで破壊する事態にならねば、教師として

黙認しかねる。ボーデヴィツヒ、下がれ」

「しかし！」

「下がれと言ってるんだ、聞こえないのか？」

これでボーデヴィツヒさんは下がるだろう。姉さんに嫌われたいくないはずだ。

しかし念のためいつでも実戦モードを使えるようにしておく。

「はい・・・わかりました」

ボーデヴィツヒさんはISを解除して去っていく。
見ると姉さんが本当に怖い顔で僕を見ている。しまった、これはな
んか言われる。

「織斑、アリーナのバリアーのことは黙っておいてやる。さっさと
二人を保健室に連れて行け。
以上だ」

「はい・・・」

僕は二人を保健室に連れて行く。心の中は申し訳なさでいっぱいだ
った。

第十一話 終

第十一話 狙われた二人（後書き）

ほぼ原作沿い。

レギオスネタが・・・少ない。

朴念仁をつまく・・・引き出せない。
不調です。

第十二話 戦いたくないけど・・・(前書き)

書く事がないです。

こういうときはどうしたらいいんでしょうね。

サブタイトルがなかなか思いつきません。

シヨック！

最後まで書ききれっていませんでした。すいません。

第十二話 戦いたくないけど・・・

場所は保健室。今はシャルルと鈴さんとセシリアさんの様子を見に来ている。打撲の治療を受けて包帯の巻かれた二人がいる。その包帯がとても痛々しい。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝ってましたわ」

そんなことを言ってくる。でも僕のせいで二人はこうなった。僕がポーデヴィツヒさんと戦わないと言ったから、僕を無理やりにも戦わせようとしてこの二人を攻撃した。僕の・・・せいだ。

「一夏、大丈夫？」

シャルルが心配してくれている。今の僕はどんな顔をしているだろう。自分でもわからないくらい落ち込んでいるのだろうか。

「一夏、いつたいポーデヴィツヒさんと何があったの？」

「何にもないですよ・・・」

「ウソだ！一夏は・・・普段ならあんな顔は絶対しない、絶対にし

ないんだよ!」

シャルルが震えている。ああ、僕がボーデヴィツヒさんに向かった時か。あの時は・・・純粹に怒ってたから、怖い顔でもしてのかなでも、言うわけにはいかない。とてもじゃないけど言えない。

「少し、風に当たってきますね・・・」

「「「夏(さん)?」」」

僕は保健室を出ようとする。また僕は逃げてる。しかし突然の地鳴りで僕は足を止める。シャルル、鈴さん、セシリアさんも何事かと驚いている。

ドドドドドドドドドドッ・・・!!

その音がだんだん近づいてきている。僕は念のため、いつでも動けるように身構える。ドカーン!と保健室のドアが吹き飛んだ。・・・そしてその吹き飛んだドア僕の方に向かってきている。

「ドアって・・・吹っ飛ぶものでしたっけ?」

僕はバク宙でその場から退避。シャルルたちの元にワンジャンプで戻る。

「織斑君！」
「デユノア君！」

そして女子生徒が入ってきた。いや、雪崩れ込んだ。すると僕とシャルルは一齐に囲まれ、まるで取り合うかのごとく手を伸ばしてくる。こわっ、地獄絵図だよ。

「あの・・・どうかしましたか？」

「ど、どうしたの、みんな・・・ちょ、ちょっと落ち着いて」

「」「」「これ！」「」「」

女子全員が一枚の紙を前にずいっと出して来る。僕とシャルルは一枚ずつとってシャルルが読み上げる。

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアができなかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』」
「ああ、そこまでいいから！とにかく！」

そしてまた一齐に手が伸びてくる。地獄の底に連れていかれる。

(よっこそ地獄へ)

誰だ！何かの映画で聞いたことのあるセリフだったぞ！

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

ああ、そうか。この前の襲撃事件が原因か。そのためのタッグ。で、女子は二人しかいない男子と組もうと必死になってるってところかなでも……

「あの、僕この大会に出るつもりは」

「え？一夏は出ないの？」

「はい？」

シャルルが今にも泣きそうな顔でこっちを見てくる。な、なんで？
・・・そうか。シャルルが誰かとペアで特訓する場合、正体がいつばれてもおかしくない。となると学園中はパニックになる。なぜだろう。僕の命も危ない気がする。・・・社会的な意味で……。

「……」

「……」

シャルルを見る。目が潤んでる。うう、この目には逆らえない。また僕は戦わないといけないのか？でもここで戦わないなんていった

ら・・・また誰か傷つくのか？ポーデヴィツヒさんが大人しくしているとも限らない。なにより・・・

「みなさん、ごめんなさい！僕はシャルルと組むのであきらめてください！」

とりあえず一礼。誘ってもらってるのに悪いことしちゃったかな。

「まあ、そういうことなら・・・」

「他の女子と組まれるよりはいいし・・・」

「織斑君に頭下げられたら・・・ねえ」

みんな納得してくれたようだ。でも僕は戦いたくないのに・・・

「はあ・・・」

「あ、あの、一夏」

「一夏、あたしと組みなさいよ！幼馴染でしょうが！」

「いいえ、ここはクラスメイトとしてわたくしと！」

二人ともけが人なのになんでここまで動けるんだろう。もう・・・何もかもわからないや。

「ダメですよ」

山田先生がそこにいた。この人ならこの二人を説得してくれるはずだ。僕はもう疲れたよ、パトラツシユ。

「お二人のISを調べた結果、ダメージレベルがCを超えています。トーナメントの参加は許可できません」

「そんな！あたし十分に戦えます！」

「わたくしも納得できませんわ！」

(その怪我じゃ無理ですよ・・・)

「ダメと言ったらダメです。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥が生じますよ」

「「うっ」「」

どうやら観念してくれたいらしい。

(優勝したら、その子が一夏と付き合うのよね)

(それだけは阻止しなければいけませんわ)

二人が僕とシャルルを見る。な、何かすごい迫力だ。

「いい、あんたたち！絶対優勝すんのよ！」

「わたくしたちの分まで頑張ってくださいな。心から応援いたしますわ！」

「は、はあ」

「ありがとうございます。二人に気持ちに伝えられるように頑張るよ」

優勝しないとあとでなにか言われそうだ。

「ふふ、美しい友情ですね」

山田先生、僕はこの状況で友情ではなく、何か別のものを感じるんですけど……。

場所は職員室。僕とシャルルで組むということ姉さんに伝えに来た。

「失礼します」

「織斑一夏です。織斑先生はいますか？」

「織斑か……それとデユノアも。こっちだ」

姉さんのほうに向かう。途中こっちに視線を向けてきた先生達に笑

顔で礼をした。あれ？あそこの先生は机に頭を思いつきりぶつけちゃったよ？あの先生は・・・血で机が・・・なんで？

「織斑、あまり職員室を荒らすな」

「あの、僕のせいなんですか？」

「お前以外に誰がいる？」

シャルルを見ると苦笑している。やっぱり僕なのか？

「で、何のようだ」

「織斑先生、僕はシャルルと一緒に学年別トーナメントに出ます」

「！」

僕は姉さんにこのトーナメントには出ないと言っていた。当然戦いたくないからだ。でも、その本人が今戦うと言ってるんだから姉さんが驚くのも納得できる。

「・・・織斑」

「はい」

「あとで話がある。デュノアは寮に戻れ。手続きはしといてやる」
「わ、わかりました。それじゃあ僕はこれで」

シャルルは職員室を出ようとするが何度も振り返る。僕が大丈夫と言おうとしたら

「さっさと行け、デュノア。邪魔だ」
「は、はい！」

と姉さんが言っつてシャルルはダツシユで寮に向かっていく。姉さん、ちよつときつく言いすぎじゃないかな。

「いくぞ織斑」
「はい」

そして僕らは屋上へ。

寮ではなく校舎の屋上。今日も星空が美しい。

「どついつ風の吹き回しだ、一夏」
「どついつ風が吹いているんでしょうね、今日は」
「ちゃんと質問に答えろ」

姉さんに隠し事は通用しない。師匠たちに鍛えてもらっていたことだっつてばれているのだから。

「少し事情がありました。でも、大事なのはそっちじゃないんです」
「言ってみる……」

「ボーデヴィツヒさんです。あの人を見てると昔の僕を思い出すんです。他人を傷つけるために力を使ってる。彼女は自らそうしてる分、自分よりも質たちが悪いですけどね」

「あいつは……強さを攻撃力とだと思っている。お前からすればその解釈は気に食わんのだろうな」

「そうですね……。あとは鈴さんとセシリアさんです。あの二人は、僕のせいで傷ついた」

「……」

「僕が戦わないと、また被害者が出る。そう思うと……」
「……」

「だから、ボーデヴィツヒさんと戦います。これ以上、被害者が出ないように」

「そうか。いいだろう。手続きはしておいてやる」

「すみません」

「構わん。寮に戻れ。もう遅い」

「はい」

僕は寮に戻っていく。しかし姉さんはしばらくそこにいた。

「まだ……悩んでいるのか、一夏」

その言葉が一夏に届くことはなかった。

僕は寮に帰ってきた。そして自分の部屋に戻る。今は夜の十一時半。

「ただいま」

「おかえり、一夏」

シャルルが起きていた。僕を待っていてくれたんだろう。

「すみません、遅くなっちゃって」

「うん。とりあえずお風呂に入ってきたら？」

「入りますけど・・・シャルルは寝ないんですか？」

「僕は待ってるよ。暗いと見えないでしょ」

「そうですね。じゃあ、ちょっと入ってきます」

「うん」

僕は体を洗ってシャワーで流す。シャルルが待っているということとでなるべく早く済ませた。

「出ました」

「うん」

「僕に何かようでも？」

これだけ待っていてくれるんだ。なにか理由があるはずだ。

「うん、さっきの保健室。遅くなっちゃったけど、トーナメントのペアを言い出してくれてありがとう。僕すごく嬉しかったんだ」

「別になんともないですよ。事情を知っているのは今のところ僕だけですから、助けるのは当たり前です」

「・・・優しいね、一夏は」

「そうですね？」

シャルルがこつちをずっと見てくる。最初は笑顔だった、でも段々真剣な顔になってくる。そしてこつちに近づいてまっすぐにこつちの目を見てくる。

「一夏、いったい一夏に何があったか教えて」

「なんにもないですよ」

「僕知ってるんだよ。一夏が毎晩のように苦しそうにしていること。夜中に起きて屋上で悩んでいること」

知らないうちに僕は目を逸らしていた。

「こんなにまじめで、こんなに優しい一夏が・・・理由はわからなけれど戦いたくなくて、それでも僕を助けるために戦おうと思ってくれる。そんな一夏の暗い顔なんて。あんな怒った顔なんて・・・見たくないよ」

これは言ったほうがいいのか？でも、もし言ってしまったらどうなる？

軽蔑される、拒絶される。それが・・・怖い。

「僕はね、一夏に本当のことを言ったとき、とても不安だったんだ。一夏に嫌われたら、落ち込んだらどうなる？でも一夏は受け入れてくれた。ウソをついていたこんな僕を、受け入れてくれた。だから、今度は一夏の番だよ。今度は僕が一夏を受け入れる番だ」

「……………」
「話して……………」

シャルルがまた笑う。お互いにベッドに座る。

「第二回モンド・グロツソの時でした」

「……………」

「僕は誘拐され、監禁されました」

「え？」

「誰がやったのかわかりません。僕もあとで世界中にハッキングしたんですが、犯人を特定できるような情報は一切ありませんでした。よほど大きな組織かなんかでしょう」

「……………」
「さらっとものすごいこと言わなかった？」

「言ったかもしれない」

「……………」

「……………」
「ふふ、一夏ってやっぱりすごいね」

場の雰囲気は少しだけやわらかくなる。

「話を戻しますね。そのあと僕を助けてくれたのは姉さん・・・織斑先生です」

「だから織斑先生の不戦敗・・・」

「そういうことです。僕の居場所を提供したのがドイツです。織斑先生はお礼として一年間、ドイツで軍隊教官として働いてました」

「ボーデヴィツヒさんは織斑先生の教え子ってこと？」

「そうだと思います」

「もしかしてボーデヴィツヒさんは織斑先生が優勝できなかったのが一夏のせいだと思ってるの？」

「はい」

「そんなの間違ってる！それは一夏のせいじゃない！」

シャルルがそう言ってくれる。それだけで十分だった。

「そのとき誘拐されたのは僕に力がなかったからです。誘拐さえされなければ、今のような状況にもならなかった」

「そんな・・・」

「事実です」

シャルルが俯いてしまう。そして何かを思い出したようにもう一度僕の目を見る。

「一夏が戦いたくない理由って・・・何？」

僕の忌まわしき過去、血塗られた罪。

「姉さんが助けに来てくれたときです」

「・・・」

「姉さんは僕を庇って、撃たれて倒れました」

「え？あの織斑先生が？」

「不意打ちだったんです。そのときはISの防御性能ついて僕は何も知らなかったんです。だから僕は姉さんが死んだと思ったんです。たった一人の家族が・・・」

「・・・」

シャルルにもこの気持ちはわかると思う。彼女は唯一家族と呼べる母親を失っているから。

「そのあとの事はよく覚えてないんですけどね。気付けば返り血で僕の体は血まみれで、雪片には血がこびり付いていました」

「雪片？」

「そうです。僕は倒れた姉さんの雪片を使って、今まで自分が培ってきたものを・・・人殺しに使った。今ではそれがトラウマのようになっています。だから今まで鍛えてもらった師匠たちに、僕は戦わないって言ったんです。雪片を、力である白式も使わないと姉さんに言ったんです。僕は・・・人殺しなんです・・・」

「・・・」

全部話した。自分でも話すと思ってなかった。これで終わった。シャルルの方を見てみると自分の目の前に立っていた。

ガシッ

首に腕を巻いて抱きついてきた。

「しゃ、シャルル？」

「ゴメンね……」

「なんで……シャルルが謝るんですか？」

シャルルは泣いている。声が震えているのがわかる。

245

「一夏は苦しんでるのに、僕のせいでもた戦うことになってる。なのに僕は自分のことしか考えてなかった」

「……」

「僕は……恥ずかしいよ」

僕はシャルルの頭に優しく手を置いて撫でる。

「僕がシャルルを助けたいと思ったんです。これは……僕のががままです」

「それでも……」

「僕は大丈夫ですから」

シャルルが離れて僕を見る。その目はやはり涙であふれていた。

「ほら笑ってください、シャルル。僕はシャルルの泣いている顔なんて見たくないですよ」

「・・・うん」

また笑ってくれる。その笑顔だけで僕は嬉しかった。

「もう、寝ましょう。遅いですから」

「うん、そうだね」

そして明かりを消す。部屋が真っ暗になる。

「一夏」

「はい」

「僕は・・・一夏の味方だからね」

「ありがとうございます」

最初はどうなるかと思ったけど、シャルルは受け入れてくれた。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

その日の一夏の夢はぼんやりしていて、目覚めは酷いものではなかった。

学年別トーナメント当日。僕はシャルルと待機していた。

「よくこんなに人が来るもんだなあ」

自分の素直な感想。どっかのお偉いさん達も来ている。というか、何人かはテレシアで見たことがある。本当にお疲れ様です。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が着てるからね」

「一夏」

「はい」

シャルルが心配そうな顔でこっちを見てくる。

「一夏なら同じ過ちは繰り返さないと思う。でも、あんな悲しい顔や怒った顔は・・・しないほしい」
「わかりました」

わかってる。もう誰かに心配をかけるようなことはしちゃいけない。

「よし」

「こつちも準備OKだよ。本当にあれを使うの？」

「はい、でもボーデヴィツヒさんと戦うときだけお願いします」

「わかった。あ、対戦相手が決まったね」

モニターがトーナメント表へと切り替わる。見ると・・・

「えっ？」

「誰かが仕組んだとしか思えませんね」

「・・・最悪だ」

「ふん」

それぞれが違う反応を示す。

一回戦目は篠ノ之箒&ラウラ・ボーデヴィツヒ 対 織斑一夏&シヤルル・デュノアだった。

第十二話 戦いたくないけど・・・(後書き)

一夏とシャルルの区別がつけづらいです。

どうしたものか・・・

途中で投稿してしまって最後まで書いていませんでした。
すいません。

第十三話 二人の乱舞（前書き）

ついにVSラウラです。筈には・・・開始早々退場してもらいまし
ようか？

とりあえず自分が書きたいように書きます。
どうぞ！

第十三話 二人の乱舞

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」
「・・・そうですか。僕は戦いたくなかったんですけどね」

二人がにらみ合う。そして試合開始のブザーがなる。

「勝たせてもらいますよ」

「ふん、ほざけ。勝つのは私だ」

お互い戦闘態勢に入る。僕はシャルルに合図する。

「シャルル！」

「任せて！」

シャルルが量子変換で大量の武器を出す。出したのは・・・あの催
眠手榴弾。

「えいつ！」

それを篝さんとボーデヴィツヒさんに投げる。正直言って避けられる量ではない。

「なに!?!」

「くっ」

その手榴弾は爆散し、篝さんはその煙に包まれる。

ボーデヴィツヒさんは自分の方に来た手榴弾を全てAICで止める。よし、狙い通りだ。

「シャルル、お願いします!」

「OK!」

数日前。ISで息を合わせながら特訓した試合二日前。自分達の部屋で作戦会議をしていた。

「まずはボーデヴィツヒさんのペアです。打鉄うちがねかラファールかどっちかはわかりませんが、いると僕らの妨げになります」「そつだろつね。僕が抑えておこつか?僕なら対応できると思っけど」

シャルルの得意とする技能『高速切替』フリット・スイッチは、シャルルの器用さと瞬時の判断により、武装呼び出しと標準のロックが同時に出来る。そしてシャルルの戦闘は基本近距離から中距離の『砂漠の逃げ水』ミラーシユ・デザート。斬り合っていたかと思えばいきなり銃に持ちかえての近接射撃、間合いを離せば近接ブレード《ブレッド・スライサー》に変更しての接近格闘。シャルルは打鉄うちがねかラファールのどちらでも対応できるらしい。でも……

「いえ、シャルルにはボーデヴィツヒさんの足止めをお願いしたいんです」

「ボーデヴィツヒさんの？」

「はい」

シャルルがわからないという顔をしている。

「一夏、僕も出来る限りのことはするよ。でもボーデヴィツヒさんにはAICがある。僕の武器はほとんど通用しない」

シャルルの武器にはほとんど実弾兵器しかない。となるとAICで全て防がれてしまう。

「だからこれを使うんです」

僕はウエストポーチから取り出す。

「催眠手榴弾？」

「そうです。シャルル、試合開始直後にこれをボーデヴィツヒさんとそのペアに逃げられないようにばらまいてください」

「それもAICで止められるよ？」

「確かに止められます。でもシャルルはその止められた手榴弾を撃つてください」

「どうして？」

僕の推測が正しければ、きっとこうなる。

「ボーデヴィツヒさんはペアのことは頭に入れてないと思います。

だからAICで自分だけを守るはずです。その間に僕が催眠手榴弾で弱ったペアを零落白夜で倒します。寝ているペアを見ればボーデヴィツヒさんも催眠ガスを警戒するはずです」

「なるほど。でもそのガスはシールドエネルギーを突破できるの？」

「改造しました。大丈夫ですよ」

「.....」

「どうかしました？」

シャルルがいろんな感情が混ざったような目で見てくる。いや、実際はどんな目か知らないけど。

「一夏って、何者？」

「・・・何者なんでしょうね？」

「くっ。何も見えない」

「なんだ、このガスは？」

箒はその手榴弾からあふれ出たガスにより視界が埋まる。

ラウラはAICで手榴弾を防いでいた。シャルルは作戦通り、その止まった手榴弾を五十五口径のアサルトライフル《ヴェント》で一つずつ正確に打っていく。

「うっ・・・なんだ。妙に・・・眠い・・・」

箒の意識は次第に薄れていく。そんな中聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「箒さん、ごめんなさい」

「！」

一瞬だった。箒の打鉄のシールドエネルギーは一瞬で0になっていた。一夏の零落白夜はシールドエネルギーを根こそぎ持っていくほ

どの破壊力だったが、絶対防御でギリギリ守りきれられるほどの繊細な攻撃だった。そして箒は眠り、一夏がガスの中から脱出する。そしてラウラは箒の寝顔を見た瞬間理解した。

「催眠ガスだと？」

「そういうこと」

シャルルがラウラの後ろに回ってアサルトライフルを両手に打つ。ラウラは被弾しながらもガスから逃げるように退避する。

「こしゃくなまねを！」

「僕の作戦じゃないけどね」

「くっ」

AICで実弾を止めて、ラウラは横目で一夏のほつを見る。

一夏はアリーナの端まで行き、箒を寝かせていた。

「すぐに終わらせてきますから、ここで待っていてください。ここから安全ですから」

寝ている箒には聞こえないが、一夏はそう言ってシャルルの方へ向かう。

「お待たせしました」

「大丈夫。全然待つてないから」

「そうですか」

「うん」

笑顔でシャルルがそう言う。話をしながらもその銃撃が止むこととはない。

「くっ。ならば」

ラウラはA I Cを解除し、横に移動しながらレール砲カノンを打つ。しかし一夏とシャルルはあっさり避ける。

「シャルル、準備はいいですか？」

「いつでもどうぞ」

僕は目に沈黙を宿し、シャルルと同時に動き出す。

シャルルはマシンガンに切り替えてボーデヴィツヒさんに打つ。

それをA I Cでボーデヴィツヒさんが止めてレールカノンを打とうとしていた。

「やませんよ」

僕は雪片を構えて一閃。レールカノンは爆散する。

「なっ！」

僕は追撃しようとするがボーデヴィツヒさんは六つのワイヤーブレードとプラズマ手刀を出す。さすがにこれだけの同時攻撃を喰らったら無事ではすまない。さっきのでかなりシールドエネルギーを消費してしまった。それでも僕は喰らいつく。

「はっ。この数に貴様の刀一つで敵うと思っているのか？」

「……………」

無視だ。確かに僕一人じゃ手と足を使い、ボーデヴィツヒさんの腕を払ってプラズマ手刀を止めることは出来る。あとは雪片でワイヤーブレードを二つ対処できるくらいだ。でも、僕は一人じゃない。

「僕もいるよ」

シャルルもボーデヴィツヒさんに近距離戦に挑む。シャルルは片手に《ブレット・スライサー》、もう片方に六十二口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》を持っている。両方とも近接格闘用の武器。僕とシャルルはボーデヴィツヒさんにAICを使わせないために近距離戦にした。AICの弱点は対象物に集中しないと効果を発揮しないこと。この状態でお互いがぶつかるなんて事はない。

この連携を何度も練習したから。相手の視線を覆つような怒涛の攻撃『サウンドストーム砂嵐』。

「くっ」

ポーデヴィツヒさんの顔に焦りが見えてくる。僕は両手両足の展開型スラスターを使って、スピードを上げる。その手でプラズマ手刀が付いている手を払う。その間にシャルルは《ブレット・スライサー》でワイヤーブレードを二つ切る。武器はワイヤーブレードとプラズマ手刀を合わせて残り六つ。

「貴様！」

ワイヤーブレードでポーデヴィツヒさんはシャルルを吹き飛ばす。しかしシャルルはそれでも《レイン・オブ・サタデイ》を打ち、ポーデヴィツヒさんの両手を打つ。これでプラズマ手刀が短時間だが封じられる。

「まだだ」

僕はその間にワイヤーブレードを二つ切る。これで残り四つ。この数なら全身をフル活用すれば僕一人で全て捌さばける。そしてその間に吹き飛ばされたシャルルが戻ってきて残り二つのワイヤーブレードを切る。これではプラズマ手刀だけ。今

度はボーデヴィツヒさんが僕らの攻撃を防ぐ形になった。

「シャルル、そろそろいきますよ」

「了解！」

「貴様ら……！」

シャルルはシールドを展開してプラズマ手刀を防ぐ。僕は雪片を振り、ボーデヴィツヒさんはもう片方のプラズマ手刀で防ぐ。

「くそっ」

ボーデヴィツヒさんを追い詰めたが硬直状態がしばらく続く。観客席の方はあまりの連携に声一つでない。

「ふっ！」

「なっ!?!」

シャルルがシールドをパージする。盾の装甲がはじけ飛び中からリボルバーと杭くいが融合した装備が露出する。六十九口径パイルバンカ

「グレー・スケール灰色の鱗殻」。

シールド・ピアース通称『盾殺し』

「しまっ

「！」

シャルルがシールドを解いた瞬間にシールドに体重を乗せていたボーデヴィツヒさんが体勢を崩す。その隙を僕達は見逃さない。

「はっ！」

バキン！

僕とシャルルは同時にプラズマ手刀の袖のパーツを切断。

これで完全にボーデヴィツヒさんは無防備だ。

僕らは同時に蹴って、ボーデヴィツヒさんの体勢を崩したまま宙に浮かせる。

「シャルル！」

「うん！」

二人同時に瞬時加速。ボーデヴィツヒさんと距離を詰める。

「はあああああ！」

『雷迅』

僕はイグニッション・ブーストでその勢いを利用して雪片を振るう。シャルルもイグニッション・ブーストでその勢いを利用して『盾殺し（シールド・ピアース）』をぶつける。

「がはっ！」

ボーデヴィツヒさんの絶対防御が発生し、シールドエネルギーが一気に削られる。

そしてアリーナの壁に叩きつけられる。その機体に紫電が走り、I S強制解除の兆候を見せ始める。

あと一息。

「これで・・・」

「終わりだ！」

僕とシャルルがとどめの一撃をしようと近づいた瞬間、異変が起きた。

第十三話 二人の乱舞（後書き）

前半は会話が長いなあと思いました。

そのせいで戦闘描写がうまく書けなかったような気がします。

ラウラをいじめすぎたような気が・・・。

今回はVTSですね。次回はどっいつぶつに書きましょつか。

第十四話 VSブリュンヒルデ／自分（前書き）

いつもより短いですかね。自分では何文字ぐらい書いてるかわかりませんが。

少しずつ評価が上がってきています。作者は本当に感激です！
VTS戦。どうぞ！

第十四話 VSブリュンヒルデ/自分

(こんな……こんなところで負けるのか、私は……！)

想像以上の相手だった。そして信じられないほどの連携。私の判断ミスだ。でも……。

(私は……負けられない！負けるわけにはいかない……！)

遺伝子教化試験体C 00三七。識別記号はラウラ・ボーデヴィツヒ。

私はただ戦いのためだけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。私は優秀だった。最高レベルを維持し続けた。しかしそれは、世界最強の兵器 ISの出現までだった。

直ちに私にも適合性向上のため、『ヴォーダンオージェ越界の瞳』 疑似ハイパー

センサーとも呼ぶべきそれを、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植手術が施された。しかし、私の体は適応しきれず、この処置によって私の左目は金色へと変質し、常に稼動状態のままカットできない制御不能へと陥った。

その結果、『出来損ない』の烙印を押された。

そんな時、あの人に 織斑千冬に出会った。

彼女は極めて優能な教官だった。私はIS専門となった部隊の中で

再び最強の座に君臨した。

私はその強さに、その凛々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に、憧れた。

自分もこうなりたいと願った。だから私は訊いてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？どうすれば強くなれますか？」

その時だ。鬼のような厳しさを持つ教官が、悲しい顔をしていた。

「私には弟がいる」

「弟……ですか」

「あいつを見ると、わかるときがある。本当の強さとは何なのか。その強さで何が出来るのか」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいさ。実際に会ってみないとわからんだろうからな。……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつの」

優しい笑み。影があるような、どこか遠いところを見ている瞳。

（違う。私が憧れるあなたは強く、凛々しく、堂々としているのに。教官をそんな風に変えてしまう男。その男の存在が許せない。あいつを排除する。だから……力が、欲しい）

願うか……？^{なんじ}汝、より強い力を欲するか……？

(力があるのなら、それを得られるのなら、こんな空っぽな私など
くれてやる。だから・・・よこせ、力を・・・比類なき最強を！)

Damage Level・・・D
Mind condition・・・Uplift
Certification・・・Clear
ot
《Valkyrie Trase System》・・・bo

「あああああっ！！！！」

突然ボーデヴィツヒさんが張り裂けるような絶叫を上げる。

「くっ」
「うわっ！」

僕とシャルルはシュバルツェア・レーゲンから放たれた激しい電撃
により吹き飛ばされる。

「シャルル、大丈夫ですか？」

「なんとかね。一夏は？」

「僕は平気です。それよりも・・・」

僕はボーデヴィツヒさんを見る。そのISが変形していた。いや、そんな生やさしいものじゃなかった。その装甲は全て歪み、粘土のようになつてボーデヴィツヒさんを包んでいく。

ISは基本『スタートアップ・フィッティング初期操縦者適応』と『フォーム・シフト形態移行』によつてその形状を変える。そしてその二つともかけ離れた変化が今目の前で起きていく。黒い闇が彼女を覆っていく。

「何か・・・来る・・・」

僕は立ち上がり、いつでも動けるようにする。そしてずっと前を見る。視線の先ではシユバルツェア・レーゲンだったものが心臓の鼓動ように脈動しながら地面へと降りていく。そして着地すると倍速再生するように高速で全身を変化、整形させていく。黒い全身装甲フルスキンだったが以前の無人ISとはまた別物だった。全体のラインはボーデヴィツヒさんのままで、最小限のアーマーが腕と脚につけられている。顔はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を放っている。だがそれが持っている武器に僕は・・・ただ憤りしか感じられなかった。

「どつして・・・」

「い、一夏……？」

僕の声は震えていた。そこには《雪片》が握られていた。姉さんが使っていた刀。僕が最も忌み嫌うもの。それをポーデヴィツヒさんが使おうとしている。

「どうしてそうやって間違っただ！！」

僕は飛び出す。その雪片と黒いISを見てるだけで、自分が過去に間違っただけをしたことがいやでも思い出される。

「一夏、ダメだ！そんな状態じゃ無理だよ！戻って！」

シャルルが止めようと後ろから声をかけてくる。確かにシールドエネルギーは残り少なく、白式のエネルギーも余裕があるわけじゃない。でも僕はそんなことを一切考えていなかった。そして雪片と雪片がぶつかり合う……。

「わ、私はいったい何を……」

催眠手榴弾で眠っていた箒は突然目覚める。さつきから連続して金属音が聞こえてきて、それで目を覚ました。そして箒はその音源を見て啞然とするしかなかった。

そこには同じ刀を持った黒と白のISが見たこともないような太刀筋で刀を振るっていた。

しかし、それは美しい演舞のようであり、非難をしていた生徒達はその光景に見入ってしまった。

もし、第一回モンド・グロツソの決勝戦を見た人ならこう言うだろう。これこそモンド・グロツソにふさわしいと。だが箒は今戦っている白いIS、白式を使っている一夏の顔を見ると、動けなくなってしまった。彼の・・・怒りに満ちた顔を。

「どうしてお前はそんな顔をするんだ、一夏・・・」

箒の顔は悲しみに歪んだ。

僕は感情に任せて雪片を振っていた。突き、横薙ぎ、袈裟切り、ありとあらゆる方向に雪片を振るった。僕が攻撃すれば黒いISが防御し、反撃してきて僕がそれを防ぐ。その繰り返し。

でもその黒いISの太刀筋は姉さんのものだった。僕が尊敬する姉さんの力。その力を、雪片で、他人を傷つけるために使っている。

(この人は、力が何なのか、何のためにあるのか、わかってない！)

僕は雪片を上段に構え、力任せに振り下ろす。その黒いISは防いで罅迫り合いの状態になる。

そのラインアイ・センサーを、その赤い光を見る。何も考えていない目。そんな状態で力を振るう姿は間違いなく昔の自分。それを見るのがいやだった。だからさらに力を込める。しかしその瞬間、黒いI横へ移動し、刀を中腰に構えて、僕の刀を受け流した。それはシャルルがやって見せたものだった。

(しまっ・・・)

僕は体勢を崩す。黒いISはそこから僕の雪片を上を持ち上げるように切り上げる。僕は雪片を放しはしなかったが、無防備な状態になる。そして振り上げられた雪片は上段から襲い掛かってくる。

白式のシールドエネルギーはあとわずか。その一撃を喰らえばタダではすまない。

金剛劉を発動させようとするがシールドエネルギーが足りない。もうダメだと思った瞬間だった。

ガギン！

「え？」

一瞬だけオレンジ色の影が見えた。しかしそれがすぐに目の前から消える。後ろに吹き飛ばされた影を見る。そして現状を理解する。僕はその方向へ瞬時加速した。

「シャルル！」

僕は吹き飛ばされたシャルルを受け止める。シャルルが僕を庇って斬られた。シールドエネルギーが既に限界だったのか、ラファールは強制解除されていた。

「シャルル！シャルル！シャルル！！」

「おい、一夏！シャルルは大丈夫なのか！？」

篤さんがこっちまで来ていた。たぶんあまりの音に目が覚めたんだろう。

しかし何度呼びかけてもシャルルは目覚めない。

「シャルル・・・？」

篤さんがシャルルを支えている。そのシャルルの顔を見る。ISの絶対防御があるとわかっていてもやはり思ってしまう。本当に大丈夫なのかと。するとあの記憶が再び脳裏に映し出される。

姉さんが撃たれて気を失った顔。それが今のシャルルの顔と重なってしまう。そして考えてしまう。死んでしまったのではないかと。

そう思うと、黒い闇が僕の中を埋めていく。

「うあああああああああ！」

白式を実戦モードに移行。零落白夜を発動。そんなことはどうでもよかった。僕は両手で雪片を握り、顔の横まで持っていていき、突きの構えをとる。『雷迅』を使う。瞬時加速をしようとして放たれるエネルギーは血のように真っ赤であった。目標はただ一つ。目の前のものを・・・殺すこと。

(ためらうな。殺せ。そうすれば全てが晴れる)

自分の声なのに、自分の声でないような声が頭に響く。でもそれでもいいと思った。関係ないのだから。

(瞬時加速のチャージが終わりました)

筈は一夏のおふれるような殺気を感じ取って一夏のほつを見る。一夏が零落白夜を発動しているのがわかった。そして突きの構え。一夏がやるうとしていることはすぐにわかった。ボーデヴィツヒを殺すつもりなのだ。

「やめろ、一夏！そんなことをしたらボーデヴィツヒが死んでしま

うぞー！」

しかし一夏は聞こえてないかのように構えを解かない。その殺気がどンドン巨大なものになっていく。そして一夏が飛び出す瞬間だった。

「やめろ、一夏！お前はまた同じ過ちを繰り返すきか！！？？」

それは千冬の声だった。しかしその言葉で一夏の意識はクリアになっていく。そして目の前が真っ赤になった。血の色である。零落白夜でこのままボーデヴィツヒさんに向かっていたらどうなっていたか、その先を考えて一夏は吐きそうになり、零落白夜を消して雪片を地面に刺した。

「ハア・・・ハア・・・う、ゲホッゲホッ」

なんとか踏みとどまった。しかし黒いISを見ると制圧しに来た教師陣をなぎ払っている。

それを見てるとまたおかしくなりそうだった。しかしそれを止める声が聞こえてくる。

「いち・・・か・・・」

振り返ってみる。するとそこには弱々しく目を開いているシャルルがいた。

「シャルル！大丈夫ですか!？」

「一夏、僕は・・・大丈夫だよ。ちよつと・・・体が痛いけど・・・ね」

「そうですか。はあ・・・よかつた・・・」

本当に安心する。死んでたら僕はボーデヴィツヒさんをどうしていいかわからない。

おそらく殺していただろう。そしてまた自分は後悔する。たぶんそうなつてた。

「一夏・・・」

「なんですか、シャルル？」

シャルルが振り返るように言う。僕はそれを黙って聞く。

「一夏はもう・・・間違つたりしないよね？」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

もう一度黒いISの、ボーデヴィツヒさんのほうを見る。教師陣は攻撃さえしなければ黒いISは襲つて来ないとわかつてなかなか手を出せていない。僕はまず自分を落ち着かせながら言った。

「姉さん」

「なんだ？」

「先生たちを退避させてください。僕がやります」

「……………」

姉さんが考える。さっきの僕の形相と行為を見たらそれは考え込んでしまうかな。

しばらくして姉さんが最終確認をとる。

「一夏、信用していいんだな？」

「はい。彼女を、ボーデヴィツヒさんを連れて帰ります」

「……………わかった。好きにしる」

「はい……………」

そこで通信が切れる。そして振り向くと篝さんが複雑な表情をしている。

「篝さん、あの……………」

「言わなくていい」

「え？」

正直ここまで来たら自分でも言わないといけなかった。自分が過去に何をやったか。

たとえどんなに否定されようと言わなきゃいけないと思った。

「私がいつか自分で聞きだす。だから今は、あれを何とかして来い」
「は、はい・・・」

真剣な顔でそう言うてくる。とりあえず・・・大丈夫かな？
次にシャルルの顔を見る。その顔は苦しそうにしているけど笑っている。

「いつてらっしやい、一夏」
「・・・はい、いつてきます」

僕は意識を集中させる。雪片を腰に添えて居合いの構えをしてボー
デヴィツヒさんの方を見る。
あっちもこっちに気付いたようでもこっちに向かってくる。僕は雪片
を展開、しかし零落白夜は使わない。そのまま瞬時加速で黒いIS
に向かう。

(出来るかどうかはわからないけど、やるしかないな)

僕はイメージする。雪片に零落白夜ではなく、白式のエネルギーを
代わりに使う。そして雪片からは青白いエネルギーではなく、炎の
ような紅色のエネルギーが出てくる。黒いISが雪片を振り下ろす。
僕はそれを迎え撃つ。

サイハーデン刀争術『焰切り・翔刃』しょうは

雪片がぶつかり合う瞬間、腕のスラスタを展開して瞬時加速を行う。最初の瞬時加速と腕のスラスタで雪片の暫撃が強化される。黒いISの雪片はその手から弾かれる。僕は振りぬいた雪片を上段から振り下ろす。

サイハーデン刀争術『焰重ね・紅布』こうふ

雪片に溜めた紅色のエネルギーが暫撃としてその場に残る。そしてその暫撃はレーザーのように熱線へと変わり、黒いISを焼き払う。黒い闇が……消えていく。

「おっと」

ポーデヴィツヒさんが解放される。僕はポーデヴィツヒさんを抱きかかえて、そして目が合った。眼帯が外れて、金色の左目が見えた。その目はひどく弱っているようで、助けて欲しいと願うようにこちらを見ていた。そしてポーデヴィツヒさんは気を失う。

「僕は……間違ってるのかな」

空を見上げる。自分のために力を使っているのは僕だと考えてしま
う。それでもその質問に答えてくれる人はいなかった。

第十四話 終

第十四話 VSブリュンヒルデ/自分（後書き）

終わるところが中途半端ですいません。書いてる時間がないもので。今回は短くなります。二巻の終わりまで書こうかと思えますので。本当にすいません。皆さんの評価、応援を作者は待ってます！

第十五話 それぞれの始まり（二巻終了）（前書き）

書き始めてから一ヶ月が経ちました。作者はゴールデンウィーク中に、適当な気持ちで書いていたんですが、気付いたら自分でもびっくりするくらいまじめに書いてます。わからないものですね。二巻が終わります。そろそろサブストーリーを入れようかと思えます。どんな内容かはお楽しみに。

第十五話 それぞれの始まり（二巻終了）

「一つ忠告しておくぞ。あいつの笑顔だけには気をつけることだ。あいつは心が未熟なくせに妙に他人を魅了するからな。油断しているとあいつのことばかり考えるようになるぞ?」

その時の教官の顔は少し悲しそうで、でもどこか優しい顔をしていた。そしてわかった。教官をこんな顔にさせる男が・・・羨ましかつたんだ。教官にこんなにも心配してもらえる・・・その男が。

「その弟は今はどうしているのですか?」
「少々悩んでいてな。でも放っておけないんだ。不思議とな」

教官はまた心配そうな顔をした。どうしても気になり、私は訊いてみた。

お前はなぜ強くあろうとする? だせそこまで強いのだ?

「僕は強くないですよ。むしろ弱いくらいです」

弱い? あれだけの力でまだ弱いのか?

「力はただの暴力でしかないんですよ。大事なものはそれを使う心で

す

心？

「僕もよくわからないんですよ。ただ・・・誰かを傷つけるだけの力に、意味なんてない。これだけはいえます」

・・・そうか。

「僕の心は不安定なんですよ。だから力を間違ったことに使う時だつてある」

・・・

「でも僕はボーデヴィツヒさんに、僕のようにはなつて欲しくないんです」

すまなかつたな・・・。

「だから、僕が見守ってます。ボーデヴィツヒさんが・・・間違わないように」

そいつは笑つてそう言った。そして理解した。こいつは底が見えないほど優しいのだ。だから惹かれるんだ。この心に。これには・・・惚れてしまいそうだ。

「・・・ここは？」

「気がついたか」

ラウラは見覚えのない天井を見上げていた。ここは保健室であり、自分が寝ているベッドの横には千冬が丸イスに座っていた。

「何が・・・起きたのですか？」

ラウラは千冬の方に目を向ける。答えてもらえるようにしっかりと目を見る。

「一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」

少し考えてから千冬は話し始めた。

「VTシステムは知っているな？」

「はい・・・。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをそのままトレースするシステムです。しかし」

「そうだ。IS条約でその研究・開発・使用、全てが禁止されている。それがお前のISに積まれていた」

「それは・・・本当ですか？」

「巧妙に隠されてはいたがな。精神状態、蓄積ダメージ、そして何

より操縦者の意思……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現時学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

ラウラはシートを握りしめた。原因は自分にあるからだ。

「私が……望んだからですね」

自分が千冬のように強くなりたいと願ったからである。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「はい……」

「お前は誰だ？」

「え？わ、私は……」

いきなりの質問にラウラは答えることができなかった。

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前は、これからはラウラ・ボーデヴィツヒだ。お前は、お前でしかない」

「え？」

あの教官が、自分を励ましてくれていることが意外だった。あまりにも意外で、何も言えなくなってしまうた。そしてその教官はイス

から立ち上がり、保健室を去ろうとする。

「ああ、それから」

ドアに手をかけたところで、何かを言おうとする。その横顔は、やはり何かを心配しているような顔だった。

「お前は私になれないぞ。あいつの姉は、私ですら悩まされるからな」

教官が保健室から出て行き、自分だけが部屋に残る。

「フフ・・・」

急に笑いがこみ上げてくる。とても清々しい気分で、とても心地よかった。

「結局トーナメントは中止だった。ただ、個人データは取りたいから、一回戦は全部やるそうだよ」

「そうですか・・・」

場所は寮の食堂。割と長かった事情聴取が終わって、食堂終了時間ギリギリだった。僕はさっさと食べて考え事をしていた。

「やっぱりあれはVTS・・・としか考えられない」

「ボーデヴィツヒさんのあれ？」

「はい」

あとで調べてみたけど、あれはやっぱりヴァルキリー・トレース・システムだった。それがボーデヴィツヒさんのISに積まれていたとなると怪しいのはドイツで、それが気になった。僕は決意して立ち上がる。

「よし！こうなったら今からハッキングして全ての真相を　　！」

「ダメだよ！一夏なら出来ると思うけど、やっぱりダメだって！」

「うーん・・・」

まあ、ハッキングは一応・・・一応犯罪なので、ここはシャルルに従うとしましょう。そんな会話をしてると周りに女子が集まっています、一人一人なにか言っている。

「優勝・・・チャンス・・・消えた・・・」

「交際・・・無効・・・」

「・・・うわあああんっ！」

女子が数名、泣きながら去っていく。本当にどうしたんだろう。

「ん？あれって・・・」

「うん？」

そこには篝さんがいた。なにか不安そうな顔をしてるけど、先月の約束のことかな。

「篝さん」

「な、なんだ？」

「買い物ぐらいなら・・・付き合いますよ？」

ビシィッ

なんだろう。この音をよく耳にする。それで結果は毎回よくない方向に・・・。

「そ、そんなことだろうと思ったわ！」

「うわっ！」

篝さんがみぞを狙って蹴ってくる。いきなりですか！？僕は体を反

るようにして避ける。とりあえず話し合わないといけないので、姿勢を低くして篝さんの脚を払う。

「なっ?」

そして体勢が崩れて倒れそうなところを片手で肩を支える。さて、これでやっと話せる。

「篝さん、突然蹴るのはよくないと思います」

「うっ」

「あと、言いたいことがあるのならちゃんと行ってください」

「・・・い、い、言えるかああああ!」

篝さんは僕を手で突き飛ばして走り去っていく。なんか鈴さんとも似たようなことがあったような・・・。

「一夏つて、わざとやってるんじゃないかって思う時があるよね」

「シャルル、それはどういう意味なんですか?」

「なあ?」

シャルルは答えをくれないらしい。うーん、わからないな。と、まだわからないことがあった。

「シャルル、なんかこう、一定の人物とだけ会話できるシステムってありませんでしたっけ？」

「プライベート・チャンネルのこと？」

「そっぢゃなくてですね、確か波長がどうこう言ってた……ええと」

クロッシング・アクセス
「相互意識干渉のこと？」

「あ、それです。うーん、そうか。あれが……」

なるほど。あれが意識の会話なのかな？デルボネさんの念威での会話とはまた違う……ような気がする。まあ、大したことなさそうだからいいけど。

「一夏、もしかしてボー・デヴィツヒさんと？」

「たぶん。偶然だと思いますけど」

「ふーん。そう」

今度はシャルルの機嫌が悪そうに見える。本人はなるべく顔に出さないようにしてるけど、少し見ればわかる。語尾が少し強くなって歩く速度が少し速くなる。と言ってもデルボネさんによく相手のことを見ろって言われたっけ。なんで機嫌が悪いんだろう。

「あ、織斑君、デユノア君。ここにいましたか」

「はい、どうかしましたか？」

山田先生だ。さっきの事件での書類処理などで忙しかったはずなの

に顔は笑顔だ。本当にお疲れ様である。

「なんとですね！今日から男子の大浴場使用が解禁なんです！」

「あれ？僕らが使っても大丈夫なんですか？」

「はい！今日は大浴場のボイラー点検があつたので、もともと生徒たちが使えない日だったんです。

でも点検自体は終わったので、それなら男子の二人に使ってもらおうということになりました」

なるほど。でもそこで僕は問題点に気付く。その原因を見る。

「どうします？シャルル」

「ど、どうって・・・」

シャルルは女子だ。かといってここで別々に入ると不信感を抱かれる。どうしよう。

「さあさあ！二人とも着替えを取って行きましょう！あ、織斑君にはプレスレットがあるんですけど？とりあえず準備してきたらどうですか？」

「あ、あの、山田先生。わかりましたから、押さないでください」

山田先生は僕らの背中を押していくぐい押ししてくる。なにをそんなに張り切っているんだろう。

「大浴場の鍵は私が持っていますから、脱衣場の前で待っていますね。じゃあ」

と言ってすたすたと歩いてしまふ。えーと、どうしよう？

「どうします？」

「えーと、とりあえず僕は着替えを取ってくるね。で、大浴場に行く間に何か考えよう」

「そうですね。そうしましょう」

と言うことになったけど、お互い気まずくてなにも話せずにいる。気付けば……

「あ、来ましたね。それじゃあどうぞ、ゆっくり〜」

「は、はあ……」

既に脱衣場の中、山田先生の『ゆっくり〜』が意味ありげに聞こえた。

「シャルル」

「はっ、はい！」

急に話しかけられてびっくりしたんだろうか。とりあえず・・・

「今日は疲れているはずですから、シャルルがお風呂に入ってください」

「一夏はどうするの?」

「僕はここで時間を潰してから部屋に戻ります」

「え、でも・・・」

今日はシャルルに助けられてばかりだったから、これぐらいはしないかね。

「まあまあ、ゆっくりしてください」

「・・・あ、あの・・・」

「ん?・・・え?」

「ど、どござー!」

シャルルが僕の目の前に来て僕を一回転?させて僕を無理やり大浴場に押し込んで、ドアをぴしゃりと閉める。これは・・・入っているってことなのかな?まあ、考えても仕方ないし・・・入ろうか。僕はプレスレットに制服を量子変換させてとりあえずタオルを腰に巻く。そして大浴場を見る。

「おお、これは・・・」

広いな。湯船大が一つ、ジェットとバブルのついた湯船が二つ、さらに檜風呂が一つ。サウナ、全方位シャワー、打たせ滝までついている。すごいな。

「これに温水プールつてのは・・・贅沢すぎかな」

テレシアでは・・・これ以上先は想像にお任せします。僕は体を洗ってから湯船大に入る。

「はあああああ~~~~」

この学園に入ってきて正直、戦ってばかりだ。おかげで毎日のように夢は見るし、体も心もそろそろ限界だ。だから大浴場に入れるというのは救いだ。おかげで体の疲れが少しずつ取れていく。

「あ、なんか・・・眠くなってきた・・・」

いろいろと疲れてたのかな。意識が朦朧もろろとしてくる。

カラカラカラ・・・。

あれ？脱衣場のドアが開く音がする。今は男子が大浴場を使っているから誰も入ってこないはず。

ぴたぴたぴた。

恐る恐る音がした方向を見る。

「お、お邪魔します……」
「なっ!?!」

シャルルだった。でも薄手のタオル一つなのでボディラインがくつきり見える。相変わらず形が整っていた。

「……あ、あんまり見ないで。一夏のえっち……」
「い、ごめんなさい!」

高速の回転で回れ右。あまりの速さに僕を中心に渦が少し出来上がる。あれ?僕ではできなかった師匠の技のコツが少しわかったような気がする。

「あ、あの、どうして!?!」
「ぼ、僕が一緒だと、イヤ……?」
「いえ、けしてそういうわけではないんですが……」

ああもう!僕は何を言ってるんだ!変態か!?!一度裸を見ていると

はいえ、シャルルが、綺麗なのはわかってる。だけど見ちゃダメだ！そこは紳士として・・・紳士として！

「やっぱり、その、お風呂に入ってみようかなって。迷惑なら上がるよ?。」

「いえいえ、大丈夫です！僕が上がりますから！シャルルは入って」

「ま、待って！」

シャルルが僕の手を掴んで止めてくる。

「話があるんだ。大事なことから、一夏にも聞いて欲しい・・・」

「そ、そうですか」

僕はもう一度湯船に入る。見るわけにはいかないの、シャルルに背を向けて話を聞く。

そうするとシャルルが近くに寄ってきて、背中を合わせる形になる。

「その・・・前に言ってたこと、何だけど」

「・・・学園に残るって話ですか?」

「そう、それ。僕ね、ここにいようと思う。一夏がここにいればいいって、言ってくれたから」

シャルルはこつちを向いて。肩に手を乗せて体を寄せてくる。

「シャルル!？」

「一夏は僕を助けてくれるんだよね?」

「……はい」

「だから僕も一夏を助ける。一夏がどんなに悩んだり、苦しくっても、僕が助けになるよ」

少しだけ肩の重荷が取れたような気がした。

「ありがとうございます……」

「あとね、僕の話はこれからシャルロットって呼んでくれる?ふたりきりのときだけでいいから」

「それが本当の……?」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「わかりました。シャルロットさん」

「……」

「シャルロットさん?」

「なんかね」

横顔だけ見たけどシャルロットさんは苦笑していた。はて、何がおかしいのか。

「あの……そろそろ離れてもらわないと……」

これだけ密着していると、女性特有の膨らみが背中に触れているのである。当然気になってしまっわけ……

「あ、ああっ、うんっ！そうだね！ぼ、僕、先に体と髪を洗っちゃうねー！」

シャルロットさんは自分の状態を自覚して、僕から離れて湯船を出る。と、そこで足が止まった。

「一夏……あのね……」

「なんですか？」

なにか言いたいことがあるそうだ。顔を見てないからどんな表情をしているかはわからないけど。

「あの……髪を洗ってくれないかな？」

ドボン

僕は湯船に顔をぶつけた。頭から思いつきり。うん、ぼけてない。

「な、何を言ってるんですか!？」

「その・・・体が少し痛いんだ。だから腕が少し上がらなくて・・・
ダメ?」

斬られたときか。あれは僕を庇ってそうなってしまった。僕のせい
だな。

「ちょ、ちょっと待っててください」

「う、うん」

僕はブレスレットを見る。えーっと確か水着がどこかに・・・あった。僕は水着を量子変換、一枚持ってきたタオルで目を隠して後ろで結ぶ。

「ど、どござい」

一夏は見えないのでシャルロットが僕の手を引っ張る。シャルロットさんが座ったところでノズルを回す。シャワーが勢いよく水を出
す。

「そ、それでは・・・洗いますね・・・」

「は、はい。お願いします・・・」

お互いに声が小さい。き、気まずい。まずはシャンプーで、次にリンスで、シャルロットさんの髪を洗っていく。その髪は・・・サラサラしていた。

「一夏・・・上手だね」

「そ、そうですか？」

「もしかして・・・何回もやったことが・・・」

「な、ないですよ！これで二回目ですよ！」

「本当に？」

「本当ですってば！」

「そうかあ。えへへ・・・」

「？」

とりあえずご機嫌なのでいいかな。そのあとはシャルルが自分で体を洗って、先に出た。僕は体を拭いてあとはブレスレットで部屋着を着れば終わり。早いもんだ。そのあと脱衣場を出たけど二人とも何も言えないでいて、部屋に着いたら僕達はすぐに寝ていた。

次の日。『先に行つてて』と言うので食堂で別れたから、朝のホームルームにシャルロットさんはいない。
何か忘れ物でもしたんだろうか。

「み、みなさん、おはようございます……」

教室に入ってきた山田先生はふらふらしていた。朝から何が起きたんだろう。頭でも打ちましたか？

「織斑君、先生は頭を打ってませんよ」

なぜわかった？

「あ……とりあえずこれどうぞ」

「ありがとうございます。ああ、おいしいですね」

今日僕が作っておいたお茶である。原料から自分で作っているの
味はそれなりに。

「今日は、ですね……転校生を紹介します。転校生と言いますか、
すでに紹介は済んでいるといいいますか、ええと……」

いまいちわからない説明だけど、どうやら転校生が来るらしい。そ
れで教室が騒がしくなる。

まだ……来るって言うのか。今度の人とは仲良くできるだろうか。

「じゃあ、入ってください」
「失礼します」

え？

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願います」

ぺこりと一礼。スカート姿のシャルロットさんがそこにいた。Wh
y?

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。はああ・・・また寮の部屋割りを組み立てなおす作業が始まります・・・」

なるほど。だから落ち込んだのか。どうやら相当疲れる仕事らしい。

「え？デュノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは」

「ちよっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

一気に教室が騒がしくなる。はっ、教室のドアから殺気が！

「一夏あつ！……！」

ドアが勢いよく開いて鈴さんが出てくる。ドアは……大切に使いましょう。

「死ね！……！」

やばい。席から立つたけど、白式を展開するどころか、避けることも間に合わない。

ここで……死ぬ？

ドオオン！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

鈴さんが怒りのあまり肩で息をしているのが見える。見えるってことは……生きてる？

目の前を見るとシユバルツエア・レーゲンを展開したボーデヴィツヒさんがいた。AICで龍砲を止めてくれたらしい。

「ど、どうもありがとうございます。あの、ISは大丈夫だったんですか？」

「……コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み

直した。あとこれからは私のことはラウラと呼べ、いいな？」
「は、はい。わかりました」

突然肩を下に押すような形でラウラさんが正座を促す。ラウラさんはISを解除して正座をする。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「あの・・・婿^{むこ}じゃなくて嫁なんですか？」

誰かが・・・間違った知識を吹き込んでるとしか思えない。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。しかし」

「しかし？」

「その前に教官に認めてもらう必要がある。私がお前にふさわしいと。だから・・・私を鍛えなおしてくれ！」

と言って土下座をしてきた。クラスみんなはびっくりしている。僕だっけしてる。あんなに冷たそうなラウラさんが土下座をしているんだ。驚かない方がおかしい。

「あの・・・僕誰かに教えるのは基本お断り」
「頼む！」

ガシツと僕の腰辺りに抱きついてくる。え？何でこんなことに？

「アンタねえええっ！！！」

鈴さんが再び衝撃砲を撃とうとしてくる。僕はとりあえずラウラさんを安全なところに置く。に、逃げよう。なぜか殺気がこのクラスに充満している。僕が逃げ始めようとしたときだった。

ビシュンッ！

レーザーが僕の頭に向けて放たれる。僕は反射的に避けてレーザーが来た方向を向いた。

「一夏さん？その方と何があったか詳しくお話ししてくれませんか？と？」

セシリアさんが・・・ブルー・ティアーズを展開していく。怒っているのだけはわかる。殺す気ですか？

僕は窓へ逃げようとする。さすがに二階から飛び降りれば、多少時間が稼げるはずだ。窓に手をかけた瞬間だった。

ドスッ

避けたはいいが、壁に刀が刺さっていた。名は^{あけよい}緋宵。篝さんだった。

「一夏、どういつつもりか説明してもらおうか」

顔が・・・怖い。いや本当に。僕は廊下に逃げようとするが一つの影が僕の前に立ちはだかる。シャルロットさんだった。ただその顔が・・・笑ってるけど笑ってない。たぶん心が。

「一夏、そういえばボーデヴィツヒさんと^{クロッシング・アクセス}相互意識干渉で何があったか訊いてなかったね」

「あの一、別に教えてもいいんですけど。なんでISを展開してるんですか？」

「なんでだろうっね」

シャルロットさんの左腕の盾がパージされる。

そこにあつたのは六十九口径パイルバンカー《^{グレースケール}灰色の鱗殻》。
通称『^{シールド・ヒアース}盾殺し』。

こ、殺される？

サイハーデン刀争術『水鏡渡り』

僕はデールバツ○・ゴートの要領でシャルルを抜き去り、廊下に逃げる。そしてそれぞれ武器を持った四人がついてくる。逃げないと。僕は廊下を走り去る。その途中で……。

ガシッ

「ぐえ」

僕は首根っこを掴まれた。僕を止めたのは姉さんだった。水鏡渡りをしていた僕を止めるなんて、人間のやることじゃない。い、息が。

「おまえら！いいかげんにしろ！」

その騒動は……姉さんの一喝で……治まった。

第十五話 終

第十五話 それぞれの始まり（二巻終了）（後書き）

あえてキスはさせませんでした。した方がよかったかな？

紅椿は次回に回そうと思ってます。

書くことないです・・・はあ。

また書きますので、作者は感想、評価、応援を心からお待ちしております！

テレシアにて セシリア・オルコット(前書き)

セシリア編です。鈴のネタが思いつきません！今回はとある事情により他のラノベの主人公の名前を使わせていただきます。どうぞ！

テレシアにて セシリア・オルコット

テレシアで働いていたとある土曜日。今日はレストランでの僕の予約がなくなつたらしい。

接客も料理もできないということである。僕が作ると値段が変わると言っている。だからマスターが決めている値段は高いのだから。それでも一人も予約してくれなかつたことは……

「どれだけお金を取ってるんだろう、マスター」

いや仕事をしたいのは本当なんだけど、やっぱり接客したいとか、料理をしたいかと思つてしまうわけで。なんと言つてか……頼りにされないつて言つのはちよつぴり寂しかったりする。

「すまないねえ織斑君。午後まで部屋の掃除なん手伝ってもらつちやつたねえ」

「大丈夫ですよ。今日は僕午後も予定はありませんから。桜木さんのお手伝いをしたかつたんです」

「うれしいねえ。料理の下ごしらえはどうするんだい？」

「僕は遠慮しておきます。僕は自分の力で、桜木さんのようなおいしい料理を作りたいんです」

そつだ。自分で作つて、研究してこそ意味があるんだ。

「そうかい、そうかい。でも忘れちゃいけないよ。」

大切なのは相手に喜んでもらおうつて思う心だからねえ?」

「はい、忘れてませんよ」

「うむ、よろしい」

さて、今日の仕事は終わった。普段なら午後11時時ぐらゐまで働いてるけど、今は夕方の5時半。
今日は早めに上がるのかな?

「桜木さん、僕今日はもう」

あがると言おうとして外からあわただしい声が聞こえてくる。

「どうするんだ!今日はあの有名な『ノーネーム』が来るはいいが、あつちのピアノリストが怪我をしたらしい。だから今日はキャンセルすると言っているぞ!」

「わかつてますよ!今日はそつちの予約のお客様がいっぱいだったのはわかつてます。」

でもそれがキャンセルされたなんて言つたらテレシアの評判は落ちるのはわかつてますよ!

ああ!どうしたらいいんだ!??」

『ノーネーム』。一部の人間にしか知られていないオーケストラ。その演奏力は他のものとは比べ物にならないほど美しいと言われている。そのため一握りの上流階級の間でも観賞は困難であると聞いたことがある。たとえ見れたとしても奇跡だとか。他の人に知られていないのなら『名無し』、つまり『ノーネーム』という団体名でいいだろうということになったらしい。一般社会ではその意味は誰も知らないと言われている。まあ、存在自体が伝説みたいな物だったから、本当にあるのかは正直疑わしいものだったんだけど。その団体が、今日テレシアに来るらしい。

「なんか、大変なことになってませんか？」
「そうだねえ。私にはよくわからないねえ」

桜木さんはこういうのには興味がないらしい。基本自分の仕事を忠実にこなし、自分が認めた人としか話さない。『どうせ生きるんなら、自分がやりたいことをすればいい』というのが桜木さんの Motto だそうだ。なんか、かっこいいな。

「織斑君、ピアノはできるのかい？」
「え？まあ、多少は・・・」
「だったら行ってきなさい」
「な、何を言ってるんですか、桜木さん！？僕みたいな素人が」
「顔にどうにかしたいと書いてあるよ」

そんな顔をしていたんだろうか、僕は。自分では正直わからない。

「ノーネームのためじゃなく、私達テレシアのためにやってくれんかね？」

「……わかりました。僕もここを失うのはいやですからね」「うん。よろしくのう」

よし、やってやる。

どこまで出来るかはわからないけど、このテレシアで働き続けるためには、やるしかない！

「どうするんですか、マスター！このままでは……」「さて、どうしたものか」

僕はダツシユで責任者を探していた。そこでマスターとここの社員が話しているところを見つけた。

「仕方ありませんね。ここはキャンセルを」

「ちょっと待ってください！」

「織斑？」

マスターなら話が出るだろうと思って僕はマスターの方を見る。

「僕が……僕がピアノを弾きます！」

「織斑！あなたは本気で言っているんですか！これは失敗すればテレシアだけではなく、ノーネームの名にも泥を塗ることになるんですよ！」

名前がないのに名に泥を塗るとはこれいかに。って、言ってる場合じゃない！

「マスターはテレシアとノーネーム、どっちが大事なんですか！？」

「！」

「僕はテレシアの方が大事です！それを救うためだったらなんでもします！だからお願いします！僕に・・・ピアノを弾かせてください！」

「・・・」

マスターは考え込んでしまう。そして厳しい目でこっちを見てくる。

「失敗したら・・・どうなるかわかってますね？」

「わかっていますよ。言っておきますけど、僕は失敗したらここを辞める覚悟だっていますから。でも僕の名前は公開しないようにお願いします」

「・・・フフフ、そうですね。なら任せましょう」

マスターが笑った。普段はあまり笑わないあのマスターが・・・笑った。

「行つてきます！」

「ちよつと待ちなさい、織斑！」

マスターと話をしていた社員が止めようとしたけど振り切った。マスターが許可したんだからいいはずだ。

「マスター！あれでよろしいのですか？」

「いいんですよ、あれで。私も昔はあんな感じでしたから」

「え？マスターが？」

マスターは不敵な笑みを浮かべる。一夏の背中を見ながら呟く。

「見させてもらいますよ。あなたの心を」

場所は変わってテレシアのステージ。ステージはステージでも一般人が見たらびっくりするぐらいの大きすぎるステージ。いったい、どれだけの金がかかっているのだろう。僕は髪型を変えて眼鏡を装着して変装する。これで僕の正体はばれない。ISを使える男がここで働いていることが公になれば絶対に注目される。テレシアは僕をメディアから守ってくれているのだから。

「おい、あれが本人らしいぞ・・・」

「やだ、まだ高校生だって？」

「本当に大丈夫なのか？」

ノーネームの団員達が色々と言ってくる。でも気にしない。僕はテレシアのためにやるんだ。

「これが楽譜だ」

少し背が高い中年の黒い髪の男が楽譜をわたしてきた。楽器はバイオリン。その目は完全に僕を見下している。その目が少しいやだった。だから言ってやった。

「才能に・・・年齢なんて関係あるんですか？」

その男は啞然としていた。こういうプライドの高い人間は小さい頃から才能に恵まれているパターンが多い。だから自分の才能に誇りを持ち、酔いしれ、そしておぼれる。こういうのは一番きらいだ。

「いいねえ！そいつおもしろえなあ！おい！おまえ、名前はなんていうんだ？」

すこしチャラそうな茶髪で髪がボサボサの男が話しかけてくる。楽器はチェロ。

スーツは着崩しているけど本番はちゃんと着るのだろうか。

「他人の名前を訊く時はまず自分から名乗るのが先じゃないでしょうか？」

「そうかもしれねえなあ。だがな、俺達ノーネームは」

その男はチェロをふわりとイスに置き、ポケットからナイフを取り出す。

そして僕にすごいスピードで迫った。

「異常なんだよ」

僕は刺さる前に男の腕を掴んで止めた。その男の速さは常人からしてみれば相当速いものだった。

「お！いいねえ。お前、名前は？」

「四ノ宮京夜です」

これは僕の名前が外部に漏洩しないように考えた偽名だ。織斑一夏だと目立ちすぎるからね。

「そいつは偽名だな」
「！」

この人・・・なんで・・・

「お前の顔を見ればすぐにわかる。そいつはお前の本当の名前じゃねえ。」

そつちが名乗る気がねえならこつちも名乗る義務はねえ。

そもそもノーネームでは自分達の名前は言わないことになってる。

まあ、楽しくやろうや、四ノ宮？」

その男はナイフをしまつてスーツを整える。どうやらそこらへんはちゃんとするんだ。

「ごめんなさい。あの人、興味を持った人にはいつもあんなことするのよ。本当に人を刺しちゃうときは大変なんだけどね。」

申し訳なさそうに金髪のボブカットの女性が謝ってくる。楽器はフルート。年齢は二十歳ほど。

見た目はちゃんとしているけど、中身はどうだか。

「人が死んでもなんとも思わないんですか？」

「自分じゃなければいいのよ。他人のことなんて興味ないわ」

「・・・異常ですね」

「彼も言つてたでしょう？まあ、よろしくね京夜君」

その女性は去つていった。そしてメンバーを見る。そして理解する。知られていないのではなく、知りたくないんだと。どこか異常で、恐怖を覚えるのだと。

「よし、全部覚えた」

僕は楽譜を一通り見て適当なイスに置く。そして準備をする。開演時間は19時半。現時刻は19:20。

「おや？楽譜は見なくていいのか？余裕だねえ」

茶髪の男が話しかけてくる。問題はないので言つてやった。

「問題ないですよ。全部覚えましたから」

「そいつは頼もしいねえ。でも、それだけじゃあ、ノーネームではやっていけないぜ」

男は不敵な笑みを浮かべていた。大丈夫だ。テレシアのために……。

ステージから見ると客席に空白はなく、全てが人で埋まっていた。その数えることの出来ないほどの席を見るとスポーツの試合を見るような視線を感じた。いや、すごい。テレシアの一角でこんなことになってるとは思わなかった。あれ？席の一つに目立つ青色のドレスを着た見覚えのある縦ロールが見える。

（あれってまさか、セシリアさん？）

見間違えるはずがなかった。セシリアさんは有名人でも見るような視線を放っている。そして僕の方を見ると驚いた顔をしていた。とりあえず笑顔でその視線に応える。

「それではノーネームの演奏を始めます」

男性の指揮者がステージに上がる。その髪はこの場に合わないほど伸びている。具体的には腰辺りまで。そして演奏が始まる。観客は信じられないような顔をしていた。そこには完成された音楽ではなく、不完全な音楽がそこにあった。

（なるほど。確かにこれは異常だ）

全員の息が合っていないどころか、好き放題に楽譜にそってそれぞれ音を奏でている。楽譜通りではない、それぞれのオリジナル。まるで自分が一番とでも言っているように。それでも全体が崩れることはない。不思議と一つになっていた。

(それだけじゃあ、ノーネームではやっていけないぜ)

なるほど、ただ楽譜どおりに弾けばいいってわけじゃないと言いたかったのか。
望むところ！

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

ノーネームのメンバー全員と観客の一部が気付いた。重要な役割の一つであるピアノが明らかに音が変わったことに。僕は自分のメロディーを奏でる。それでいて他のメンバーのバラバラであり、それでも一つになっている演奏をよりまとめ上げた。

(やるじゃないですか、織斑)

観客席で見ていたマスターはそんなことを思っていた。一夏に任せ
て正解だったと思った。

（あらまあ。織斑君、大胆なことをしましたねえ）

桜木はわからないと言っていたが、その微妙な違いに気付いていた。演奏時間およそ二時間半。終わった後は喝采に僕らは包まれた。

パチパチパチパチ。

場所は変わってホテルのパーティー会場。そこでは夜の11時を過ぎてにもぎやかだった。僕はグラスに入ったワインを配ったり、料理を運んだりなど忙しい。姉さんは帰ってこないことが多いからたぶん大丈夫。こんなに夜遅くまで働いていたなんて言ったら最後、僕に明日はない。

「あの、そのあなた、ちょっとよろしくて？」

聞き覚えのある声でした。誰かと思ってそっちを振り向くとセシリアさんだった。

青いドレスがよく似合う。

「なんででしょう、お嬢様。僕に出来ることならなんでもしますよ」

出来るだけ他人を装う。ここで僕の正体をばらすわけにはいかない。ホテルの人たちもそこは理解してくれている。もちろん僕の偽名も。

「あの、あなたのお名前は？」

「他人の名前を訊く時はまず自分から名乗るのが先じゃないでしょうか？」

少し前に同じようなセリフを言った気がするけど、まあ気にしない。

「す、すいませんでした！わたくしの名前はセシリア・オルコットです」

「僕の名前は四ノ宮京夜です。美しいお嬢様には礼儀も大事ですよ？」

「そ、そんな。美しいだなんて・・・」

セシリアさんの顔が真っ赤だ。何か恥ずかしいことでもあるのかな？

「おい」

突然声をかけられた。振り返るとそこには僕に楽譜を渡した男が立っていた。

「いい演奏だった。さっきはすまなかった」

と言って頭を下げてきた。なんか、悪いことしちゃったかな。

「いえ、僕も言い方が悪かったです。本当にすいませんでした」

僕も頭を下げる。そうすると目の前に手が差し出されているのが見えた。

「また一緒に演奏できるといいな」

「そうですね」

そして僕らは握手をした。

「おお！なんだよお！すっかり仲良くなってるじゃねえか！」

と言いながら僕の首に腕をまいてきたあの茶髪の男だった。着崩してるスーツがだらしない。

「なにか」

「そんな警戒すんなよ。俺達は一緒に演奏した仲じゃねえか。楽しくやるっぜー！

あ、俺のことは京介きやうすけでいいからな。よろしくな、京夜！」
「それは・・・偽名ですか？」

セシリアさんに聞こえないように声を潜める。ノーネームでは自分の名前は言わないと教えてくれたのはこの人だ。その本人が自分の名前を言うわけがない。

「・・・いいねえ。やっぱりお前最高だわ。一緒にいると飽きねえな」

あっちも小声で話してくれている。どうやらセシリアさんに聞かれ
たらまずいということを理解してくれたらしい。

「俺達はそろそろ帰るぜ、もう遅いしな。またどこかで会おうぜ！」
「またな」

二人とも帰っていく。僕は手を振って彼らを見送った。

「あの、あの方達は？」
「ノーネームのメンバーです」
「えええ！」

セシリアさんはこれまでになく驚いている。どうやらノーネームこ
とは知っていたようだ。

「あら、そのお嬢さんを口説いてるの？」

セシリアさんの後ろを見るとあの金髪の女性がニヤニヤしながらこっちを見ている。

何がそんなに楽しいんだろう。

「そんなわけないじゃないですか。こういう態度ではおかしいですか？」

「他人なんてどうでもいいのよ。でもあなたは別」

そう言って僕の隣に来て僕の手をとった。そして小さい紙を僕の手の上に置いた。

「これ、私の連絡先。あと私は18歳でフリーだから。また会いましょう、京夜君」

そう言うと女性は去ってしまった。って二十歳は失礼だったかな。

「えっと、あなたの名前は四ノ宮京夜さんでよろしいのですか？」
「京夜でいいですよ。どうかしましたか？」

セシリアさんが考え込んでしまっている。もしかして・・・ばれてる？

「いえ、あなたとすぐく似ている方がいるもので」

「ハハハ、私のドツペルゲンガーとでもお知り合いですか？」

「いえ、たぶん違いますわ。一夏さんはそんな冗談は言いませんわ」

僕ってあまり冗談を言うような人には見えないんだ。

「あの、よかつたら一緒に踊りませんか？」

「え、ええ！？」

セシリアさんが驚いている。少し意外性を見せた方が正体がばれない筈だ。

「あ、あの。それでは・・・よろしく願いしますわ」

「はい」

僕らは時間が時間と言うことで少しの間だけ踊った。セシリアさんがこつちを見たときに笑顔でセシリアさんの顔を見たら顔を赤くして俯いてしまった。

「やっぱり似てますわ・・・」

「なにか言いました？」

「い、いえ！何でもありませんわ！オホホホ」
「？」

踊っているときにテレシアのスタッフがヒューヒューとか言っていることは僕は知らなかった。

「あの、京夜さん？」

「はい？」

「よろしければ、今度ピアノを教えてくださいませんか？」

「いいですよ」

「ありがとうございます」

そのパーティーは・・・夜遅くまで続いた。

ツト 終

テレシアにて セシリア・オルコ

テレシアにて セシリア・オルコット（後書き）

メインがセシリアではないですね。なんかシヨックです。書いてた
ら変な展開になってました。しかもサブなのにかなり盛り上がって
る。あれえ？

GJ部の主人公の名前と髪型を使わせていただきました。

次回は三巻に入ろうと思います。と言っても束と篝の会話からす
けどね。

感想と評価と誤字脱字、あと応援もよろしく願います！

m () m

設定 テレシア（前書き）

一夏の職場です。ここは本当に現実か？

テレシアと言うより登場人物の設定になっちゃいました。
すいません。

設定 テレシア

テレシア

一夏が働いている高級ホテル。

そこには莫大なお金が掛かっていて、上流階級の人間が楽しむ娯楽が全て詰まっている。

全ての経費はマスターが管理している。そしてここには大勢のSP達が待機しているとか。

登場人物

・マスター

スーツを着て、中年なのにすらっとした体をしているテレシアのオーナー。

どの年代の女性にも人気がある。年齢は不明。一夏をスカウトしたのは彼である。性格は極めて穏便。あまり笑わないが、テレシアに対する情熱だけは人一倍ある。

一夏のテレシアに対する熱意が自分の昔の姿と重なった。それからは笑うようになり、お客さんが増えたとか。

・桜木和子なぐらぎかずこ

テレシアでの仕事をほとんどこなしている67歳。一夏の尊敬の的である。

誰よりも早くテレシアに来ていた働き者。一夏に料理のすばらしさを教えたのはこの人である。

性格は優しいが、それは本人が認めた人だけである。意外と策士だったりする。

モットーは『どうせ生きるんなら、自分がやりたいことをすればいい』。

ノーネームの人たち

(名前がないとか・・・僕は何してるんでしょうね?)

・黒い髪の男性

少し背が高い中年の男性。楽器はバイオリン。

小さい頃からバイオリンの才能があったため、それが当然のことだと思い、他人を見下していた。

一夏との和解で丸くなった。性格は堂々としている。

・茶髪の男性

楽器はチェロ。

普段からスーツを着崩しているチャラ男。ポケットにナイフを携帯

している。

人懐っこい性格で、ノーネームの中では珍しいくらい明るい性格。

一夏には自分のことを京介と呼べと言ったが、それは偽名。

・金髪の女性

金髪のボブカットの女性。楽器はフルート。年齢は18歳だが、年齢以上に大人びている。

趣味は他人を冷やかすこと。基本DS。

他人に関してはまったく興味を持たない。一夏は例外らしい。

・四ノ宮京夜しのみやきよち

一夏のホテルでの偽名。外見はGJ部の主人公の髪型に眼鏡をプラス。

ノーネームではピアノを演奏。

自分の音楽を貫きながらもノーネームの合唱をさらにまとめた。上の三人とは和解。普段の一夏より少しだけ紳士で大胆だったりする。(いろんな意味で)

設定 テレシア（後書き）

どうでしたか？SPさん達にはどこかで活躍してもらおう予定です。
と言ってもパーティーなどの演奏をしていたのはこのSPだったり
するわけですがw
応援、評価、感想お待ちしております！

第十六話 突然起こるから accident なのである (三巻開始) (前書き)

遅れてすいません。サブタイトルが・・・思いつかないです。
思いついたのはわけのわからないもの。あとオリジナル展開で悩み
ました。

テストが終わりました。はあ、寝不足で頭いてえ。
すいません、愚痴言つて。それではどうぞ！

第十六話 突然起こるからaccidentなのである(三巻開始)

今は誰もいない第三アリーナ。時間も遅いので空は暗い。そのピットで篤は悩んでいた。

(私では、あいつの助けになれないのだろうか)

この学園に入つて一夏と再会してわかったことがあつた。戦いを避けて^さいる。自分の力に怯えているようにも見れる。だから一夏の力になりたい。そう思い始めた。でも自分にその力はない。一夏が鈴とセシリアを助けに行こうとしたときに、自分は何も出来なかつた。せめて専用機があれば、一夏を支えるぐらいはしたいと思つた。

「.....」

自分の携帯を見る。そこには彼女の姉である篠ノ之束の番号が表示されている。その電話一本で、専用機が手に入る。彼女の姉なら頼めばすぐに作ってくれるだろう。そういう人なのである。

(私は.....)

電話をかけようとしたそのときだった。

突然電話がかかってきた。画面を見ると本人だった。篠ノ之東である。

「もすもす、ひねもすう〜。ハイ！みんなのアイドル、篠ノ之東だよ

やあやあ、篝ちゃん。久しぶりだね！元気に青春してるかい？」

ブチッ！ブツッ。

切れた。二重の意味で。あの姉は人がまじめに悩んでいる時に何を訊いてくるんだろうか。

そのふざけっぶりに腹が立った。

また電話がかかってきた。

「.....」

「ひどいなあ、篝ちゃん。二回も切るなんて」

「キレて切っただけです。切ったのは一回です」

腹が立っていたのでその声はひどく冷めている。そんなことは気に

せず東は続ける。

「もうすぐ篝ちゃんの誕生日だよ。何が欲しい？何でもあげちゃあうよ？」

「・・・姉さん、私は」

「うんうん、わかってるよ。欲しいんだよね？篝ちゃんだけの専用機が！」

「！」

欲しいと思ってたのは確かだ。だがピンポイントで当ててくるとは思わなかった。

「もっちりん用意してあるよ。最高性能にして規格外仕様。ハイエンドそして白と並び立つもの。その機体の名前は『オーバースペック紅椿』！あかしはき」

「うわあ。綺麗な夜景だね」

とあるホテルの一室。シャルロットは大きな窓から外の景色に感嘆の息が出る。

「ねえねえ、一夏。ここが僕の部屋なの？」

「いえ、ここは僕の部屋です」
「え？」

今信じられないことを聞いたシャルロットだった。部屋のものもどれも高級品で、とてもじゃないけど気軽に住めるといふ場所ではなかった。

「ここは僕が正社員になったら使ってもいいって言われてたんです。だから僕の部屋なんですよ」

一夏が尋常ではない事は知っていた。でも部屋一つを自由に使っているなど聞いたことがない。

「ええと、どうして僕を呼んでくれたの？」

シャルロットの心臓はこれから起こるであろう事にその鼓動を早める。

「これからはずっと一緒ですから、僕と同じ部屋でいいと思いませんか」
「え？」

一夏が目の前までやってくる。その目はまっすぐシャルロットの目

を見ている。

「シャルロット、好きです」

「一夏、僕も……」

二人の顔が段々近づいていく……。

「あれ？」

場所はIS学園一年生寮の自室。時刻は早朝六時半。今見ていたのは全て夢だった。

「あと……少しで……」

シャルロットは夢の続きを想像する。そうするとシャルロットの顔はどんどん赤くなっていく。

(ああ、でもやっぱり続きが見たいなあ)

シャルロットは夢の続きを見ようと布団を被りまぶたを閉じる。

(でもテレシアで泊めてくれるってことは・・・ずっと一夏と一緒なんだよね。そうすれば必然的に)

.....

(うん、続きを見よう)

そしてシャルロットはもう少し寝るのであった。

「う、うん.....」

時間は朝の5時半。こんな時間に起きている人間は少数なのだが一夏は目覚めた。

「あれ、今日はちょっと遅いな。寝心地がよかったのかな？」

一夏は普段朝の5時に起きている。これはテレシアで桜木の話聞いてから習慣にしていることだった。桜木を見習って、朝早めに準備をして働くということにした。最近では姉である千冬に弁当を作っている。

「さて、まずは顔を洗って
ふに。」

「ん？」

ベッドから立ち上がろうとして、手をベッドに置いたら柔らかな感触が手に触れた。

よく見るとシーツが盛り上っていた。僕はシーツをどける。

「……………なんで？」

そこにはラウラさんがいた。いるだけならいい……………よくないけど。ただその姿が全裸なのである。身につけているのは左目の眼帯と待機形態のIS 右太ももの黒いレッグバンドだけだった。

「寝ぼけてるんだな、うん」

僕は洗面所で顔を洗う。冷たい水が眠気を吹き飛ばしていく。ブレスレットで制服に着替えてもう一度ベッドを見る。そこにはやっぱりラウラさんがいた。

「はああ。なんで」

その寝顔を見る。どんな夢を見てるかはわからないけど、嬉しそうに顔をしていた。

「まあ、いいか」

僕はラウラさんをシートで包んで持ち上げる。腕は外に出したまま。そしてこの学園に入ってから何度目かわからないお姫様抱っこでラウラさんを運んでいく。たしかシャルロットさんと同室になったとか。山田先生、いつもお疲れ様です。ラウラさんを抱えて静かな廊下を歩く。しばらく歩くと反対側から人影がやってきた。白いジャージに黒のラインがはいっている。よく見ると姉さんだった。

「織斑先生、おはようございます」

「ああ、織斑か。お前は相変らずは」

早いと言おうとしたのだろうか。姉さんの視線は僕が抱えているラウラさんに向いている。その顔が凄みを増していく。姉さん、怖いって。

「一夏、何があった？」

「えっと、朝僕が起きたらラウラさんが全裸で寝ていて、それで部屋に戻そうかと・・・」

「・・・そうか。まあいい、私が運んでおこう」

「すみません、助かります」

僕がラウラさんを姉さんに渡したときだった。

「う、ううん・・・」

ラウラさんが居心地の悪そうに顔を苦悶にゆがめていた。

「・・・」

「・・・」

長い沈黙のあと、姉さんはラウラさんを僕に差し出した・・・あれ？

「織斑、お前が運べ。デュノアの部屋の鍵は私が開けておく」

「え、でも」

「いいから運べ」

「・・・はい」

僕は再び歩き続ける。どうやら姉さんは一年生の寮長もやっているらしい。まあ、忙しいのなら仕方がないかな。もう一度ラウラさんの顔を見る。その寝顔は安堵に包まれ、嬉しそうにしている。

(もしかして起きてる?)

と思ったが、一定のリズムで寝息をしていたのでそれはないだろうと思う。シャルロットさんの部屋に静かに入る。どうやらまだ寝てるらしいが、その顔がまた幸せそうにしている。

「いい夢を・・・」

僕はそう言って部屋を出た。自分がいい夢を見れる日は来るだろうか・・・。僕はそんなことを考えていた。

場所は一年生寮の食堂。

僕は黙々と朝食を食べていた。ただいつもと違うのは、急いでいる友人が三名。正面の篤さんに、隣で何か悩んでいるラウラさん、今から朝食を食べようとしている隣のシャルロットさん。この三人は授業に間に合うのかな。

「篝さん、昨日は何かあったんですか？起きるのが普段と比べて遅かったようですけど・・・」

「な、なんでもない。なんでもないぞ」

と言って篝さんは朝食をパクパク食べていく。とりあえず僕は食べ終わったのでお茶でも飲む。次にラウラさんに目を向ける。パンを食べながらもぶつぶつとなにか言ってる。

「あの、ラウラさん？」

「ん、どうした？」

「何か悩みでも？」

「いや、大したことではないんだ。気にするな」

「そ、そうですか」

（なぜ私は自分の部屋に戻っていたのだ？確か昨日は一夏の部屋に行った筈なんだが、わからん）

一夏がラウラを運んでいたことをラウラは知らない。ただ彼女は寝心地がよくて寝すぎってしまった。だからラウラは遅れてしまったのである。ゆっくり食べているラウラと対照的に急いで食べている人が一人、シャルロットである。

「えっと、シャルロットさんは寝坊ですか？」

「うん、ちょっと二度寝しちゃって」

「ふーん・・・」

「気にならないの?」

「いい夢だったんでしよう?」

「ど、どうして!？」

シャルロットさんがびっくりしている。凶星だったんだろうか。

「寝顔が笑顔でしたから」

「み、見てたの!？」

「はい。ちよつと色々あって、織斑先生に鍵を開けてもらいました」

ボンツ!

「ん?」

シャルロットの顔が真っ赤になって大きな音がした。彼女の顔からは煙が出ている。シャルロットは自分の寝ながらニヤけていた顔が一夏に見られたと思うと恥ずかしくて仕方がなかった。

「シャルロットさん?大丈夫ですか?」

揺らしても返事がない。心ここにあらず?いったいどうしたんだ?

「ええと・・・三人とも早くしないと遅れちゃいますよ?」

時計を見ると予鈴の時間まであと五分。篝さんとラウラさんは食べるペースを上げる。シャルロットも復活して急いで食べ始める。これは・・・間に合わないかな?

「下駄箱で待つてますから。三人とも早く来てくださいな」

とりあえず下駄箱で待つ。三人が走ってやってきた。

「どつするんだ、一夏!このままでは教官に怒られてしまつぞ!」

ラウラさんが怯えてる。そんなに姉さんが怖いんですか?

「とりあえず今から走っても間に合うわけがありません。なのでラウラさんは僕がおんぶで運びます」

「な、何?」

「待て、一夏!どうしてそうなる!」

「そつだよ!なんでラウラなの?」

篝さんとシャルロットさんが何か言ってるけど、とりあえずそんなの聞いてられない。今朝持ち上げたけど、たぶんこの中で一番軽い

のはラウラさんだ。他の二人も重くないけど。というか言ったら失礼だ。

「時間がないんです、早く！」

「……まあ、仕方ないな。おまえが言つのなら乗ってやらんでもないぞ」

と言いながらも僕の後ろにやってきて、一回飛んで僕の背中に乗る。あ、やっぱり軽い。

「二人とも失礼します」

「え？」

僕は篝さんとシャルロットさんの二人を両脇に抱える。どっかの作業員がタルを運ぶような格好で。

第三者？が見ればなんともしュールな光景だろう。

「な、何のつもりだ、一夏！降ろせ！」

「は、放して、一夏！こんなの恥ずかしいよ！」

「二人とも舌を噛みますので少し静かにしてて下さい」

「……」

あの感情を押し込めた目で二人を黙らせる。使い方を間違っていると
か思っちゃいけない。

とりあえず静かになったのでよし。

「ラウラさん、出来るだけ首を絞めないようにお願いしますね」
「りよ、了解した」

現在の位置は寮の一階の下駄箱。目指すは一年一組の教室。そして朝のホームルームが始まるまであと十分。間に合わせてみせる！

サイハーデン刀争術『水鏡渡り』

高速移動で僕は教室へ向かう。あっという間に校舎に到達。そして偶然開いていた廊下の窓に足を乗せて次の階に三角飛びのように三階まで上がる。

「到着！」

HR開始五分前に到着。結構余裕だったね。教室に入るとクラスメイトが全員驚いたような顔をしている。さすがに三人も抱えて教室に入ってきたら誰でもびっくりするかな。

「あ、二人とも降ろしますね」

僕は篝さんとシャルロットさんを降ろす。その顔はこれでもかとい
うくらい呆けている。水鏡渡りが速すぎて気持ち悪くなったりとか
してないよね？きつと大丈夫だよな。

「あの、ラウラさん？そろそろ降りて欲しいんですけど・・・」

あまり意識してなかったけど、首のほうは苦しくなかった。ラウラ
さんは腕を僕の前でクロスさせて落ちないようにしていた。そのた
め顔が僕の真横にある。銀髪がサラサラとくすぐったい。

「い、いや、あのだな、もう少しこうしていたい・・・」

その頬が少し赤い気がする。でもそんなことは言ってられない。

「織斑先生に怒られますよ？」

「！」

そう言うとラウラさんは僕からすぐに離れる。そんなに姉さんが怖
いんですか？

僕は教室の方を見る。次の瞬間教室が騒がしくなった。

「なんで！？なんで織斑君がああ三人を運んできたの！？」

「ボーデヴィツヒさん、おんぶなんてずるい！」

「織斑君！次は私でお願いね！」
「ちよつと！抜け駆け？」

などと言ってくる。どうやらみんな運んで欲しいらしい。・・・そんなにいいもんじゃないんだけどなあ。危ないし。そこでセシリアさんが視界に入った。なにか言いたそうであつたが、我慢して振るえている。たぶん次に何が起こるかわかっているんだろうなあ。

「あの・・・そろそろ席に着かないと」
「こうなるんだ」

バシーン！

クラスメートの頭を出席簿が駆け抜ける。僕の周りに集まっていたクラスメートは全員頭を抑えていた。僕の姉である織斑千冬だ。今日も出席簿はいい仕事をする。

「織斑、あんまり騒がしくするな。面倒だ」
「はい・・・すみません」

これって僕のせいなんだろうか？今日も一年一組は元気だった。

週末の日曜日。

僕は来週の臨海学校の準備ということで駅舎を含み周囲の地下街すべてと繋がっているシヨッピングモール『レゾナンス』に来ていた。食べ物や欧・中・和を問わずに完備、衣服も量販店から海外の一流ブランドまで網羅している。『ここで無ければ市内のどこにも無い』だそう。すごいね。テレシアにも引けをとらないね。とまあ、紹介はこれぐらいにして、今日はシャルロットさんの水着を買うそう。どうやら持っていないらしい。実家に・・・デュノア社に女性の水着を送ってもらうのは無理だろう。そういうことで買いに来た。一応初めて来るので僕らはお店を見ながら歩いてた。

「あのね一夏。前から言おうと思ってただけだね・・・」
「どうかしましたか？」

シャルロットさんが目の前までやって来る。

「シャルロットさんはやめてほしいな。何かよそよそしいと言っか・・・自分で言うのもあれだけど、やっぱり長いよ」
「え、でも・・・」
「その・・・できれば違う呼び名で呼んでほしいな」

上目遣いでこっちを見てくる。どうやら本当に変えてほしいらしい。ううん、でもテレシアではお客様を呼び捨てにするなど言語道断。この口調は板についてしまった。だからシャルロットさんと呼ぶな

と言われても正直困る。シャルロットさん、シャルロット、ううん、シャルルン……て僕はバカか？シャルルだと嫌がるだろうし……ううん……。

「シャル……」

「え……？」

「いや、忘れてください。やっぱりシャルロットさん以外には」

「シャル。シャルがあ。うん！いいね！」

「はい？」

「一夏、これから僕のことにはシャルって呼んでね！絶対だよ！」

「え、ちょ、ま、待って」

シャルロットは強引に一夏の手を引っ張って先を歩いていく。一夏が考えてくれた呼び名と言うことで彼女は嬉しくて今にも羽ばたくような気持ちだった。

一夏とシャルロット。その二人を物陰から見ている二つの影があった。鈴とセシリアである。

その目には一夏とは違う意味で光が見えない。

「ねえ……」

「なんですの……」

「あれって、手握ってない？」
「握ってますわね」

握っているのは確かであるが、シャルロットが一夏の手を無理やり取ったのもまた事実。しかし今の二人にはそんなことどうでもよかった。

「そっか。見間違いでもなく、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。よし！殺そう！」

鈴の腕にはすでにISのアーマーが展開している。IS学園以外ISを使うのは禁止されているはずが、今はそんなルール鈴にとってはあって無いようなものである。

「ほう、楽しそうだな」
「「！？」」

いきなりの背後からの声に二人は振り返る。そこにいたのはラウラだった。鈴とセシリアの体は自然と戦闘状態になっていた。

「そう警戒するな。師匠に誰かを傷つけることはやめると言われたからな」

「師匠って、一夏さんのことですか？」

「そうだが？」

このラウラ、あの日から一夏のことを嫁と呼んだり、たまに師匠と呼んでいたりする。一夏はどちらもやめてほしいと言ったので本人の前ではなるべく控えているが、そう呼びたいときはそう呼んでいる。

「そもそもこんな追跡は無意味だと思うが？」

「そ、そうだとしても！」

「み、未知数の敵と戦うにはまず情報収集が先決でしょう？」

「そうですね！ここは追跡ののち、二人の関係がどのような状態にあるのか見極めるべきですわ！」

「なるほど、一理あるな」

こうして三人の追跡が始まった。

「！」

「どうしたの、一夏？」

「いえ、殺気が・・・」

「殺気？」

僕は後ろを振り返る。確かに背中に悪寒を感じた。しかしその殺気は今感じられず、敵意を持ってそうな人もいない。気のせいだっ

たんだろつか？

「もう、せっかく買い物に来たんだからリラックス、リラックス」
「は、はい」

笑顔でそうシャルロットさん・・・シャルはそう言ってきた。やっぱり慣れないなあ。そして僕らは進んでいく。あ、そうだ。買ったものがあるんだった。

「シャルロットさん」
「・・・」

顔がふくれている。どうやら本当にシャルと呼ばないといけないらしい。あーなんだこれ。すごく違和感がある。

「シャル・・・」
「なーに？」

機嫌の良さそうな返事が返ってくる。はあ、これからずっとこのままか。

「ちょっと買いたいものがあるので先に行ってください」
「うん、わかった。でも早くきてね」

「はい」

そこでシャル・・・と別れる。僕は歩いていて見つけたアクセサリショップに入る。

「うーん、女性へのプレゼントって結構考えますね」

女性から女性へのプレゼントならまだわかる。でも男性から女性へのプレゼントは難しい。
うーん。

「やっぱりこれかな。すいません、これを包んでほしいんですけど」

店員さんに言って僕はそれを買った後にもう一度お店を見回ってみる。

「じついつデザインがいいのかな」

そんなことを言いながら僕はお店を出てシャルロットさ・・・シャルがいる水着売り場へ着く。
さてシャルはどこに

「そのあなた」

「はい、僕ですか？」

僕は後ろから声をかけられて振り返る。

「そうよ、男のあなたに言ってるのよ。その水着、片付けておいて」

ああ、そうか。ISが普及してからは女尊男卑になってしまったんだっけ。平等が一番なのになあ。

まあ、ここは大人しくしましょうか。

「わかりました、じゃあ僕はこれで」

ガシッ

僕は肩を掴まれてそこで止まった。

「あなた使えそうね。これから私の買い物に付き合いなさい」

「え、あの、僕には連れがいるんですけど」

「なに？女であるあたしの言うことが聞けないって言うの？自分の立場わかってんの？」

何でこうなってしまった。こうならないように頑張ったつもりなのに。どうしたら・・・あ。

(何か問題があったら電話してください)

そう言えばマスターがそんなことを言ってたっけ。僕はマスターの携帯に電話する。

(もしもし)

(こんにちわ、織斑です)

(どうかしましたか?)

(その、ちょっと女性に絡まれてしまいました)

(そうですか、わかりました。今すぐにそっちに送りますね)

(え?送るって何をですか?)

(掛けなおす必要はありませんよ。ではまた)

ブツッ

マスターは忙しいのか一方的にしゃべって電話を切ってしまった。

「あなた今誰に電話したの?警察なら無駄よ」

「いえ、警察ではないんですけど」

「じゃあ何なのよ」

ドドドドドドドドッ………!

あれ?なんか前にもこんなことがあったような、でも音もつとすごい気がする。次の瞬間僕とその女性の視界は黒で埋まった。いや、

気絶したわけじゃないんだ。ただ……。

「ちょ、なんなのよこれ!？」

女性が驚いている。店内は黒服にサングラスの男性女性で埋まっている。そして先頭にいた男がこっちにやってきた。

「すみません。我々はこういうものです」

と言って胸ポケットから出したのは……テレシアのSPの証明書だった。

「え?テレ」

ガシッ

その女性は背後から口を封じられ、黒い波に連れていかれる。僕は呆然とその光景を見ることができなかった。この人たち全員がSP?

「それでは織斑様、我々はこれで」

SPの一人が一礼した後に敬礼。どこの軍隊ですか。て、まさか!

「うわあ・・・」

僕はお店の外に出た。ここはショッピングモール。そのショッピングモール全体が黒服のSPたちで埋め尽くされていた。上下左右どこを見ても黒服。そしてSPの人たちが僕を確認すると全員が僕に向いて敬礼した。なんだこれ？そして帰っていく。普段騒がしいはずのショッピングモールは静寂に支配されていた。

「・・・・・・・・・・」

僕は何も言えなくなった。そういえばマスターが僕をスカウトしに来た時ってこんな感じだったっけ。それにしてもあんなにいたのか。

「一夏！一夏！」

お店から僕を呼ぶ声がしたので振り返るとシャルだった。なにかあせっている。

「どっかしましたか？」

「く、黒服の人たちが一夏の顔写真を持って『この方をご存知ですか？』って訊いてくるから

一夏に何かあったんじゃないかと思って心配したんだよ」

なるほど。どうやら心配させてしまったらしい。僕は小声でいう。

「あの人たちはテレシアのSPだったようです。僕も初めて知ったんですけどね」

「て、テレシアのSP!？」

「はい。まさか僕がこんなに保護下に置かれているなんて思ってませんでした」

シャルは驚いたような顔をしている。というか僕だって驚いてる。あの黒い波のような光景が脳裏に焼きついている。あの女性は大丈夫なんだろうか。

「とりあえず何も無くてよかったよ」

「はは、そうですね」

さっきの女性のことは言わないようにしよう。また心配をかけるかもしれないな。シャルの方を見ると何かを見て顔が青ざめている。何を見たんだろう。

「あ、あの、ちょっと来て」

「はい」

シャルが僕を引っ張っていく。そして僕はシャルと試着室に一緒に入る形になった。え、なんで？

「あの、どうかしたんですか？」

「いや、その、選んだ水着が似合うか見てもらいたくて」

「でも、なんで一緒にいる必要があるんですか？」

「い、いいから。ちよつとゴメン」

シャルロットはカーテンの端から外を覗く。その視線の先には追跡トリオがいた。

「あいつらどこに消えたの？」

「まさか、わたくしたちの尾行に気付いた？」

鈴、セシリア、ラウラがいた。

（見つかったら絶対邪魔される）

事情がどうあれ、今は一夏とふたりきりで外出　シャルロット
にとってはデートである。一夏はどう思っているかわからないが、シャルロットにとっては至福の時間である。それが邪魔されたとなつてはたまらない。

「外に誰かいるんですか？」

「だ、誰もいないよ。いいからとにかくここにいて。すぐに着替えるから」

「え？ちよ、ま」

シャルが突然着替えだす。見るわけにはいかないのが僕は高速でクイックターン。あまりに速すぎて風が舞い、試着室のカーテンが少しふわっと浮く。

(うつつ、勢いでこんなことしちゃったけど、どうしよう……)

(ど、どうしてこんなことに。水着を見るだけなら外でもいいと思うんですけど……)

(ああもつつ、やっちゃえ！)

そして衣擦れの音が聞こえてくる。一度裸を見ている一夏の胸の鼓動は早くなり、あの風呂での光景がフラッシュバックされていく。

(ダメだ、何を想像してるんだ僕は！消えろ！記憶よ、消えてくれ！そうだ。何か別のことを考えよう。えっとさっきのクイックターンなら円礫ができるかもしれない)

『円礫』

使用者を中心に剄を吹き荒れさせ、周囲の相手を吹き飛ばす技であ

る。

(僕は師匠たちが使っていた剽という力は使えないけど、さっきのクイツクターンをもっと速くすれば・・・もしかしたら・・・)

「もう・・・いいよ」

「え・・・」

恐る恐る振り返る。シャルの水着はセパレートとワンピースの中間のような水着で、上下に別れているそれを背中クロスして繋げていた。色は夏を意思した鮮やかなイエローで、シャルの金髪とよく合っていた。

「似合ってます・・・すごく」

「じゃ、じゃあ、これにするねっ」

「うっ」

シャルがもう一度着替えようとする。僕は慌ててもう一度クイツクターン。でも今回は少し違って、僕を中心に風が吸い寄せられてカーテンが内側にふわっと浮く。

「あ、あれ？」

「ん？」

ふにゅ。

「「!!」」

シャルが僕の背中にその体を寄せていた。まさか、さっきの円礫（飯）のせい？何はともあれシャルの膨らみが背中に当たってしまっているのである。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

互いに無言。と思ったらシャルが僕の腰に手を回して抱きついてきた。

「シャル？」

「あのね、一夏。僕まだ言いたいことがあるんだ」

その声はどこか真剣で、でも言いづらいことなのか控えめである。僕は聞くことにした。

「僕ね、デユノア社とか関係なく、一夏と・・・・・・・・一夏と・・・・・・・・」

「シャアア。」

突然試着室のカーテンが開かれる。そこにいたのは姉さんと山田先

生だった。

「お、お、織斑君！？デユノアさん！？」

山田先生がびつくりしている。この状況を見たら他の人はどんな反応をするんだろう。

「何をしている？」

姉さんのその声は冷たく、どこかあきれたような感じがした。

「いいですか？いくらクラスメートといっても、けじめはつけなければいけません。

試着室に男女二人で入るのはダメです」

「す、すいません」

二人して謝る。でも・・・シャルは何を言おうとしたんだろう。ちよつと気になるな。姉さんのほうを見ると何も無い壁の方を見ている。ああ、そつえばさつきからそこら辺に人の気配がしてるけど。

「そろそろ出てきたらどうだ？」

姉さんがそう言うと鈴さんとセシリアさんが壁の後ろから出てきた。なんで隠れてたんだ？

「き、奇遇ね、一夏。こんなところで会うなんて」

「そ、そうですね。おかしいぐらいですわ」

二人ともどこかあせっているように見える。二人とも買い物だったのかな。

「まあいい。さっさと買い物を買わせて退散するでしょう」

姉さんはため息混じりにそう言った。どうやら水着の準備がまだのようで、姉さんの手には水着がある。それでここに買いにきてたのか。納得だ。

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないので鳳^{ファン}さんとオルコットさん、ついてきてください。それにデユノアさんも」

そう言うと山田先生は有無を言わず生徒三人を連れて向こうへ行

ってしまつ。先生、三人も必要なんですか？

「・・・まったく、山田先生は余計な気を遣うつか」

「何か言いましたか、織斑先生？」

「今は就業中ではないからな、姉さんでいい。私たちはこの場ではただの姉弟きょうだいだろう」

「・・・わかりました」

僕は体中の緊張と固い雰囲気解く。切り替えの速さはいきなりの戦闘に対処しやすくなる。

「で、一夏。どっちの水着がいいと思う？」

姉さんが取り出したのは専用のハンガーにかけられた水着二着。

片方はスポーティーでありながらメッシュ上にクロスした部分がセクシーさに演出している黒水着。

もう片方は対極で、一切の無駄を省いたかのような機能性重視の白水着。

(うーん、これはどっちがいいんだろう)

僕がしばらく悩んでいると姉さんが口を開いた。

「黒の方が」

「いや、そうじゃなくて」

「じゃあ白か？」

「うーん……」

「何か言いたいことがあるなら言えばいいだろう」

僕は自分が考えていたことを素直に言う。

「どっちも姉さんなら似合うだろうなあ、って思ってるんだけど」
「………ハハハ」

姉さんがおなかを押さえて笑いを堪えている。なんで？

「なにがそんなにおもしろいの？」
「いや、すまなかったな。お前は相変わらずだと思ってな。そうか、
どちらも似合うか……ハハ」

まあ、久々に姉さんの笑っている顔を見れたからよしとするかな。

「では、黒の方にするかな」
「でもそっちの水着だとへんな男たちが寄ってこない？」

白水着の方も似たようなもんだけど、ストイックな分声をかけずら

いと思う。

「余計な心配をするな。大体、私とその辺りにいる程度の男になびくような女に見えるか？」

「見えないけど、心配なんだよ。姉さんからはそんな話一回も聞いたことがないから」

「お前よりいい男がいたら考えてやろう」

苦笑しながら姉さんは言う。僕としては少し恥ずかしかった。

「で、お前の方はどうなんだ？」

「え、何が？」

「お前は彼女を作らないのか？テレシアではそういう話がよくあるそうじゃないか」

「いや、そういうのはちょっとね」

どっかのお偉いさんのところに婿入りはしたくない。できればいつまでも平穏な日々が続けばいい。
今はそう思ってる。

「お前は早く、互いに支え合える女性を探せ。私のほうが心配だ」
「でも……」

「デュノアはどうなんだ？さっき何かをしようとしてたろう」

うあ、ちゃんと見てたか。

「僕は何もしてないよ!」

「そうか。まあ、お前が信用した人間にならあのことは話しても構わん」

もしかして、僕がシャルに話したことに気付いてる？

「さて、私はのことは気にするな。いい加減悩むのはやめてくれ。こっちまでおかしくなりそうだ」

そう言っつて姉さんはレジの方へ向かっていく。どうやら一番苦労してるのは姉さんらしい。しかも自分のせい。

「好きな女性・・・か」

僕は天井を見上げる。今はそついうのはわからない。でも、今悩むべきところはそこじゃない。

時間は十分ほど前、ラウラは追跡トリオからはずれ、店内を見渡していた。

「この世にはこんなに様々な水着があったのか」

ひとつひとつ見ていく。自分にはどうもわからないが種類が豊富、それだけはわかっていた。

（ちゃんとしたものを選べば、嫁は褒めてくれるだろうか）

そんなことを考えながら端末を手に取る。

同時刻、ドイツ国内軍施設。

そこではIS配備特殊部隊『シュバルツェア・ハーゼ』通称『黒ウサギ隊』が日々訓練を行っていた。そこに所属している長身の女性、副隊長であるクラリツサ・ハルフォーフは端末に連絡が入ったことに気づく。彼女の年齢は二十二。部隊の中では最高齢であり、十代が多い隊員たちを厳しくも面倒見よく牽引する『頼れるお姉様』である。

「クラリツサ、私だ。ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、どうかしましたか？」

「う、うむ。実は今度臨海学校というものに行くことになったんだが、どのような水着を選べばよいか、選択基準がわからん。そちら

の指示を仰ぎたいのだが・・・」

この部隊ではラウラは人間関係の多大な問題を抱えていたのだが、先月のVT事件の直後に『好きな男ができた』という相談をクラリッサに持ちかけたときから全てのわだかまりは解けて消えていた。その時の隊員たちの反応は（原作通り）。

「隊長、できれば彼の、織斑一夏がどんな人間であるのか教えていただきたいのですが」

「そ、そうだな。強く、誠実で、そして何より・・・優しいな」

最後のところは消えそうな声だったが隊員たちにはしっかり聞こえた。反応は（原作通り）。

376

「そうですか。では私からのアドバイスです」

「た、頼む」

「隊長自身で選ばれてはどうでしょうか？」

「え？」

ラウラはクラリッサの言っていることがわからなかった。どういう水着を選べばいいのか、それがわからなくて相談したつもりが自分で選べと言っているのである。それでもクラリッサは続ける。

「そういう男性は頑張っている女性がタイプです」

「そ、そうなのか？」

「はい、それに隊長が選んだ水着ならどれでも似合うと思いますよ」

「そうか。ありがとう。では、私はこれから水着を選ぶ。忙しいところすまなかつたな、クラリッサ」

「いえ、この黒ウサギ部隊は常に隊長と共にあります」

「ではな」

そこで通信は切れる。こうしてラウラは自分の水着を選び、それぞれが臨海学校の準備を終えるのであった。

第十六話 終

まだ頭が痛いです。あゝ死ぬうう。

書いてて頭がおかしくなりそうです。実際変なこと書いていたような気もしなくもないんですが。何度も言って申し訳ないのですが、サブタイトルが思いつかないです。Please help me !・・・すいません・・・おかしくなりました。

大坂者さん、いつもありがとうございます。誤字脱字のチェックは大変なのに本当にありがとうございます。とりあえず頑張りますのでこれからも評価、感想、出来ればチェックもお願いします。アドバイスも可です。これを読んでくれるみなさん、これからも応援お願いします！評価してくれると作者も数字でわかりやいので書く気力が湧いてきます。では、また。

第十七話 どこに行っても仕事（前書き）

思いついたサブタイトルがこれ。なんか展開が予想できそうですが、気にせず読んでくれると嬉しいです。では、どうぞ！

第十七話 どこに行っても仕事

「海っ！見えたあっ！」

「ん・・・んん」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が声を上げる。

臨海学校初日、僕はとある理由で寝不足だったりする。なので仮眠状態だったがさっきので目が覚めてしまった。うう、もうちょっと寝ていたい。

「どうした一夏、眠そうだぞ」

「疲れているのか？師匠」

真後ろの篤さんとその横のラウラさんが心配してくれている。ていうかラウラさん、その呼び方はやめてほしいんですが。

「はは、ちょっと寝不足でして」

僕はその原因、というか自分のせいなんだけど、シャルの左手首にあるブレスレットを見る。シャルの顔を見るとそこにはこれ以上ないほど笑顔だった。

「そんなに気に入ったんですか？」
「えっ、あ、うん。まあ、ね。えへへ」

僕は先週の買い物に付き合ってくれたお礼として僕のブレスレットと同じものを作ってプレゼントした。このブレスレットは服を量子変換させてストックさせる装置。それには僕のオリジナルプログラムの『システム』が組み込まれていて、常にエネルギーが供給されるシステム。白式のコアに組み込んであったりする。ただのブレスレットというものもなんか寂しいので名前を付けてみた。モーター・チェンジン瞬間服装グ・クロス変換ブレスレット。通称MCCB。そう名づけたんだけど。

(そんなんじゃないかって普通のブレスレットでいいんじゃないかな?)

とシャルに言われた。まあMCCBはやめようか。このブレスレットはダイヤルで服を選び、それをディスプレイで表示する小型の装置が付いている。ただこのブレスレットは特殊で、服の洗浄、及びサイズの自動調整までしてくれる優れものである。隣を見るとシャルが量子変換の光に包まれて私服に変わっていた。そしてまた学園の制服に戻す。その繰り返し。

「シャルロットさん!?それはいったいなんですか!?!」
「え?ああ、これはね、一夏がね。えへへ……」

通路を挟んで向こう側のセシリアさんが聞いてくるけど、答えにな
ってない。付け足すとシャルと僕のプレスレットはまったく同じと
いうわけではない。シャルのは外見だけを見ると、高そうな白金の
プレスレット。そのデザインは僕がアクセサリーショップで見たデ
ザインを僕なりにアレンジした完全なオリジナル。対する僕のは空
をイメージしたスカイブルーに雲の模様がはいってる。空はいい。
悩んでいるときは空を見るのが一番だ。

「一夏！私の分はないのか！？」

「なぜ弟子である私にはくれないのだ！？」

「そうですね！不公平ですわ！」

三人が不満を言ってくる。確かに平等じゃなかったね。自分で平等
が一番とか言っというて僕は何をやっているんだろう。シャルの方を
見てみると心配そうな顔でこっちを見ている。どうしたんだ？

「あの、一夏？これって作るのにどれだけ時間がかかるの？」

「二週間ほどです」

「え、ええ！？」

まあ二週間ほど寝ていなかった。シャルに僕の過去を告げたあの日、
僕はお礼がしたかった。だからこのプレスレットを作ろうと思った
んだ。昨日の夜は最後の調整で夜が遅くなってしまったのである。
ね、眠い……。

「そうかあ。一夏が僕のために・・・」

シャルは再びブレスレットを見る。まあ、喜んでもらったのならよししよう。

「そのだな、私にも作ってほしいんだが・・・」

篤さんがそんなことを言ってくる。セシリアさんもラウラさんも目で訴えてくる。

「皆さんの分も作りますから待っていてください」

そう言つてを篤さんとラウラさんは納得して座った。一人残ったセシリアさんはなぜか近づいてくる。

「あの、一夏さん」

「なんですか、セシリアさん」

セシリアさんが小声で言ってくる。何か聞かれたらまずいのかな。

「海に着いたらですね、一夏さんにサンオイルを塗ってほしいので

すが、よろしいですか？」

「いいですよ」

「そうですね。ではお願いしますね」

セシリアさんは嬉しそうな顔をして自分の席に戻る。別に聞かれてもよかつたんじゃないかな。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

全員がすぐに着席する。さすが姉さんだ。教育の賜物だね。

こうして僕らは目的地である旅館に着いた。僕らは整列する。さすがにES学園一年生全員となるとすごい列である。

「それではここが今日から三日間お世話になる花月^{かげつ}だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくお願いしまーす」「」「」

全員が一礼。その後に着物姿の女将^{おかみ}さんが丁寧にお辞儀をした。

「はい、「こちらこそ。今年の一年も元気があってよろしいですね」

年は三十代だろうか。聞かないけど。仕事柄笑顔が絶えないからなのか、その容姿は女将という立場よりずっと若く見える。笑顔は人を若く見せるというのはどうやら本当らしい。

「あら、こちらが噂の……?」

噂になってるかどうかはさておき、僕は失礼のないように挨拶。

「はじめまして、織斑一夏です。この度は僕が男子一人ということでご迷惑をおかけします。本当に申し訳ありません」

その場で一礼。実際男子が一人ということと浴場分けが難しくなるそう。はあ、人には迷惑を掛けたくないものだ。

「あらあら、そんなにかしこまらなくてもいいですよ。こちらこそはじめまして。清洲恵子です」

そう言って女将さんは丁寧なお辞儀をする。その動きは気品あふれるものでしっかり大人の雰囲気を出している。やっぱり仕事慣れしている。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用に

なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に聞いてくださいまし」

女子一同は返事をして女将さんについていく。さて、僕はどこの部屋なんだろうか。

「ね、ね、ねー。おりむ〜」

この呼び方は間違いなくのほほんさん。本名は布ほとけ本音。いつも眠たそうな顔でとにかくスローペース。戦場だと真つ先に死んじやうんじゃないだろうか。そんなのほほんさんを知ったときに布ほとけさんと呼んだら……。

（私にはお姉ちゃんがいるから布ほとけはやめてほしいなあ〜）

本音さんと呼んだら……。

（おりむーは堅すぎるんだよ〜。もっとフランクになりなよ〜）

と言われてしまった。ということでのほほんさん。正直に言おう。この名前で呼ぶことに慣れようとしたけど小三時間かかった。僕は何やってたんだ？そんなのほほんさんが訊いてくる。

「おりむーって部屋どこ？一覽に書いてなかったー。遊びに行くから教えて〜」

そうなんだよね。ほんとどこなんだろう。

「織斑、お前の部屋はこっちだ。ついてこい」

「はい。ではのほんさん、またあとで」

「ばいばい、おりむ〜」

僕は姉さんについていく。旅館の中はかなり広く、快適なものだった。空調システムもばっちり。

「ここだ」

「え？ここって・・・」

目の前には『教員室』と書かれているドアがある。まさか・・・。

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな」

姉さんがため息と共に肩を落としている。

部屋の中は広く、外側の窓が一面窓になっていて海を見渡せるよう

になっている。ここから夕日を見たら綺麗だろうなあ。

「結果、私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろう」

「ははは。僕なら一週間以上は起きていられるから大丈夫だったんですがね」

嘘は言っていない。修行時代、何日間もずっと修行していたのだから。十日間は余裕だ。最近は鍛錬をしなかったからかな。ちょっと眠いや。実際寝てても警戒は常にしている。また誘拐なんてイヤだからね。

「ちゃんと睡眠はとれ、馬鹿者が」

「ははは」

そう言ってるが姉さんはどこか心配そうな顔をしている。確か姉さんにちゃんと寝るよつにと言ったのは僕だけ。人のことは言えないね。

「今日は一日自由にしてもいいんですよね？」

「……………羽目を外しすぎるなよ」

「わかりました」

そして荷物を置いて僕は部屋を出る。いつものウエストポーチを身

に付ける。そして海へ向かう。その旅館の庭らしきところが見える廊下を歩いていた。僕は途中で足を止める。

「なんだ・・・これ？」

地面にウサミミが生えている。若干機械っぽいやつ。しかもその後ろには看板が刺さっている。

『ひっばってね！ひっばってもひっばんなくてもなにかがおこるよ』

『

と書いてある。このウサミミ、束さんだよね？篝さんの姉で、ISを作った天才、篠ノ野束。それよりこれはどうしたらいいんだ？引っ張った方がいいのか？やめた方がいいのか？・・・もし引っ張らないとしたらどうなる？遠隔操作で何かをするはずだ。近くに気配は・・・ない。さて、どうするべきか。

・・・すばっ。

あっさり抜けたよ。さて、どうなる？

キィィィン・・・。

ん？上？避けないとまずいな。

ドカーーーーーー！

僕は高速でバックステップ。謎の飛行物体を避ける。そこにあったのはデフォルメされたにんじんだった。

「あっはっはっ！引つかかったね、いっくん！ぶいぶい！」

にんじんが二つに割れて出てきたのは束さんだった。その格好は一人不思議の国のアリス状態で青と白のワンピースを着ている。あとウサミミも。

「お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。いっくんの元気そうな顔を見て束さんは嬉しいよ！」

「それはどうも。ところで、僕がこれを引っ張らなかつたらどうなつてたんですか？」

「うん？何も起こらないよ。まあ、引っ張ったら私が降ってくるよ。うになつてたんだけどね！」

この人は・・・人をバカにしているんだろうか。

「あ、そうだ。いっくんのお茶ちょうだい。あれおいしいんだよね」
「どうぞ」

僕はあらかじめ用意してあった水筒を東さんに渡す。東さんはごくごくつくとそれを飲み干した。

「ブハア。ああおいしかった。ごちそうさまでした！」

「はい、お粗末さまです」

最初のは若干オヤジくさかった。東さん飲み終わったその水筒を僕に渡す。

「ところでいっくん。篝ちゃんはどこかな？」

「たぶん海の方にいると思いますよ。正確にはわかりませんが」

「そっか。まあ、私が開発したこの篝ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあねいっくん。また後でね〜！」

そう言って東さんは行ってしまった。どうやら僕が引つ張ったウサミミが篝ちゃん探知機だったらしい。ダウジングロッドのように左右に動いていた。東さんの手の中で、しまった。いつの間にか手から取られていた。あの人といると本当に気が抜けるな。気をつけないと。さて、じゃあ行きますか。

「あつ」

海に出たのはいいけどやっぱり暑い。僕は下は水着、上は薄いＴシャツという状態。海は透き通っていて浜辺も綺麗。この三日間は僕達の貸切だそう。警沢だねえ。

「あ、織斑君だ！」

「う、うそっ！体細すぎじゃない？」

「でもちゃんと鍛えてるよねえ」

「あたし、自信なくしちゃった・・・」

別館の更衣室から出てきた女子数人が僕を見てそんなことを言うってくる。いや、体が細いのは認めるよ。修行時代は死ぬほど・・・死ぬような訓練をしたしね。その傷は不思議と残ってない。なんでだろうね。

「織斑くん、あとでビーチバレーしようよ」

「あ、はい。わかりました」

「絶対だよー！」

さてと、セシリアさんはどこだろう。

「い、ち、か~~~~~っ！」
「・・・ふっ」

僕は2mほどの高さまで飛ぶ。もっと飛べるけど。下を見ると鈴さんがいた。僕に飛びつこうとしたのか、体勢を崩しかけている。着ている水着はスポーティーなタンキニタイプ。オレンジと白のストライプでへそが出ている。僕は静かに着地する。

「あんだなんで避けるのよ！」

「背後からの攻撃は絶対に避けると教えられたので」

「攻撃なんかしないわよ！バカ！」

鈴さんがふくれる。そういえば鈴さんは小学校の頃も中学校の頃も飛び乗ろうとしてきたっけ。それだけだったら避ける必要もなかったかな。気を抜いちゃいけないとは思ってるけど、なんか僕・・・ピリピリしてる？

「一夏さん、探しましたわ」

「あ、すいません」

声のした方を見るとそこにはセシリアさんがいた。こっちの水着はブルーのビキニで腰にパレオが巻かれている。その手には簡単なビーチパラソルとシート、それにサンオイルを持っている。セシリアさんはパラソルとシートを広げた。準備はばっちりだった。

「コホン。そ、それでは一夏さん、お願いしますわ」

セシリアさんは首の後ろで結んでいたブラの紐ひもを解といて、水着の上から胸を押さえてシートに寝そべる。セシリアさん、男性がいる前ではそういう行動は控えましょう。

「あなた！一夏に何させるつもりよ！」

鈴さんが大きな声で言う。どうしたんだ？

「見ての通り、サンオイルを塗っていたたたくのですわ。バスで約束しましたの」

その声は妙に弾んでいる。まあ、約束を破るつもりはないけど。僕はサンオイルを手にかけて手で温める。さてテレシアのマッサージ方法でもしますか。

「ん……。一夏さん上手ですわね」

「それはどうも」

このマッサージ、疲れがすぐ取れるということの一部の人間には好

まれているのだが……。

ポスッ

セシリアさんは寝てしまった。そう、このマッサージは非常に眠くなるのである。こうなるとテレシアではお客様を運ばないといけなくなるので手間が掛かる。

「安らかに」

僕はセシリアさんの耳元で呟く。セシリアさんは規則的な寝息を立てている。そのまま寝かしておこう。

「あなたはそういうことをどこで身につけてるのよ」

「さあ？どこでしょうね」

「ふん」

鈴さんがそっぽを向いてしまう。僕、なんかした？

「あの、鈴さん？」

「なによ」

その声はすごく不機嫌だ。暑いのか手で顔をあおいでいる。

「何か飲み物でも買ってきましょうか？」

「んん、そうね。でもどうせならかき氷が食べたいかな」

「そうですね。じゃあ、あとでおごりますね」

「え？あ、ああ、うん、ありがとう。じゃあ、あたしちょっと泳いでくるわ」

そう言って鈴さんは海の方に向かっていく。どうやら少しは機嫌がよくなったようだ。食べ物でつるのはどうかと思っけど。

「あ、一夏。ここにいたんだ」

呼ばれたので振り向く。そこにはシャルと

「・・・そのミイラは誰ですか？」

ミイラがいた。バスタオルで頭の上から膝下まで隠している。よく見ればバスタオルですで見えないのに左目に眼帯をしている。ん？眼帯？

「ほら、一夏に見せたら。大丈夫だよ」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める」

「ん？その声は、ラウラさん？」

声からしてラウラさんだった。よく見るとシャルがなにやら説得を試みている。小声で言ってるのでよく聞こえない。

「せっかく水着に着替えたんだから、一夏に見てもらわないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあって……」

「ふーん。だったら僕だけ一夏と海で遊んじゃうけど、いいのかなあ？」

最後は僕にも聞こえるようにシャルは言った。

「そ、それはダメだ。ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

ラウラさんはそのままタオルを脱ぎ捨てる。あとでちゃんと片付けないとね。そんなことを考えながらもラウラさんを見る。

「う、うう。わ、笑いたければ笑うがいい……」

その水着はレースをふんだんにあしらった黒い水着。そしていつもの飾り気のない伸ばしたままの髪は左右で一对のアップテールになっている。うん、似合ってるんじゃないかな。

「ラウラさん、その水着は自分で選んだんですか？」

「そ、そうだ。自分で選んだ方が良いと言われてな
「へ。とつても可愛いですよ」
「なっ？そ、そうか、私は可愛いのか。そのようなことを言われたのは初めてだ」

ラウラさんは恥ずかしそうに両手の指をもてあます。うーん、初めて言われたからかな。

「ね、一夏。このブレスレットって防水してある？」

「はい、大丈夫ですよ」

「ほんとにすごいね」

シャルはブレスレットをまじまじと見る。白金プラチナが日光を反射して輝いている。

「うん。やっぱり似合ってます」

「そ、そうかな。えへへ、大切にするね」

シャルが笑顔でそう言う。うん、物を大事に使うのはいいことだ。

「おっりむらくーん！」

「さっきの約束！ビーチバレーしようよ！」

「わー、おりむー対戦。ばきゅんばきゅーん」

「それっ。織斑君にパス」

僕はボールを受け取る。さっき約束した女子三人がやってきた。ちなみにのほほんさんは水着ではなく着ぐるみだった。暑くないのかなあ？

「ちょうどこちらも三人ですからやりましょうか」

みんなでコートコートの準備をする。そう言えばバレーボールってあんまりしたことないけど、見てればそのうち覚えるよね。

「ふっふっふっ。七月のサマーデビル言われた私の実力をみよ！」

櫛灘くしなださんがジャンピングサーブ。へえ、綺麗なサービスだなあ。

「任せて！」

シャルがアンダーでレシーブ。なるほど。基本はあんな感じか。

「ほっ、アタック！」

で、あれがスマッシュ。その向かった先は……ラウラさんの顔面？

「かわいい・・・私が、かわいい・・・」

ボーっとした状態で何かぶつぶつと言っている。まずい！

「ラウラさん！」

僕はその場で跳躍。砂に足を取られて体勢を崩すがそれでも飛ぶ。僕は空中で体をひねってラウラさんの顔に迫っていたボールをなんとか腕で弾く。そして僕は背中から落ちる。砂が暑い。

「はっ！一夏、大丈夫か？」

我にかえったラウラさんが僕の顔を見る。その顔はいつもらしくない不安な顔だ。

「僕は大丈夫です。それよりラウラさんは大丈夫ですか？」

笑顔でそう訊く。するとラウラさんの顔が赤くなっていく。また？

「あ、う、あ、スマン、一夏！」

なぜかそのまま海へとダツシユ。ドボンと音を立てて海に入った。何がどうなっているのやら。

「大丈夫、一夏？」

「大丈夫ですか、織斑君？」

シャルが僕の顔を見る。横には山田先生がいる。いつの間に来たのか。僕は倒れたまま心配されている。なんか情けないな。

「いつまで寝ている。だらしないぞ。ほら立て」

この声は姉さんかな。目の前に手が差し出されている。僕はその手を握って引っ張ってもらう。その手は少し冷たくてサラサラとしていた。

「すみません、織斑先・・・生・・・」

「ん、どうした？」

「あ、いえ。何でもありません」

「そうか」

例の黒い水着を着ている。いつもビジネススーツとは違う印象で、そのスタイルのいい鍛えられた体は美しいものだった。

「織斑先生、モデルみたい・・・」

「かっこいい〜！」

うん。確かにかっこいい。正直モデル以上だ。

「一夏つてさあ、ひよつとして織斑先生が好みのタイプなの？」

「え？急にどうしたんですか、シャル？」

「だってさ、僕たちの水着を見たときと随分反応が違うんだもん」

シャルが頬を膨らませている。なんかさっきから僕は女性の機嫌を損ねているような気がする。

「純粋に驚いただけですよ。いつも固そうな織斑先生が少し楽しそうで」

姉さんのほづを見る。どうやら山田先生と一緒に参加するらしい。その顔は少し笑っている。

「僕はあの日以来、姉さんに心配かけてばかりでしたから。ずっと暗い顔をしてたんですよ。僕は少しでも姉さんに笑ってほしいんです」

「一夏・・・」

「さて、やるぞ一夏。容赦はしないぞ」

姉さんがすでにスタンバイしている。楽しそうだなあ。うん。

「じゃあ、やるうか一夏」

「そうですね」

僕らは構える。すると姉さんもジャンピングサーブ。

「うわっ」

僕はなんとかレシーブ。ただ手首がものすごく痛い。姉さんが本気だ。その顔は嬉しそうだ。

「えいつ!」

シャルがスマッシュを打つ。狙うは姉さんの斜め右の位置。これは取りづらいう。姉さんはそれをダイビングでキャッチ、と思った。そこで片手でハンドスプリング。体勢をすぐに立て直す。しかもボールは絶妙な位置を狙ってくる。姉さんってこんなにバレーボールができたのか。その後はすさまじい戦いとなり、僕と姉さんお互いのスマッシュをレシーブ、味方がトスを上げてまたスマッシュ。この夏一番の対決だった。腕が痛い・・・本当に。

姉さんたちの休憩時間が終わり、僕はバレーボールをしているグループから少し早く抜ける。目指すはこのビーチにある海の家の中。そこはお約束の木で出来た海の家で、氷と書いている旗が風になびく。

「どうかしましたか？」

裏に回ると何やら準備をしている女性がいた。毎年ここで働いているか、その肌は日焼けしている。

「すみません。実はこういうものでして」

そう言って取り出したのは・・・テレシアのメンバーズカード。自分がテレシアの一員であることの証明書。

「て、テレシ

パシッ

僕は女性の口をすぐに押さえる。そして僕は自分の人差し指を自分

の口に当てる。

「!!!!!!!!!!!!!!」

女性は僕の手をペチペチと叩いている。早く話を済ませた方がいいな。

「僕のことは誰にも言わないでください。僕のお願いを聞いてくれれば何もしませんから」

女性はコクコクと首を縦に振った。

僕はその女性にそのお店のメニューを教わった。なんでかって？作ったことがないからだよ。それにね、テレシアは高級ホテル。来るのは上流階級のお偉いさん達。当然メニューは限られた物になる。要するにただ作ってみたいんだよね、こういうの。

で、さつき女性になんであんなに怯えていたのか訊いた。どうやら先週のSPさんたちの噂が広まってるらしい。テレシアに関わってはいけない、という噂が。先週は接客を予約したお客さんがいたの
で訊いてみた。

「確かにそういう噂は耳にしているよ。でも、テレシアに限ってそ

「れないだろう?」

と言っていた。客足は減らず、何の問題もないと思った。でも一般人には多少悪い噂になってるらしい。それでSPの一人にあのレゾナンスで連れ去られた女性はどうなったか訊いてみた。

「そんな人いましたか?」

.....。

で、今は焼きそばとかラーメンを作ってる。僕は事前に持ってきた野菜や肉、調味料などを使っている。調味料は自分で作って、他はテレシアから持ってきた。どこにそんなものを詰め込んでいたかって?食材用の量子変換機。ちょっと作って終わるうかと思ってる。

「すみません、焼きそば八つ追加で!」

「はい!」

いつの間にか大繁盛。お店の中は騒がしく、外にまで人が並んでいる。初めて作ったけど、どうやらおいしく出来たようだ。

「すみません、かき氷を一つお願いします」

聞き覚えのある声だと思ったら鈴さんだった。そういえば自分はおどるとか言ってたのに、なにやってるんだ、僕は。よし。

「すみません、さっきかき氷を頼んだツインテールでオレンジ色の水着を着た女子にこれをお願いします。これはタダでお願いします」
「はい、わかりました！」

ちなみに野菜の栽培方法や調理方法は一部メモでここに残しておく。僕のオリジナルだからテレシアの秘密は守られる。お店の女性は自分のお店が繁盛してるのが嬉しいのか、今は警戒している様子はかけらもない。これでテレシアの噂が少しでもよくなればいいと思う。

「お待たせしました！本日お一人様限定「サマーフェスティバル」です！」
「え？」

鈴の前にそれは置かれた。そこにはいちごのかき氷をベースに様々なテレシア産？のフルーツが盛られている。後はチョコやシロップなど甘いものが付け加えられている。一夏は材料が少ししかなかったので作れるのは一つだけだった。

「なんで鳳^{フアン}さんだけ？」
「ずるいー！」

「ねえねえ、私達にも分けてよ！」

飛び交う二組の女子の文句。その対応に鈴は困っていた。

「わ、わかったから。一口だけよ？」

「「「やった！」」「」」

三人はすぐに一口食べて満足そうな顔をする。

「おいしい！」

「甘すぎないってのもいいよね」

「こんなにおいしいフルーツがあったなんて！」

鈴はそのかき氷を見る。そしてある一つの仮説を立てていた。

(サマーフェスティバル・・・夏・・・かき氷・・・おごる・・・
もしかして一夏?)

店内を見渡す。そこには海の家にはありえないほど人であふれている。料理がおいしくなければここまで人は集まらない。調理しているのが一夏だと思えば自然と納得がいった。

(どつせなら・・・一夏に食べさせてもらいたかったなあ)

鈴も一口食べる。そのかき氷の味は鈴にとってはとても甘いものだった。

時間は七時半。IS学園の生徒は大広間を三つ繋げた大宴会場で夕食を取っていた。ただそこには本来居るはずの生徒一人が見当たらない。

「ねえ箒。一夏がどこにいるか知らない？」

「私も知らないんだ。まったく、あいつはどこに行ったのやら」

箒とシャルロットは席が隣だった。最初料理を見ると紙にそれぞれの名前が書かれていた名札があり、席は決まっていた。通常の旅館としては少しおかしいな光景である。気になったが、いつまで考えていても仕方がないので箒は食事を再開する。

「うむ、これは本わさか。少し贅沢だな」

「本わさ？」

「そうだ。本物のわさびをおろしたわさびが本わさだ」

「じゃあ、学園の刺身定食でついているのは？」

「あれは練りわさといって、着色したり、合成したり見た目と色を

似せているわさびだ」

「へえ〜。はむ」

「!」

箸の見間違いでなければシャルロットはわさびをそのまま食べていた。

「……」

「お、おい、シャルロット。大丈夫なのか？」

「……うん。風味があつておいしいよ？」

シャルロットの顔は少し歪んでいたが大丈夫そうだった。そのわさびを見る。わさびの山のおよそ三分の一ほどが減っていた。それでも食べた量を考えればきついはずだった。

「どづいづことだ？」

よく見ると生徒一人一人のメニューが違っていた。名札はそれぞれが食べるべき料理に合わせて置かれていたようだ。箸の夕食は味が控えめのもので箸にとっては非常に食べやすかった。

「ふむ。わからん」

理由はわからないがおいしいので箸は気にせず食べ続けた。

夕食前。一夏は誰よりも早く夕食を済ませ、IS学園一年生全員の夕食を一人一人の好みに合わせて作っていた。事前に調理されていた料理を一人一人に合わせて手直しするだけだったのでなんとか間に合い、女子が食事中の合間に一夏は風呂に入っていた。そして今は自分の部屋にいる。

「今日は楽しかったなあ」

窓を開け、手すりに腕をあずけて海を見る。月の光を反射している海は美しい。そして今日一日を振り返る。自分が好きなことをして、他人に喜んでもらえる、自分にとっては理想的で充実した一日だった。

「平和な日々が続けばいいのに・・・」

「うーん、平凡なんてつまらないよ、いっくん」

「！」

すぐ近くに東さんがいた。手すりの上に座っていて空を見ている。

「いつくんはまだ悩んでるの?」

「……何のことでしょうか?」

「わかってるくせに」

東さんはなぜか僕の過去を知っている。理由はわからない。でも姉さんが教えたとも思えない。

本当にこの人は謎だ。

「そんないつくに東さんからアドバイスです!」

東さんは手すりから降りて僕の顔の真横に自分の顔を近づける。そして東さんは呟くように言う。

「ためらうな。殺せ。そうすれば全てが晴れる」

「!?!」

僕は東さんから離れ白式の全データをディスプレイで表示する。ディスプレイ越しに東さんを鋭く睨みつける。

「あれ?いつくん、もしかして凶星だった?」

「なんで……あなたが……」

「安心しなよ。白式に盗聴システムは入ってないし、東さんがそんな陰気くさい事すると思う?」

白式のデータを見る。やっぱりそんなデータはなかった。

「いつくん、君はね、逃げようとしてるんだよ。自分のやったことからね」

束さんの目が変わる。その目はまるでこっちの全てを見通しているようだった。

「だから自分の過去に関連するものは全て消し去りたいと思うんだよ。そしてそれは君の本心だよ」

「.....」

僕の・・・本心？だからあんなことが自分の頭の中から聞こえてくるのか？

「いつくん、過去はね、一生ついてくるものなんだよ」

その言葉は、罪人にとっては重過ぎる言葉だった。僕はその場で座り込んでしまう。

「力を持った人間は戦わなくちゃいけない。力の使い方はいつくんが一番知ってる束さんは思ったんだけどなあ」

束さんが僕の目の前までくる。目は僕の目をまっすぐ見ている。僕は目を逸らしたかったけどできない。それは許されなかった。

「今のいつくんじゃあダメだ。よく考えてね」

唐突に束さんが消える。僕は何も考えられなくなってしまった。そして目の前が真っ暗になる。

「いち……か、一夏！返事をしろ！」

「？」

目の前には姉さんがいた。その顔は必死で、僕をゆすっている。

「一夏、何があったんだ？ずっと座り込んだままだったぞ」

どれだけ時間が経ったのだろう。僕には永遠のような時間に感じられた。

「ここは？」

「何を言っている？ここは部屋だぞ」

どうやら放心状態にあっただらしい。東さんの言葉はそれだけ重かった。

「姉さん、僕疲れたよ」

「……………」

姉さんが心配そうな顔でこっちを見ている。その顔をまともに見れなかった。

「わかった。今日はもう寝ろ」

「はい」

僕はすぐに眠った。僕の心はボロボロだった。

「一夏……………」

千冬は外を見る。そこには何も無い。一夏の寝顔を見ると苦しそうにしていた。

「お前はどつして、そこから抜け出せない？」

その質問に答えることができる人物は……一人もいない。

第十七話 終

第十七話 どこに行っても仕事（後書き）

遅れてすいません。最近は体力がもたずにDOWN、すぐ寝てしま
います。

さて話は考えてあるのですが結局は寝てしまい書けず。
それでも頑張りますので、感想、評価、応援お願いします！

第十八話 自分は・・・何がしたいんだ？（前書き）

最近更新遅いですよね。すみません。オリジナル展開を考えるのが難しくなってきました。でもとりあえず書きます。どうぞ！

第十八話 自分は・・・何がしたいんだ？

合宿二日目。場所はIS試験用のビーチ。四方を切り立った崖に覆われている。今日は一日中ISの各種装備試運用とデータ取りをするようだ。専用機持ちは大量の装備が用意されている。ということ。他の一年生の邪魔にならないように、専用機持ちは少し離れた場所に集められていた。ちなみに専用機持ちは織斑先生が担当。他の一年生には山田先生が指示を出している。そんな中、僕は・・・。

「一夏、どうしたの？」

シャルが心配そうな顔をしている。今の僕の顔はひどい顔をしているだろう。原因は東さんとの会話。東さんの言葉は僕の心に深く突き刺さり、僕が罪人であるということを改めて認識させた。自分にとって苦痛となるものは全て容赦なく消す。それが僕の本心だった。あの頃とまったく変わってないじゃないか。もう二度とあんな思いはしたくないのに。

「大丈夫です。気にしないでください」

「本当に？つらかったらちゃんと言わないとダメだよ？」

「わかってますよ」

「ならいいけど」

シャルは僕をちらちらと何度も確認しながら前を見る。そこには姉さんがいる。こっちをずっと見ている。僕が今何を考えているかはおそらくばれているだろう。

「ふう。さて、ようやく全員集まったか。おい、遅刻者」

「は、はいっ」

遅れてきたのはラウラさん。どうやら寝坊したらしく、集合時間に五分遅れてやってきた。

「ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「は、はい。ISのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。これは (IS三巻参照)

現在も進化の途中であり、全容は掴めてないとのことですが、さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

ラウラさんはほっとしながら戻ってくる。そして僕と視線が合った。

「どうかしたか？」

「いえ・・・なんでもないです」

ラウラさんのことをまともに見れなかった。学年別トーナメントのあの日、僕は姉さんの言葉でなんとか踏みとどまった。それがなか

「だったら？今ここにラウラさんはいないだろう。そしてあの悲劇が繰返される。そう思うと眩暈めまいがする。重症だね、これはもつとどうにもならないのかもしれない。」

「待ってください。箒は専用機を持ってないでしょう？」

「そ、それは……」

鈴さんがここにいる誰もが気になっていたことを指摘する。専用機持ちしかいないはずの場所に箒さんがいる。なぜ？

「私から説明しよう。実は」

「ちーちや~~~~~ん!!!」

箒さんと姉さんがいやそうな顔をする。見ると砂煙を上げながらサーフィン感覚で崖を滑って跳躍した人物がいる。僕は目をそらす。そこいるのは東さんだった。ここは立ち入り禁止のはずなのにね。

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめ　ぐえっ」

飛びかかってきた東さんを片手でキャッチ。しかも顔面で。メキメキと音を立てながら姉さんの指が東さんの顔に食い込んでいく。さすがにやりすぎだと思っよ。

「うるさいぞ、束」

「うぐぐぐ。相変らず容赦のないアイアンクローだねっ」

そう言うと束さんは姉さんの拘束から抜け出し、篝さんの方を向く。

「じゃじゃーん！やあ！」

「……どうも」

「えっへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなっただね、篝ちゃん。特におっぱいが　ぶっ」

篝さんがどこから取り出したかもわからない木刀で束さんを吹き飛ばす。……痛そうだ。

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ。篝ちゃんひどい！ねえ、いっくんひどいよね？」

「っ」

束さんが今度はこっちを向く。そして昨日のことを思い出す。今のふざけているような態度とは違い、束さんはまるで僕を責めるように言葉を選んでいった。そのため僕の体は緊張で動けなくなってしまった。僕は目を逸らしながら言った。

「さすがにセクハラで訴えられると思いますよ、東さん」
「え？そう？まあ、捕まえられるものなら捕まえてみやがれ〜！」

東さんは空に向かって高らかに宣言した。その言動に一同はぽかんとしている。

「おい東。自己紹介ぐらいしろ」

「えー。めんどくさいなあ。私が狂気の mad scientist にしてスーパースターの東さんだよ、はろー。イエーイ！」

東さんは両手の人差し指を立てながら斜め上に向ける。とんでもない挨拶だった。ちなみに英語の発音は意外と綺麗だった。

「それで、頼んでおいたものは……？」

篤さんが東さんに何かを頼んでいたようだ。東さんの目がキラーンと光る。

「うつふつふつ。やっぱり気になるよねえ。では、大空をご覧あれ
」！

東さんが上に指を向けると金属の塊が激しい音と共に落下する。そしてその金属の塊は量子変換により消える。中から出てきたのは真

紅のISがだった。

「じゃじゃーん！これぞ篝ちゃん専用機こと『あかつはぎ紅椿』！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製だよ！」

篝さんのために作ったのか。束さんは基本自分が興味を持った人間とだけまともにしゃべる。現在は姉さんと篝さんと僕。一応親はかろうじて認識できるらしい。でも興味を持った人間にはとことん優しくするそうだ。

「さあ！篝ちゃん、今からフィッシングとパーソナライズを始めようか！私が補佐するからすぐに終わるよん！」

「それでは、頼みます」

「篝ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新データに更新するだけだね」

コンソールを開いて束さんは指を滑らせる。さらに空中投影のディスプレイを六枚ほど呼び出すと、膨大なデータに目配りをしていく。それと同時進行で空中投影のキーボードをまるでピアノを弾いていくかのような滑らかかつ素早い動きで叩いていく。その間も瞬時に切り替わっていく画面にも全部しっかり目を通してている。相変わらずこの人は天才である。

「ほい。フィッシング終了。超早いね。さすが私」

紅椿に連結されてあったケーブル類が外れていく。

そんなじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。篝ちゃんのイメージどおりに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

篝さんは目を閉じて集中するとすごいスピードで上空へと飛翔。そのまま二百メートルほど上空で滑空していた。

「どつどつ？ 篝ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

「え、ええ、まあ」

実の姉に対して少し堅い態度の篝さんだった。そういえば束さんがISを開発してから引越しの連続だと聞いた。そのことを恨んでるのかもしれない。そろそろ許してもいいと思うけど。

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『あまじき雨月』で左のが『からわれ空裂』ね。武器特性のデータを送るよー」

束さんが空中投影のキーボードでデータを送る。篝さんはデータを見た後に構えをとり、雨月で突きを放った。突きが放たれると同時に、周囲の空間に赤色のレーザが最初は球体として、そして順番に光の弾丸となって漂っていた雲が爆ぜる。

「いいねえいいねえ。それじゃあ次はこれを打ち落としてみてねえ。
はい！」

嬉しそうにそう言うと東さんは十六連装ミサイルポッドを量子変換で呼び出す。そして篤さんに向けて撃った。いよいよやりたい放題である。

「 やれる！この紅椿なら！」

篤さんは空裂を振るう。あの赤いレーザーが今度は帯状になって広がり、ミサイルを全て打ち落とす。その場にいる全員がその圧倒的なスペックに驚愕する。東さんはそれを満足そうに見ている。ただ姉さんは東さんを厳しい目で見ている。しばらく見た後に姉さんは僕を一瞥。近づいてきて小声で話しかけてきた。

「一夏、何を吹き込まれた？」

「・・・何も」

「そうか」

そう言うともう一度東さんを見る。どつや姉さんには全てお見通しのようである。敵わないなあ。

「うんうん。それじゃあ篝ちゃん。ちょっと降りてきて」
「は、はい」

そう言うと篝さんは僕たちの元に降りてくる。それを確認すると束さんは僕の方を向いて人差し指を自分の方に向けてくいくいつと曲げる。全員の視線が僕に向けられる。

「いつくん、ちょっと来て」

「な、何ですか？」

「いいからいいから。カモンカモン！」

束さんは僕の腕を握ってぐいぐいと僕を引っ張る。少し引きずられているようにも見える。束さんは僕を紅椿の前、篝さんの前まで連れてくる。篝さんは少し複雑な顔をしていた。今の僕の顔を見れば当然だろう。暗く、弱々しく、情けない顔を。

「ねえねえ、いつくん。どう？紅椿は？」

「すごいと思いますよ」

「それだけ？いつくんから見たら紅椿はまだ不完全じゃないのかな？」

全員の顔色が変わる。さっきのを見ていたらこれ以上完璧なISはないだろうと全員が思っていた。それがまだ不完全だということに全員が驚いていた。

「いつくんいつくん！いつくんが紅椿をいじってみてよ！できるでしょ？」

「できないこともないですが、大したものじゃないですよ」

「それでもいいんだよ。東さんはいつくんの改造に興味津津なのだよ」

東さんは再び紅椿にケーブル類を付け直す。東さんの周りにまた空中投影のディスプレイとキーボードが出てくる。

「では、どつぞ〜！」

サーカスの司会者のように東さんがその位置を僕に譲る。僕は同じキーボードをもう一つ出し、片手に一個ずつという形で叩いていく。そして紅椿のデータを見る。

「とんでもない物を作りましたね、東さん」

「いやあ、それほどでも」

僕はキーボードを両手で一つずつ叩きながらデータを見て気付いた。紅椿の全装甲にエネルギーが流れるようになっていた。

「東さん。これは一体なんですか？」

「ああ、それはね、展開装甲といってね、この天才の東さんが作っ

た第四世代型ISの装備なんだよー」

今のは聞き間違いだろうか？もし違っていたなら世界中の研究者達は涙目だろう。

「第四世代？」

「各国でやっと第三世代型の試験機ができた段階ですわよ？」

「なのに、もう……」

ラウラさん、セシリアさん、シャルがそう言っていると束さんは大したこともないように続ける。

「そこはほれ。天才束さんだからー。はい。ここで心優しい束さんの解説開始。まず、第一世代というのは（IS三巻参照）

現在絶賛机上の空論中のもの。展開装甲は白式の《雪片式型》にも使用されてまーす。試しに私が突っ込んだ」

今なんて言った？雪片に展開装甲だつて？ということとは白式も束さんが作った第四世代型ってことか？つまりあの時白式を送ってきたのも束さんということになる。やっぱりこの人の考えていることはわからない。

「ほらほらいっくん。手が止まっているよ」

「は、はい」

「ちなみに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機リアルタイム・マルチロール・アクトレスつてやつだね。にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい」

全員が驚愕で声が出ない。それでも僕は聞きながらも高速でキーボードを叩いていく。

(自動支援装備か。となるとビットが・・・あった。二つか。自動制御装置をちよつとひねるか。雨月と空裂は・・・これでいいかな。あとは・・・)

「いつくん、終わったかい？」

「はい、大体は」

東さんがディスプレイを見ていく。

「ありや？エネルギーの出力が抑えられてる」

「出せるスピードは変わってませんよ」

「おー！さっすがいつくん！他には？」

「・・・見ればわかるでしょう？」

「あはは。そうだね」

東さんは次々と紅椿のデータをコピーしていく。僕はその間に新し

いシステムを入れて終わらせる。

「東さん」

「うん？」

「どうして僕に白式を？」

聞きたい。この人は戦うための力を僕に渡した。もう、戦わないと決めていたのに。それはこの人も知っているはずだ。

「・・・それはね」

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

誰かと思ったら山田先生だった。その顔はいつも以上に慌てている。

「どうした？」

「こっ、これをつっ！」

山田先生が姉さんに小型の端末を渡して何かのデータが表示される。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし・・・テスト稼動は中止だ。お前達にやってもらいことがある」

姉さんが専用機持ちの方を向いて告げる。その顔は真剣だった。

「あれ？こちらの方は？」

山田先生が姉さんに訊く。僕にしか見えなかったが、東さんが口の端が得意げにつりあがった。

「篠ノ之東だ」

「え、えええ！」

山田先生の悲鳴が響き渡った。

「では、現状を説明する」

場所は旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間。かさばな
僕たち専用機持ちと教師陣は集められた。証明を落とした部屋は薄暗く、大型の空中ディスプレイははつきりと見える。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルバリオスヘル銀の福音』
通称福音が制御

下を離れて暴走。監視区域より離脱したとの連絡があった」

姉さんが淡々と説明していく。周りを見ると全員が真剣な顔で説明を聞いている。こういう事態に対しての訓練を受けていたことがはっきりとわかる。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することになった」

海で暴走か。十年前の「白騎士事件」とちよつと被るな。（白騎士事件は原作通りです）

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よつて、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

こんな事態に僕たち高校生が対応していいのか？

「それでは作戦会議をはじめ。意見があるものは拳手するようになさい。目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

最初に発言したのはセシリアさんだった。まずは情報からというところか。

「わかった。ただし、これは二カ国の最高重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩もつえいした場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」
「了解しました」

僕たちの目の前に表示されたのは福音のデータだった。それぞれが意見を言う。

「広域殲滅くわいきせんめつを目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じオールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍カウリウを上回ってるから、向こうのほうが有利……」

「この特殊武装が曲者まがものって感じはするね。ちょうど本国からリヴァイブ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからない。偵察ていさつは行えないのですか」

ラウラさんが言っていることは確かだ。戦つとすればこれだと情報不足だ。

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろ

う

「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生が最もな意見を言う。そして視線は自然と僕に集まってくる。

「……僕ですか」

「そうよ。あなたの零落白夜で落とすのよ」

「白式のスピードがあれば可能だとわたくしは思いますが？」

鈴さんとセシリアさんがそう言うとその場が静かになる。その二人は当然だという顔をしていたが、残りの三人は心配そうな顔をしている。シャルは事情を知ってるし、篝さんとラウラさんは少なくとも僕が戦うことをためらっていると知っている。

「どうだ？一夏」

姉さんが僕に確認を取るが僕は正直行きたくない。ただでさえ失敗できない作戦なのに、今の不安定な僕を送っても結果は明らかだ。姉さんもそれはわかっている。

「一夏、どうするの？」

シャルが心配そうに訊いてくる。どうだろうね。感情を無理やり押し込めればいけるかもしれない。でもそれではあの時とあまり変わらない。それは・・・いやだな。

「僕は」

「私が行きます」

そう言ったのは篤さんだった。誰も予想してなかったために全員が不意を突かれた。僕は慌てて止めにかかる。

「ま、待って下さい篤さん！篤さんはISの操縦時間はほとんど皆無です。危険すぎます！」

「確かにそうかもしれないな。でもお前は人のことを言えるのか？」
「うっ」

そうだ。僕は基本ISを放課後や授業で使っていない。操縦時間など代表候補生と比べたらなきに等しい。でもこれは訓練じゃない。実践なんだ。怪我では済まされないかもしれないんだ。だから・・・。

「それにこの紅椿は姉さんと・・・なによりお前が作ってくれたものだろう。負けるはずがない」

篤さんは笑顔で言うが僕は納得できない。

「しかし」

「はいはい。いっくんは少し心配すぎだと束さんは思うよ?」

「「「「「!?!?!?!?!」」「」「」「」

突然の声に全員がその発生源見る。よく見ると天井の一部が取り外されそこから束さんの顔がさかさで出てきた。いきなりすぎる。

「さっきデータをざっと見てたけどね、今の紅椿は福音を単体で倒せると束さんは思うよー」

福音を・・・一人で?

「・・・・・・山田先生、あのウサギを捕まえてください」

「えっ!?!?は、はいっ」

「おっと!束さんは今捕まるわけには行かないのだよ!ではadi
OS!」

姉さんが山田先生に頼むが束さんは天井を元に戻し、匍匐前進ほふくぜんしんで屋根裏を駆ける。音がガタンガタンとうるさい。そして見えないがめちゃくちゃ早い・・・と思う。僕は望んでいなかったのに、結局篤さんは一人で福音を撃墜することになった。

第十八話
終

第十八話 自分は・・・何がしたいんだ？（後書き）

今思えば一夏は用途が機動というだけで手足に展開装甲らしきものを使ってみましたね。展開装甲の原理は知っていたようで。これを書くまで気付かなかったです・・・orz。お気に入り件数と評価ポイントが少しずつ、少しずつ上がっているのが本当に嬉しいです。これからも「白を纏いしHeaven Sword」をよろしくお願ひします！

第十九話 お人好し（前書き）

かなり書いたのに一気に消えました。
うわあああああああああ（涙）
遅れてスイマセン。どうぞ。

第十九話 お人好し

時刻は十一時半。

砂浜で箒はこれからの戦闘に緊張を覚えながらも集中していた。

（負けられない。今の私なら大丈夫だ。なにより・・・）

箒は紅椿を展開する。その真紅の装甲は太陽の光を反射し燦然と輝いている。

（一夏が二度とあんな顔をしないように、私が戦うんだ）

箒は展開装甲で加速。福音のもとへ向かう。

「じゆん暫時衛星リンク確立・・・情報照合完了。目標の現在位置を確認。もうすぐだな」

束と一夏が調整した紅椿。そのスピードはイグニッション・ブースト瞬時加速かそれ以上の速さだがエネルギーの消費は抑えられている。エネルギー残量は福音と戦うには十分だった。

(あれが福音……)

『シルバリーホースベル銀の福音』はその名にふさわしく全身が銀色をしている。そして頭部から生えた一对の巨大な翼は本体同様銀色である。それはウィングスラスターであると同時に広域射撃武器でもあるとデータにはあった。

(よし、このままいくぞ)

箒はあまじき雨月とからわれ空裂を抜き取り福音に迫る。しかし福音は最高速度のまま反転。後退の姿になって刀を紙一重でかわす。

442

(かわした?)

「てつき敵機確認。迎撃モードへ移行。『シルバリーベル銀の鐘』、かどう稼動開始」

「!?!?」

福音のウィングスラスターの一部がまるで翼を広げるかのように開く。そこから打ち出されたのはいくつもの光の弾丸。一つ一つが高密度に圧縮されたエネルギーだった。

「つつ」

箒は避けようとしたが一発だけ当たってしまい、その一発が着弾した瞬間に爆ぜた。その数と連射速度、なにより福音本体のスピードが問題である。

(まずはあの動きを止めなくては)

箒は背中の中の二つのビットを射出。福音に向かわせる。二つのビットは交互に福音へ迫り、当たって福音をのけぞらせる。その間に箒は雨月で突きを放つ。赤いエネルギーが雨月を包んだかと思うとそのエネルギーは薙刀へと変わり延びていく。

「!?!」

福音はギリギリで回避。遠距離戦をやめて近距離戦に持ち込む。箒は放った突きをすばやく解き、福音をギリギリまで引き寄せる。

「ふっ!」

今度は空裂を振るう。エネルギーが刀身を包み、福音の腹部に当たる。そのまま帯状のエネルギーが放出され福音を突き放す。そのエネルギーは炸裂弾のように拡散し、福音にダメージを与える。福音は反撃といわんばかりに体を一回転して《銀の鐘》をばら撒くように撃つ。逃げ場はなかった。

(くっ)

身構えたがそれは必要なかった。さっき放った二つのビットが箒の危険を察知して戻ってくる、ビットそのものが展開。エネルギーを放出して楕円形だえんけいのエネルギーシールドを構築して福音の攻撃を防ぐ。

(これは・・・一夏が?)

両月も空裂もビットも全て一夏が新しくプログラムしたものだ。しかし全てエネルギーを使うので乱用はできない。紅椿のエネルギー残量を見るとあと一回の接近と数回の攻撃が限界だった。

(焦らず・・・慎重に・・・)

箒は意識を集中させて福音に接近する。

場所は作戦会議室となった風花。かさはな

そこでは全員がモニター越しに福音と紅椿の戦闘を見ている。そん

な中、僕はじっと待つしかできなかった。自分には何も変わってない、その現実には打ちのめされていた。

(僕は……どうしたらいいんだ？自分ではもう……どうにもならないのに)

モニターを見る。そこには福音と戦っている筈の姿が映っている。その目には強い意志が見える。一夏にはない、強固な瞳がそこにはあった。

(……あれ？この反応は……)

一夏以外の人は福音と筈の戦闘に目を向けていて見えていないが、一夏は確かに見た。そこには福音でもなく、紅椿でもなく、海域を封鎖している先生達のISの反応でもなかった。

(詳細なデータが一切表示されない……。まさか……)

一夏は自然と立ち上がっていた。そして部屋を出ようとする。

「すみません。僕ちょっと喉が渴のどいたので飲み物でも買ってきます」
「え？……一夏？」

シャルロットは出ていく一夏の背中を見る。その足取りはひどく重そうだった。

「はあああつ！」

箒はビットで福音を牽制^{けんせい}。空裂の炸裂弾により、福音の行動をさらに制限する。そして雨月を横薙^{よこな}ぎに振るってエネルギーの薙刀を少し離れた距離から福音の脇に当てる。福音はそれを払おうとその薙刀に触れる。

（もう少し・・・もう少しだ・・・）

箒はこのままいけば勝てると思っていた。しかし福音はその視線を逸^そらす。箒もそつちを見る。そこには一隻^{いっせき}の船がいた。船に関するデータは一切表示されない。

（密漁船？こんな時に！？）

箒の攻撃の手が一瞬だけ緩む。福音はその隙に脱出し上昇する。福音は《銀の鐘^{シルバークロウ}》の標準を全て密漁船に合わせていた。

(・・・どうする？福音か・・・それとも)

紅椿のエネルギー残量は残り35%を切っていた。ここで密漁船を守れば福音の撃破は難しくなる。福音を狙えば密漁船に被害が及ぶ。自分がどうしたらいいか、箒は戸惑うが突然一夏の横顔が脳裏に浮かぶ。

(一夏なら・・・一夏なら！)

箒は福音と距離をとり密漁船を庇^{かば}うようにその射線上に立つ。見えたのは襲い来る光の弾丸の雨だった。箒は思わず目を瞑^{つむ}る。

447

「箒さん。そこから動かないくださいね」

「え？」

突然聞き覚えのある声があった。声のした方を見るとそこには『轟剣^{こうけん}』により巨大な零落白夜の光を放出している雪片を上段に構えた一夏がいた。一夏はそれを振り下ろし、『銀の鐘^{シルバークロウ}』のエネルギー弾丸を全て消し去った。

「一夏・・・どうして・・・？」

「心配で来ちゃいました」

その一夏の顔は笑顔だが苦しそうにしている。実際『轟剣』の反動で体中に負担が掛かっていた。

「でも安心しました。紅椿を手にしたらどうなるかと思いましたけど……」

「《銀の鐘》シルバーベルの迎撃対象を変更、確認」
「!?!」

福音の攻撃対象は密漁船から一夏へ変わる。その光弾が一夏に迫る。

「よけろ一夏!」

「ごめんなさい。まだエネルギーが回復してないんです」

システムで白式のエネルギーは常に回復する。しかしここまでの超高速移動でエネルギーは既にスズメの涙ほどしか残っていないかった。おまけにシールドエネルギーは『轟剣』にほとんど使ってしまった状態である。

「くっ」

筈は急いで一夏の方へ向かう。紅椿のエネルギーは白式よりも残っているとはいえ紅椿の燃費を考えれば今の白式とあまり差はない。

「お願いがあるんです。箒さん」

「!?!」

助けようとした箒を一夏は突き飛ばす。押された瞬間、異質な映像が箒の頭の中で投影される。

血の海となっている床。その真ん中に立っている血塗れちまみの少年。その手には血で汚れた雪片が握られている。そこでその映像の少年と一夏の顔が重なる。

「一夏!?!」

「僕のようには・・・ならないでください」

ドオオオオン!!

光弾が全て僕に当たり、残りわずかなシールドエネルギーは失われる。ISは強制解除され、死んでもおかしくないような熱さと衝撃に襲われる。

「一夏ああああ!!」

紅椿のシールドエネルギーは十分残っている。爆発の中にいる一夏を助けるのは問題なかったが、箒がしているリボンは焼き切られた。

（あ、髪。大丈夫かな。綺麗な髪だから焦げたりとかしてたら・・・
残念・・・だな）

静かに眼を閉じる。僕の意識はどこか遠くに・・・。

旅館の一室。現在は夕方の四時前。

運ばれた一夏は今は寝ている。その全身には包帯が巻かれていて痛々しいものだった。隣にいる筈はずっと考え込んでいた。頭の中にあるのはさつき見た映像。その映像の顔とあの時道場で見た一夏の顔が重なる。あの殺意を秘めた目を思い出してしまい、筈は恐怖で震えてしまう。

（あれが・・・お前の戦いたくない理由だということのか？）

寝ている一夏の顔をまともに見れなかった。彼の過去は自分のよりも暗く、深いものだった。

「・・・ああ、やっぱりここにいたのね」

鈴が部屋に入ってきて箒の隣に座る。そして箒の方を向いて唐突に訊いてくる。

「あなた……一夏の何を見たのよ？」

「………何も」

「………そう」

鈴はそう言つと一夏の方を見る。

「でもこいつはホントどうしようもないバカよねえ」

「………どづい意味だ？」

箒は鈴の顔を見る。その顔はどこか嬉しそうである。

「あなたのことが心配でこいつは飛び出したのよ。それは知ってるでしょ？」

「あ、ああ」

「あたしの時もそう。あの無人機が襲つて来た時にこいつは作戦よりもあたしの安全を優先してたのよ。ホント何考えてるのかしらねえ？」

鈴の顔から笑みがこぼれる。しかし長くは続かず、心配している顔に変わる。

「こいつは常に他人のことを第一に考えてる。自分はこんなに苦しんでいるのにね。ほんと呆れちゃうわ」

そういえば一夏は昔からそうだった。

小学生の頃、篤は数人のクラスメートの男子から男女と言われてかわれていた。そんな篤を助けたのは一夏だった。一夏は後で先生に怒られると分かっているもその男子達を殴って黙らせた。どんなに変わってしまったても一夏は一夏だった。もう一度一夏の顔を見る。体の震えは既に止まっていた。

「こいつは……今も昔も変わらんのだな」

「そうね」

鈴はうなずいて立ち上がる。そして部屋を出て行くこととする。

「どこに行くんだ？」

「どこって……福音のところに決まってるじゃない」

「福音だと？……居所はわかっているのか？」

「それなら今ラウラが」

言葉の途中でドアが開けられる。そこにはISの腕だけを部分展開したラウラがいた。

「出たぞ。ここから三〇キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

腕の上に表示されたディスプレイを見て結果を伝える。

「さすがドイツ特殊部隊。やるわね」

「お前の方はどうなんだ。準備はできているのか」

「当然。甲龍シエンロンの攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「問題ない。そろそろだと思いが」

ドアが再度開かれる。そこにはセシリアとシャルロットがいた。

「こちらも完了していますわ」

「僕も準備オツケーだよ。いつでもいける」

専用機持ちが全員揃そろうう。篤は念のために聞く。

「待ってくれ。これは命令違反ではないのか？」

「え？そっただけ。まさかあんた来ないつもり？」

「わたくしは当然行きますわ」

「篤、一夏は逃げずに戦った。だから僕たちも戦わないといけねんだよ」

「それにだ。師匠の仇は弟子が討つものだろう?」

全員が既に戦う決意をしている。

「そつだな。今度こそ負けはしない!」

海上二〇〇メートル。福音はまるで胎児たいじのような格好でうずくまっている。静かに、ただ静かに。しかしその静寂は超音速で飛来した砲弾によって破られる。

「初弾命中!」

ラウラの放った弾丸が福音に当たる。爆発によって生じた煙から出てきたのは戦闘体勢に入った福音だった。

五人の反撃が始まる。

第十九話 お人好し（後書き）

六月九日。十八歳になりました。早いもんです。

しかも当日は体育祭＋塾。拷問でしたw

気付けばここまで来てるんですよ。色々頑張ります。

次回ですがあの人を出そうかと思ってます。誰かは想像がつく人はいちやうかもしれませんが、とりあえず出したいんで出します。
では、また。

第二十話 ホワイト・オペラ（前書き）

サブタイトルが思いつかず。レギオスから借りてきちゃいました。それっぽいからいいかなと思ひまして。

前回の更新は遅かったですね。スイマセン。

第二十話 ホワイト・オペラ

(「」は・・・?)

ぼーっとした状態で一夏は奇妙な所にいた。見ると地面にはスモークのようなものが漂っている。空は夜なのか、満月と満天の星空がそこにはあった。その空を見て一夏は違和感を覚える。

(空が・・・・・・・・あんなに近い・・・・・・・・)

一夏は次に下を見る。そして気付く。スモークの上に立てるはずがない。いや、今出た答えも信じられなかった。自分は・・・雲の上に立っている。

(もしかして僕・・・・・・・・死んじゃった?)

雲の上に立つなど出来る筈もない。自分が死んだと思うのが妥当だった。

「罪人の末路は・・・死・・・か・・・」

「。。」

そんなことを言っていると不意に歌声が聞こえてくる。その歌声はとても綺麗で、聞いているだけで心が落ち着く。僕は気になって声の方へと歩いていく。

「ラ、ラ、ラララ」

そこにいたのは白いワンピースを着た少女だった。その髪は服と同じで白色。夜の景色によく映える姿だった。彼女は両手を広げて目を閉じた状態で空に向けて悲しそうに歌う。

(・・・鎮魂歌^{レクイエム}って・・・こんな感じなのかなあ)

僕はそれを聞きながら雲の上に座る。そして星空を見る。綺麗な星空に綺麗な歌声。もう言い残すことはなかった。このままずっとここにいてもいいと思うぐらいに。でも・・・。

(なんだろう。まだやり残したことがあるような気がする・・・)

とそこで少女の歌声は止まる。何かあったのかと思いその少女の方を見る。少女も僕の方を振り返り僕の目を見て言う。その目は碧眼^{ヘキガン}で星のように輝いている。

「あなたは……どうしたいの？」

「え？」

急に風が吹いて雲がぶわつと舞い上がる。僕はその雲に飲み込まれた。

「続けて砲撃を行う！」

ラウラは間髪容れずに次弾をを発射する。その姿は通常装備とは大きく異なり、八〇口径レールカノン《ブリッツ》を二門左右それぞれの肩に装備している。さらに遠距離からの砲撃・狙撃対策用に四枚の物理シールドが左右と正面を守っていた。しかし砲撃仕様はその反動相殺のために機動との両立が難しい。福音は砲弾を全て回避しながらラウラに迫る。その右手がラウラに触れる後数十メートルというところだった。

「させないよ」

「シャルロット？」

シャルロットは瞬間加速でラウラと福音の間に割って入った。そのままショットガン二丁を近距離から撃つ。福音が後ろに体勢を崩す

がそれも一瞬のことでシャルロットに向けて《銀の鐘》^{シルバーベル}で反撃した。

「悪いけど、そのぐらいじゃ落とせないよー!」

リヴァイブ専用防御パッケージである『カーテン・ガーデン』。二枚の実体シールドと二枚のエネルギーシールドがカーテンのように広がり福音の弾雨^{だんう}を防ぐ。福音は次にシャルロットへ向かう。シャルロットは右手に盾殺^{シールド・ピアス}しを量子変換で呼び出す。シャルロットは福音を真正面から迎え撃つつもりだった。

「まったく無茶ですわね」

福音とシャルロットが接触する直前で青いレーザーが福音を襲う。福音は一度退避し攻撃を避け続ける。セシリアは六機のブルーティーズを全てスラストとして用いた強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備している。そのビットはスカート状に腰部に接続されていて砲口は全てふさがれている。その高速移動下で反応できるように超高感度ハイパーセンサー『ブリリアント・クリアランス』を頭部に装着。高速移動下で大型BTレーザーライフル『スターダスト・シューター』を撃ち続ける。その全長は二メートル以上もあり、ビットを機動力に回している分の火力を補^{おぎな}っていた。

「あなたわね、弾数制限があんのよ!少しは考えなさいよ!」

そう言いながらも鈴はセシリアの射撃の隙を狙って衝撃砲を撃つ。しかしそれはいつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎となっている。機能増幅パッケージ『崩山』。元からあった衝撃砲にさらに二つ追加された。計四門の衝撃砲である。

「鈴！」

福音は鈴に向けて《銀の鐘^{シルバーベル}》を撃つ。その間に飛び出したのは箒だった。箒はビットを展開。楕円形^{だえんけい}のシールドエネルギーを形成し鈴を庇う。箒は怒鳴るように言う。

「シャルロット！落ち着け！よく見る！」

シャルロットは全員の顔を見る。必死な顔で戦っている。

「くっ。やはり速い」

「落ちなさい！」

「絶対たたき落とす！」

全員が考えていることは同じだった。ただ福音を撃破する・・・それだけだった。シャルロットは焦って他の専用機持ちの事を考えずに先走ってしまった。みんなが一夏のために戦っている。

「箒、ゴメン」

「わかってくれればいいんだ」

改めて箒とシャルロットは福音に向かう。全員で福音を倒すために。

視界が鮮明になっていく。広い空間。あらゆることを想定されて作られた丈夫な壁。

一夏は中学時代に通っていた練武館れんぶかんの中にいた。

「どうかしましたか、織斑」

そこにいたのはレイフォン・アルセイフ。一夏に高速移動状態での戦闘とサイハーデンという刀技の流派を教えた人物。

「レイフォン師匠、今日はどうしても言いたいことがあって来ました」

そつだ。僕はあの日、僕が過ちを犯したあの日、僕はこう言ったんだ。

「僕はもう・・・戦いたくないんです」

その日から僕はここには一度も来ていない。ここで教わったことを、僕は人殺しに使った。ここに帰ってくる資格などない。

「じゃあ君はなぜその武器を持つてるんですか？」

「何を　　っ！」

僕は自分の右手を見る。そこにあつたのは雪片だった。しかし白式の雪片とは違い、生身の人間が振れるほどの大きさと重さになっていた。

「構えてください、織斑」

「・・・師匠、何をするつもりですか」

レイフォンは腰のベルトについているものを取り出す。天剣と呼ばれる、何があつても壊れないといわれている武器。それは白金錬金ブリッチナ・ダイト剛イトと呼ばれる特殊な合金を使っている。それを使えるものが天剣授受者。その十二人が一夏の師匠である。レイフォンの天剣はヴオルフシュティンと呼ばれる剣だった。黒い模様に金の装飾。何よりも白銀の刀身が美しい。

「確かめるんですよ。今の君を」

「待つてください。僕は戦う気なんてないんです！」

「ならなぜ君はその刀を捨てないんですか」

「うっ」

師匠の周りの空気が震える。師匠たちだけが使える剄けいという力。僕はそれを使うことはできない。でも見たり感じたりすることはできる。実際見ても師匠たちの剄の量はそこが見えない。それが天劍授受者になるための条件。圧倒的な剄の量。それが殺気となって僕を覆う。

「いきますよ」

「！！！！」

師匠の全体の輪郭が一瞬ぼやける。僕は反射的に雪片を振るい全身に力を入れる。剄があるとないとは圧倒的な差がある。剄は肉体及び武器の強化。相手を攻撃するエネルギーにだってなる。目の前には既にヴォルフシュテインとその奥に師匠の顔が見える。

「鍛錬は続けてたみたいですね」

「そうしろと言われましたから　ね！」

僕は雪片を振り切り師匠と距離をとる。

「師匠、やめてください！僕は戦えないんです！師匠たちに教わっ

たことを僕は人殺しに使った。そんな僕が戦うことなんて許されな
いんです！」

「・・・本当にそう思ってますか？」

「え？」

気が付くと一夏の周りには十数人のレイフォンが一夏を囲んでいる。

『千斬閃』

レイフォンがサヴァリスの武門であるルッケンスの秘奥である『千
人衝』という残像攻撃を自分なりに改造した技。

その残像が今一夏に一斉に突進してくる。

「くっ」

『竜旋剄』

僕はその場で高速回転して自分を中心に竜巻を作る。師匠なら剄を
使ってもっと大きな竜巻を作れる。僕は最近になつてできるよう
なつた技。シャルのおかげで出来るようになった気がする。なんと
なくだけど。

師匠の残像は竜巻で全て消えたのを感じる。あまりのクイックター
ンに体が傾き、視界も斜めになる。しかし師匠が次の技を放つ準備
を既に終えていたのが視界に入った。ヴォルフシュティンに練り上

げられた剄は白い光を帯びている。間違いない。あれは師匠が編み出した連弾れんだんという技だ。

『重ね閃断』

レイフォンがその白銀の光がその刀身から放たれ一筋の斬線となつて飛んでくる。

僕は体勢を立て直し、雪片でそれを受ける。

「ぐ……う……」

僕はさらに力を込めるけどそれを弾くことができない。でもこれは連弾。当然次が来る。

『追い狩り』

レイフォンはヴォルフシュティンを横に一閃。白い光が斬線となつて飛ぶ。その光は先ほどレイフォンが放つたものと重なり威力を増す。そしてしばらく経つとそれは大きな爆発を起こす。

僕はその爆圧を全身に受ける。その反動で宙に吹き飛ぶ。途切れそんな意識の中、師匠が続ける。

「そう思ってくれるのは純粹に嬉しいですよ。でも……君は他人

のことしか考えていない」

レイフォンは跳躍し、一夏と同じ高さの所まで飛ぶ。既にヴォルフシュティーンには大量の剉が込められていて、上段に構えている。一夏はレイフォンが次に何をしてくるかわかっていた。『轟剣』を使うつもりだ。

「君は……どうしたいんですか」

「……僕は」

僕は無理やり意識を繋ぎ止める。そして今思ってることを大声で叫んだ。

「僕のせいで……誰かが悲しむのは見たくないんです！」

「結局他人ですか？」

キイイイイン

僕の意思に応えるように雪片がその刀身を開く。そして零落白夜の光が次第に大きくなっていく。こっちも『轟剣』を使う。師匠は上から下へ、僕は右から左へ振るう。

「うおおおおお！」

強大な二つの光がぶつかり合う。その衝撃で辺りは熱気に包まれる。そんな中、一夏の頭の中に自分の声が聞こえてくる。それは今まで自分が言ってきたことだった。

力はただの暴力でしかないんですよ。大事なのはそれを使う心です。誰かを助けるのに、理由がいりませんか？
これは・・・僕のがまます。

(・・・はは、なんだこれ。僕は・・・戦ってばかりじゃないか・・・)

バキーン！

突然雪片が音と共に粉々になった。零落白夜のエネルギーを流しすぎたために耐え切れず自壊した。雪片の破片がパラパラと落ちていく。雪片が砕けた音と同時に一夏は自分の中の何かが崩れたような気がした。

(そうか・・・・・・僕は・・・)

雪片がなくなり一夏が放った『轟剣』も消える。一夏はそのまま光に包まれた。

福音は鈴、全員の攻撃を避けながらも《銀の鐘》^{シルバールベル}で反撃をしてくる。いつまで経っても開けない突破口。全員が次第に焦りを覚えてくる。

「ああもう!」

「待て鈴!」

ラウラが止めようとするが鈴は動いた。鈴はエネルギー弾を全身に浴びながらも拡散衝撃砲を連射しながら福音に接近。ついに福音の目の前に捕らえた。そして双天牙月で頭部に接続されたマルチスラストー《銀の鐘》^{シルバールベル}。その片翼を鈴は切った。

「どつよ　　ぐっ!？」

肩側だけの翼になりながら、それでも福音は鈴の左腕へと回し蹴りを叩き込む。脚部スラストーで加速されたそれは鈴の腕部アーマーを破壊。同じようにもう片方で鈴の腹部を蹴る。鈴は海に突き落とされる。

「貴様!」

箒は両手に刀を持ち、福音へ斬りかかる。その急加速に一瞬反応が遅れた福音の右肩へと刃が食い込んだ。

(このまま押し切る！)

しかし福音は刀を気にせず両手を箒の両腕を逃がさないように掴む。残った片方の翼が箒の目の前までその砲口を開く。エネルギー弾がチャージされ、目の前が光で溢れる。

「箒！逃げて！」

「くっ」

ラウラは福音に向けてレールカノンを撃とうとしていた。

「箒さんに当たりますわ！」

「なら、どつしると！」

ラウラもセシリアも手を出せないでいた。

(こんなところで、やられてたまるかあああ！)

紅椿の展開装甲が全て開く。全身から赤い光が衝撃波のように広がり、福音の手と体を弾く。

「はあああああっ!」

箒は空裂の炸裂弾を近距離で当てると福音は吹き飛ばす。その隙をねらって箒は雨月を振るう。伸びたエネルギー状の刀が最後の翼を両断する。福音は崩れるように海面へと落ちていった。

「無事か？」

「私は・・・大丈夫だ」

ラウラが箒の側までやって来る。全員が福音が落ちた位置を確認する。全員が勝利を確信した瞬間、海面が強烈な光の珠によって吹き飛んだ。

「!?!」

見ると青い雷を纏った『銀の福音』が球体の中心にいた。

「まずい!これは

『第二形態移行』だ!」

ラウラが叫んだ瞬間、福音の頭部から眩いほどの輝きと美しさを併せ持ったエネルギーの翼が生える。

「キアアアアアア……！！！」

福音の獣の咆哮ほうこうのような声が当たりに響き渡る。

僕はまた雲の上に立っていた。しかしさっきまでとは違って空は満天の星空ではなく、晴天だった。

「本当にいいのですか？」

「え……」

僕は後ろを振り返る。そこには顔を半分ガードで覆い、白く輝く甲冑ちゆうこうを身に纏まとった女性がいた。大きな剣を自分の側に突き刺し、片手で柄つかを持っている。その姿はまさに白い騎士だった。

「本当に戦うのですか？」

「……はい」

僕の中で答えは出たんだ。もう迷わない。

「僕は……この罪を背負って戦いますよ。二度と……同じ過ち

を繰り返さない」

「あなたが戦えば、周りの人間もあなたの運命にまき込まれ、戦うことになってもですか？」

「・・・もしそれが本当なら、僕がこの手で全て守りますよ。この命と引き換えだとしてもです」

「・・・そう」

「じゃあ、いいんだね？」

「えっ？」

また後ろから声をかけられる。振り向くと、白いワンピースの少女がいた。さっき見た悲しい顔ではなく、人懐っこい笑み。少女は僕の手を取り、にこりと微笑^{ほほえ}む。

「行こう。みんなが君を待ってる」

「・・・そうですね」

僕はもう一度振り返り、白い騎士の女性に手を伸ばす。

「？」

「僕に・・・力を貸してくれませんか？」

「・・・」

白い騎士の女性はしばらく考えた後、その剣を持って僕の側まで来た。そして僕の手の平にそっと手を置いた。ガードで顔は見えなかったけど。その顔が少し笑った気がした。

「いいですよ」

「ありがとうございます」

三人で雲の上を歩いていく。空が少しずつ遠くなっていく。そんな気がした。

福音はその驚異的なスピードでラウラへと飛びかかる。

「なにっ!?!」

あまりの速さに反応できずラウラは足を掴まれる。

「ラウラを離せえっ!」

シャルロットは近接ブレードによる突撃を行う。しかし福音はそのまま掴んだラウラをそのままシャルロット投げつけた。

「ぐっ」

「うわっ」

二人がぶつかりその隙に福音はエネルギー弾で迎撃する。その爆発の中から二人が海に落ちていく。

「シャルロット！」

「ラウラさん！」

箒は雨月で突きを放つが・・・エネルギーは出なかった。

(そんな・・・エネルギー切れ？)

「箒さん!？」

っ!」

福音がセシリアの目の前にいた。両手両足の計四カ所同時着火による瞬間加速。イクニッション・ブースト福音の翼は巨大化しセシリアを包む。そしてエネルギー弾雨をゼロ距離で食らう。セシリアも海へと落ちていく。

「セシリア!頼む!紅椿、動いてくれ!」

しかしエネルギー切れで紅椿はその機体を維持するのが限界だった。福音は翼と翼の間にあるエネルギー弾雨を集中させる。そのエネルギーが巨大なレーザーとなって箒に放たれる。そして箒も落ちていく。

「うっ、うっ……」

箒は目を開けた。上を見ると福音のエネルギーの翼が大きくなっていく。専用機持ち5人全員に向けての《銀の鐘^{シルバークロウ}》。これが最後だと箒に告げるように。

(すまないな、一夏。私は……私は……)

その翼が輝きを増していく。箒は覚悟決めてまぶたを閉じる。福音のエネルギー弾雨が放たれる瞬間だった。

「うっ……」

目を開けると箒は抱きかかえられていて超高速で移動していた。体にGが少しかかるあたりISでも相殺しきれない程のすさまじいスピードで移動しているのがわかる。そして箒はその影を見る。

(だれ?)

見覚えのないISスーツ。髪型。その顔は白いバイザーで隠れていて見えない。その白銀のISは箒をエネルギー弾雨から救ってくれ

た。そして安全な孤島ことうに運び、膝をついて静かに箒を地面に置いた。見ると他の専用機持ちは既に運ばれている。この一瞬で五人を助けたそのISを見る。そのバイザーが量子変換により消える。そこには見覚えのある顔があった。

「い、一夏？」

「こんばんは、箒さん」

見間違えるはずがない。一夏がそこにいた。姿こそ変わっているがそこには寝ているはずの一夏がいた。箒は飛び上がりその胸倉むねぐらを取って揺さぶる。

「一夏！体は、傷はっ……！！」

「だ、大丈夫ですから、とりあえず離してください」

「す、すまん」

箒は慌てて一夏から手を離す。そこにいた一夏の目はどこまでも澄すんでいるように見えた。

「あ、そうだ。箒さん、これ」

「これは……リボン？」

一夏の手にあるのは白いリボンだった。

「今日は七月七日。箒さんの誕生日でしたよね？」

「あ………」

「おめでとつございます」

一夏からリボンを受け取り箒は呆然とそのリボンを見る。

「もしかしてブレスレットの方がよかったですか？」

「い、いや、そういうわけじゃないんだ。大事に……使わせてもらう」

箒は渡されたりボンで髪を縛った。

「あ。やっぱり白も似合いますね」

「やっぱり？」

「箒さんの水着、とっても綺麗でしたよ」

「な……」

箒の水着は縁の方に黒いラインが入った白いビキニだった。しかし箒にとっては露出面積が広く、いざ着ようとするとき恥ずかしくなる。だから初日の自由時間はなるべく人目が付かないように移動していたが、一夏は見ていたと言う。箒の顔は真っ赤になる。

「み、見ていたというのか！」

「だってあんなに拳動不審にしていたら気付くと思いますよ。まあ、他の人は気付いてないようでしたけど」

「あ、え、う……」

一夏に見られたという事実は箒に精神的に大ダメージだった。一夏のほうを見ると立ち上がって福音の方を向いていた。

「一夏、戦いに行くのか？」

「そうですね。何か問題でも？」

一夏が振り返る。その顔は戦いに行くのが当然だという顔をしている。あんなに戦うことをためらっていた一夏が、今はまぶしく見えた。

「それじゃあ、いつてきます」

「え？一夏？」

一夏は福音の方に向かっていく。その背中に迷いはなかった。

第二十話 ホワイト・オペラ（後書き）

次回は第二形態移行状態セカンド・シフトでの戦闘。次は三巻を終えて、次は設定を書こうと思ってます。今考えているものだからかなりイメージがしずらいと思ってます。さて、どうしたものか。書いているうちにどんどん書きたいことが出てきます。不思議ですよ。とりあえず頑張ります。

第二十一話 Knight of Heaven (前書き)

本当に書いていいのか迷ってしまい、いざ書こうかと思うとなかなか書けず。なのでところどころおかしいところがあるかもしれませんが。指摘してくれると嬉しいです。

第二十一話 Knight of Heaven

目を開けると砂浜にいた。もう夜なのか空には星が見えている。

「やあ、いつくん」

「・・・どうも」

声のした方を見ると東さんがいた。東さんの顔は笑ってる。

「で、どこかへお出かけかな？」

「今から戦いに行くんですよ」

「おお！ついにいつくんが戦場に？わーい！ドンドンパフパフ！」

東さんが妙に盛り上がっている。やっぱりこの人は何を考えているのかわからない。僕がやったことを責めるかと思えば僕が戦うことに賛成している。・・・そうか、わからないようにしているのか。なんとなくだけでもそんな気がする。

「東さん」

「うん？」

「行っってきます」

「うん！いつてら〜」

僕は白式に意識を集中させる。手首を見るとブレスレットがない。そして白式の待機状態であるガントレットには水色の装飾が施されている。その外見は小さな空。まさか……

「行こうか、白式」

光が渦を巻くように僕を包む。白式に今までの面影はなかった。I Sスーツは……これって確か師匠の修練着だったような気がする。白式本体には大型ウイングスラスターが二機から四機に増えている。なによりも黒い模様に金の装飾。無駄のない白銀の装甲が全身に必要最低限だけ付いている。その姿は師匠たちの天剣を連想させる。変わったなあ。そのスペックデータを空中ディスプレイで見ると、よく見るとブレスレットの機能が丸ごと白式に入っていた。他にも……これだけの变化……もしかして。

「白式の第二形態『ナイトオブヘブン天空の騎士』……」
「それがいつくんの第二形態移行……セカンド・シフトうん、そう言うと失礼だったね。それがいつくんの今の心なんだね。うふふ」

束さんが……失礼だけど気持ちが悪いくらいほどご機嫌である。とりあえずそっとしておこう。僕が飛び立とうとしたその瞬間だった。

「一夏！」
「は、はい！」

慌てて声のしたほうを見る。声と呼び方でわかったけど姉さんだった。

「本当に・・・一夏なのか？」
「他の誰かに見えますか？」

確信があって呼んだんじゃ・・・ああ、髪か。よく見ると髪形まで変わっている。ISは自己進化するって言われてるけど・・・ここまで変わるものだろうか。姉さんの顔を見るとどんどん凄みを増していく。怖い。

「どこへ行くつもりだ？」
「福音のところです。なので許可を」
「ダメだ！」
「え。別にいいじゃあーん」
「東は黙ってる！」
「うえーい。ちーちゃん怖ああ」

東さんはふざけているが実際怖いのが現実だ。体が震えそうになるが僕はなんとか抑える。

「どうしてだ。どうしてお前ばかり苦しむ・・・私は・・・」

姉さんが申し訳なさそうな顔をしている。そうさせているのは僕だ。
でも・・・

「それは姉さんも同じでしょう？」

「・・・」

「僕のせいで誰かが悲しむのはもう見たくないんです。だから・・・
前に進もうと思います」

「一夏・・・」

僕がすっかりしてないといけない。だから決めたんだ。立ち止まらないって。

「許可を・・・お願いします」

「・・・わかった」

姉さんの言葉を背に僕は海に振り返る。その視界の端に見えた姉さんの顔はいつもの落ち着いた顔だった。

「覚悟してくださいね」

福音に向かいながら僕は左手に雪片を呼び出す。その刀身が開き零落白夜の光が刀の形となる。

「天剣ヴォルフシュティンを復元レストレーション」

右手に青白い光と黄金色の光が集まりその光は剣の形になる。レイフォン師匠が使う天剣がそこにあった。僕は零落白夜のエネルギーを奔らせその刀身に零落白夜を纏まとわせる。その二本で福音に迫る。しかし福音はそれを踊るようにかわす。

(やっぱり速い。少し速度を上げますか)

僕は背中の中の四機のウイングスラスタダブル・イグニッションで二段階瞬時加速で加速。足の展開型スラスタで方向を調整して福音の背後に回ってヴォルフシュティンを振るう。狙うは福音のエネルギーの翼。しかし福音は振り返りシールドエネルギーで構成された疑似シールドで防ごうとする。しかしそれは叶わず零落白夜の光がそのシールドを切り裂き、ヴォルフシュティンが福音の腕の装甲を一撃で粉砕ふんさいした。

(威力が・・・高すぎますね)

「敵機てつきの情報を更新。最大攻撃力を使用する」

「！」

福音は僕から距離を取る。その翼が大きく開きそのエネルギー弾雨が撒き散らされる。無作為に放たれたそれは動けないあの五人にも攻撃が及ぶということでもある。

「させませんよ。天剣イージナスを復元^{レストレイション}」

ヴォルフシュテインが光に戻り今度は盾の形になる。リヴァース師匠の天剣である大型の盾。僕はその盾から広範囲に零落白夜のエネルギーを放出。福音の弾雨を必要な分だけ消していく。第二形態^{セカンド・シフト}移行したことによってシールドエネルギーの量は十分すぎるくらいだった。

(守ってみせる)

イージナスを右手に、雪片を左手に福音に向かう。

「痛っ」

「ここは？」

「うっ、油断しましたわ」

「っ！福音はどこだ！」

鈴、シャルロット、ラウラ、セシリアは目を覚さました。しかし自分が今いる場所は海の上ではないことに違和感を感じる。

「起きたのか？」

箒が全員に声をかける。残りの四人は自分達の安全を確認し次に福音の反応を追う。そこにあつたのは高速で移動している福音の反応とそれに近づこうとしている反応がもう一つ。全員がその方向を見る。

「あれは？」

「一夏だ」

「「「「一夏（さん）！？」」「」「」」

四人が驚くのも無理はない。全員が倒れた一夏のボロボロだった姿を見ているからだ。

「なぜ一夏さんが一人で!?」

「今のあいつに戦わせていいわけないでしょう!」

「どうしろと言うんだ! 私たちには戦えるだけの力が残っていると
言うのか!」

鈴とセシリアは福音に向かおうとするが箒の言葉で踏みとどまる。

全員のエネルギーがもう底を付こうとしている。これでは一夏の足手まといにしかならないとわかってしまう。箒はそれがもどかしくてつい声を張り上げてしまう。

「ねえ、箒」

「・・・なんだ？」

シャルロットが落ち着いた声で箒に尋ねる。

「一夏が自分で戦うって決めただよね」

「そうだが」

「うん、そうか」

シャルロットの顔が笑顔になる。どこか安心したような顔で。

「師匠がそう決めたのなら私たちはここで大人しく待っているべきではないのか？」

ラウラも何の問題もないように続ける。しかし箒は納得できなかつた。

「あいつは・・・ずっと一人で戦ってきた。そして今も・・・」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「私はいいつの隣に立ちたい！あいつを支えたいんだ！」
「箒!？」

突如紅椿の展開装甲から黄金おうごんの粒子あひが溢あふれ出だす。

「これは……!？」

ハイパーセンサーからの情報で紅椿のエネルギーが急速に回復していくのがわかる。

『絢爛けんらん舞踏ぶたう』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……
完了。

箒の目の前に表示されたのはワンオフ・アビリティーの文字だった。

「まだ終わってない。私たちは戦えるんだ」

箒は確信し専用機持ちを全員集める。

「いい加減、しつじふ」

僕はイージナスを前に出しながら福音に向かうがエネルギー弾雨が邪魔で前に進めない。第二形態移行したことにより、システムでシールドエネルギーが少しずつ回復していく。それでも零落白夜のシールドは消費が激しい。長時間使っていればそれだけでエネルギーが全て持っていられる。福音との距離が離れていく。そんな中、福音の下から砲撃が襲った。見るとラウラさんのレールカノンだった。

「一夏。ここは我々が抑える！」

「お任せください！」

「一夏！余計な心配しないで、さっさと片付けちゃいなさいよ！」

ラウラはレールカノンで、セシリアはブルー・ティアーズ、鈴は龍砲で福音を的確に狙っていた。

「一夏。僕たちが時間を稼ぐ！」

「だから早くしろ！」

シャルロットと箒も福音の足止めをする。全員が動けるのだと一夏も安心する。

「わかりました。僕がやります。天剣キュアンティスをレストレイション！」

天剣は一度に一つしか使えないようだ。僕はイージナスを消し、代わりに白いバイザー状のハイパーセンサーを呼び出す。名前の由来はデルボネ師匠が使っていた天剣。福音のありとあらゆる情報が表示される。

（銀の福音 シルバリオスベル

操縦者を確認

プログラムを構築）

「よし。ヴィルフシュテインをレストレーション」

僕は再びヴォルフシュテインを右手に呼び出す。雪片を光の粒子に変え、ヴォルフシュテインに吸収させる。甲高い音と共に剣だったヴォルフシュテインは刀の形になった。零落白夜の制御装置が強化され、零落白夜のエネルギーが感覚と数値でわかるようになった。

「後は・・・みんなを信じるだけだ」

これから放つ技を頭の中でイメージしながらヴォルフシュテインに零落白夜のエネルギーを奔らせ腰に添^そえる。一夏は福音に隙が出来るまで待った。

鈴とラウラが福音の動きを止めてシャルロットが催眠手榴弾を投げる。それをセシリアがブルー・ティアーズで正確に打ち抜き催眠ガスが福音の視界を埋める。その際に全員が同時に攻撃した。

「やったか？」
「まだよ！」

爆風で福音の姿は見えないがハイパーセンサーは福音がまだ稼働中であることを知らせる。福音がエネルギーの翼で爆風を払い、その翼が大きき開く。

「・・・終わりにしましょう」
「！」

四機のスラスターと両手両足のスラスターによる同時瞬時加速で福音の目の前にいた。あまりの速さに福音の反応が遅れる。一夏は斜め上にヴォルフシュティンを振り上げる。

天剣技『霞楼』かすみろう

一夏が放った一閃は無数の不可視な斬線へと変わる。その斬撃は福音の装甲を内部から破壊し、エネルギーの翼を少しずつ、まるで筆のように切り裂く。福音の絶対防御が発動し、強制解除される。

「おっと」

一夏は落ちていく福音の操縦者を抱える。その体に一切傷はない。
一夏が手加減したからである。

「いねいねい」

やっと終わった。見ると空は夜明けの光で僕らを照らしていた。

第二十一話 終

第二十一話 Knight of Heaven (後書き)

今回は短いですね。スイマセン。戦闘描写がうまく書けてたか不安です。

次回で三巻も終わりです。

僕は雪羅が好きだったりします。まあ、使いませんでしたけど。更新が遅くなって申し訳ありません。

今回は自分で文面を考えるのがほとんどでしたので悩みました。テレシアに関して書いていたときはスラスラと書けてたりしてたんですけどね(苦笑)。

とりあえず頑張りますのでこれからも応援お願いしますm()m

第二十二話 これからは・・・ (三巻終了) (前書き)

途中まで書いていたものがまた消えました。もうイヤ・・・ORZ
とりあえず書き直しました。どうぞ。

第二十二話 これからは・・・（三巻終了）

福音撃破後、僕たちは無事旅館に帰ってきた。そこで待っていたのは腕組みをしている姉さんと気まずい顔をしている山田先生だった。

「作戦完了　　と言いたいところだが、お前達五人は重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出だ。懲罰用の特別トレーニングも用意してあるから、そのつもりでいる」

「ちよつと待つてください！何でこいつだけ免除なんですか！？」

鈴さんが僕を指差して大声を上げる。人に指を向けるのは失礼ですよ。

「こいつはちゃんと許可を取ったからだ。だがお前達はどうか？独自行動で福音に向かった。それでも何か言いたい事があるなら言うてみる、^{フアン}凰」
「うっ」

まあ、こうなるよね。これで反論できたら大したものだ。でも、みんな疲れてるだろうなあ。よし。

「あの、織斑先生？」

「なんだ？」

「その懲罰用のトレーニングのことなんです、僕が五人分の懲罰用のトレーニングを受けます。だからこの五人は免除してくれませんか？」

専用機持ちが全員僕を見ている。山田先生は信じられないという顔をしている。

「織斑君。さすがにそれはつらいと思います」

「僕が失敗しなければこんなことにはなりません。それに、みんな疲れているのにすぐに懲罰用のトレーニングなんてしたら倒れちゃいますよ」

懲罰用というくらいだからきついだろうけど、なんとかなるはずだ。

「……………まったく。どうしようもないな、お前は」

「ん？」

見ると姉さんが呆れた顔あきでため息をついていた。疲れてるのかな。

「いいだろう。今回はこいつに免じて許してやる。しかしこのようなことがまたあった場合、お前達には倍の量をこなしてもらおう。いいな」

「「「「は、はい！」「」「」
「最後に・・・よくやった」
「「「「え？」「」「」

そう言うと姉さんは振り返り旅館の中に戻っていく。やっぱり心配だったのかな。本人は顔には出さないだろうけど。とりあえずこれで一件落着。

場所は大宴会場。そこでIS学園の生徒と教師はそれぞれ夕食を楽しんでいた。もちろんメニユーは全員違う。しかし初日とは違いそこは騒がしいものだった。

500

「ねえ！専用機持ちが全員いないよ！」
「みんなどこに行ったの？」

そんな中、とある七名は夕食を早めに済ませ全員が別々のところにいた。

「いったいどこにいるんだ？」
「一夏さんに何があったのか聞こうと思ってましたのに」
「なんであいつはすぐになくなるのよ」
「うーん、一夏が行きそうな場所は」

「ふむ。教官に嫁の居場所でも訊いてみるか」

全員が黒一点の一夏を探していた。そしてもう一人は別の場所へ向かっている。

ある岬の先。そこに束はいた。高さは三〇メートル近くあり、落ちたら無事では済まない場所である。しかしそんなことは気にせず空中ディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺める。その顔はいつになく楽しく、嬉しそうである。

「あかつきはき紅椿の稼働率は四九パーセント。けんらんぶどう絢爛舞踏を含めれば五十六パーセントか。はは、いっくんはすごいなあ。あんな短時間でここまで調整してたんだ」

しばらく見た後に束は別のディスプレイを呼び出す。そこでは白式びやくしき第二形態の戦闘映像が映し出されている。

「盾に剣はいいとして、まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて
まるで」

「まるで『びやくし白騎士』のようだな。コアナンバー〇〇一、お前が心血を注いだ一番目の機体にな」

森から出てきた千冬がその一本の木にその身を預ける。

「やあ、ちーちゃん。元気？」

「まあな」

二人はお互いの顔を見ずに話を続ける。どんな表情をしているのかは見なくてもわかっている。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんでしょ
うか？Thinking time！」

「白式を『しろしき』と読めば、それが答えなんだろう？」

「うわ即答。さすがはちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのこと
とはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体はそのコアを残して解体された。
そのコアは第一世代型の作成に大きく貢献した。そしてそのコアは
とある研究所襲撃事件によりその行方がわからなくなる。いつしか
『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた。

「さて、久しぶりに会ったんだ。少し話でもしようか？」

「うん。そうしよう、そうしましょう」

「そうだな。……例えば、とある天才が一人の男子を高校
受験の日にISがある場所に誘導できるとする。そこにあったIS
を、その時だけ動くようにしておく。すると男が使えないはずのI

Sが動いたように見える」

「ん〜？でも、それだと継続的には動かないよねえ」

「そうだな。お前は、そこまで長い時間同じものに手を加えることはしないからな」

「えへへ。飽^あきるからね」

「・・・で、どうなんだ？とある天才」

「うふふ、どうなんだろうねー。実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねえ」

「ふん・・・。まあいい。まだあるぞ」

「ちーちゃんがこんなに話すなんて、珍しいね」

「そうかもしれないな」

実を言えば、千冬は自分の中の何かが軽くなっていたような気がしていた。今は少し気分がいい。

「とある天才が大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、どこかのISの暴走事件だ」

東は何も言わないが、それでも千冬は続ける。

「暴走事件に際して、妹の乗る新型の高性能機を作戦に加える。妹は華々（はなばな）しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」
「へえ、すごい天才がいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、十二カ^{かく}国の軍事コンピユーターを同時にハッキングするという歴史的な事件を自作した、天才がな」

束は嬉しそうに笑う。彼女は立ち上がり千冬の方を向く。

「じゃあ今度は束さんのお話。パチパチパチ」

「で、どんな話なんだ？」

「いっくんのことだよ」

「あいつがどうしたと言っんだ」

千冬はわからないという顔をしているが束は続ける。

「いっくんがボロボロになって家に帰ってきたことは憶えてる？」

「………ああ」

私^{わたし}がたまたま家に帰って来た時、一夏はまさに満身創痍^{まんしんそうじ}という状態で倒れていたところを見た。一夏自身からは聞けなかったが危険な訓練をしていたことは後でわかった。

「その時の傷は今見える？」

「今は見えない。たぶん治^{なお}ったのだろう」

「痕^{あと}も残さずに？」

「………何が言いたい」

千冬は束を鋭い目で睨^{にら}む。その姿を見失わないように。

「ちーちゃん。いつくんはね、選ばれた子なんだよ」
「それはどういう意味だ」
「これからってことだよ。楽しみだなあ」
「！」

束はなんの躊躇ためらいもなくその岬を飛び降りる。千冬はその岬の辺りを探すが束はいなかった。

旅館の一番高い屋根の上。一仕事終えた一夏はそこにいた。その屋根の上に座ろうとした瞬間だった。
ズキッ

（う。これは・・・もしかして全身が筋肉痛？）
超高速加速の反動が今頃来ていた。一夏はバランスを崩し仰向けあおむになる。

（帰ったらPICと操縦者保護プログラムの強化と・・・自分自身

を鍛え直そうかな)

夜の空気が優しく一夏の体を冷やし、眠気を誘う。

(夢を・・・見た気がする。あれ・・・思い出せ・・・ない・・・な)

一夏は眠ってしまふ。しばらく仮眠をとるといふ形だったがその眠りは妨げられる。

スツ・・・ぴと

「ん」

額に触れた冷たい感触に一夏は目を覚ます。そこにはだれかの手があった。

「・・・姉さん」

「すまん。起こしてしまったか」

「ううん。別にいいよ」

「そうか」

姉さんが僕の隣に座っていた。僕は起き上がって姉さんの方を見る。

「どうしたの？」

「ひとつ訊きたい事があったな」

「うん」

姉さんがどこか暗い顔をしている。どうして？

「もし・・・戦うことから逃げられないとしたら・・・どうする」

逃げられないか。そういえば東さんも似たようなことを言っていたよ
うな気がする。

507

（力を持った人間は戦わなくちゃいけない。力の使い方はいっくん
が一番知ってるよと東さんは思ったんだけどなあ）

僕は逃げない。もう間違ったりしないから。

「戦いますよ。たとえどんなに苦しくても」

「そうか」

姉さんの表情から陰りが消える。これでよかったのかな。

「で、下にいる五人。お前達もここまで来たらどうだ？」

ギクツ×5

何か気配がすると思ったらそこには篝さん、セシリアさん、鈴さん、シャル、ラウラさんがいた。

「あの、さすがにそこまでは」

「そもそもどうやって上り扉ましたの？」

「一夏！あんたが降りてきなさいよ！」

「ラウラ、あそこまでいけると思う？」

「うむ。できるかもしれんが・・・」

というわけで、僕が全員上まで運びました。安全を考慮して一人ずつ。僕と姉さんが少し上に、五人が少し下のほうに座った。うーん、気まずいのかな？

「うん。これからは」

全員が一夏の方を見る。一夏は優しい顔で宣言する。

「ぼくがみんなを守りますよ」

(この手で。この力で。自分の持てる全てで守ろう。それが・・・今の僕だ)

専用機持ちの五人は一夏から目を逸^そらす。その顔は耳まで真^{まじ}つ赤である。

「やれやれ」

千冬は一夏に聞こえないようにため息をつく。その夜の星空は綺麗なものだった。

臨海学校最終日。朝食を終えて僕らは全てを片付けて、今はそれぞれのクラスのバスの中である。

(さて、どうしたものか)

昨日は体を休めることに専念していたため、僕はとある用事を忘れていた。正直この問題はほったらかしにしているものではない。

「どうしたの一夏？」

「いや、実は」

「ねえ、織斑一夏くんっているかしら」

「あ、はい。僕ですけど」

バスに一人に女性が入ってきた。僕はシャルにことわって女性の方に向かう。鮮やかな金髪で整ったプロポーション。格好はというとブルーのサマースーツ。姉さんとは違ってビジネススーツではなくおしゃれのためのカジュアルスーツだった。

「君がそうなんだ。へえ」

その人は僕を見つけると近くまで寄ってきて興味深そうに僕を眺める。品定めではなく、純粹に興味で僕を観察している。わずかに香る柑橘系かんきつけいのコロンがなんとも女性らしい。まあ、人をじろじろと見るのはよくないことだけだ。

「どうかしましたか？ ナターシャ・ファイルスさん」

「あら。やっぱり知ってたのね。そう、私わたしがナターシャ・ファイルス。『シルバリオ・ユスベル銀の福音』の操縦者よ。ナターシャでいいわ。白いナイトさん」

篝さん、セシリアさん、シャル、ラウラさんが慌てて自分の席から

飛び出す。それを一瞥するとナターシャさんが僕に顔を近づけてくる。僕は彼女の口を人差し指で止める。

「あら？」

「女性がそう簡単にキスするものではありませんよ？」

「そう。残念」

本当に残念そうにしているナターシャさんだった。まあ、それはいいとして。僕が忘れていた用事はこの人が最も関係している。ちょうどよかった。

「ナターシャさん。これを」

「これは？」

僕の手にあるのは小さなデバイスである量子変換機とメモリースティックが一つ。

「こっちは量子変換機で福音のコアが入ってます。こっちのメモリースティックには福音のスペックデータが入ってます。あ、第二形態移行後のデータも一応入ってますよ」

「いつの間に『あの子』のコアを？」

「あの戦闘の最中に失礼ながら全てのデータを見させてもらいました。隙を突いてコアの疑似データを福音に無理やりダウンロードしてコアを追い出すような形でその機体と引き離しました」

「じゃあ、これは本物？」

「はい」

僕は量子変換機からそのコアを出し、空中ディスプレイでデータをナターシャさんに見せる。他の生徒は何やら危なそうな会話をしているのではないかと視線をそらす。実際は国家機密である。

「わかったわ。でも・・・」

「でも？」

「コア・ネットワークでこの子の存在はばれると思うの」

「それなら問題ありません」

「え？」

「このコアの疑似データは凍結処理されればそのままコア・ネットワークとして機能し続けます。そうすればステルス機能と同じ原理で実際の福音のコアの存在はばれません」

「凍結処理のことまで！？でもあれは確か極秘で

「何か問題でも？」

ナターシャさんの顔色が少しずつ青ざめていく。そしてその体は傾いていく。

「ナターシャさん？」

ナターシャさんは僕の胸に顔を埋めていた。泣いていた。

「ありがとう・・・本当に・・・」

僕はナターシャさんの背中に手を回して優しく抱いた。ナターシャさんが落ち着くまで。

ナターシャはしばらく泣いた後、一夏が見送り、自分は手を振ってバスを出た。降りた先に目的の人物を見つけてそちらへ向かう。

「随分と嬉しそうだな」

そう言ったのは千冬であった。ナターシャはそれに笑顔で答える。

「素敵なプレゼントをもらいましたから」

その顔を一瞥し、次にバスの方を見る。

「一夏！お前は どうしていつも そうなのだ！」

「一夏さんは誰にでも優しすぎます！」

「一夏。覚悟はできてるよね？」

「一夏！見損なっただぞ！」

四人の怒号がバスの外からも聞こえていた。

「はあ………。それより、昨日の今日でもう動いて平気なのか？」

「ええ、それは問題なく。私は、この子に守られていましたから」

「そうか」

「あ、でもこんなことをした元凶げんきゆうを私は許す気はありませんよ」

顔は笑顔だが殺気に近い気配まじわを纏まとわせる。

「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会さもんいんかいがあるんだろ？しばらくは大人しくしておいたほうがいいぞ」

「そうですね。あのナイトさんの連絡先を教えてくださいましたら考えましよう」

ナターシャはバスの方を見る。千冬はナイトとは誰なのかを察し、しぶしぶ携帯を開く。

「ありがとうございます」

携帯が受信したのを確認するとナターシャは歩き出す。

「しばらく大人しくしてますね。では」

千冬は歩み去るナターシャの後姿を確認しバスへ向かう。

「姉さん。ちょっと助け　　うわっ！」

ちよつとバスの窓から顔を出したと思うと一夏は車内に引き戻されていた。

「まったく、世話の焼けるやつだ」

これからまた忙しい日々が続いていくのであった。

第二十二話 終

第二十二話 これからは・・・ (三巻終了) (後書き)

どうでしたか？出来は悪くない方だと思ってます。

ただいま四巻のネタで悩んでいます。さて、どうでしょうか。

とりあえず頑張って書きますので応援よろしく願います。

設定 天空の騎士(ナイトオブヘブン) (前書き)

『Knight of Heaven』通りですが一応書いておきます。

本人はやりすぎたと思っています。

設定 天空の騎士（ナイトオブヘブン）

白式・天空の騎士 ナイトオブヘブン

操縦者・織斑一夏 そつじゅうしゃ おりむらいちか

白式が第二次形態移行した機体。セカンド・シフト

黒い模様に金の装飾が施された無駄のない白銀の装甲が全身に必要な最低限なだけ付いている。ウイングスラスタが二機から四機に増えたことにより二段階瞬間加速を可能にした。一夏自身にも変化があり、ISスーツと髪型が変わる。（具体的にいうと、ISスーツはレイフォンの天剣時代の修練着で髪型は一夏の髪の色はそのままに、レイフォンの髪型に少し近づけた感じです）待機状態のガンレットは左手首のブレスレットを吸収したことにより空をイメージした色合いが追加されている。両手両足の展開型スラスタ、自動防御機能、ガード実戦モード、ブレスレットの機能は健在である。最大の特徴は彼の師匠たちの武器である天剣が使えることである。

『実戦モード』

一夏の掛け声に呼応して発動し、発動した時にシールドエネルギーを含めた全エネルギーを回復する。変わったのはブレスレットのシステムと白式のシステムが融合してシールドエネルギーが少しずつ回復するようになったこと。シールドエネルギーは通常状態では800、実戦モードでは3000まで上がるようになった。

『サイハーデン刀争術、水鏡渡り』みかがみわた Ⅱ 同時瞬時加速マルチ・イグニッション・ブースト
四機のウイングスラスタと両足両足の展開型スラスタの計八機のスラスタで同時に瞬時加速イグニッション・ブーストを行う超高速移動。ISのハイパーセンサーの反応速度を超えるほどのスピードを出せる。強化されたシステムにより長時間この状態で移動できるようになった。この際に発生するGは、後日一夏が軽減に成功。

武器と技

《雪片》

白式の唯一武器だったIS用の近接ブレード。一夏にとっては自分の思まわしき過去であり、罪の象徴でもある。自分がやったことを背負うと決めてからは使うことに躊躇ためらいがなくなった。

・ 『サイハーデン刀争術、焰切り・翔刃』ほむらのかげ しょうじん

零落白夜のエネルギーではなく、白式のエネルギーで炎のように赤いエネルギー状の刀身を作り出す。相手に瞬時加速で接近。雪片を振るう際に腕の展開型スラスタで斬撃を強化する居合いあいの技。瞬時加速イグニッション・ブーストと並行して使うためエネルギーの消費が激しい。『雷迅』は通常の雪片で突きを行う技。

・ 『サイハーデン刀争術、焰重ね・紅布』ほむらのかげ べにぬい

焰切り・翔刃で振り上げた雪片で上から雪片を振り下ろす。その刀身を斬線としてその場に残す。その斬線はレーザーのように熱線へと変える技。レーザーの射程距離は雪片に流したエネルギーの量に比例する。

・ 『轟剣』

「設定 白式」に同じ。

天剣

破壊不可能といわれている白金鍊金鋼ブリチナダイトという特殊な合金を使っている。元は天剣を所持することを許された天剣授受者てんけんじゅじょうしゃと呼ばれる者の最高性能の武器。雪片と違い、どれだけ零落白夜のエネルギーを奔はしらせても壊れることはない。一夏が使えるのは一度に一つ。

《ヴォルフシュテイン》

使用者：レイフォン・ヴォルフシュテイン・アルセイフ

形状：剣

零落白夜のエネルギーを奔らせ、纏まとわせればISのアーマーを一撃で破壊できるほどの攻撃力を持った武器。一夏は対人戦の時に雪片を吸収させてその威力を抑おさえている。その時の形状は刀である。

・ 『天剣技・霞楼』

無数の不可視な斬撃による内部浸透破壊ないぶしんとくはかいこうげきの技。近距離攻撃で、その一つ一つが零落白夜の斬撃である。

・ 『轟剣』

「設定 白式」に同じ。しかしヴォルフシュテインが壊れることはない。

《イージナス》

使用者：リヴァース・イージナス・エルメン

形状：盾

鉄壁の防御力を誇る大型の実体シールド。単体でも身を守るには十分なほどである。

・『金剛剄』

零落白夜のエネルギーシールドによる防御技。相手のエネルギー攻撃を完全に無効化することができる。高密度に零落白夜のエネルギーを奔らせることにより実弾をそのまま相手にはじき返すことができる。展開範囲と密度は自分で調整することができる。

《キュアンティス》

使用者：デルボネ・キュアンティス・ミューラ

形状：小型の杖

シャープなラインが特徴である白いバイザー。一夏専用の超高感度ハイパーセンサーである。見た対象を瞬時に解析し、一夏の目配せ^{めくばせ}だけで対象に関連するプログラムを作ることができる。対策用のプログラムは一夏が一度対象のデータを全て把握する必要があるため少し時間がかかる。キュアンティスを装備している間は白式の装甲から零落白夜のエネルギーでできた蝶^{ちよう}を作り出すことができる。その蝶は小型の爆弾でもあり、その威力と数は事前に調整できる。キュアンティスを解除するとその蝶も消える。

設定 天空の騎士(ナイトオブヘブン) (後書き)

イージナスと雪片があれば、残りはどうでもいいんじゃないかと思
ってしまった作者です。今後は外伝やらオリジナルストーリーを書
いていく予定ですが、自分にはこっちの方が向いているのではない
かと悩んでおります。とりあえず、これからも応援よろしくお願
いします。m(´`m(´`m

運命に選ばれた二人の天才 篠ノ之束（前書き）

お久しぶりです。いろいろ事情があつてパソコンが使えません。シヨック（T・T）。とりあえずパソコンが使えるところで書いています。これからまた書き始めようと思つてますが書けないことが多い分ほとんどなので更新が遅れます。すいません。今回は外伝でありプロローグみたいなものです。最初に書かなかつたのは作者の文才がなかつたからです。本当にすいません。でもこの物語で結構大事な一面だったりします。それではどうぞ。

運命に選ばれた二人の天才 篠ノ之束

今から四年前、それは突然起こった。

そこはISの開発者である篠ノ之束しののたばねのとある研究所。そこには何かのパーツやらケーブルが散乱している。その散らかりようは一夏が見れば卒倒ものである。そんな魔窟まくつの片隅に・・・オーロラが見えた。

「何あれ何あれ！？すごい！」

束は自分が座っていたイスを蹴飛ばしオーロラのほうへ向かう。イスが派手な音を立てて研究所を転がっていくが束は全く気にしていない。ただ目の前の光景に好奇心がくすぐられる。

「うわ、うわ。触れる。そして・・・吸い込まれる」

実際は束がオーロラに向かってダイブした。何の危険も顧みかえりずにその中へ。なんとも無謀である。その先にあったのは、天井に光が流星のように駆ける奇妙な空間だった。

「ありゃ？何にもない・・・つまんないの」

束は残念そうにそう言う。ISを開発してから束は政府や何やらから追われる日々を楽しんでいたがまだ足りなかった。そこでやっと見つけた面白そうなことなのに裏切られた気分である。しかしそんな束の周りに気味の悪い色をした霧が集まり人の形を成す。黒いコートを着込み、狼のような仮面をつけているのが八人。束を囲むように立っている。

「貴様は何者だ。どうやって入ってきた」

機械音声の様な声。それぞれがノコギリのような歪な刃を持った剣やカッターなどを持っている。束の関心はその武器に向けられる。

「変わった武器だね。でもよく見るとただの鉄じゃなさそうだね。ねえ、ねえ、それなあに？」

束の口の端がつりあがる。それは「錬金鋼^{ダイト}」と呼ばれる「記憶復元」の特性が備わった特殊合金である。束も知らない、本来ならありえない物質。さっきまで落ち込んでいたが、自分の興味を引くものにその目が輝く。しかし帰ってきた答えは物騒なものだった。

「貴様が知る必要はない。おまえは我々狼面衆^{ウルフフェイス}により滅び、たとえ生きていたとしても我々同様ここからは出られはしない」

狼面衆が束に刃を向ける。当たればもちろん命はない。しかし束はヒラリヒラリとまるで舞うようにかわす。青いロングスカートが優雅に広がる。

「なぜ当たらない!？」

「仕方ない。同時にいくぞ」

狼面衆が一齐に束に向かい武器を振り下ろす。しかしその振り下ろした先には何もなかった。

「どこに……」

「上だ!」

束は上空へ避難し狼面衆を見下ろす。その顔は笑っている。

「演出はかつこよく」

束は空中で一回転。束の周りに光の粒子が集まり束は移動型ラボを展開する。ISの前腕部のようなパーツが計十六本。名前は「我輩は猫である（名前はまだ無い）」。第三者が見ればまるで阿修羅あしゅらのようである。

「どーん！」
「がはっ」

束は急降下で勢いをつけて狼面衆をその十六本の腕で地面に押さえつけた。

「放せ！」

「何を言っているんだい？束さんはIQという名の限界を超えた mad scientist だよ？その天才がそんな馬鹿なことをするわけないじゃないか。フアーアーハッハッハッハ

は？」

束は自分の目を疑った。見ると狼面衆がまるで風船のように膨ふくれれ上がっていく。そして……。

「ぐあああああああああ」

ドオオオオオオオオン！

狼面衆は全員爆死した。まるで体の中に爆弾があったかのように破裂した。

「……………」

束はそれを冷たい視線で見ている。いくら狼面衆が人間ではないとはいえ、人の形をしたものがこんなふう^に死ぬのはあまりいい光景ではない。

「帰ろうかな」

何かが束の中で冷めてしまい、束は元の場所に帰ろうとする。来た道に向けて踵^{かかと}を返したときだった。

カッソ。

ヒールのような高い足音と共に辺りの空気が振動する。束は自分の背後に圧倒的な存在を感じた。

「お、おお!？」

束は振り返る。振り返られずにはいられない。そこにいたのは特徴的な金髪をした少女だった。無表情。その視線はどこまでも冷たく、その存在感はすべてを否定するように濃いものだった。

「あなたは？」

「相手の名前を聞くときはまず自分から名乗るものじゃないかな？私^が知っている少年はそういうと思うな」

「……………私はナノセルロイド・マザーI・レヴァンティンです」

「長い。覚えづらいね」

「……………ヴァティ・レンです」

「OK、ヴァち〜！」

「……………」

ヴァティは黙ってしまふ。東は少しふざけすぎたかと思い、何とかしようと話題を考える。そしてヴァティを見て言った。

「すごいよね。ナノマシンだけでそこまで人に似せて作れるなんてね。東さんはびっくりだよ」

「……………東……………ですか」

反応があつたので東はそのまま続ける。

「あのさ、ここはどこ？」

「ここはオーロラ・フィールドです」

「オーロラ・フィールド？」

「オーロラ・フィールドとはオーロラ粒子によって作られる人工の亜空間のことです」

「そりゃすごいね。じゃあオーロラ粒子は？」

「オーロラ粒子は人の思念に反応して新しい世界を形成すると言つ性質を持ち、亜空間増設機に対して思念波によってデータの入出力を行うことでオーロラ粒子が反応し、新たな亜空間を形作るものです。私のナノマシンのエネルギー源はそのオーロラ粒子です」

まるで辞書を読むかのように説明したヴァティだったが、束は話をしてくれたことをうれしく思った。

「で、なんでこんなところにいるんだい？」

「好きでここにいるわけではありません」

「どういうこと？」

「私たちは本来あなたたちとは異ことなつた世界の住人です」

「・・・そっか。やっぱり」

あまり驚きはなかった。さっき見た武器を見ればこの束側たはながわの世界のものではないとそう説明できるからだ。

「どういうわけかあなたたちの世界と私たちの世界はこのオーロラ・フィールドで繋がっていて、お互いを引き寄せています。このままではぶつかり合い、両方とも滅びます」

「・・・マジで？」

「なのに私は元の世界に帰れないのです。だからその解決策を考えました」

「うん、それで？」

「私が出だした結論、それは・・・」

場の空気が張り詰める。束はヴァティが次に発した言葉を疑った。

「そちら側の世界を破壊します」

「できると思う?」

「問題ありません。戦力なら十分ありますから」

ヴァティがそう言うとヴァティの背後に異様な姿をした二体の巨大な化け物が現れた。一体は空を覆うほどの巨大なドームのような、もう片方は子供が作った巨大な泥人形のような、しかし驚くべきところはその三体がヴァティと同じようにナノマシンで構成されている。オーロラ粒子を吸収し、無限と言えるほどのエネルギーを有していることだ。

「これはまずいね」

束が開発した世界最強の兵器、IS。それでも敵^{かな}わないかもしれな
いような生物兵器。束がそう思ってしまっほどの相手だった。

「確かに戦力は十分のようだね」

「そうです」

「でもさ・・・」

束は二体からヴァティに視線を戻す。

「君たちはここから出られないんだよね?」

「・・・」

元々表情に変化が見えないようなヴァティだった。少しだが確かにその表情が歪んだ。さっきの狼面衆の話では自分たちはここから出れないと言っていた。それはヴァティも同じだった。

「そこで東さんからの提案です」
「・・・何かあるのですか？」

東の笑みが深くなる。しかしその笑顔は歪んだものではなく、やさしいものだった。

「私が君たちをこの空間を解析してここから出してあげる」

「できるのですか？」

「私を誰だと思ってるの？」

「東です」

「あははははは。確かに」

東は楽しそうに笑った。どこかでヴァティと心が通じたと思った。

「でも条件が二つある」

東は二本の指を掲げる。^{かか}

「なんですか？」

「なるべくこっちの世界には手を出さないでほしい」

「本気で言っているのですか？」

「解析に時間がかかるかもしれない。もし我慢が出来なかったら手を出してもいい」

「……………」

ヴァティは考えている。その沈黙は永遠に感じられた。

「どうかな？」

ヴァティは束のほうを見て言った。それだけで説得力は十分だった。

「考えておきます」

「それともう一つ」

掲げていた二本の指が一本になる。束の笑顔は子供のように無邪気なものに変わる。

「君たちが使っているそのナノマシンを少しわけてもらえないかな？」

ヴァティがまた無表情になる。しかしその顔からは警戒心が見て取れる。

「何をするつもりですか？」

「それは内緒」

.....

「まあ、いいでしょう」

ヴァティの周りに無数の小さな光が集まる。それは束の知らない、オーロラ粒子を吸収してエネルギーにするナノマシンだ。束はそれを『我輩は猫である（名前はまだ無い）』の一本の腕を掃除機のようなものに変換してナノマシンを全て回収する。

「あ、そうだ」

「なんですか？」

「このナノマシンで監視をするなんて陰気くさい事しちゃ駄目だよ？」

「.....わかりました」

長い沈黙だった。たぶんやるつもりだったのだろう。しかし念を押しといたので大丈夫だろう。束はそう思った。

「それじゃあ、バイバーイ！」
「・・・期待してます」

束はヴァティに手を振りながら来た道に戻る。しばらくするとオーロラの渦が見えた。入ると見えたのは自分の研究所だった。

「さてこれからどうしようかなあ〜」

今の束には世界を救うことも、滅ぼすこともできるかもしれない。それだけのものが束にはあった。どちらにしようか考えている。

「うーん・・・よし！」

しばらく上を向いて考えたあと、束は笑う。その声は嬉しそうである。

「どっちもやっちゃおうか！」

その方が・・・きっと楽しいから。

運命に選ばれた二人の天才 篠ノ之束（後書き）

どうでしたか？

気づけば作者もびっくりするぐらい話が大きくなってました。かなり時間をかけて考えたのでどこかおかしな所があったら言ってください。では、これからも I S 「白を纏いし Heaven S W o r d」をよろしく願います！

運命に選ばれた二人の天才 織斑一夏（前書き）

どうもです。今回は一夏編。一夏の修行時代とこれからのことです。選ばれたというより巻き込まれたと言う方が正しいかもしれませぬ。突然ですが一夏の夏休みの一週間の予定です。日曜日はフリー。水曜日も基本はフリー、だけどたまに予定が入る。月、木、土がテレシアで仕事。火、金が鍛錬といった感じですよ。一応言っておこうかと。前置きはこれぐらいにします。それではどうぞ。

運命に選ばれた二人の天才 織斑一夏

今から三年前。

一夏がテレシアにスカウトされ、仕事が板についてきたある日。帰り道にある建物を見つけた。本来ならそこにあるはずのない、質素で大きな建物だった。

(ここ、なんだろう?)

目の前には大きな扉。その先からは何とも言えないプレッシャーを感じる。耳を澄すますと、まるで太鼓を叩いたような鈍い音がひっきりなしに聞こえてくる。一夏はまるで突き動かされるようにその重い扉を開ける。開けると広い廊下が目の前に広がる。音は進むたびに大きくなり、またドアが一つ。その先には更衣室のような場所があった。シャワーもある。

(何かの運動部? それにしては全体が大きすぎるし・・・野球をやるには狭すぎる・・・そもそも野球をしてるような音でもない)

音は次第に大きく、連続して聞こえてくる。更衣室にある、外に繋がっているであろう一つのドア。轟音が鳴り響く。そこからビリビリと・・・殺気が感じられる。

(あれ？体が・・・震えてる？)

自分でもビックリするぐらい体が動かない。恐怖？それとも・・・。

一夏はドアを開ける。開けた瞬間、広いフィールドに出た。突風に一瞬目を閉じそうになるが一夏は前を見る。目の前の光景に・・・言葉を奪われる。

「うーん、暇だね」

「そんな嬉しそうな顔でよくそんなことが言えますね」

声はするのにそこには何本もの黒い線しか見えなかった。それでも轟音は鳴り響き、突風は荒れ狂うように一夏の横を吹き抜ける。その周りに数人、とてつもない存在感を持っている人影。その全員が一夏を見る。一夏は思わずすくんでしまう。

「おや？こんなところにお客さんとは珍しい」

黒い線が人の形になる。現れたのは背の高い男だった。長い銀髪を後ろで結び、その顔は笑顔だ。

「ど、どうも」

その人が僕の顔を見ている。ただ僕は少し不安だった。その顔は笑顔なんだけど、何を考えているのかわからない・・・少し不気味な笑顔だった。

「サヴァリスさん、なんか困ってますよ？」
「おっと、これは失礼」

どうやら名前はサヴァリスさんだそうだ。今度は特徴的な茶色の髪で目は藍色の男が近づいてくる。

「・・・へえー」

サヴァリスさんよりも背が低い、でも自分と同じぐらいの背丈。ちよっと負けてるかな。その人が僕をまるで何かを探るように見てくる。何だろう・・・自分と少し似てる気がする。外見ではなく、中身というか。

「あ、すみません。僕の名前はレイフオン・アルセイフです。よろしく」
「あ。これはごく丁寧にどうも。織斑一夏です。」

差し出された手を握り、お互いにペコペコと頭を下げる。うん、この人とは仲良くなれそうだ。

「その人は誰ですか？というか女王はいつたいどこへ？」

「なかなか良さそうな子じゃありませんか」

「うん、面白そうな子ではあるね」

「なに？リヴよりいい男なんているわけないじゃん」

「筋はしっかりしているのう」

「いつまでそんなことをしている。もつと背筋を伸ばさんか」

「そのペコペコやめろ。ウザッ」

「なんだ男かよ。綺麗な女ならよかったのになあ」

「随分と細い体をしているな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（上からレギオスのカナリス、デルボネ、リヴァース、カウンティア、ティギリス、カルヴァーン、バーメリン、トロイアット、ルイメイ、リントンスです）

周りにいた全員がいろいろと言ってくる。最後の人は不機嫌そうに何も言わなかったけど。

「・・・・・・・・えーつとですね」

「なんですか？」

全員が僕の方を向く。気圧されそうになるけど僕は声を振り絞った。

「僕を鍛えてください！」

どうしてあんなことを言ったんだろつか。いくらなんでも血迷っていたとは思えない。

そして一夏の天剣授受者による、地獄よりもつらい修行が始まった。

数週間後

・修行その1

メンバー：レイフォン、カナリス、カルヴァーン、デルボネ

「まさかあそこまで飲み込みが早いとは思ってませんでした。誰に似たのやら」

「びつくりだな」

カナリス、カルヴァーンは自分の剣技を全て一夏に叩き込んだ。今はレイフォンと一夏が高速で移動しながらヒット&アウェイで剣をぶつけ合っている。

「で、なぜ二本なのだ？しかも片方はお前の予備だろう？」「
「そういうあなたはどうなんですか？」

一夏が握っているのはカナリスからもらったレイピアとカルヴァー
ンからもらった幅広の長剣の錬金鋼ダイトだった。一夏はその二本を別々
に使っている。その太刀筋はカナリスとカルヴァーンのものだった。

「二本でないとレイフォンの斬撃に追いつけないそうですよ」

「しかしあれではバランスが悪い」

「織斑は自分で調整してあの二本を同じ重さにしたそうですよ」

「なに！？自分でだと！？」

「はい」

「……頭まで良いのか、あいつは」

レイフォンと一夏はインファイト状態になる。一夏は二本で、レイ
フォンは天剣であるヴォルフシュティン一本で迎え撃つ。二本使う
ことにより一夏はレイフォンの斬撃を正確さばに捌いていく。

「織斑、相手の動きをよく見ていないといけませんよ。でないと・
」

今まで黙っていたデルボネがそう言った瞬間だった。レイフォンが
ヴォルフシュティンを振るう速度を上げる。一夏は反応しきれず、
ヴォルフシュティンがその肩に迫る。

(ぐっ)

一夏は反射的にカルヴァーンからもらった錬金鋼タイトを盾の代わりにする。しかし間に合わず、ヴォルフシュティンが肩を掠かすめる。鮮血が一夏の肩から腕を伝って床にこぼれ落ちる。

「もうやめましょう」

レイフォンはヴォルフシュティンを下げる。これ以上やっても一夏の怪我が増えるだけである。

「……………ぶっ」

しかし一夏の目を見てもう一度構える。一夏の目は本気だった。

「もう一度だけお願いします」

「……………どうなっても知りませんよ」

金属音が練武館に響き渡る。

・修行その2

メンバー：サヴァリス

「さて、大分動きがよくなってきたね」

一夏はサヴァリスと組み手ををしていた。サヴァリスの流派であるルッケンス。一夏はサヴァリスの動きを一通り見て自分のものにした。

「でもまだまだ」

それでも^{けい}剋があるとないとでは天と地ほどの差がある。当然サヴァリスの動作は一夏より早い。

「少しは楽しませてくれよ？」

サヴァリスの体内に剋が流れる。肉体を強化し、拳が剋に包まれる。その拳が一夏の顔面を狙う。当たれば怪我では済まされない。最悪、一夏は死ぬ。

「……………」

一夏はただその拳を見ていた。迫りくる死。感覚が研ぎ澄まされていく。世界がまるでコマ送りのように時間がゆっくりと流れる。一夏はその拳をかわす。風圧で一夏の頬が少し切れる。

「おや？」

「うおおおおっ！」

一夏はすぐに反撃に転じる。腰のひねりを加えた正拳^{せいけん}。今度は一夏がサヴァリスの顔を狙う。一夏の拳がサヴァリスの顔に当たる。その確信が一夏にはあった。しかし……。

「がはっ」

一夏の拳はサヴァリスの顔から離れていく。サヴァリスは空いていたもう片方の手で掌打^{しゅつた}を放った。それは一夏の腹部をとらえ、一夏を壁まで飛ばす。一夏はまるで地面に叩きつけられたような痛みに襲われる。そして床に倒れる。

「げほっげほっ」

「ふむ。面白いね」

一夏は剽も使えないのにサヴァリスの正拳をかわした。普通の人間ではそれは不可能だ。それを一夏はやってのけた。そのことがサヴァリスにとっては嬉しかった。その笑みが深くなる。

「立ちなよ、織斑。まだ終わってないから」
「ぐ、うう。・・・はい」

一夏は重い体を奮い立たせる。サヴァリスは既に一夏に猛スピード迫ってきている。

「まだ、動ける」

一夏はまた構える。その倒れそうな体に活を入れる。組み手はサヴァリスが飽きるまで続いた。

549

・修行その3

メンバー：ルイメイ、リヴァース、カウンティア

「えつとね、剄が使えないから本来なら金剛剄は使えない。だけどコツだけは教えるよ。これは戦闘においてとっても重要なことだから」
「はい」

一夏はリヴァースから鉄壁の防御力を誇る金剛剄の基礎を学んでいた。

「まずは絶対に怖がっちゃいけないこと。どんな攻撃も受けきると
いう自信が大事なんだ」

「はい」

「だから危ないけどルイメイの攻撃をギリギリでかわしてほしいん
だ」

「は？」

「なら、さっそくいくぞ。うおおおらああああ！」

「え？ちよ、ま　　っ」

ルイメイの天剣は大きな鉄球。しかも棘とげ付き。当たれば間違いなく
全身の骨が砕ける。

「ねえ、リヴ」

「ん？どうかした、ティア？」

そばで見ていたカウンティアがリヴァースに声をかける。その顔は
どこか不安そうである。

「織斑、あのままじゃ死んじゃうと思うんだけど」

「……………」

一夏の危ない修行は続く。

・修行その4

メンバー：バーメリン、ティギリス、トロイアット

一夏は駆け抜ける。目の前には青白い弾雨。バーメリンが二門の機関砲かんほうで銃弾を放つ。毎分四千発、両手で八千発という劉弾が一夏を襲う。一夏は自分が出せるスピードを出し切り、その弾雨をかわす。

「当たんねえ、ウザッ」

そんな中、端で見ている一人の老人と若い男がいた。

「しかしティギリスの旦那だんな、どうして織斑は弓でいいわけ？圧倒的に不利だと思っけどな」

一夏が持っているのは弓だった。何の変哲へんてつもない、ただの弓だった。

「銃より弓のほうが使いやすいと彼は言っておったのう」

「ふーん。おーい。バーメリン、いつまでそんなガキンチョに時間かけてんだ？情けねぞ」

「うるせえ。死ね、死ね！」

・修行その5

メンバー：リントンス

「では、始める」

「はい」

一夏は二十メートルほどの高さまで飛び、空中で舞い踊る。一夏は肉眼では見えないほどの糸を練武館の壁に刺さっていた無数のフックに絡めていく。一夏が手にはめているのはリントンスの天剣であるサーヴォレイドを一夏が解析し、似せて作ったものだ。一夏の意思に反応し、殺傷力のある極細のワイヤーに電流を流し込み、その手袋のようなものの指先から操り人形の糸のように自由自在に使うことができる。その糸は宝を守るセキュリティセンサーのように中を漂っている。

(仕上げかな)

一夏は逆さになり網状にワイヤーを張り、足場を作りその上に着地する。

「……………」

リントンスはその精度を見極めるように目を細める。

「一本多いな」

彼の手が空を切った。リテンスの鋼系こうけいが一夏のワイヤーの一本を切り裂く。

「あっ」

その瞬間、一夏が張ったワイヤーが全て緩みゆるみ、足場が崩れる。リテンスが切った一本は一夏が張ったワイヤーの全てを支えるものだった。一夏の体は自然落下を初め、そのワイヤーが今一夏を待っている。

「くっ」

一夏は再び舞い踊る。まるでビデオを逆再生するように、ワイヤーを今度は回収していく。そして一切怪我をせずに着陸に成功した。

「ぶっ」

「途中で気を抜くからだ。常に必要最低限の力で相手に対処しろ。余計な力を使えばその分集中力を使うだけだ」

「すみません」

「相手はお前のことを待ってはくれないぞ」

「はい」

「もう一度だ」

「はい」

このワイヤーを一本ずつ操るには猛烈な集中力が必要になる。一夏の極限状態での訓練は続く。

修行後

一夏は仰向けに倒れていた。体には切り傷、打撲、やけど。他にも様々。既にボロボロの状態である。

「織斑、大丈夫ですか？」

「だい……じょう……ぶですから。気にせずに……どうぞ」

「そ、そう？」

「あゝい」

「わ、わかりました」

レイフォンが一夏の下を去っていく。一夏が鍛えてもらう条件。それは料理を振舞うことだった。レイフォンがいるため料理には困らなかったが、結局人手不足で困っていたところに一夏が来た。ちなみに味の方は好評である。

(しばらくは動けないな。仕事に支障が出ないかも心配だ)

そんなことを考えるほどの元気はあった。しかし一夏の体はピクリとも動かない。

「あら！何この子！誰かの知り合い？」

突然声が聞こえた。声にした方を見ると長身で黒髪の女性がいた。

(19? いや、外見はそれぐらいだけど。なんだろう・・・内面はそうじゃない気がする。なんでだ?)

「やだ何この子。肌ぶにぶにじゃない！羨ましいなあ。ああ、でも柔らかい」

女性は一夏の頬をつまみ、むにむにと引っ張っている。

「やめ・・・れ・・・くらひゃ・・・い(止めてください)」

「あはははは。おもしろ〜」

「ちょっとアルシエイラさん。その人困ってますよ。止めてあげてください！」

「なに？リーリン。嫉妬？なんなら胸揉んであげるけど？」

「止めてください！...！」

「あら、残念」

右目に眼帯をした金髪で髪がロングの女性がいた。リーリンさん・
・か。で、この黒髪で活発そうな女性がアルシエイラさん。なんか
・・見てて微笑ましいんだけど。

「あ、リーリン。おかえり」

「ただいま、レイフォン。ごめんね、昼の準備が遅くなって」

「大丈夫だよ。リーリンがいてくれて僕らは助かってるから」

「そう。うん、じゃあこれからも頑張らないとね」

レイフォン師匠・・もしかして気付いてないのかな。アルシエイ
ラさんなんかすごくにやけてるし。しかしその顔は突然真剣なもの
に変わる。

「レイフォン、ちょっと席を外してくれる？」

「わかりました、陛下」

陛下？レイフォン師匠があっさり退いた？この人、それだけ強いっ
てこと？

「リーリン、話があるんだけど」

「はい、何ですか」

「この子に贈り物をしてあげて」

アルシエイラさんが右目を指しながらそんなことを言った。リーリンさんは右手で眼帯を抑えながら首を横に振る。

「ダメです！この子は無関係ですよ。おまけに彼は見たところ武者ではありません。そんなことをしたらどうなるか。私でもわかりません」

「でもね、この子にはいつか必要な気がするの。今訓練してるのもそのためかもしれない」

アルシエイラはどこか悲しそうな顔で。リーリンは必死の形相でこれからすることを否定している。しかしリーリンも悲しそうに顔を歪める。

「どうなっても知りませんよ」

「お願い」

リーリンが右目の眼帯を外す。一夏はその右目を見た。そこにあっただのは茨輪の十字だった。

（コンタクト？いや、違う。あれは・・・裸眼だ。いったいどうなってる？）

リーリンが一夏の目を見る。その瞬間だった。

「う、うわあああああああああああああああっ！！
！！」

一夏の体を熱と激痛が襲う。まるで体の中に無理やり何かをねじ込まれたような感覚だった。

「これは私から」

アルシエイラの人差し指の先が蒼銀色に輝く。その指が一夏の額に触れる。

バタン。

一夏はあまりの激痛に意識を失った。この頃からである。一夏の傷の直りが早くなったのは。

そして時は今。

一夏は再び練武館の前にいた。

(みんな、いるかな)

過ちを犯したあの日。一夏はもうここには来ないと宣言した。来ることは許されない。自分にそう言い聞かせていた。扉を開ける。廊下を歩く。見慣れた更衣室。その先にあるドア。しかしやけに静かである。

(よし)

一夏は意を決してドアを開ける。懐かしい空気が肺いっぱい広がる。

「お久しぶりで

」

ビシュン!

青い弾丸が一夏の頬を掠めた。血は出ていなかった。

「遅えぞ!」

バーメリン師匠が剄弾を撃っていた。その顔は不機嫌だ。

「いやあ、やっと戻ってきてくれたね。君がいないと退屈で」

サヴァリス師匠の笑顔は相変わらずだった。ただ戦いを楽しむ。そんな狂喜的な笑み。

「あの、えつと・・・」

一夏はそこにいる全員を見る。何人かはこちらを向いていないがそれでも言いたいことは伝わってきた。

「おかえり、織斑」

レイフォン師匠が優しく微笑んでくれる。僕が返す言葉はただ一つ。

「ただいま」

これから一夏の厳しいながらも、充実した訓練がまた始まった。

運命に選ばれた二人の天才 織斑

一夏 終

運命に選ばれた二人の天才 織斑一夏（後書き）

レギオスを読んでいる人は何が起こったかわかると思いますが。まあ、そういうのをなるべくないようにしたかったです。結局やってしまいました。次は設定。そのあとは四巻やオリジナルストーリーを展開する予定です。まだ考えがまとまってませんが。とりあえず考えておきますので楽しみにしてください。

設定 IS 「白を纏いしHeaven Sword」(前書き)

この話の内容とレギオスから来たキャラの設定です。わからないことがあったらレギオスWikiを参考にして下さい。

設定 IS 「白を纏いしHeaven Sword」

IS 「白を纏いしHeaven Sword」

オーロラ・フィールドというオーロラ粒子によって作られる人工の亜空間によってISの世界とレギオスの世界が繋がった世界。時空が歪み、レギオスから来た人物には多少の時間と記憶にズレがあり、死んだものも生きている。二つの世界はお互いに引き寄せ合っていて、放っておけばぶつかり合い消滅する。篠ノ之束はそれを防ぐために日々オーロラ・フィールドの解析に取り組んでいると同時に、新しく手に入れた技術で何かを企んでいる。織斑一夏は十二人の天剣授受者と出会い、訓練を受けた。彼は二人の人物からあるものを受け取る。一夏も世界の存亡が懸かっている戦いに巻き込まれていく。

天剣授受者

レイフォン・アルセイフ

髪は茶色で目は藍色。孤児院の資金を稼ぐ目的で武芸の道を志し、10歳で最年少の天剣授受者となった。自らの実力を客観的に把握しており、武芸に関しては高慢に見えるが、それ以外の面では優柔不断で押しが弱く、特に色恋沙汰に対しては鈍感。ここは一夏と同じである。孤児院育ちのため普通に生活できる程度の家事ができる。剋力は天剣授受者の中でも屈指のもの。人嫌いの天剣授受者リテンズから手解きを受けた鋼糸の使い手でもある。また、剋技の仕組みを使用者の剋の流れから理解して模倣する特技を持ち、天剣授受者達の特技をはじめとする様々な剋技を習得している（無論、

「使える」だけで授受者達には及ばない)。単独で戦うことに慣れておりチームで戦うのは苦手。この作品では一夏に高速移動状態での戦闘とサイハーデンの流派を教えた人物。一夏と似たような過去を持ち、それがわかっていたため一夏が戻ってきた時は暖かく迎え入れた。他の天剣授受者も同じである。一夏は無意識の内にだが白式が第二次形態移行する際に戦う理由を一夏にもう一度考えさせた。

セカンド・シフト
サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンス

武芸の名門ルツケンス家から輩出された天剣授受者。ルツケンス門下では初代ルツケンスに次ぐ2人目の天剣授受者で、レイフォンを除けば最年少(13歳)で天剣授受者になった男。長い銀髪を後ろで結び、常に笑顔を浮かべ、通常時・戦闘時を問わずよく喋るが、その強さと技量は天賦のもの。己の強さを高め、戦いを楽しむことにしか興味がない戦闘狂で、自身の流派であるルツケンス家を含めたあらゆる事に何の執着も持っていない。格闘術を主体とする剋に特殊な変化を加える高等技術「化鍊剋」かれんけいの使い手で、この戦い方はルツケンス家の特徴でもある。武器は手と足に装着する鎧のような天剣。この話では一夏の才能に気付きよく組み手をしている。

リントンス・サーヴォレイド・ハーデン

現天剣授受者最強と目される壮年の武芸者。人嫌いで有名で、普段から不機嫌そうな顔つきや口調をしている。日数や時間をわざわざ「秒」で表現するなど、物事を数字で表現する時に大きな数を使うクセがある。極細の鍊金鋼ダイトの系「鋼系」こうしの使い手で、無数の鋼系を同時に操り一本一本が神経のように物を感じることができ、しかもその1本1本に剋を纏わせて、切り裂くのに十分な殺傷力を持たせることができる。レイフォンに鋼系の手解きをしており、レイフォンにとっては鋼系の師。師だけあって鋼系の技量はレイフォンの遥

か上を行き、操る鋼系の本数は万単位とも億単位とも言われる。一夏には鋼系の基本だけ教え、後は自分の技を披露しただけ。それでも技を実演させる一夏にレイフォンと同じ何かを感じている。

カナリス・エアリフォス・リヴィン

アルシエイラの影武者を務める黒髪、長身の女性武芸者。幼い頃からアルシエイラの影武者となるべく育てられ、整形手術によってアルシエイラに似た外見をしている。単に影武者を務めるだけでなく、アルシエイラの面倒ごとは全て任されている苦勞人。アルシエイラに絶対の忠誠を誓っており命を捨てることすら躊躇わない一方、生真面目な性格が災いし、アルシエイラに散々手を焼かされ、辟易している。レイピアを扱う武芸者で、現天劍授受者の中でも特に気配を消す「殺剄」^{さつげい}に長けている。一夏には自分の予備の鍊金鋼^{ダイト}を渡し、自分の劍技を全て叩き込んだ。

デルボネ・キュアンティス・ミューラ

現天劍授受者唯一の特別な剄を使う他の追隨を許さない念威繰者一（念威での索敵や情報伝達などによりほかの武芸者をサポートする）。原作では100歳間近の老女で既に死んでいるが、この作品ではオーロラフィールドにより復活。年も少し若くなっている。本人は一度死んだということは知らない。念威の能力は年を取っても全く衰えず。念威端子一（念威の媒介となる物質）はチヨウの形をしている。一夏にはやさしく接し、戦闘の基本を教えている。

リヴァース・イージナス・エルメン

身長の高い色白の太った男で、戦いに消極的。カウンティアからは「リヴ」と呼ばれている。防御系剄術「金剛剄」の達人で（レイフ

オン曰く、この技のみで天剣授受者になった)、どんな攻撃を受けても傷1つ負わないほどの鉄壁の防御力を誇ると言われている。天剣は盾で、錬金鋼のプレートを多数縫いこんだ防護服を着る、あらゆる点で防御に特化した武芸者だが、剣型の錬金鋼を所持していた時期もある。レイフォン曰く、「彼を殺そうとは考えられないし考えたら、そんなことを考えた自分自身を嫌悪する」らしい。レイフォンの訓練を自ら見に行くなど、彼とつるんで行動していた時期もあり、これが元でレイフォンがカウンティアに殺されかけた事がある。なお、恋人であるカウンティアの額の傷は、初めて彼女と出会った際、極度のトランス状態から戻すためにリヴァースがつけたもの。一夏には金剛剱の基本を教えているが、自分が無茶な訓練をさせているのではないかと悩むときがある。

カウンティア・ヴァルモン・ファーンズ

長身、色黒のスレンダーな女性で、好戦的な性格。リヴァースからは「ティア」と呼ばれている。天剣は大刀で超攻撃的な技の使い手で、動き易さを極限まで重視した耐久力の低い防護服を着る。加えて、超攻撃的な技を放つため、10回以上技を放つと防護服が完全に破れてしまう。また、怒ると無意識の内に剱が暴走してしまう。

因みに以前、レイフォンが天剣授受者だった頃、“リヴァースが自分をほったらかしてレイフォンとリントンスの訓練を見ていた”という理由だけでレイフォンを殺しかけた事があり、その猛烈な嫉妬深さは厄介極まりない。女性とは普通に会話を行えるが、その反面リヴァース以外の男性から話しかけられたら冷淡な態度を取る。

額と胸に刃物で切られたような切り傷があるが、額の傷はリヴァースと初めて出会ったときに彼に付けられたもの。一夏の訓練の時もリヴァースにくつついているがリヴァースの訓練がやりすぎではないのかと思っている。

テイギリス・ノイエラン・ロンスマイア

齡80を数える老人で、現天劍授受者の中ではデルボネに次ぐ年長者。アルシェイラの祖父でもあり、アルシェイラからはテイグ爺と呼ばれている。長弓の使い手。子沢山らしい。デルボネ同様一度死んでいるが本人は知らない。一夏には弓を使った戦法を教えている。

カルヴァーン・ゲオルディウス・ミッドノット

幅広の長剣を扱う50代の武芸者。苦勞的な性格であると同時にプライドが異様に高い。半物質化した剄を纏い、攻撃を受け止めつつ相手にダメージを与える「刃鎧」を得意とする。一夏にはカナリス同様自分の予備の鍊金鋼ダイトと自分の技を託す。

バーメリン・スワツティス・ノルネ

陰気な性格で非常に口が悪い女性天劍授受者。奇抜過ぎる化粧の趣味も相俟って非常に肌が白く、不健康そうな顔をしている。長大な砲身を持つ銃の天劍と、通常の鍊金鋼で作られた多数の銃を状況に応じて使い分ける。一夏は主的扱い。しかし一夏の作る料理にはいつも感謝している。

トロイアット・ギャバナスト・フィランディン

化鍊剄の扱いに長けた天劍授受者。女好きで金遣いが荒い。杖使い。攻撃するとき、攻撃の名前は毎回変わる。一夏には化鍊剄の全てを叩き込んだ。面白そうだからという理由で一夏の修行を邪魔するときがある。

ルイメイ・ガーラント・メックリング

力任せの戦いを好み、錬金鋼も鉄球という大男の天剣授受者。豪快で、偉そうとよく人に言われる。カウンティアと同様、破壊に特化した武芸者で、本気で暴れると一県を破壊しかねない為、本気で戦ったことはない。時間に正確で、毎朝決まった時刻に練武館で修練する習慣がある。一夏はストレス発散の対象。修行中に突然一夏にその鉄球を振り回すときがある。言い訳は“手元が滑^{すべ}った”。

その他

アルシエイラ・アルモニス

天剣授受者への命令権を持つ女王。黒髪、長身のグラマラスな女性。複数の天剣授受者をも軽くねじ伏せる圧倒的な剣の使い手。外見は19歳前後だが、膨大な活剣によって何年も前から同じ外見を保っており、実年齢は定かではない。あらゆる物事に動じず、むしろ波乱を楽しむような胆力の持ち主。武芸者の原型となつたある男の血統にあたり、その因子を重ねたことより人為的に生み出された天剣授受者を遥かに超える勁の持ち主。その勁の保有量は天剣であつても受け止めることが出来ない。リーリンを非常に気に入っており、ワザとなのか地の性格なのかたびたび奇妙なちよっかいを掛けている。しかし、たまに相談に乗ることもあり、リーリンにとっては悩みの種であると同時に良き相談相手でもある。リーリンに頼み、リーリンが一夏に何かを与えると共に自分も一夏に『贈り物』を与える。

リーリン・マーフェス

レイフォンと同じ孤児院で育った幼馴染。活発で社交的な性格。料理が得意で頭脳明晰。レイフォンにただの幼馴染以上の感情を持っている。ISの世界では料理を担当。手元にあるお金でやりくりしている。右目は特別なものであり、茨輪の十字が刻まれている。アルシェイラに頼まれ一夏にあるものを授けた。

ナノセルロイド・マザーE・レヴァンティン

自分の世界へ帰るために一夏たちの世界を破壊しようとする金髪の少女。その体はオーロラ粒子をエネルギー源とする無数のナノマシンで構成されている。人間の姿で「ヴァティ・レン」と名乗っている。その言動は機会じみている。肉体を構成するナノマシンを広域に散布する事により、広範囲の様子を手取るように感知できる他、ナノマシンで巨人を生成することもできる。束と接触し、オーロラフィールドの解析を頼んだ。また自分が持っているナノマシンを束に渡した。

ナノセルロイド・マザーEIEE・ドウリンダナ

ヴァティがつれてきた生物兵器の一体。その身体は先が見えないほど巨大。さらには少々傷ついたぐらいではすぐに再生してしまい、倒しきれない。これはナノマシンの集合体であり、すぐに他のナノマシンで補うため。自身の身体を大量の弾として放つ。その弾も一つの固体として動く。オーロラフィールドにより復活。

ベヒモト

ヴァティがつれてきた生物兵器の一体。ナノセルロイド・マザーEIEE・ドウリンダナと同じく一個の個体ではなく、無数のナノマシンからなる一種の群棲。地中を移動し、その姿は幼児が泥で作った

人形のような曖昧な人型をしている。鋼殻のレギオス？ ホワイト・オペラにおいて、レイフォン、リントンス、サヴァリスによって倒された。オーロラフィールドにより復活。

設定 IS 「白を纏いしHeaven Sword」(後書き)

次回予告です。

『テレシアにて ラウラ・ボーデヴィツヒ』です。あとオリキャラ登場です。

シャルと鈴の話もできてます。算は微塵もアイデアが出てこない(苦笑)

ただテレシア編は毎回小説の後と決めていきます。そこで誰を先に出してほしいか聞いてみたいと思います。ちよつと結果が見えてたりしますが。とりあえずラウラ編を書いてきます。ちよつと時間がかかりますがなるべく早くします。お楽しみに！

テレシアにて ラウラ・ボーデヴィツヒ(前書き)

ラウラ編です。あとオリキャラです。テレシア編は久しぶりなのでうまく書けてるか不安ですが頑張ります。それではどうぞ。

テレシアにて ラウラ・ボーデヴィツヒ

夏休みで初めての出勤日。

いつも通り午前中は桜木さんの部屋掃除を手伝い、弁当も食べた。おいしかった。いまだに桜木さんに味で勝てる気がしない。僕に足りないものは何だ？そんなことをテレシアのロビーで考えていた。今は昼の休憩時間。ふと視線を上げるとマスターと・・・一人のSPがいた。

「あ、四ノ宮。ちょっとこっちに来てください」

僕に気付いたマスターが手招きしている。特に断る理由もないので僕はそっちへ向かう。

574

「紹介したい人がいます。この人です」

「はじめまして、若^{わか}。私の名前は天野^{あまのみう}美雨です。今このときから私がああなたの専属のSPです。これからよろしく願います」

そう言うと目の前の女性、天野さんが丁寧に辞儀をした。とても体が細く、黒髪をアップにしている。表情はどこか僕を厳しく見ている。フレームの細い眼鏡^{めがね}をかけたいかにも硬派という感じ。

「あ、どうも。四ノ・・・いえ、織斑一夏です。て・・・

え？」

偽名は知っているだろうから失礼のないように本名で答えた。ん？
ちよっと待った。今僕のことを若って呼んだ？若って確かどこかのお偉いさんの跡継ぎみたいな人の呼び名だよね？どついうこと？

「あなたがテレシアを継ぐのではないのですか？」

天野さんが怪訝けげんな表情で訊いてくる。隣を見るとマスターが苦笑している。

「いやあ、京夜がテレシアを継いでくれたらそれが一番いいと話を
してましてね」

あ、そういうこと。で、その従者みたいなものだから若と。・・・
なんだろう。とてつもなく違和感を感じる。

「あのく、天野さん？失礼ですがおいくつですか？」

本当に失礼だと思った。女性に何を訊いているのだろうか、僕は。
紳士として万死に値する。

「私のことは美雨でかまいません。ちなみに私は17歳です」
「え？ええ！！？？」

なんてこつた。おやつさんビックリだよ。僕より年上じゃないか。

「あの僕のことは京夜でお願いします。年上に若なんて呼ばれるほど僕はできた人間ではありませんから」
「………確かにそのようですね」

あれ？すんなり通つたよ。

「でもそれだからこそです。いずれあなたにはテレシアを継いでもらわなければならないのですから」

この人……結構頑固だ。

「ほら、しっかりしてください。眼鏡を忘れてますよ」
「あ……」

僕はしまったと言わんばかりに自分の顔に触れる。四ノ宮京夜としてテレシアにいるときは髪型を変え、伊達^{だて}だけど眼鏡をしている。髪型を変えただけじゃばれるからだ。天野……美雨さんは僕の目の前まで来て優しく眼鏡をかけてくれた。

「それと、今日はSPの方々と組み手をする予定ではなかったのではないのですか？」

「あ……」

そうだった。以前SPの人たちにそんなことを頼まれていた。今日がその日だった。

「あなたは他人のことを気にかけるばかりで自分のことは何もできていません。だから私がここにいるんです」

「う、うう」

「はは」

返す言葉もない。どうやらこの人には何を言っても無駄だろう。マスターはマスターで苦笑い。

「早くしないと皆さんに悪いです」

美雨さんが僕の腕を掴んでぐいぐいと引っ張っていく。

「あ、ちょっと。そんなに引っ張らなくても」

そんな二人の背中をマスターは笑顔で見送っていた。

「微笑ほほえましいねえ」

後ろから声がした。マスターは振り返るとそこには一仕事終えた桜木がいた。そしてマスターの隣まで来る。

「はい。でも天野君ぐらいが織斑にはちょうどいいんじゃないでしょうか？」

「そうかもしれないねえ」

一夏と美雨の姿が見えなくなり、マスターと桜木の二人だけになった。

「しかし驚くほど似てますね。さすがだ」

「うむ。やっぱり似てきたねえ」

そこで桜木が取り出したのは二枚の写真だった。一枚は背の高い男性と華奢きゃしゃで顔の形が整った女性が写っていて、その間に小さな女の子がいる。もう一枚は古く少し痛んだ写真。しかしそこに写っているのは

「本当に……そっくりだねえ」

天野美雨そっくりの女性だった。

「天・・・美雨さん、少し気になってたことがあるんですけど、聞いてもいいですか？」

「はい、何なりと」

美雨さんは僕の一步後ろを歩いている。本当に従者みたいだ。今僕はテレシアの長く広い、それでいて手入れが隅々まで行き渡っている豪華な廊下を歩いている。ああ、こんな些細こまごまなところまでお金が掛かっている。こういうところがテレシアなんだろうなあ。

「テレシアのSPって何人いるんですか？」

あの『レゾナンス』で発生した黒い波は記憶に焼きつけられている。いったい何人いるんだろう。

「正確にはわかりませんが一万人近くいるそうですよ」
「一万!!!??？」

すごい、としか言えない。他に言葉が見つからなかった。

「ああ、でもその中の戦闘員は三千人ほどです。他はテレシアの運営のため日々頑張っています。緊急事態のときは全員で動くそうです」

戦闘員って何？と訊くのはやめておく。まさかあの時のあれが全員とかじゃないよね？

「僕はこれからその三千人を相手にするんですか？」

「いえ、いくらかは私が相手をします。あなたに女性の相手は無理でしょうから」

「返す言葉もございません」

あれ？美雨さんもSPだよね。でも美雨さんだけ僕と戦わないってどういうことだ？

「美雨さんは何者なんですか？」

「………私は」

僕は美雨さんを見るため振り返る。その雰囲気は厳格という言葉がふさわしかった。

「テレシアで最も強く、最も優秀なSPです」

「……か」

テレシアのロビーにその人はいた。長い銀髪、左目に黒眼帯、IS学園の改造制服。ラウラ・ボーデヴィツヒである。

「いらっしやいませ。どんなご用件ですか？」

マスターが笑顔で迎える。そしてお互いの顔を見る。

(……できる)

(IS学園の制服……変わった子ですね)

お互いが内心で好き勝手言っていた。

「ここに『最強の高校生』がいると聞いたので手合わせをしたい」「ああ、はい。わかりました。それではこちらへどうぞ」

マスターは何のことか理解し、一夏と美雨がいる場所へラウラを連れて行くのだった。

場所はテレシアの本館から少し離れたドーム上の建物。とにかく広い。下手すると練武館より大きいかもしれない。

「こちらです」

美羽さんがドアを開ける。そこにはその広さにもかかわらず畳が隙間なく敷かれている。目の前には黒い海。黒服にサングラスの男性女性。テレシアのSPたちだ。本当に三千人がこの一箇所に集まっている。

「「「「「四ノ宮殿！！天野殿！！よろしくお願いします！！」」」」」

というわけで始めました。3000VS2。テレシアのSPがそれぞれ二人を囲み一斉に襲い掛かる。

「っ。多いな」

僕は掌底、足払い、背負い投げ。できるだけ相手を傷つけずに体力だけを削っていく。そんな作業が・・・一時間ほど続いた。

「ま、参りました・・・うっ」

最後の一人が気を失う。三千人がうつ伏せ、または仰向けになっている。第三者が見れば地獄絵図であるその中に三人が立っている。そう・・・三人である。

(ん?)

見ると見覚えのある長い銀髪が視界に入る。そしてその女性がこっちを向くと左目に黒い眼帯をしているのが見えた。どこから見てもラウラさんだ。

「たのも〜!」

ラウラさんの声が響き渡る。言うのがちょっと遅いのではないかと思ってしまった。

「・・・はじめまして、四ノ宮京夜です。あなたは?」

正体はばれてないはずだ。だから丁寧に挨拶をする。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。『最強の高校生』というのはお前のことか？」

「・・・どうなんでしょうね」

「できれば手合わせしてほしい」

『最強の高校生』って何ですかそれは。確か山田先生は『15歳の天才』だったっけ。他にも変な噂が流れてそうだ。

「あなたには悪いかもかもしれませんが、若には指一本触れさせませんよ」

美雨さんが僕を庇^{かば}うように前に立っている。

「どけ。お前に用はない」

「若と勝負したいなら私に勝つてからです」

なんか・・・どんどん変な事態になってきてる。止めたほうがいいかな。

「あの、美雨さん？」

「若は下がってください」

「この美雨とかいうやつのはお前だ。覚悟しておけ」

僕はお邪魔のようだ。大人しく下がりました。はい。

「ふっ」

「はっ」

ラウラさんと美雨さんがストレートや回し蹴りを放っている。攻防が長く続く。ただ驚いたのは美雨さんが軍隊仕込みのラウラさんに引けをとらないということだ。

「・・・やるな」

「当然です・・・」

二人は一度距離をとって息を整える。するとラウラさんが自分の眼帯に手を伸ばす。まさか・・・。

「これで最後だ」

「！！！！」

『ヴォーダンオージェ越界の瞳』だ。金色のオッドアイが輝く。美雨は驚きを隠せなかった。そしてラウラの動きはさっきと違い、格段によくなる。美雨

が少しずつ押される形になる。が・・・

「もらった!」

(あ・・・)

僕が気付いたときには既に遅かった。美雨さんは追い詰められているようで実は誘っていた。ラウラさんの手が胸倉に伸びる瞬間を狙っていた。美雨さんがその腕を掴み、体を半回転。そのまま背負い投げをした。

「ぐっ」

「私の勝ちですね」

ラウラさんが驚いている。僕も似たようなものだけど。まさか『越^{ヴォ}界の瞳』を発動したラウラさんに勝てるなんて思わなかった。

「さて、どうしてそこまで若にこだわるのですか？」

「・・・私には認めてもらいたい人がいる」

ラウラさんがそんなことを言っていた。もしかしてあの時の話かな。

「私はそいつに比べればまだまだだ。とてもじゃないが勝てるとは思えん。勝負でも、そして人としても」

なんだろう。僕がラウラさんを追い込んでいる気がする。

「私はそれでもそいつの傍そばにいたいと思った。そのために強くなる
うと……」

「……」

「お前はどうかんだ？」

「え？」

「どうしてお前は頑張れるんだ？」

ラウラさんが美雨さんに訊いている。あれだけの強さは確かに以上だ。生半可なトレーニングでは無理だろうな。

「私は……」

美雨さんが僕の方を見ている。その目は厳しいものではなく、別のものが感じられた。

「若のためです」

そう言った。僕としてはどうしてそこまでこだわるのかわからなかった。

「ふ、そうか」

「はい」

「邪魔したな」

ラウラは立ち上がりその場を去っていく。

「また来る」

「いつでもどつどつぞ」

ラウラさんの姿が見えなくなる。とりあえずばれてないよね。

「ふう・・・」

「お疲れ様です、美雨さん。とりあえずシャワーでも浴びてきたらどうですか？」

見ると美雨さんは結構汗をかいている。まあ、あの後なら納得もいくけど。

「そうします」

そういうと眼鏡を外し、まとめてあった黒髪を下ろした。あ、意外と髪長いね。

「では、京夜君」

「は、はい！」

あれ？呼び方が変わった？雰囲気も変わってる。さっきの硬いイメージと違って、優しく柔らかなイメージ。

「今日は厨房担当でしたから遅れずに行かないとためですよ？」
「……………はい」

口調まで変わってる。もしかして眼鏡と髪型のせい？

「それじゃあ、失礼しますね」

「あ、はい」

美雨さんが笑顔で一礼をして去っていく。そのまぶしい笑顔は誰かに似てる気がした。

美雨はロビーまで来ていた。そこで声をかけられる。

「おや？美雨ちゃん」

「あ、桜木さん。いつもお疲れ様です」

「そっちもお疲れ様。今終わったのかい？」

「はい」

桜木がロビーで少し休んでいたソファとは向かい側のソファに美雨は座る。

「で、どうだい織斑君は？」

「いい子ですよ。まあ、中学生の頃から変わってませんが」

「そうだねえ」

美雨は小さい頃からテレシアで働いている。だから一夏のことだけが中学生の頃から知っていた。

「しかし見てるとおもしろいねえ」

「何がですか？」

桜木がニヤニヤと笑いながら美雨の方を見る。

「美雨ちゃんが頑張ってるのは織斑君のためだったねえ」

「な！？」

「で、本当は織斑君のことどう思ってるんだい？」

「な、何とも思ってます！ただ心配なだけです」

「そうかい、そうかい。まあ、汗をかいたままじゃ気持ち悪いだろうからお風呂にでも入ってきなさいな」

「はい、そうします」

美雨はソファから立ち上がり、大浴場へ向かう。その顔は真っ赤だ。

「少し大人気なかったのでは？」

「そうかもしれないねえ」

マスターが桜木のすぐ横まで来ていた。さっきの光景をしっかりと見ていた。

「しかし本当に言わなくていいのですか？彼女はあなたの」

「それは言わない約束だったけどねえ」

「……………すいません」

桜木はマスターが言おうとしたことを遮り、また写真を取り出す。家族と思われる三人の写真を。

「あの子には…………強く育ててほしいからねえ」

テレシアの最上階にあるレストラン。今はそこで調理中。うん、やっぱり働いてるときが一番落ち着く。もう言うことはないね。

「四ノ宮殿、お忙しいところ申し訳ないのですが一つ訊いてもよろしいですか？」

「あ、はい。もうちょっとで手が空きますので少し待っててください」「はい」

SPの一人が来ていた。とりあえず注文されたものを全て作り終えてレストランを出る。

「で、どうしたんですか？」

「実は、少佐殿が次にいつ来られるか気になっておりました」「は？」

少佐？ いったい誰？ …… あ。

「これは失礼しました。ラウラ・ボーデヴィツヒ殿のことです。四ノ宮殿と同じ学園の制服だったので知り合いだと思ひまして」

「まあ、そうですね。一応訊いておきます。でも僕の正体をばらすようなことは控えて下さい」

「わかりました。おい、みんな喜べ！ 少佐殿がまた来てくれるそうぞぞ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

この日、テレシアの一部のS.P.Pの中でラウラさんが少佐で呼ばれる
よじになりました。

テレシアにて ラウラ・ボーデヴ

イミレ 終

テレシアにて ラウラ・ボーデヴィツヒ（後書き）

あまのみう
天野美雨

17歳

テレシアが誇る最強にして最も優秀なSP。そのため一夏の専属のSPとして選抜された。頭がよく、バランスのとれたスタイルの持ち主。小さい頃に事故で両親を亡くし、そのショックで二重人格になってしまった。眼鏡をかけ、長めの黒髪をアップでまとめれば厳しく凛とした硬派な女性。眼鏡を外し、髪を下ろせば優しい柔らかい女性。桜木和子の孫だが桜木はそのことを隠している。両親を亡くした後、すぐにテレシアに拾われ、育ってきた。テレシアでの仕事の大半をこなし、料理は桜木が直々に教えたまさに才色兼備である。一夏の働きとその性格に惹かれてる。

どうでしたか？実は作者の理想を詰め込んで暗い過去をプラスしたような感じです。ラウラのオチは……感想お願いします。次は四巻です。そして最初からオリジナル展開。まあ、そのせいで色々と予定がくるってしまっただけですがそれでも頑張ってます。応援よろしくお願いしますm()m

第二十三話 仕える者として（四巻開始）（前書き）

四巻の展開をそのまま使ったり、オリジナルを混ぜたり、完璧なオリジナルだったり。そんな感じで四巻は進めようと思ってます。それではどうぞ。

第二十三話 仕える者として（四巻開始）

夏休み。水曜日でも何もないから家庭栽培。静かな時間を過ごしてた。

「今日も暑いなあ」

この後は勉強に料理の研究に白式の調整でもしようかと思っていた。しかしそう思ったときだった。

家の電話が鳴った。僕は受話器をとる。

「はい、織斑です」

（あ、織斑ですか）

「何ですか？マスター」

マスターだった。今日は仕事がないけど、どうしたんだろう。

（実は織斑に……いえ四ノ宮に用がある人から電話がかかってきました）

「あ、そうですね。で、その相手は誰なんですか？」
（ええ、実は　　）

というわけで、休みの日でも出かける事になりました。

現在、車の中に、四ノ宮京夜としてここにいる。ただその車というのが・・・黒いリムジンだった。自分でも乗るなんて夢にも思わなかった。

（贅沢だなあ）

で、今向かっているのがなんとセシリアさんの家だった。どうやらピアノを教えてほしいということらしい。そういえばそんな約束してたね。ただ問題なのが・・・

「あの、美雨さん？確かあなたは17歳でしたよね？」
「ええ、そうですね？」

運転手が美雨さんだった。眼鏡をして、黒髪をアップでまとめている硬派な方の美雨さんだ。そこはいい。運転免許は確か18歳からのはずだ。その手つきは妙に慣れている。

「運転していいんですか？」

「これが運転免許です」

と取り出したのは本物だった。これがテレシアの権力か。もう・・・
何にも言えない。

「用件が済んだら電話してください。迎えに来ますから」

「あ、すいません」

「あとこれが私の連絡先です」

「わかりました」

車は静かに目的地へ向かっていく。

「では、いつてらっしゃいませ」

「はい、いつてきます」

車のドアが閉まり、どこかへ行ってしまう。12時を回り昼食も済ませた。そして着いて最初に視界に入ったものは・・・鉄製格子てつせいこうしの扉。いかにもお金持ちが住みそうな家の扉だ。

(これが家?)

あまりいい行いとはいえないが家を拝見する。扉の先にある小さな・
・いや大きなお屋敷。遠いから小さく見えるわけで。妙に広い庭
に噴水やオブジェがある。そして広い駐車場に白のロールスロイス。
そういえばセシリアさんって大富豪なのかな。ノーネームの演奏会
を見に来るくらいだし。とまあ、とりあえずインターフォンを押す。

(はい、どちらさまですか?)

聞こえたのはセシリアさんの声ではなく少し大人びた声だった。僕は
失礼のないように挨拶する。

「はじめまして、四ノ宮京夜です」

(あなたが?)

「はい」

(少々お待ちください)

鉄製格子の扉がガチャリと開く。うわ、遠隔操作だよ。さすが金持
ち。これは入っていいのか?

(……やっぱり待とうか。勝手に入ったら……ねえ)

しばらく待っていると落ち着いた雰囲気のメイドさんが出てきた。歳は18ぐらいだろうか。これまでにいろいろあったから他人の歳に敏感になってしまった。失礼なこと極まりない。

「はじめまして、セシリア様にお仕えしているチェルシー・ブランケットと申します。以後、お見知りおきを」
「いえ、こちらこそ」

僕らはお互いに丁寧にお辞儀をする。こういう動作が自然とできることが僕らの特権なのかもしれない。

「それではこちらへ」
「はい」

長い庭を歩いていく。その間にいろいろと話していたけど。

「でもあなたがチェルシーさんでしたか。聞いたとおりの人ですね」
「・・・それはお嬢様から聞いたのですか？」
「あ・・・」

しまった。この話は織斑一夏の時に聞いた話だった。チェルシーさんは『どうかしましたか？』と心配そうに聞いてくる。

「あの、えつとですね・・・」
「ときに、ご無礼を承知の上でおたずねしますが、私のことをお嬢様はなんと？」

言っても大丈夫だよな？

「とてもよく気が利く方で、優秀で、優しくて　　美人だって

言っていました」

「まあ」

にっこりとした柔らかな笑み。一瞬美雨さんの笑顔が脳裏に浮かぶ。彼女がメイド服を着たらどうなるか想像してみたけど・・・ないな。

「私も四ノ宮様のお話はお嬢様から耳にしております」

お屋敷の大きめの扉を開けて中に入る。

「僕のことなんて言っていました？」

「そうですね。優しくそうで、上品で、素敵な方だとおっしゃっていました」

「そうですか」

「ただ同時に残念だと」

「どうということですか？」

「ええ、お嬢様によるとあなたは
「チエルシー、ストリーパーツプ!!!!!!」

声をした方を向くとセシリアさんだった。高級そうなサマードレス。上質な素材で作られているであろうレースが目を引き。セシリアさんらしいと思った。

「それは言わないと約束したはずですよ!!」
「すみません、お嬢様。お嬢様の反応が面白かったもので
「う……………」

ああ、そうか。セシリアさんはこの人にはいろんな意味で適わない
つてことか。さて、僕も挨拶あいさつしないとね。

「お嬢様、お久しぶりです」
「あ、京夜さんお久しぶりですね。あとわたくしのことはセシリア
でお願いします」
「……………了解しました。セシリアさん」
「……………」

セシリアさんは黙ってしまった。その顔はどこかしら赤い。

「では、四ノ宮様。お嬢様をよろしく申し上げます」
「はい」

チエルシーさんはそう言っただけで自分の仕事に戻っていく。たぶん部屋の掃除とかだろう。この屋敷は広いから大変だろうなあ。

「案内してもらえますか？」

「あ、はい！こちらですわ」

セシリアさんの一歩後ろで廊下を歩く。

「ここですわ」

そう言って開けると部屋の中に大きなピアノが見えた。部屋はこれでもかというくらい綺麗だ。

「セシリアさんはバイオリンもしているんですか？」

よく見ると部屋の隅にバイオリンのケースがある。

「ええ、わたくしは主にバイオリンを弾きますわ。でもピアノはたしなむ程度なので京夜さんに教えていただくと思ひまして」

「そうですか」

二つこなすのは難しいと思うけど、今日はピアノをメインでいこうかな。

そして京夜一（一夏）によるセシリアのレッスンが始まった。

「あ、そこはテンポが違いますよ」

「わ、わかりましたわ」

割と難しいな、この曲。でもこの楽譜ならもうちょっとよくなると思うけど。

「あっ」

セシリアさんが間違ってしまい、難しい顔をしている。ああでも「こなら・・・」

「セシリアさん。ここはGでも大丈夫ですよ。ほら」

僕はセシリアさんの隣でセシリアさんが間違っただけを弾いた。この方がいいと思う。

「い、いっつですか」

セシリアさんの指が滑らかに動く。そのきっちりとした姿勢もそうだけどやっぱり育ちの良さが感じられた。

「で、できましたわ！京夜さん！今は　　っ
ん？」

見ると一夏の顔がすぐ傍にあった。セシリアは慌てて顔を逸らす。

「どうかしましたか？」
「い、いえ、何でもありませんわ！」

セシリアが見た瞬間、京夜のその横顔が一夏と重なってしまった。セシリア自身はそうでないかと思っっているが、しかしどうしても一夏と重なってしまう。

（今隣にいるのが一夏さんだったらどれだけ幸せなことか）

「セシリアさん。セシリアさん！」

（残念ですわ）

「大丈夫ですか？」

「は、はい。大丈夫ですわ」

どうしたんだろう。でも結構長時間やってるから疲れたのかな。時間は昼の二時半。うーん……

「セシリアさん」

「はい」

「ピアノはこれぐらいにしてバイオリンにするのはどうでしょうか？」

「え？あ、はい。そうしますわ」

セシリアさんは立ち上がると背伸びをした。二時間も座ってれば体が固まるよね。

「あ！す、すみません京夜さん！わ、わたくしっいたらこんな」

「大丈夫ですよ。僕も同じことをすると思いますし」

セシリアさんはそう言われて安心したのか笑顔でバイオリンを取りに行った。これがまた手入れが入念にされているのがわかる。

「京夜さんはバイオリンは弾けますの？」

「いえ、多少触れたぐらいです」

「そうですの」

「ですからセシリアさんが弾いて下さい」

「わたくしそこまで上手というわけでは」

「僕はセシリアさんの演奏が聴きたいです」

「……」

「だめですか？」

「いえ、せつかくですのでやりますわ」

セシリアさんがバイオリンを弾いている間、僕は音色を一つ一つ、
零こぼさずに聴いていた。そしてセシリアさんの演奏が終わる。

「いかがですか？」

セシリアさんの顔が満足感に溢れている。僕は素直な感想を言う。

「セシリアさんは・・・結構強引な性格ですね」

「な！それはどういう意味ですか！？」

「どこかきこちないと言うか、それを無理やり直そうとしてる感じがします」

「そ、それは」

「でも優しいですね」

「・・・はい？」

「うまく表現できませんけど、他人を優しく引っ張っていくような感じがしますよ」

一夏は笑顔でそう言う。セシリアはその不意打ちに固まってしまっ

「・・・するんですわ」

「え？」

「わたくしだけ弾くなんて不公平ですわ！京夜さんも弾いて下さい！」

セシリアは無理やりバイオリンを一夏に預けた。しかし一夏は苦笑するしかない。一夏はバイオリンを少しかじったぐらいである。

「僕には無理ですよ」

「やってみなければわかりませんわ！」

「……………」

「……………」

「ふっ」

一夏は観念してバイオリンをあごに当てた。

「……………」

セシリアはさっきまで自分がそのバイオリンを使っていたことを思い出して顔を真っ赤にする。それを一夏は見えていない。既に目を閉じ準備をしていた。そして一夏の演奏が始まる。

~~~~~

それは誰も知るはずのない曲だった。とても悲しい音色。一夏自身

も何の曲かはわからない。しかし一夏にとっては聞き覚えのある鎮魂歌<sup>クワイエム</sup>。心音がリズムを取り、手が勝手に動く。

不意にセシリアの頬を一筋の涙が伝う。彼女の頭に浮かんでくるのは死んだ両親の思い出だった。曲を聴き続けるほどその思い出は鮮明になっていく。次第には大粒の涙がぼろぼろと落ちていった。

「セシリアさん？」

「え？」

一夏は演奏を止めてセシリアの顔を見る。申し訳なさそうな顔で心配している。

「終わりにしますか？」

「・・・そうしますわ」

それからはセシリアさんが落ち着くまであのテレシアの日について語っていた。

「今日はすいませんでした」

「顔を上げてくださいな、京夜さん。別に謝ることはありませんわ」

その後、僕はセシリアさんが泣いているところをチエルシーさんに見つかりいろいと訊かれた。まあちゃんと説明して許してもらったけど。それで夕食はご馳走になってしまっただけ。今は帰りである。

「四ノ宮様は私が門のところまで送ります」  
「お願いしますわ、チエルシー」

セシリアさんに見送られて庭を歩く。なんだか申し訳なかった。

「四ノ宮様、一つ聞いてもよろしいですか？」  
「はい、なんでしょう」

辺りが暗くなつたため噴水やオブジェがライトアップされている。どこのアニメだろう。僕の金銭感覚のほうがおかしいのかな。

「四ノ宮様はそのままでもいいのですか？」  
「え？」

横にいるチエルシーさんの顔を見る。その顔は真剣だ。

「四ノ宮様にはどこか壁があるような気がします。とても頑丈な壁

です」

そんなことを言われたのは初めてだった。

「私達のような人間は主に忠実であり、誠実でなければなりません」  
「……」

「あなたは第三者のような視点で人を見ていませんか？」

「……僕は」

「よく考えてください。そんなあなたは誠実ではありませんので」

今は車の中。僕は悩んでいた。

「美雨さん」

「なんですか、若」

「美雨さんは僕に何か隠し事してますか？」

キイイイイイイ

ちょうど車が曲がるというところだったが美雨がハンドルを極端に回し、ブレーキを踏んでしまったのでまさにドリフト状態になっていた。当然中とうぜんにいる一夏の体は傾き、窓にぶつかる。

「ど、どうしたんですか!」  
「いえ、なんでもありません。少し手元が狂っただけです。申し訳  
ありません」  
「そ、そうですか」

一夏は再び質問を続ける。

「自分を偽って誰かに接するのは間違ってますか？」  
「どういう意味ですか？」  
「そんな人間が誰かのために何かをするのは間違ってますか？そんな人間が・・・誠実といえますか？」

美雨は少し考えた後に答える。

「その人は誠実とはいえませんが」  
「・・・」  
「でも気にすることはありません」  
「え？」

信号でちょうど止まり、美雨は一夏の方を見る。その顔はいつもの  
厳しい目ではなかった。

「あなたのやりたいようにすればいいんです」  
「・・・わかりました」

美雨さんの言う通りかもしれない。この日、改めて自分のあり方を  
見直した。

## 第二十三話 終

第二十三話 仕える者として（四巻開始）（後書き）

オリジナル展開でした。全く思いつかなかったのですごく悩みながら書きました。最後は意味不明ですいません。チエルシーは四ノ宮京夜が別の人間であるとわかったぐらいだと思います。四巻が一番難関ですね。次はどうしようかと必死な作者です。文才に欠ける作者ですがこれからもよろしくお願いしますm（| |）m

## 第二十四話 懐かしき日々よ（前書き）

文章が書けないため四巻は結構きついです・・・orz。とりあえず書きますのでどこが問題なのか指摘してくれると嬉しいです。



## 第二十四話 懐かしき日々よ

日曜日。場所はIS学園。時計は既に昼の一時を回っている。

「あつついわね。エアコン入ってんの？」

ファン・リンイン  
鳳鈴音。IS学園に通う一年生。IS『ツェンロン甲龍』の専属操縦者にして中国の国家代表候補生。今は寮の廊下を歩いている。

(しかし意外と早く終わったわね。あの先生のことだからもっと時間がかかると思ってたけど)

鈴は国家代表候補生として自分のISの報告のために一組の担任である山田真耶やまだまやに呼び出された。本来ならば実際にISを起動して本人も立ち会い、データを検証することだった。しかし本人の立会いはいらなと言われ、本人が提出するはずだったデータも既に本国に送られたと言われた。おかげで鈴は大分楽ができたのである。

(どっかに優秀で、手際の良い奴でもいたのかもね)

そして鈴は自分の部屋の前までやってきた。ドアを開けると涼しい風が鈴の頬を触れた。金髪碧眼のルームメイトであるティナ・ハミルトンがエアコンをつけてくれたのだと確信する。

「ただい」

「ああ、やっぱりそうなんだ。で、他には？」

「確かリンリンとか呼ばれてたと思います。まあ、その度に怒ってましたけど」

「あはははは、やっぱりおもしろいわねえ。というか織斑君って随分女の子と話すの慣れてるわね」

「そうですか？」

「ぶっちゃけガールズトークもいけるんじゃない？」

「それはさすがに無理ですよ」

「冗談 冗談」

鈴は失神しそうになり後ろに倒れそうになるがなんとか踏み止まる。部屋の中を見ると自分のルームメイトであるティナと一夏が楽しく談笑していた。

「なんで一夏があたしの部屋にいるのよ!？」

「あ、鈴。終わったの？」

「お邪魔してます」

ペコリと一夏は頭を下げた。鈴はその丁寧な動作が一夏のものだと確信し、目の前にいるのが一夏だと改めて認識した。

「さてと、私はちょっと出かけるとしますか」  
「ま、待ちなさい!」

部屋を出ようとしたティナの肩をがっちりとし鈴は掴んでティナを逃がさないようにした。

「どうなってんのよこれは!?!」

「詳しいことは織斑君から聞いて。それに・・・私がいると邪魔になりそうだし」

「?」

「!?!」

ティナは一夏に聞こえないように最後は声を潜めた。鈴は動揺しすぎてティナの肩を放してしまった。

「それじゃあ、ごゆっくり〜」

「あ! ちょっと待ちなさいよ! あんた!」

ティナはすぐにドアへダッシュ。パタンとドアが閉まり、部屋には一夏と鈴だけとなる。

「鈴さん、大丈夫ですか?」

「だ、だ、大丈夫よ」

二人つきりである。鈴の心臓はいやでもその鼓動を早める。顔からは煙まで出ている。一夏の顔を見ると笑顔だった。そして冷蔵庫がある方へ向かった。

「アイスクーキを作ってきたんですよ」

「え？」

「よかつたらどうですか？」

一夏は冷蔵庫から白い箱を出すとそれを掲げて確認する。

「あ、うん。もらう」

「はい」

鈴は部屋のベッドに腰掛け、一夏は慣れた手つきでそのクーキを切って皿に置いてフォークと共に鈴に渡す。

「残りは好きなようにしてください」

「わかった。それじゃあ、いただきます」

「はい、どうぞ」

一夏はそのクーキを再び冷蔵庫にしまう。鈴はそのクーキを一口サイズにフォークで切って口に運ぶ。

「あ、おいしい」

「よかったです。初めて作ったやつだったので結構心配だったんですよ」

「そうなんだ。うん、クリームがしつこくないし、もも味つてのもいいかも」

食べているうちにいつ爆発してもおかしくなかった頭が急速に冷えていく。

「で、なんであんたが学校にいるわけ？あんた中学の頃は夏休みはあつてないようなものだったじゃない」

一夏は中学のころからテレシアで働き、また天剣授受者から訓練を受けていたのも同じ時期だ。修行で二週間休まずに特訓をすることもあれば、テレシアで泊り込みで働くということもあった。これを知っているのは彼の姉である織斑千冬ぐらいである。ISの開発者である篠ノ之束は一夏の訓練の内容までは知っている。シャルロットは一夏がテレシアで働いていることは知っているが訓練はしていたという事実だけである。

「今日は山田先生に書類処理の手伝いを頼まれたんです。まあ、白式の正式な登録もまだだったのでそれも済ませてきました」

「山田先生の書類処理？」

「はい。どうやら自分だけでは期間までに終わりそうになかったそ

うです」

「あの人は先生としてやっていけるの？」

「大丈夫だと思いますよ。根はしっかりしている先生だと思いますから」

鈴は真耶の顔を浮かべるがいかにも頼りないというイメージだった。しかしESでセシリアと同時に敗北したことを思い出した。

(しっかりやれば、ね)

そして一夏の話思い出した。

(もしかしてさっきの『甲龍<sup>シエンロウ</sup>』の報告は一夏が？・・・て、そんなわけないか。あの短時間で白式の登録とデータ収集なんてできるわけないし)

本人を見る。すると一夏の視線は一つのものに集中していた。一冊の本である。

「あれってアルバムですか？」

それは一夏が中二の時に鈴に渡したものだ。鈴が引越す際に、鈴が小学生から中学生までのクラスの写真をまとめたものだった。

ちなみにその時のクラスの協力もあり、鈴にとっては思い出が詰まったものでもある。

「そう、見る？」

「・・・・・・・・」

見ると一夏の顔は難しい顔をしていた。実際彼は思考の海の中にいた。

「一夏？」

「え？ああ、はい。見ましょうか」

一夏はそのアルバムを持ってきてきても当然のように鈴の隣に座る。その瞬間鈴の心臓が跳ね上がった。

「なんで隣に座るのよー！」

「いえ、一緒に見たほうがいいかと思ひまして」

その涼しい顔をした一夏を見て鈴はため息をついた。

（いつものことか・・・）

諦めて鈴はアルバムのページをめくっていく。

「あ、これ。確か小五の時の写真ね。あの時は笹ささを食べるとか言われて怒ったっけ」

一夏も写真を見る。それは集合写真だったが一夏の視線は写真の自分自身に集中している。そこには幼さから感じられる幸せそうそうで無邪気な笑顔があった。

(こんな風に笑ってたんだ、僕は)

鈴がページをめくっていく。次に見えたのは三人の写真だった。左から弾、一夏、鈴だった。中学の頃の写真である。

「そつえばあんたが変わったのもこの頃だったっけ。いったい何があったのよ？」

一夏はその写真に疑問を抱いていた。自分が罪を犯したあの日。それから少し日が経った頃の写真だ。それでもそこにいる一夏は笑っていた。しかしそこにいるのは『織斑一夏』だろうか？『織斑一夏』という人間を閉じ込めて、『四ノ宮京夜』という人間としてその時は生きていた気がした。今はどうだろうか？自分の笑顔は『作った』ものじゃないだろうか？



「一夏？」

一夏は寂しそうな目で写真を見ていた。それを見た鈴は咄嗟とつぱに言うてしまった。

「ねえ、今から弾の家に行かない？」

「え？」

「あ」

鈴は自分の失言に気付く。弾に会いに行くということはその妹でもある蘭にも会うということだ。ちなみに言うと鈴と蘭は仲が悪い。

「それじゃあ、行きましようか」

そして二人は五反田家ごたんたへと向かう。

一応連絡して今は弾だんの家の裏に来ている。弾の家は食堂とそれぞれが別々で、弾の部屋に行くには裏口から入らないといけない。というか結構久しぶりだね。この前来た時は早朝で弾だんは寝てたし。そんなことを考えていたらドアが開いた。

「おお、一夏。久しぶり」

「お久しぶりです、弾」

「それと・・・鈴木も久しぶり」

「なんなのよ、その嫌そうな顔は」

弾が家の中から出てきて僕は家にかかる。店をまかなう殿げんさんと蓮れんさんは夜の仕込みで忙しいそう。あとでちゃんと挨拶しないとね。

「一夏、お前鈴木と来たってことはもしかして・・・」

弾がすごくにやにやしている。

「弾が何を考えているかわかりませんがとりあえず違つとだけ言うておきます」

「・・・はあ、そうか。まあ昔からお前はそうだもんな」

「？」

「はああ」

さっきは諦めたが鈴木は再びため息をつく。

「苦労してんだな」

「まあ、ね」

弾が鈴さんの背中をポンポンと叩いている。確かに代表候補生はいろいろ大変かもしれないね。そのあとは弾の部屋に行って三人で談笑していた。IS学園のこと。弾の学校のこと。僕たちは時間が過ぎるのも忘れて話し込んでいた。

「おっと、もうこんな時間か。うちで食べていくか？」

「どうします、鈴さん」

「そうね。せっかくだからゴチになろうかな」

「よっし。じゃあ決まりだな」

「ただいま」

そう言つて五反田食堂に帰ってきたのは弾の妹である、こだんだらん五反田蘭。今は15歳で中三である。

(生徒会も楽じゃないな)。ていうか日曜日はやめてほしい)

ちなみに蘭が通っているのは女子校であり、その生徒会長でもある。今日はその仕事で家を出ていた。そして食堂に見覚えのある顔が二人。

「いつ、一夏・・・さん!?!」

「あ、お邪魔してます」

「と・・・・・・鈴さんも」

「兄妹揃って同じ反応ってどういうことよ!」

というわけで、蘭さんは着替えて一緒に食べることになりました。今現在は食事中。僕の隣が鈴さんで目の前に蘭さん。蘭さんの隣が弾。蘭さんが着ている服は半袖のワンピースだった。髪はおろしたロングストレートでおしゃれだった。

「普段はかなりラフなんだけどなあ」

「なにか言いました?」

「いや、実はな」

「お兄」

「お、おつ」

弾に蘭さんの鋭い視線が送られる。蘭さんの声のトーンが異様に低く聞こえる。

「余計なことを言ったらどうなるか・・・わかってるよね」

「肝に銘じておきます」

「・・・あんたも大変ね」

「まあ、な」

さっきも同じような会話を聞いた気がする。立場が逆だけど。

「で、なんで鈴さんがここにいるんですか」

「あたしは一夏とIS学園から来たのよ」

「お兄、ほんと？」

「結構急な話だったんだ。だから俺は何にも悪くないぞ!？」

鈴さんはどこか嬉しそうに、弾は慌てている様子。そんな中、蘭さんは何かを決意したかのように立ち上がる。

「決めました。私、来年IS学園を受験します」

ガバッと弾と鈴さんが立ち上がった。

「お、お前、何言ってる」

「そうよ! あんたいったい何を言ってる!」

ヒュッ                      ガン!

おたまが弾の顔面を直撃した。弾がバタリと床に倒れる。鈴さんがそれを呆然と見ている。僕は宙に浮いたままのおたまを座ったまま掴み、調理中の蔵さんに向かって矢のように投げた。蔵さんはそれ

をキャッチして親指をグツと立てる。僕はそれに笑顔で答える。この連携は結構前からやっていたりする。

「おたまの前に俺を助けるよ！」

おお、さすが弾。リスボン復活が早い。

「食事中に大声を上げて立ち上がるのは行儀が悪いと思いますが？」

「ぐ、そ、そうだけど！」

「で、ですよ。あはは」

「まあ、あたしもさっきのはくらいたくないし・・・」

三人が席に着く。

「でもいいんですか？たしか蘭さんの学校はエスカレーター式で大学まで出れる有名な学校ですよ」

「大丈夫です。私の成績なら余裕です」

「IS学園は推薦ないぞ・・・」

弾がそう言った。その顔は少し腫はれている。きつとさっきのおたまのせいだろう。

「お兄と違って、私は筆記で余裕です」

「いや、でも・・・な、なあ、一夏！あそこって実技あるよな!？」  
「ありますよ。IS起動試験のことですね」  
「適正がまったくない人はそれだけで落とされちゃうからね」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

蘭さんが無言でポケットからなにやら紙を取り出す。それを受け取って開く弾とそれを見る鈴さん。

「げえっ!？」  
「うそっ!？」

ん？二人して何をそんなに驚いてるんですか？

「「IS簡易適正試験・・・判定A・・・」」  
「問題はすでに解決済みです」

へえ、すごいな。今の段階でAだったらIS学園にも入れるんじゃないかな。自分のは見ただことないけど。

「そ、それで。い、一夏さんにはぜひ先輩としてご指導を・・・」  
「僕教えるのは下手ですよ?」  
「そ、それでも!」  
「そうよ!一夏は下手なんだからあきらめなさい!」

・・・人に言われるとダメージが大きいね。

「いいのかよ!?なあ母さん!!」

「あら、いいじゃない別に。一夏君、蘭のことよろしくね」

「・・・まあ、できる限りのことはしますけど」

蓮さんはいつも通り笑顔で美人だ。『二八から歳をとってないの』  
と言えるほど十分若く見える。

「あなたはなんですぐ承諾しちゃうのよ!」

「そうだ!ああもう、親父おやじはいねえし!いいのか、じーちゃん!

「蘭が自分で決めたんだ。どうこう言う筋合いじゃねえわな」

「いやだって」

カーン!

今度は中華鍋が弾の顔面に当たる。さっきの連携をリピート。弾の顔は真っ赤だ。

「おまえらもう少し静かに食事はできねえのか?一夏をしてみる」  
「ご馳走様でした」



僕は食べ終わったのでトレーを運んでいく。

「あ、一夏君はいいわよ。洗い物はこつちですから」  
「いえ、僕がやりますよ。せめて洗い物ぐらいはしないと」

三人はその自然な動作にぐうの音も出ない。一夏は他の客の洗い物を済ませるとお茶を淹れて三人に持っていった。

「あんたはどんな神経してんのよ」  
「お前のその行動力はおかしい！」  
「あ、ありがとうございます」

とまあこの後も三人がギヤアギヤアと騒いで怒られて、という繰り返しだった。

「みなさん落ち着きましょーよ」

そう言った一夏の顔は苦笑だったが、心から楽しんでいるようにも見えた。

夕食後

「じゃあな、一夏」

「また来ます」

「いや、勘弁し　　グハア」

蘭の拳が弾の脇腹にクリーンヒットしていた。

「一夏さん！また来てください！」

「はい」

蘭は笑顔だったがその拳は弾の脇にめり込んだままである。

「弾、あんたも頑張りなさいよ」

「お、おう。お互いに・・・な・・・」

そして僕らはIS学園へと帰る。

「一夏さあ」

「はい、なんですか」

IS学園のゲート前。僕は鈴さんの一歩後ろを歩いていた。

「あなたに何があったか知らないけどね」

鈴さんが振り返る。釣り目が厳しく、それでも優しくこっちを見ている。

「なにか困ってるならちゃんと言うこと、わかった？」

その言葉に一夏は自然と笑みがこぼれる。その笑顔に偽りはなかった。

## 第二十四話 終

## 第二十四話 懐かしき日々よ（後書き）

弾と蘭を出してなかったため二巻の展開を借りました。四巻で二巻  
つて・・・orz次回予告です。タイトルは『名も無き親たち』で  
す。それと四巻の原作をもう一度読むので更新が遅れます。四巻の  
どの部分を使い、どの部分を捨てるのか。出来る限り早くしますが  
遅くなっても温かい目で見してほしいです。では、また。

第二十五話 名も無き親たち（前書き）

ノーネーム編です。それではどうぞ。

## 第二十五話 名も無き親たち

場所はテレシア。今日も四ノ宮京夜は忙しい。

夏はなぜこんなに暑いんだろう。そんなことを考えながら仕事をしていた。いや、本当につらかったんだ。部屋を掃除するのはいい。しかしエアコンが壊れていたというのは正直予想外だった。SPの人たちが見逃していたというエアコン。それを暑い部屋の中で修理すること三十分。その部屋で掃除をすること三十分。そしてエアコンがやっと起動した。何が言いたいかというと・・・汗だくだ。というわけで・・・

「広いなあ」

現在、水着で温水プールに入っています。以前説明したとおりテレシアの大浴場はES学園の大浴場+温水プールが二つ。おまけに一つつが広い。すばらしい。

(あ、前が見えない)

伊達眼鏡だてめがねが曇くもってきた。しかしそんなことはどうでもいい。この空間の開放感くわいほうかんは一度掴つかんだら手放てはなせない。

「服はブレスレットが自動で洗ってくれるから大丈夫だよな」

自分が作ったブレスレット。本当は白式に取り込まれちゃったけど。服を量子変換でストックできる優れたもの。自動洗浄、殺菌、さらに服のサイズの調整もできる。それはいいんだけど・・・温水プールってなんでこんなに落ち着くんだろう。

「そんなブレスレットがあれば楽よね」  
「そうですね」

？

「今持ってる？」  
「はい。腕につけてます」  
「へえ、見せて」

！

今ここには僕しかないはず。眼鏡を擦り意識を浮上させて隣を見る。

「うわあー！」

「そんなに驚かなくてもいいでしょう?」

金髪のボブカットの女性がいた。・・・確かノーネームの一員でフルートを吹いてた人だ。

「久しぶり、京夜君」

「お、お久しぶりです」

「一回も連絡をくれないからこっちから来たのよ」

見るとインディゴ（藍色）のビキニを着ている。ただ、顔が近い。

「実は・・・お願いがあるの」

「お、お願いですか?」

「そう。お願い」

女性が近づいて来る。そのうち僕は追い詰められて後ろに進めなくなる。な、何が起きてるんだ?

「実はね・・・」

女性が体を密着させてくる。次第にその顔が眼前まで来る。突き飛ばそうとしたが両手を抑えられている。唇と唇が触れ合いそうになる。そんな時だった。



「若！大丈夫ですか！いきなり声がしたので急いで・・・」

あ

「こんにちは」

女性は僕から離れる。しかし背中には殺気がビシビシと突き刺さっている。僕はゆっくりと首だけを動かしてを美雨さんの方を見る。

「若。あとで話があるのですぐに来てください。すぐにです」  
「りよ、了解・・・しました」

美雨さんの笑顔が怖いと思った瞬間だった。女性は知らぬ間にどこかへ行ってしまった。

・・・とりあえず怒られました。地獄を見ました。修羅を見ました。何かあったかって？勘弁してください・・・

現在、僕はホテルのロビーにいる。少し辺りを見るとマスターが誰かと話していた。

「それは私が決めることではなくあの子が決めることだと思いますが？」

「そこを何とか・・・」

「あいつなら手伝ってくれると思うけどねえ」

見るとノーネームのあの三人組がマスターと話していた。さっきの女性もいる。

「お！京夜！久しぶり！」

「お久しぶりです、京介きょうすけさん」

ノーネームでただ一人、偽名だとしても名前を覚えてくれた人だ。今日も茶髪で髪がボサボサだ。

「では、私は失礼しますね」

マスターが仕事に戻っていく。でもマスターと話してたということ結構重要な話してたのかな。

「あの〜、もしかしてお願いって」  
「君が今考えていることで間違いないと思う」

少し背が高い中年の黒い髪の男が頷いた。楽器はバイオリン。という名前がないのは不便だね。

「お前にはまたピアノを弾いてほしいんだ」

京介さんがそう言った。楽器はチェロ。ということはまだここであれをやるってことか。

「どうしてですか？」

「それはだな」

「だめ！」

中年の男が何かを言おうとしたところでさっきの女性に止められた。

「言ったら」

「クレア、もういいだろう。京夜なら信じられるとさっきも言ったじゃないか」

「でも……」

金髪の女性はクレアと呼ばれているらしい。これも偽名？

「ああもう！こいつなら問題ねえって！」

京介さんが我慢の限界だったのか大声で言った。僕・・・置いてけぼりだ。

「とりあえず、理由を聞かせてもらえますか？」

状況が読めないので僕はとりあえずということとで話を強引に進めた。

「私たちにはお金がいる」

中年の男がそう言った。お金？どういふことだ？

「どうしてそこまで？」

「詳しい話は後です。とりあえず私たちを信用してほしい」

「・・・いいですよ。何かわけがありそうですから  
「すまない」

中年の男が頭を下げる。どうやら深刻な問題らしい。

「ただし、僕に包み隠さず全て教えてください。それだけです」  
「・・・おお、いいぜ」

こうして全員の同意の下、僕らはテレシアの外に出た。向かった先は・・・食品スーパーだった。

現在、食品スーパーで買い物中。特売セールの日だそうです。

「あ、これ安い。と、こっちのお肉も」

クレアさんの目が輝いている。僕は男三人で話していた。

「まずは名前からだな。私は木下和馬<sup>きのしたかずま</sup>。35歳だ」

「俺は影野京介<sup>かげのきょうすけ</sup>。京介のまま頼むぜ。ちなみに18。で、あつちで目をキラキラさせてんのが藤堂クレア<sup>ふじどう</sup>。あつちも18」

「ハーフなんですか？」  
「まあ、そつらしいぜ」

とりあえず全員の名前を聞いた。でもこれも・・・

「君からすれば私たちの名前は偽名かもしれない。しかし私たちに  
とってはこれが本名みたいなものだ。」

「・・・ごめんなさい」

「いいっていいって。でもそうやって律儀りつぎなところが京夜だよなあ。  
ま、いつかお前の本名を聞きだしてやるけどな」

自分たちの本当の名前を知らない。なんだろう・・・引っかかるな。

「あのどうしてあなたたちは」

「これ以上はまた後でいいか？」

和馬さんが真剣な顔をしている。今ここで話すことができないのか  
もしれない。

「ちゃんと教えてくださいか？」

「もちろんだ」

「ならいいです」

「悪いな、なんか一方的に押し付けちまって」

京介さんが申し訳なさそうに頭を掻かいている。似合わないね。

「問題ありません、ただ・・・」

クレアさんの方を見る。その後ろ姿を見ると買い物に必死だ。どこ

かしらこっちを避<sup>さ</sup>けているようにも見える。

「クレアさん、どうしちゃったんですか？」

「ああ、あいつは」

「『京夜君を説得しに行ってくる』と言っておまえを探しに行った  
んだけどさ」

ピクツとクレアさんの肩が動いた。間違いなくこの話を聞いている。

「何があつたわけ？」

クレアさんが猛スピードで去ってしまった。何かほしいものが特売  
だったのだろうか。

「えつとですな・・・」

あの温水プールであったことを思い出す。目の前にあつたクレアさ  
んの顔。そして美雨さん・・・（ガクガクブルブル）

「すみません。言えませんが」

「まあ、いいけどな」

「君も何か悩みがあるなら言つといい」

「あ、ありがとうございます」

僕は苦笑いしかできなかった。

買い物のあと、僕らは電車に乗って、バスに乗って、さらに三十分歩いた。そこにあつたのは立派な一軒家<sup>いっけんや</sup>だった。

「ここが？」

「そ。俺たちの家だ」

「入ってくれ」

全員が中に入る。少し狭いが綺麗<sup>きれい</sup>にしてあつた。

「あ！京兄<sup>きょうにい</sup>だ！おかえり！」

「おう、一喜<sup>かずき</sup>！ただいま！」

「クレアお姉ちゃんもおかえり！」

「ただいま、リリス」

「「「「「「「和馬のおじさんもおかえり！……！」「」「」「」「」

「ただいま」

大家族でした。向かいのドアから小学生が十人ほど。



「やっぱりですか」

「そうだ。ここは・・・孤児院だ」

今はリビングにいる。これが一軒家にしてはまた広い。まあこの数なら当然か。

「世間せけんには知られてねえけどノーネームは代々孤児院をやってるわけよ」

「にゃふへほ（なるほど）」

今現在、僕は京介さんにノーネームの説明を受けていた。僕と和馬さんは子供達と遊んでいる。クレアさんはキッチンで料理。しかし小学生ってこんなに元気なんだ。

「で、今のノーネームの年配たちが俺達の親にして、先生ってわけ」  
「先生？」

「私達は楽器を習ったんだ。そうして私達は育てられた」

「そういうこと。で、こいつらは捨て子だったんだ」

「だから私達が拾って養っているんだ。ちなみに年配の人たちは他の施設で子供達を養やしなうために日々働いている」

「こいつらにはいい生活をしてほしいからなあ」

「そのためのお金ですか？」  
「そういふこと」

見ると部屋は綺麗で空調システムもばっちりだった。そしてこの人数。納得した。

「京介。悪いけどこっち手伝って」  
「ほいほーい」

クレアさんに呼ばれて京介さんがキッチンへ向かう。

「実はな・・・」

和馬さんが優しい目でキッチンにいる二人を見ていた。

「京介のあのナイフはこの子達を守るためのものなんだ」  
「え？」  
「一度強盗が入ったことがあったんだ。その時に・・・な」  
「殺してしまったと？」  
「そうだ。そのせいでクレアも人を信じることができなくなってしまった」  
「だからこのことは黙っておきたかったんですね」

ここを守るため・・・か。納得がいった。

「すまない。信用しろというほうが無理かもしれない」

「いえ、僕も自分の名前は伏せてあるので。お互い様ですかね」

「そうだな。で、どうだろうか」

「引き受けますよ」

「そうか、ありがとう」

そして夕食。みんなで食べる料理はおいしかった。

「なあ、京兄きやうけい。ちょっと質問があるんだけど」

「なんだ、一喜かずき？」

唐突に一喜君が会話を始めた。一喜君は京介さんを幼くしたような感じの子だ。でも子供達は大人しく夕食を食べていた。はしゃいでいた時が嘘の様だ。ちゃんと教育されているのがよくわかった。

「京兄とクレア姉ねえっていつ結婚するんだ？」

「「ぶっ!?!」」

爆弾投下。

「お、おまえ！何言ってるんだ!?!」

「私達はそんなんじゃないでしょ!？」

二人は大慌てでした。和馬さんは温かい目で見ていた。

「じゃあ、クレアお姉ちゃんはそのお兄ちゃんと結婚するの？」

「なんでそうなるの!？」

エリスちゃんが追撃。エリスちゃんはクレアさんを幼くした状態でツインテールの子だ。しかしこの子達は本当に小学生なんだろうか？

「リリスちゃん、こんなに綺麗で頑張っている人に僕は釣り合わないよ」

「京夜君は京夜君で何言ってるの!？」

「え?でも、お兄さんは優しそうだよ？」

「優しいだけではだめだと僕は思うな」

「うーん。そういうものなのかな？」

そう。自分を偽って人と接している人にそんな資格はない。

「そういうものなんだよ」

「そっか。リリスわかった」

こうしてみんな楽しく会話ができるこの家は幸せだろうな。

「ありがとう。この子達に大事なことを教えてくれて」

和馬さんが代表してそう言ってくれた。

「いえいえ。大したことはしてませんよ。それに

「

少しわかったことがある。

「自分にできることはなるべくしたいですからね」

たとえ偽りの自分でも・・・誰かを助けることはできる。そしてその心は偽りではないということも。

## 第二十五話 名も無き親たち（後書き）

ノーネームの事情でした。明日はちょっと出かけるので更新はできないです。すいません。またテレシア編は事情により四巻の後に千冬、五巻の後に鈴、六巻の後に箒、七巻の後に更識姉妹、八巻？にシャル、九巻？に〇〇〇〇の予定です。しかしあくまで予定なので感想などでこの巻の後に二つ書いてほしいというのがあったら書いてください。できるだけ努力はします。それではまた次回！

## 第二十六話 揺らぐ存在（前書き）

四巻のネタを使わせていただきました。ネタ切れです・・・orz。  
展開は変えましたが。それではどうぞ。

## 第二十六話 揺らぐ存在

場所は篠ノ之神社。そして篠ノ之<sup>しののほの</sup>箒<sup>はら</sup>は久しぶりに自分の生家に来ていた。

（変わっていないな、ここは。まあ、変わってしまったら困るとい  
うか・・・何というのか・・・）

箒は一夏と共にここで剣道の稽古<sup>けいこ</sup>をしていたことを思い出す。その  
思い出の場所だった。

「箒ちゃん、ここにいたの」

「・・・・・・はいはい」

箒は現実引き戻された。そこにいたのは40代後半の女性で、年  
相応の落ち着いた物腰と柔<sup>やわ</sup>らかな笑みを浮かべている。

「懐かしくて、つい。すみません、雪子<sup>ゆきこ</sup>叔母さん」

「あら、いいのよ。元々住んでいたところだもの。誰だって懐かし  
くて見て回るわよ」



箒は昔からこの雪子叔母さんによくしてもらっていた。そのため頭が下がらない。

「それにしても、よかったの？夏祭りのお手伝いなんてして」

「め、迷惑でしょうか？」

「そんなことないわよ。大歓迎だわ。でも、箒ちゃん？せっかくの夏祭りなんだから、誘いたい男の子の一人もいるんじゃないの？」

「そ、そんなことはっ……！！」

脳裏に浮かんでくるのは一夏の顔であり、箒の顔は赤みを増している。その反応を見て、雪子叔母さんはただ小さく微笑んだ。

「それじゃあ、せっかくだから厚意に甘えましょうか。六時から神楽舞だから、準備しといてね」

「はいっ」

箒は神楽舞の襦みそぎである風呂に入り、雪子叔母さんは準備をしていた。

「よし、と。これで準備万端ね」

箒は純白の衣と袴はかまの舞装束まつらぶしに身を包み、金の飾りを装まっている。雪子叔母さんが化粧けしやうをして、最後の口紅くちべには箒自身がした。

「そういえば箒ちゃん、昔はこれ、一人で持てなくて扇だけだったわねえ」

そう言つて雪子叔母さんが掲げたのは祭壇さいだんから持ってきた宝刀だった。

「い、今はもう持てます！」

その言葉通り、一息で刀を抜いてみせる箒。そして刀を右手に、扇を左手に持つ。

「ねえねえ箒ちゃん、扇振ってみせてよ。叔母さん、小さい頃の見えたことないから」

「え、ええ。それでは練習もかねて舞まつてみましょうか」

刀を鞘さやへと戻し、それを腰帯に差す。

「では」

閉じた扇を開き、それを揺らす。左右両端一対につけられた鈴かねが厳おしそかに音色を奏かなでた。たとえ練習であつても箒には本番さながらの気

迫にも似た雰囲気があり、あたりが突然静かになったような錯覚さえ覚える。扇を右へ左へと揺らしながら、腰を落としての一回転で刀を抜き放つ。そして刃を扇に乗せ、ゆっくりと空を切っていく。それらの様はまさしく『剣の巫女』の名にふさわしい厳格さと静寂を兼ね備えており、幼かった頃よりも美しくなった筈はそれらを自然に纏っていた。

「……………以上です」

筈は一礼してその舞を終えた。

「まあ！まあまあ！すばらしいわ、筈ちゃん！ねえ、一夏君はどう思う？」

「こんなに綺麗な筈さんは初めて見ました。様になつてて驚きましたよ」

！！！！！！

目の前を見ると……………一夏がいた。

「一夏！一夏なのか！？」

「他の誰かに見えますか？」

箒の顔が一瞬で真っ赤になり、頭の中は既にパニック状態である。

「お前はいつからそこにいた!？」

「ちょうど箒さんが舞を始めた頃です」

箒は舞に集中してしまい、一夏に気付かなかった。一夏は箒の邪魔をしないようにと気配を消していた。あくまで箒には気付かれないように、しかし雪子叔母さんが気付くぐらいに気配を抑えていた。

「なぜお前がここにいるんだ!？」

「篠ノ之神社のお祭りでアルバイトをしてました。それで休憩時間だったのでこっちのほうに来たら箒さんがいました」

笑顔で説明する一夏と慌てている箒の様子を見て雪子叔母さんはほん、と手を打った。その頭上には豆電球が光っていた。

「一夏君、これから何か予定はあるの？」

「ええ、まあ。アルバイトの続きですね。そのあとは帰るつもりですけど」

「それならバイトが終わったら箒ちゃんとお祭りを回るのはどう？」

「ゆ、雪子叔母さん!？な、何を!？」

突然の提案に箒の顔はさらに赤くなる。

「構いませんが、バイトが終わるのは七時過ぎですよ?。」

「大丈夫よ。その時間帯ならまだ楽しめるから」

「そうですね。それじゃあ、箒さん。またあとで」

「え?お、おい!待て一夏!まだ私は何も」

一夏は箒の言葉を最後まで聞かずに行ってしまった。

「箒ちゃん」

「な、なんですか?」

箒は雪子叔母さんの顔を見る。その顔はこれでもかというくらい笑顔である。

「八時から花火よね。ちゃんと二人きりになれる場所に行くのよ?」

「い、いや、あの、あいつは」

「わかってる、わかってる。頑張ってるね」

「で、ですから、あいつは」

「さあて、神楽舞の準備でもしましょうか」

「き、聞いてください、雪子叔母さん!」

振り回され続ける箒であった。

「いやあ、しっかし夏祭りってのはいいもんね！楽しい！」  
「あんまり騒がないでくださいね、アルシェイラさん。いい年して」  
「何よー、リーリン。いくら歳をとっても祭りは楽しいものなのよ！」

そこにいたのはアルシェイラとリーリンだった。二人もこの祭りに来ていた。

「アルシェイラさんは遊びすぎです！いったい何しに来たと思ってるんですか！」

「えーっと、遊ぶため？」

「みんなのお土産を買いに来たんです！」

アルシェイラはお面を頭の上に乗っけて、綿菓子を右手に、水ヨーヨーを左手にフル装備だった。

「まあまあ。そんなに怒ってたらシワが増えちゃうぞ？」

「誰のせいですか！誰の！」

「落ち着いて、落ち着いて。せっかくなんだから楽しまないと」

「また遊ぶつもりですか？」

リーリンは凄みのある笑顔を向ける。さすがにアルシェイラもこれ以上は無理だと判断する。

「わ、わかった、わかった。あとかき氷だけ、ね？」  
「・・・わかりました。かき氷だけですよ」

二人はその店へ行く。

「え？」

「あら」

「なんで」

上から一夏、アルシェイラ、リーリンである。一夏のバイト先はかき氷屋だった。

「こんばんは、アルシェイラさん、リーリンさん」

「あんた、なんでここにいるのよ？」

「仕事でして」

「お疲れ様、織斑。誰かとは大違いですね」

「うっ」

リーリンがアルシェイラの顔を見る。まじめに働いている一夏を見てはアルシェイラは反論はできない。

「とりあえず、はい。かき氷二つです」

「お！さつすが織斑！気が利くわね」

「ごめんね、織斑。えっと、いくら？」

「あ、御代は結構です。二人にはいつもお世話になってますから」

ここで一夏はアルシェイラにお世話になっているのか疑問に思った  
が深く考えるのは止めた。

「え？でも」

「

「いいんですよ。気にしないでください」

「本当にごめんね。ほら、行きますよ、アルシェイラさん」

「ええ、もう少し」

「

ギンッ

リーリンさんの鋭い眼差しがアルシェイラさんを貫いた。

「わ、わかった。リーリン怖いっば」

「・・・ふう。またね、織斑。あんまり無茶したらだめだよ」

「善処します」

「じゃあねえ」

二人が人ごみに紛れて見えなくなるのを確認して僕は仕事に戻った。



「ぶどうを一つ頼む」

「あ、はい。ちよつと待……え？」

「どうした。早くしてくれ」

目の前には篝さんがいた。白地の容姿ようしに薄い青の水面模様みなもが付いた浴衣で、アクセントに朱色の金魚が泳いでいる。所々に置かれた銀色の珠たまと金色の曲線すずが涼しげな印象と落ち着いた雰囲かも気を醸し出している。ただその顔は不機嫌だ。

「あの二人は誰なんだ？」

「えーっと、それはですね……」

答えが見つからない。あの二人に関しては僕も知らないことが多い。どうしようか。

「ただの知り合いですよ」

「本当か？」

「本当です」

嘘は言っていないと思う。

「なら……いいか」

「え？」

「それより、いつ終わるのだ?」  
「あ、はい。ちょっと待ってください」

僕はケータイを取り出して画面を見る。メールが一件。『もうあがつてよし』の一言。そして時間は七時二十分。

「もう・・・いいみたいです」

「それではいくぞ」

「あ、はい」

篤が一夏の手を取って引っ張っている。待たせてしまったことに一夏は罪悪感を感じた。

(わ、私は何をやっているんだ?)

篤は自分でも気付かないうちに一夏の手を取っていた。一夏の顔がまともに見れず、強引に一夏を引っ張り一夏の先をスタスタと歩いている。

(で、でも、これだけ待ったのだ。手を繋ぐぐらいのことはしていいはずだ。うん)

「篤さん?」

「な、なんだ？」

「すみません。待たしてしまつて」

女性を待たせるなんて僕は何をしてるんだろつね。僕らしくもない。

「き、気にするな。それよりあ、あれでもやろつ」

箒が指さしたのは射的屋だった。

「箒さんは得意なんですか？」

「え、あ、いや……」

「とりあえず、行きましようか」

今度は一夏が箒の手を引つ張つていく。もちろん一夏は箒の内心がどうなっているかは知らない。

「へい、らつしゃーい」

「すみません。二人分ください」

射的屋の大将は、浅黒く焼けた肌に白いＴシャツを肩までまくりあげて鍛えられた筋肉を見せている。気はいい人のようだ。僕は二人分の代金を払う。

「まいど。．．．．．おお、兄ちゃん、甲斐性があるなあ。女の分も払うとは、最近のガキにしちゃ珍しい」  
「そうですか？これが普通だと思ってたんですが」  
「言っねえ。よ！色男！」

一夏と箒はそれぞれに鉄砲を受け取り、コルクの弾をこめて構える。

「．．．．．」

カン．．．．．カン．．．．．カン。

一夏は鉄の札の角を正確に狙っていた。残り弾数は二発。

(こんなもんかな)

一夏は鉄砲の感覚を慣らしていた。そして箒の方を見る。

「ぐっ」

五発目の弾を外し、弾数ゼロになったところだった。

「今思い出しましたけど、箒さんは射的苦手でしたね」

「う、うるさい！ゆ、弓なら必中だ！」

「それでは景品が壊れてしまいますよ。いいですか……」

一夏は最後の二発のうち一発を箒の鉄砲に込める。

「腕をまつすぐにして、視線に対して真まっ直すぐに視線を置くのが  
ツです」

「……」

説明しながら、直接体を触つての指導までされて、箒は仏頂面ぶつちやうめんの下  
では大変なことになっていた。

668

（わあああつ！？ち、近づ、近い！て、ててっ、手がっ、体に触れ  
てっ！？うっうっ、い、息が顔にかかる……。離れ……。  
……）

てほしくないのが実は本音。

「こんな感じですね。あと焦あせっちゃだめですよ」  
「う、うむ」

一夏は箒から離れ、自分の鉄砲に最後の弾を込める。

(これは、はずれるかなあ)

一夏は箒の視線を追った。体が少しずつ、ずれている。見ると小さなだるまと少し大きめで、クッションとしても使えそうなサイズの一頭身ペンギンの間を狙っていた。

「すみません、これって横から狙ってもいいですか？」  
「おっと、そうきたかい、兄ちゃん。まあ、落とせるものなら落としてみな」

僕は銃身を横に傾けて一点を狙う。瞳から感情の色を消す。そして箒さんが引き金を引く瞬間より先に・・・撃つ。

箒が撃った弾はだるまの横を狙っていた。箒はそれを打った瞬間に気付いた。しかし弾は途中で一夏が撃った弾とぶつかってその軌道を変えた。箒の弾はペンギンのくちばしに当たり、倒れた。一夏の弾はだるまにあたり、見事に倒した。

「嘘だろ？」

射的屋の大将が響く。周りは静寂に包まれていた。

「ほ、ほれ。景品だ」

射的屋の大將はペンギンを箒に、だるまを一夏に渡す。

「はい、箒さん」

「な、なんだ？」

一夏がだるまを箒に渡した。

「ほしかったのはこっちでしょう？」

「そ、そうだが。じゃ、じゃあペンギンはお前が」

「あげますよ」

「え？」

「僕が持つてるよりも箒さんが持ってたほうがいいと思います」

その顔は笑顔だ。箒はだるまを受け取り、その笑顔に見惚みとれてしまった。

「兄ちゃん。あんた、何者だい？」

「僕はしがない・・・ただの高校生ですよ」

「・・・・・・・・・・」

周囲の観客から声が聞こえたと思った次の瞬間だった。

「「「「「嘘だ!!!!!!!!!!」」」」」

射的屋の大將も、周りの観客も一夏に質問攻めしていた。しかしその一夏は……どこか遠くに感じられた。

「もうすぐですね」

「そ、そうだな……」

背の高い針葉樹が集まってできた裏の林。その林を抜けた先にある秘密の穴場。その一角だけが天窓を開けたように開いている。それはさながら季節を切り抜いた絵のようで、春は朝焼け、夏は花火、秋は満月、冬は雪と、色とりどり四季折々（しきおりおり）の顔を見せる秘密の場所だった。知っているのは、千冬に束、そして一夏と篝の四人だけだ。

（い、今は、ふ、二人しかいない……………。そ、それに、その、なんだ……………ふ、雰囲気もいい……………）



一夏の横顔を見る。夜空を見上げ、月明かりに照らされた顔は幼かった頃に比べて大人びている。十五歳とは思えないほどである。

(い、言うなら、い、今しかない　　！！)

「い、一夏!」

「なんですか?」

「わ、私は、お前がつ、す　　」

ドーーーーーッ!!!

「あ、始まりましたね」

「す、す、……、……、……」

「どうかしましたか?」

「い、いや……。なんでもない……」

箒は一夏と一緒に空を見上げた。そこでは赤、青、緑、黄色と様々な色の花火の轟音が鳴り響き、夜空を彩っている。

(うつうつ……、花火などに邪魔されるとは……)

しかし、恨んでも仕方がない。花火がはじまる前に言い出せなかった自分のせいだ。箒は諦めて花火を見る。

「来年も」

「

「え？」

突然の一夏の言葉に箒は一夏の顔を見る。

「こつやって花火が見れるといいですね」

その顔は箒が一度だけ目にしたものだ。福音と戦った時に一夏が箒を突き飛ばしたときの顔だ。

「一夏！」

「え？」

知らないうちに箒は一夏の手を取っていた。その手はきつく握られている。

「行くな！どこにも行くな！！行かないでくれ！！！！」

「ちょ、ど、どうしたんですか？いったい何が

「

箒は福音の時を思い出してしまった。一夏が倒れた時のように、一夏がどこかへ消えてしまう気がした。さっき見えた一夏の顔が別人

に見えてしまう。そう思う時が何度もあった。IS学園で一夏と打ち込みをした時、福音との戦闘で見たあの映像。変わった一夏を何度も見てきた。

「頼むから……………」

篝の目から一筋の涙が頬を伝う。一夏がいなくなる。そう思うと不安になってしまった。

「篝さん」

鈴が鳴った。幅一センチほどの赤い紐ひも。それが交差するように巻かれ、その先端にそれぞれ金と銀の鈴が一对になっている。

『紅椿あかしばき』の待機状態である。それに一夏の手が触れた。その手は温かい。

「僕はどこにも行きませんか」

「……………」

「約束しますから」

「……………本当か？」

「もし僕が約束を破ったら煮るなり焼くなり好きにしてください」

「お前がどこかへ行ってはできないではないか」

「それもそうでした」

一夏はそういつと笑みを浮かべた。その笑顔は箒が知っている『織斑一夏』の顔だった。

「まったく・・・おまえは・・・」

箒の涙は止まっていた。そして確信する。今も昔も、『織斑一夏』という人間はここにいる。

「綺麗だな」

「そうですね」

好きな人は・・・自分の側にいてくれる。十六歳の夏の思い出は、  
華やかな火に彩られて過ぎていく。

第二十六話 終

第二十六話 揺らぐ存在（後書き）

こんな文章しか書けない作者を許してください！m（T・T）m

五巻の直前まではこんな感じになってしまいましたが、どうか見捨てないで下さい。

m（T・T）m

第二十七話 メリットとデメリット（前書き）

もついろいろあってパソコンに触れる時間すら・・・orz  
更新が遅れて本当に申し訳ありませんm( )m

## 第二十七話 メリットとデメリット

場所は駅前。時刻は十二時過ぎ。シャルロットとラウラはオープンテラスのカフェでランチをとっていた。

「いい買い物ができたな」

「せっかくだからそのまま着てればよかったのに」

二人はラウラの私服と寝巻きがないということで購入物に来ていた。ラウラが買ったのは肩が露出するようにできている黒いワンピースである。部分部分にフリルのあしらいがあって、可愛らしさを演出している。選んだのはシャルロットである。

「い、いや、その、なんだ。汚れては困る」

「ふうん？あ、もしかして、お披露目は一夏に取っておきたいとか？」

「なっ！？ち、違う！だ、ただ、断じて違うぞ！」

顔を赤らめて取り乱すラウラの姿に、シャルロットは的を射たことを確信しながらもあえて知らないフリをする。

「そっか。変なこと言ってごめんね」

「ま、ま、まっただ」

「ラウラ」

「な、なんだ？」

「フォークとスプーンが逆」

「つ~~~~~~~~!!」

シャルロットの指摘しつげきによって気がついたラウラは、それこそ耳まで真っ赤になって口に運んでいたスプーンを離れた。

「それにしても、一夏の用事ってなんだったんだろうね」

「し、知らん!」

シャルロットは携帯の着信履歴を見る。一夏の返信メールをもう一度見る。そこには短い文章が書いてあった。

『すみません。ちょっと急用ができてしまいました。申し訳ありません』

一夏にも来てもらおうとメールを送ったが一夏は来れなくなってしまうた。

「まさか他の子と外出なんてことは」

「それは本当か!？」



真っ先にラウラが反応した。しかしシャルロットは穏やかに返す。

「それはないと思うよ。一夏はそんなことしないと思う」

シャルロットは一夏の顔を思い浮かべる。どこまでも優しい笑顔。しかし底知れない唐変木。そう思うと苦笑いしかできなかった。ふと、シャルロットが隣のテーブルの女性に気がつく。

「……………どうすればいいのよ、またつく……………」

年の頃は二十代後半で、かっちりとしたスーツを着ている。

「はあ……………」

何か悩み事があるらしく、深々と漏らすため息には深淵しんえんの色が見て取れた。

「ねえ、ラウラ」

「いいんじゃないか？嫁も同じことをすると思うぞ」

言葉を先回りされたことにシャルロットは驚いたが、すぐに嬉しそ

うな顔をして続けた。

「僕のこと、ちゃんとわかってくれてるんだね」

「顔に出ていたからな。嫁と一緒にわかりやすい」

「そ、そうなんだ。とりあえず話を聞いてみるね」

そう言って、シャルロットは席を立つなり女性に声をかけた。

「あの、どうかされましたか？」

「え？　　！？」

二人を見るなりイスを倒す勢いで女性が立ち上がる。そしてそのまま、シャルロットの手を握った。

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

「バイトしない!？」

「「え？」」

同時刻、シャルロットとラウラが服を買った『サード・サーフィス』というお店の上の階にあるお店。

「……くしっ」

「大丈夫ですか、若？」

一夏と美雨一（硬派）はそこにいた。二人とも外出用の私服であり、一夏は四ノ宮京夜として今はここにいる。京夜は突然くしやみをしたが本人は原因を知らない。

「だ、大丈夫です。それより、今日はどうして僕は呼ばれたんですか？」

「今日はテレシアのSPたちの冬服の申請です。すべてこのフルオーダー品ですから」

「それって夏の今にする必要があるんですか？」

「一万人の制服となると一度に届かない可能性もあるので。ただその書類が多すぎて」

「言ってくれば僕が全部やりますよ」

「いえ、あの人数を一人では無理です。だから二人でよろしくとマスターが言っていました」

そう言うと紙の束を持ってきた。うわあ、一万人分の書類が目の前に。これは確かに時間がかかりそうだ。

「それでは、はじめましょう」

「そ、そうですね」

ペンのインクがなくなりかけた。そして、なんとか一時間で済ませた。

「お疲れ様です、若」

「美雨さんもお疲れ様です。とりあえず、昼にしませんか？もう一時過ぎですし」

「そうですね」

僕たちは書類をお店に出して店を出た。そして意外な人物に出会った。

「あ・・・」

「お、京夜だ」

「こんな所で会うとは珍しいな」

「こんにちは、京夜君」

「こんにちは」

ノーネームのメンバーで、いつもの三人だった。

「どうして今日はここに？」

「子供たちの服を買いに来ているんだ」

和馬さんが苦笑している。たしかにあの人数ならいくら服があつて

も足りないくらいだろう。

「若、この人たちはノーネームの人たちですか？」

「あ、はい。京介さん、和馬さん、そしてクレアさんです。クレアさんとは一度会ってますね」

そう、そう。あの温水プールで・・・

ガシッ

僕の肩がクレアさんに掴つかまれている。その力は異様に強い。

「京夜君？あのことは忘れなさい」

「え？」

「そうですね、若。なんなら私が忘れさせてあげますから」

二人の顔は笑顔だった。怖い方の笑顔だ。最近ではよくそういう顔を見ている気がする。美雨さんは拳こぶしを握にぎっている。僕の本能が危険を察知した。

「すみません。とりあえず黙ります」

どこかの平和主義者のようにすぐに謝る。

「それでいいのよ、それで」

「はい。そうだ、一緒に昼食はどうですか？ 私たちはまだですけど」

「それはいいわね。京介、和馬さん、いいよね？」

「俺はかまわないけど」

「私も異論はない」

「ではそうしましょう」

美雨さんとクレアさんが歩いていく。僕はしばらく硬直していた。

「お前も苦労してんだな」

「まあ、頑張れ」

二人が励ますように僕の肩に手を置く。しかしその顔はどこか楽しそうにしている。

「死なない程度に頑張ります」

今の僕にはそんな答えしかできなかった。

「というわけでね、いきなりふたり辞めちゃったのよ。辞めたって  
いうか、駆け落ちしたんだけどね。はは……」

「はあ」

「ふむ」

「でもね、今日は超重要な日なのよ！本社から視察の人間も来るし、  
だからお願い！あなたたち二人に今日だけアルバイトをしてほしい  
の！」

シャルロットとラウラは@クルーズという店にいた。そこが女性の  
お店で、特異な喫茶店だった。女は使用人の格好、男は執事の格好  
で接客するという　　いわゆるメイド（&執事）喫茶である。

「それはいいんですが……」

着替え終わったシャルロットはやや控えめに訊く。

「なぜ僕は執事の格好なんでしょうか……」

「だって、ほら！似合うもの！そこいらの男なんかより、ずっとキ  
レイで格好いいもの！」

「そうですか……」

褒められたというのに、あまり嬉しくなさそうにシャルロットはた  
め息を漏らす。店内にいた男性客の一部が落ち込んでいるのを店長  
は知らない。

(まあ、頑張ろうかな……)

「デユノア君、四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い」  
「わかりました」

カウンターから飲み物を受け取って、@マークの刻まれたトレイへと乗せる。そんな単純な動作にさえシャルロットの気品がにじみ出ている。初めてのアルバイトだというのに、その立ち居振る舞いには物怖じした様子はなく堂々としていて、けれど嫌味ではない。そんなシャルロットの姿に、女性客のほとんどが見入っていた。

「お待たせしました。紅茶のお客様は？」

「は、はい」

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？よろしければ、こちらで入れさせていただきます」

「お、お願いします。え、ええと、砂糖とミルク、たっぷりですわ、私もそれで」

シャルロットは柔らかな笑みを浮かべてうなづく。

「かしこまりました。それでは、失礼します」



シャルロットの白く美しい指がスプーンをそつと握り、砂糖とミルクを加えたカップの中を静かにかき混ぜた。

「ごっぞ」

「あ、ありがとうございます」

「それでは、また何かありましたら何なりとお呼び出してください。お嬢様」

そう言つて綺麗なお辞儀をするシャルロットはまさしく『貴公子』  
としかいいようのない雰囲気をつけていた。

（ふう。接客業つてやってみると結構大変だね。ラウラは大丈夫かな？）

仕事をこなしつつ、シャルロットはラウラの姿を探す。そして意外な光景を見た。

「アイスコーヒーが三つでよろしいですか？」

「あ、はい。お願いします」

笑顔こそないものの、ラウラはきちんと接客をしていた。その態度は一言で表すとクールだった。

「あの、ラウラ？どこかで教わったの？」

「いや、教わったことなどない。独学だ」

「独学？」

「嫁の部屋に行ったら『接客のための100の心得』という本があったからそれを読んだだけだ」

ラウラがそういう本に興味を示すのも意外だった。しかし……。

(一夏つてそんな本を持つてたんだ……)

「それに、一番大きいのは目の前にいいお手本がいることだな」

突然の言葉にシャルロットは呆けてしまう。

「あ、あのつ、追加の注文いいですか！？できればさっきの金髪の執事さんで！」

「コーヒー下さい！銀髪のメイドさんで！」

「こっちにも美少年執事さんをつー！」

「美少女メイドさんをぜひ！」

そんな騒動は一気に店内全体に感染し、爆発的に喧騒を大きくしていく。しかし店長が間に入って上手く二人を滞りなくテーブルに向かうように声をかけて調整をしていった。そんな混雑が二時間ほど続いて、さすがにシャルロットとラウラにも精神的な疲れが見え始めた頃、その事件は起こった。

とりあえず、人数が五人ということでファミレスにした。どこかの白髪がレトルトのオンパレードと言ったことを思い出した。

「ここのお店、高くないか？」

京介さんが表情を引き攣<sup>つ</sup>らせながら僕のほうを見る。いや、そこまですぐ高くないと思うけど。

「ちょっと待ってる」

和馬さんが財布の中を見ている。そしてその足元には買い物袋が三つほどあった。たぶん子供たちの服だろう。そして和馬さんの表情が険しくなった。

「もしかして・・・ない？」

クレアさんが不安そうに和馬さんに訊<sup>き</sup>いている。どうやらノーネームのお財布の事情は厳しいものらしい。確かに服と食費、それと電気代や水道代だけで全て持って行かれそうだ。

「あ、今日は僕がおごりますからそんなに気にしないで下さい」  
そう言うと京介さんとクレアさんの表情が明るくなり、目を輝かせていた。節約生活が厳しいのがよくわかる。

「おまえら少しは自重しろ」

和馬さんの鉄拳が二人の脳天に振り下ろされた。美雨さんはクスクスと笑っている。さて、お金のほうは・・・これだけあれば十分足りるよね。(ブラックカード一枚、一万円札が三枚、千円札が二枚)

「す、すみません・・・」

ふたりして一礼。年上に頭を下げられるというのはどうも落ち着かない。

「いいですよ。気にしないで下さい」

そのあとはいろいろと話した。世間話やノーネームのこと。もちろん小声で。子供たちに楽器を教えていること。あの子達にもノーネームを継いで自分たちのように孤児たちを助けるような大人になってほしいこと。いろいろと聞いた。その話の間、ひととき可悲しい表

情をしているのが独り。美雨さんだった。

「どうしたんですか、美雨さん？」

「え？い、いや、その・・・」

「どこか具合でも悪いんですか？」

「私は大丈夫です。ただ悲しいだけです。不幸な子供たちがいるということが・・・」

「まあ、確かにそうですね」

ノーネームの人たちは楽しく談笑していた。そんな光景を、やはり寂しそうに美雨さんは見ていた。いつもの凜とした美雨さんらしくない。そう思った。

「全員、動くんじゃねえ！」

三人の男が雪崩れ込んできて怒号を発する。一瞬、何が起こったのか理解できなかった店内の全員だったが、次の瞬間に発せられた銃声で悲鳴が上がった。

「きゃあああつ！？」

「騒ぐんじゃねえ！静かにしろ！」

男たちの格好かっこうといえはジャンパーにジーパン、そして顔には覆面、手には銃。背中のバッグからは何枚か紙幣が飛び出していた。見るからに強盗である。それもおそらくは銀行を襲撃した後の逃走犯。しかしその外見が古い。

「あー、犯人一同に告ぐ。君たちはすでに包囲ほういされている。大人しく投降とうじょうしなさい。繰り返す」

窓から見た店外では既にパトカーによる道路封鎖とライオットシールドを構えた対銃撃装備の警官たちが包囲網ほういもつを作っていた。

「・・・なんか」

「・・・警察の対応も」

「・・・古ふる・・・」

人質という立場にもかかわらず数名の客がそうつぶやいた。

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺たち全員  
「うるたえるんじゃねえっ！焦ることはねえ。こっちは人質がい  
るんだ。強引な真似まねはできねえさ」

リーダー格とおぼしき三人の中でひとときわ体格のいい男がそう告げると、逃げ腰だったほかの二人もも自信を取り戻す。

「へ、へへ、そうですね。俺たちには高い金払って手に入れたこ  
いつがあるし」

硬い金属音を響かせてショットガンのポンプアクションを行う。そ  
して威嚇射撃を天井に向けた行った。

「きゃあああつー!!」

パニックになった女性客が悲鳴を上げる。それを今度はリーダーの  
男がハンドガンを撃って黙らせた。

「大人しくしてな！俺たちの言うことことを聞けば殺しはしねえよ。  
わかったか？」

女性は顔面蒼白になって何度もうなずくと、声が漏れないようにき  
つく口をつくむ。

「おい、聞こえるか警官ども！人質を安全に解放したかったら車を  
用意しろ！もちろん、追跡車や発信器なんかつけるんじゃないぞ！」

男は警官隊に向かって発砲する。幸い、弾丸はパトカーのフロント

ガラスを割ったただけだったが、周囲の野次馬やじうまがパニックを起こすには十分だった。

「へへ、やつら大騒ぎしてますよ」

「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当ッスね！」

「まったくだ」

暴力的な笑みを浮かべる男たち。それを物陰から観察する目があった。

（一人はショットガン、一人はサブマシンガン、そしてリーダーがハンドガン。他にも予備で何か持っている可能性もあるけど、とりあえずは　　）

シャルロットは状況を冷静に分析していく。もう一度店内の状況を確認しようと視線を動かして、そこでぎょっとした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

店内で強盗以外にただ一人立っていたのはラウラだった。しかも銀髪に眼帯、目が覚めるような美少女とくれば誰の目であろうと止まってしまう。



「なんだ、お前。大人しくいてろっていうのが聞こえなかったのか？」

案の定、すぐにリーダーがやってくる。その手には握にったままの銃を、ラウラは一瞬だけ見て視線から外した。

「メニューを持ってきますのでしばらく座ってお待ちください」

そう言うとラウラはすたすたと歩いてく。その動作はは恐ろしいほどに冷静だ。

「何だったんだ？」

「まあまあ兄貴、いいじゃないツスか！時間はたっぷりあるんスから、あの子に接客してもらいましょうよ！」

「ああ？何言ってるんだ、お前」

「だって、ホラ！すっげー可愛いツスよ！」

「お、俺も賛成っ。メイド喫茶って入ったことなくて・・・」

二人揃そろって嬉し恥ずかしな表情を浮かべる手下に、リーダーは眉間みけんにしわを寄せながらソファに腰を下ろした。

「ふん。まあいい。ちょうど喉のどが渴かわいていたところだ。おい、メニューを持ってこい」

「かしこまりました」

ラウラは男たちを一瞥<sup>いちべつ</sup>してカウンターの中に歩いていく。そして、持ってきたのは氷が満載された水だった。

「・・・なんだ、これは？」

「水だ」

ラウラの口調は冷たいものになっていった。

「いや、あの、メニューを欲しいんすけど」

「黙れ。飲め。                飲めるものならな」

ラウラは突然トレーをひっくり返す。当然、氷水が宙<sup>ちゆう</sup>に舞<sup>ま</sup>うが、それらを回転するような動作で掴<sup>つか</sup>み                弾<sup>はじ</sup>いた。

「いつてええっ！？な、なっ、何しやがっ」

氷の指弾。それをトリガーから離れていた人差し指に、突然の出来事に反応できずにいた瞼<sup>まぶた</sup>に、眉間に、喉に、一瞬で当てる。そして犯人の怒号よりも早く、男の一人の懐へと膝蹴<sup>ひざげ</sup>りを叩<sup>たた</sup>き込んだ。

いち早く痛みから復帰したリーダーが、早速<sup>さっそく</sup>ハンドガンでラウラに

向けて撃った。

火薬の炸裂音さくれつおんを連続して響かせるが、しかしラウラには届かない。ソファを、テーブルを、観葉植物を、ドリンクサーバーを、店内のあらゆるもの盾にして、ラウラはその細身からは予想もつかないスピードで駆かけていく。

「あ、兄貴っ！？こ、こいつッ」

「うるたえるな！ガキ一人、すぐに片付けて」

「一人じゃないんだよねえ、残念ながら」

マガジンを切り替えたリーダーの背後の迫っていたのは執事服のシャルロットだった。その言葉には呆あきれたため息が含まれていたが、それは強盗事件に巻き込まれたことではなく、ラウラが機を待たずに戦闘を開始したこと。そしてそれをサポートしなければいけないということに対してのものらしい。

「なっ！？このっ」

「あ、執事服でよかったかな。うん。思いつきり足上げてても平気だし」

そんなことを口にしながら、シャルロットはリーダーの拳銃を手ごと蹴り上げる。そしてそのままの勢いでショットガンの男の肩に、今度はかかと落としを叩き込んで無力化する。ゴキッという嫌な音がして、ショットガンを構えていた腕はだらりと垂たれた。二人とも

『ありとあらゆる事態』を想定して訓練を受けた代表候補生だ。この程度の状況ならば苦もなく対処できる。

「目標2、制圧完了。ラウラ、そっちは？」

「問題ない。目標3、制圧完了」

手下二名の意識及び行動能力の喪失を確認して、二人はうなずく。そして目標1ことリーダーに視線を向ける。男はさつき蹴られて折れた指を押さえている。

「お、お前ら、何者だ!？」

「名乗る必要はない!」

「大人しく警察に捕ま<sup>つか</sup>ってくれろと楽なだけどね」

「ふっ、ふざけるなあっ! 捕ま<sup>つか</sup>ってムシヨ暮らしになるくらいなら、いっそ全部吹き飛ばしてやらあっ!」

リーダーはそう言うと革ジャンを左右に広げる。そこにあったのは、軽く四〇平方メートルは吹き飛ばせそうな、プラスチック爆弾の腹巻だった。起爆装置は、もちろん手の中にある。

「いくらお前たちでもこの爆発からは逃れられねえ!」

リーダーが親指を立てる。起爆させるのだらう。店内はパニックに飲み込まれた。

「死ねえ！」

「やめろ！」

男が起爆装置のボタンを押すその瞬間だった。

ヒュッ

何かが風を切る音がした。そして次の瞬間、店内にもかかわらず突<sup>とつ</sup>風<sup>ぶう</sup>が巻き起こり、窓ガラスが割れた。

「な、何だっただよ！？」

「う、前が・・・」

店内の全員が自分を風から守るように腕を前に出した。

「なんか物騒なことになってんな」

しばらく五人は昼食を食べていた。京介は聞き耳を立てて、店内で

流れている不穏な会話を聞いた。一夏もその話を聞いている。

「なんか強盗犯が@クルーズを襲撃したんだって」

「大丈夫なの、それ？」

「なんでも人質を取られて警察も動けないらしいよ」

「それって大事ね」

一夏は最後の一口を食べて、何事もないような顔で立ち上がる。

「すみません。ちょっとお手洗いへ」

ガシッ

テーブルから離れようとしたら美雨さんに手首を掴まれた。後ろに倒れそうになるが何とか踏みとどまる。

「どこへ行くつもりですか、若？」

「いや、だからお手洗いに」

「ならお金を置いていく必要があるんですか？」

ノーネームの三人が一夏が座っていたところを見る。そこにはお札きじが置かれていた。

「現場へ行くつもりですか？」

「え、えーっと、その」

やってしまった。お金を置いたのが悪かったか。僕があれこれと考えていると、京介さんがやれやれと言いながら首を横に振っていた。

「美雨さん。そいつなら大丈夫だ」

「何を……言ってる……」

「俺が……いや俺たち三人が保障する」

「そうだな。だから安心するといい」

和馬さんがフォローするように続ける。美雨の手が一瞬だけ緩ゆるんだ。その際に一夏は拘束から抜け出した。

「あ！若！」

「京介さん！和馬さん！ありがとうございます！」

一夏はダッシュで走り去っていく。途中ウェイターに捕まったがお金はテーブルにあると言って店を出てしまった。その姿を美雨は悲しそうな顔で見ている。

「そんなにあの子のことが心配？」

「え？」

クレアが美雨に声をかける。美雨の表情が気になり、クレアはまるで探るさぐように視線を向ける。

「あの子なら問題ないと思います。ただ」  
「ただ？」  
「あの子がいなくなると思うと・・・不安で」  
「あの子なら問題ないわよ」

そう言つてクレアはアイスコーヒーを飲みながら余裕の笑みを浮かべる。しかし美雨の心は晴れなかった。

（あれか・・・）

一夏の視線の先には大勢の人間がいた。警官隊、マスコミ関係者、一般人が現場を囲かこんでいる。

（多いな。なら・・・！！）

サイバーデン刀争術、水鏡渡りみかがみわた



一夏は高速で群衆へと向かう。そして高速移動の中で殺到さっけいで気配を消す。そして群衆の前で足に力を入れ、飛ぶ。水鏡渡りみかがみわたの勢いをそのままに、群衆の真上に行く。

「あれ？今なんか上を」

「さあ？カラスじゃねえの？」

影に気づき、群衆の全員が上を一度見る。しかし殺到で気配を消していたため群衆の反応が遅れ、すでに一夏は群衆を飛び越えていた。そして一夏は@クルーズの侵入に成功した。

突然巻き起こった突風が止やんだ。全員が目を開けるとリーダーが突然大声を上げた。

「ど、どうなってんだ、これは！？」

見ると起爆装置と爆弾がバラバラに分解されていた。爆薬の信管や銅線といったパーツが音を立てながら床に落ちていく。リーダーは爆弾からシャルロットとラウラに視線を向ける。啞然あぜんとしている二人を見て彼らがやったのではないと結論づける。そしてその男は見た。シャルロットとラウラの背後に、まるで空から舞い降りたようにゆっくりと、音を立てず地面に着地する少年の背中を。

「「！！！！！！」」

シャルロットとラウラは突然の気配に後ろを振り向く。そこには背の高い少年がいた。その手にはニッパやドライバーが指の間に挟まれている。そして少年は後ろを向いたまま、澄んだ声で二人に話しかけた。

「あとは・・・二人に任せますね」

その声で二人は我に返る。そしてリーダーに迫り、足払いでリーダーを倒し、彼は頭から床に倒れた。

「「チェック・メイト」」

男は何も言えずに気絶した。それを確認しラウラは少年の方を見る。

「お前、四ノ宮京夜か？」

「・・・・・・お久しぶりです、ミス・ボーデヴィツヒ」

その少年、四ノ宮京夜（織斑一夏）は右足を引き、左手を後ろに、右手を胸の辺りまで持ってきて丁寧なお辞儀をした。紳士のように、

しかしまるで道化のように。シャルロットにはそんな印象をだつた。

「ラウラでかまわん。しかしなぜお前がここにいる？」

「偶然近くを通り過ぎたので」

@クルーズの外には既に大勢の人が集まっていた。その人混みひんみを避けて、また警察の包囲網を越えたことにシャルロットは驚きを隠せなかった。

「ラウラ、この人は？」

「こいつは四ノ宮京夜。テレシアで働く『最強の高校生』と謳うたわれている男だ」

「さ、最強の高校生って……」

シャルロットは思わず苦笑いをする。そんな噂うわさを立てられた本人はたまらないだろう。そう感じたシャルロットだった。

(あれ？この顔……どこかで……)

シャルロットは京夜の顔を見る。その眼鏡の顔に見覚えがあった。しかし記憶があいまいで思い出せない。

「美雨はどうした？」

「今はこちらにいません。近くにいるとは思いますが」

ラウラが呼んだ美雨という名前を知らなかったが、京夜の連れだとシャルロットは判断する。

「ならちようどいい。ここで私と戦え」

「ちよ！？ラウラ！？」

シャルロットはラウラを止めようとするが戦闘態勢を解かない。対照的に京夜は自然体である。

「僕がかまいません。ですがその格好では少し無理があるのでは？」

「私は気にしない。構えろ」

「いや、そこは気にしようよ、ラウラ」

「それにあなたはIS学園の生徒です。公おおやけになるのは避けたほうがいいと思いますよ？」

シャルロットはラウラの方を見ると、一本取られたという顔をしている。どうやら京谷に会ったときに学校の制服でテレシアに行ったらしい。

「そちらの女性も同じことを考えていたと思いますよ」

「えっ？」

ちょうど考えていたことを当てられシャルロットは驚く。さっきから京夜には驚いてばかりである。

「ラウラ、僕たちって代表候補生で専用機持ちだから、公おおやけになるま  
ずいつて」

「そ、それもそうだな。おい、京夜！次は逃げるなよ！！」  
「逃げていません。それに逃げませんよ」

二人が風のように去っていく。さすが代表候補生というべきか、速  
い、そして早い。

「さて僕も帰るとし」

「ねえ！あなた京夜君って言うの？」

「へ？」

「助けてくれてありがとう！」

「あ、はい。どういたしまして」

「ねえ！テレシアで働いてるってホント？」

「え、ええ。まあ」

「お前すげえな！どんな鍛え方してんだ？」

「いや、別に……」

僕は困まれ、質問責めにあつた。こづいづのが一番苦手だ。

「ふう、疲れた」

その後、警察に事情聴取まで受けた。普段ならその程度で疲れるはずはないのに、なんだか精神的な面で疲れた気がする。

「さて、戻るか」

来た道を帰っていた。そして探していた人物に会った。

「京夜君？」

「美雨さん？」

美雨さん（眼鏡をかけてない方）だった。しかしその顔はどこか悲しそうで、おろした髪が彼女の心情を表しているようだった。

「ノーネームの人たちは帰りました。あなたによろしく、と」

「そ、そうですか」

美雨さんが一歩踏み出す。ちょうど僕の目の前に来る。

「遅いじゃないですか」

「すみません、いろいろと訊かれてしま

」

「心配するじゃないですか！！！！！」

突然の大声に僕は驚いた。そして美雨さんの顔を見て、僕は動けなくなってしまうた。

「美雨……さん……？」

美雨さんの目から大粒の涙が出ていた。その涙が頬ほおを伝つたって地面に落ちていく。

「私に」

美雨さんが僕に倒れこんだ。僕はそれを支えることしかできない。

「心配……させないで下さい」

「………すみません」

僕のせいで誰かを悲しませるようなことはしない。そう決めたはずなのに、美雨さんを泣かせてしまった。美雨さんが落ち着き、まとも話せるまでの時間はとても、とても長く感じられた。

「こ、これは、なんだ……?」

「ん、かわいいっ。ラウラ、すっごく似合うよ!」

「だ、抱きつかなく。う、動きにくいだろう……」

「ふっふー、ダクメ。猫ってというのは、ひざの上でおとなしくしないと」

「お、お前も猫だろうが……」

場所はラウラとシャルロットの寮部屋。夕食を済ませ特にすることもないので、シャルロットの提案で今日買ったばかりのパジャマを着ることになった。しかしそれは猫の着ぐるみパジャマだった。ラウラが黒猫、シャルロットが白猫である。特にシャルロットはこれをお互いに着てから、ずっとラウラを後ろから抱きしめるかたちで膝の上に座らせていた。

「ほら、ラウラ。せっかくだから、にゃーんって言うってみて」

「こ、断るっ! な、なぜそんなことをしなくてはならない!?!」

「えー、だって可愛いよ。可愛いのは何よりも優先されることだよ」

今のご機嫌なシャルロットはラウラにとっていつも以上の強敵だった。とにかく『可愛いからいい』『これを着ないなんてとんでもない』『残念ですがその要求は却下されました』と、いつもとは一八



○度違う理屈なしの根拠なし交渉なしの強引なやりとりで、気がつけばシャルロットの膝の上に座らされていた。

「ほらほら、言ってみようよ。にゃーん」

「じゃ、じゃーん……」

照れくさそうに猫の手振りまでつける眼帯黒猫ラウラに、シャルロットの幸せのパーセンテージは既にMAXである。

「ラウラ可愛い〜っ。写真撮ろっ！ね、ねっ!？」

「き、記録を残すだど!? 断固拒否する!」

「そんなこと言わずにさ〜」

コンコン。

「はい、どござ〜」

女子寮特有のフランクさで答えたシャルロットは、ラウラ愛<sup>め</sup>でて幸せいっぱいだった笑顔が次の瞬間真っ赤になった。

「お邪魔します。て、あれ？黒猫と白猫がいますね」

来客は一夏だった。

(ええええええっ!? な、なんで今日!? 今なの!? ち、違っよ?  
こ、これはね、今日シヨツピングで見つけて可愛かったから買った  
んでね、いつもはもっと大人っぽいの着てるんだよ? ち、違っんだ  
よ!?)

頭の中が急速回転をはじめ。シャルロットはそれでも説明できて  
いるつもりだったが、実際に口から出ていたのは「あ、え、う・・・  
・・・」というしどろもどろの音だった。

「で、今日はどこにいたのだ、一夏は」

シャルロットがパニックっている間にその腕から抜け出したラウラは、  
腕組み仁王立ちたてまつりでそう言うが、いつものような覇気はきは全くなかった。  
なにせ、ねこみみ・にくきゅうの黒猫パジャマである。凄味すじみよりも  
むしろ可愛らしさが二割り増しになっている。

「今日はすいません。IS関係の急な用事で出かけてました。本当  
に申し訳ありません」

今日の一夏は午前中にIS関係の書類処理。その後あとにテレシアから  
の呼び出し。次にシャルロットからのメール。午後は外出というこ  
とだった。

「お詫びというほどのものでもないんですけど、おみやげを持ってきました」

そう言っつて一夏が見せたのは@マークが大きく書かれたクッキーの包みだった。

「「!?!」」

二人とも、働いていたときの格好を思い出してダラダラと汗を流しはじめる。

(も、も、もしかして、一夏見てた!?!また僕が女の子っぽくないところを!?!)

(ま、ま、まさか、見られたのか!?!あのような、フリフリヒラヒラの姿を!?!)

一夏の言葉はもう上の空で、ふたりとも今日のアルバイトのことを思い出して顔を埋めて暴れたい気持ちになる。

「それでお店に行ったら事件があったそのお詫びということでもらいました」

「う、うん、そう・・・なんだ」

「じ、事件、とは？」

「銀行強盗って聞きましたけど？」

「……………」

「それで取材に答えている人の話なんですけど、なんでももの凄い美少女メイドと美少年執事と紳士が事件を解決したらいいですよ。まあ縁遠い話ですけどね」

「だ、だよねえ」

「そ、そうだな」

「でも見てみたいですよねえ、そんな映画とかドラマのような場面があったなら」

その言葉にぴくつと反応する二人。心なしか、パジャマのネコミミがピンと立った気がする。

（うー、でもせっかくなら僕もメイド服の方がよかったよ……………）

（しかし、今更実は私たちがと言うのも気が引ける……………）

それぞれにそんなことを思いながら、結局言い出すタイミングを逃してしまつた。

（そういえば、あの四ノ宮京夜はテレシアで働いてるって言ったけど、一夏と知り合いなのかな？でも今ここで訊いたら一夏がテレシアで働いてるってばれるよね。一夏はこのことを隠しておきたいだろうし。あ、でも）

「シャル、シャル。大丈夫ですか？」

「ん？うわあああつ！？」

シャルロットはあまりに深く考えてしまっていたために一夏が話しかけていたことに気がつかなかった。そしてシャルロットを心配して声をかけた一夏の顔はシャルロットの目の前にあった。

(び、びっくりしたあ)

「もしかして疲れてるんですか？」

「え？ま、まあそんなところ」

「だったら休んだほうがいいですよ。無理は体に悪いですから」  
「う、うん。そうするよ」

そんな気遣いにシャルロットは嬉しくなる。そしてベッドで寝ようと思った瞬間、シャルロットの頭の中で何かが輝いた。

「一夏、ちよつとそこに座って」

「？あ、はい」

一夏はシャルロットの言った通りにシャルロットのベッドに座る。そしてシャルロットは体を横向きにし、傾き、そのまま。

ポスッ

「え？」

「シャルロット！お前、何をしている！？ずるいぞ！」

シャルロットの頭は一夏の膝の上にあった。膝枕である。

「うーん？ラウラも来る？」

「と、当然だ！」

シャルロットが右の膝、ラウラが左の膝に頭を乗せている。シャルロットは既にその目を猫のように細くしている。

「二人とも今日は何があつたんですか？」

「なーんにも」

「な、ないぞ！？」

特に何もなさそうなので一夏はこれ以上追及するのをやめた。しばらくそのままにしているとシャルロットが上を向き一夏の顔を見上げた。

「ねえ、一夏」

「はい」

「できれば、その・・・頭を撫でてほしいな」

「ん？別にかまいませんが」

「それじゃあ、お願い」

「了解しました。ラウラさんはどうしますか？」

「わ、私も頼む」

「はい」

一夏は横向きになった二人の頭を優しく撫なでる。シャルロットとラウラはくすぐったそうに、しかし嬉しそうに目を細める。

「二人とも甘えん坊な子猫ですね」

『子猫』と呼ばれたことに赤くなって、二人は小さくうなずく。

「あ、あのさ、一夏。この服、可愛い？」

思い切って聞いてみる。シャルロットは、言っただけに落ち着かなさそうに指をいじった。

「二人とも可愛いですよ。黒猫と白猫というのも合ってると思います」

「そ、そっかあ。えへへ、似合ってる、かあ。うふふ」

「お、お前がそう言うなら……わ、悪くはないな。時々は着ることにしよう」

二人が照れくさそうに喜ぶ。しかし、しばらく一夏が頭を撫なでてい

ると・・・・・・・・。

「「すう・・・・・・・・すう・・・・・・・・」」  
「寝ちゃいましたか」

二人とも気持ち良さそうに寝ていた。一夏は二人を起こすのも悪いのでそこにいることにした。

(一応、連絡しておいた方がいいかな?)

一夏は携帯を取り出し、メールを送る。送信先は彼の姉である織斑千冬だ。このまま何の説明もなくこの状況が見つかれば間違いなく出席簿が脳天を貫く。そう思っ一夏はメールをした。

『ちよつと訳があつてシャルロットさんとラウラさんの部屋に泊ま  
ることになりました』

一夏は携帯を閉じるが、返信はすぐに返ってきた。

『何をされた?』

すごい。メールにまで殺気が込められている。この一言でそれを実



現させているのだから、本当にすごい。とりあえず状況を説明した方がいいね。

『二人に膝枕をしていて動けません』

と、メールを送った。そして予想通り、返信は早かった。

『今日だけだぞ』

とりあえず許可をもらったのを確認し、一夏は再び二人の頭を優しく撫でる。少し上を向いて今日一日を思い返していた。今日の件は『織斑一夏』という名前が余計に広まるのは防ぐことができた。しかし『四ノ宮京夜』としてはどうだろうか？今日は美雨さんを心配させてしまい、ラウラさんには余計なプレッシャーをかけている気がする。そして多くの人間に嘘をついた。シャルの気持ちがかつた気がする。これは・・・想像以上に辛い。

(考えても仕方がないか・・・)

一夏は眠気に襲われて座ったまま寝てしまった。部屋には黒猫が一匹、白猫が一匹、主が一人の温かい空間ができていた。

## 第二十七話 メリットとデメリット（後書き）

塾があつて、宿題があつて、模試があつて、オープンキャンパスに行つて、下書きが消えて・・・まあ、色々ありました。何度も言うようですが更新が遅れて申し訳ありません。それでもまた感想、評価をしてくれると嬉しいです。よろしくお願いします。

第二十八話 精一杯のおもてなしを（四巻終了）（前書き）

遅くなって申し訳ありません。また塾の日々が続いています。行きたくない・・・orz。愚痴ですね、すいません。

でも心の中で言っていないと・・・やっつけられないんですよ。（T

T）

では織斑家編、どうぞ！

第二十八話 精一杯のおもてなしを（四巻終了）

目の前には一つの立派な家。そしてその表札<sup>ひょうざ</sup>。

『織斑』と書かれたそれを、シャルロットは何回も読み返しながら、深呼吸をした。

（大丈夫、大丈夫……。今日は家にいるって言ってたし、急用もないって。一夏は迷惑がたりしない……。よね、たぶん）

目の前にあるのは一夏の家。『織斑』の表札とその下のインターホンと睨めっこ<sup>にらめっこ</sup>をして十分、じりじりとした陽光は容赦なくその金髪を照らしていた。

（うー、あー、えっと、本日はお日柄<sup>ひがら</sup>も良く、……。じゃなくってっ）

なんて切りだそうかと考えては、またボタンに伸ばした手を引つ込める。そうして躊躇<sup>ちゅうちゆ</sup>十一分目を過ぎたところで、いきなり声をかけられた。

「どうしたんですか、シャル？」  
「ふえっ!？」

目の前には一夏がいた。鉄製格子てつせいこうしの扉越しに一夏を見る。体を横に向け、顔だけをこっちに向けているあたり、なにかを終えた後あとに偶然シャルロットを見たという感じである。

「こんにちは？シャル」

「こ、こんにちは？」

「とりあえず、中に入りますか？そこには暑いと思いますし」

「う、うんっ？上がつていいの！？」

「いいですよ。どうぞ」

そう言うと一夏は鉄製格子の扉を開けてシャルロットを招き入れる。自分がドアを開ける動作を自然とやるあたりがなんと一夏らしいとシャルロットは思った。

「あ、あの・・・一夏は何をしたの？」

「庭に水をやっていました」

「庭？」

「あれです」

シャルロットは視線を横に向ける。そこには小さな庭園があった。見ると今が旬の野菜や果物に水滴が残っており、陽光を受けて燦然さんぜんと輝かがやいている。小さなビニールハウスまであった。

（一夏つて、家庭栽培もしてたんだ）

「シャル？入らないんですか？」

「あ、ごめん。お、お邪魔します・・・」

一夏に言われ、シャルロットは一夏の家に入る。

(こ、ここが一夏の家か・・・)

考えてみれば、男の子の家が上がったこと自体初めてのシャルロットは、思い出したようにドキドキと心拍数が上がっていくのを自覚する。

「ちょっと座すわって待っててください。今飲み物を準備しますから。・・・えーっと暑いのでアイス・ラテにでもしましょうか？」

「え？う、うーん・・・ま、任せるよ」

「わかりました。準備してきますね」

ソファーにかけたシャルロットは、それとなくリビングの中を見渡す。一夏の家は至いたって普通の家であり、リビングとキッチンが繋がつなっているタイプのものである。元々中古物件だったものを千冬が格安で買ったものだが、一夏がテレシアで働いて稼かせいだお金をつぎ込んだため全く違った家となった。この時、さすがに千冬でも自分の家を間違えたと思ったのである。

(この家って結構新しいのかな？最近建たてたのかと思うぐらい綺麗きれいだよ)

「はい、シャル。アイス・ラテです」  
「え？う、うんっ。ありがとう」

シャルロットは目の前のテーブルに出されたコップを手にして一口飲む。エスプレッソの苦味が程良くミルクと融け合い、マイルドで甘さ控え目なおいしさが口の中に広がった。

「お、おいしいね」

「よかったです。練習した甲斐がありました」

「練習って？」

「エスプレッソです。どうやったらおいしいエスプレッソができるか研究してたんですよ」

「そ、そうなんだ。エスプレッソはアイスラテの要だもんね。うん……」

726

一夏とふたりきりという状態。シャルロットの心臓の鼓動は加速度的にその速さを増していく。

(な、何か、何か話さないと……えっと、ええっと……)

ピンポン。

「ん？ちよっと出てきますね」

「う、うん」

インターホンに答えるべく一夏はシャルロットの傍そばを離れる。シャルロットは一夏に聞こえないように息を吐いた。どうにも焦ってしまつてうまくいかない。次こそはと思つて、話題を再び考えはじめ

る。  
(そういえば、一夏に四ノ宮京夜のことを聞いてなかったね。あと気になるのは趣味かな。後あとで訊いてみよつと)

「はい。て、あれ？セシリアさん？」

「え？」

シャルロットは一瞬、自分の耳を疑つた。

さかのぼること十分前

。

「ここで間違いありませんわね」

ナビ機能付きの携帯電話を何度も確認しながら、セシリアはその表札を見る。そこにはしっかりと『織斑』と書かれていて、自身の目的地到着を確認した。



(ふ、ふ、ふ。今日一夏さんが在宅しているのはクラスの情報網から得ましたわ。そして、そこに訪れればふたりきりになるのは必然！そう、ふたりきりになれば必然的に )

必然的に、の続きを意識してセシリアの頬が赤く染まる。頭の中で桃色の妄想を浮かべ、しばらく堪能したあとにインターホンへと向かう。

(喉の調子を整えませんか。……こほん)

二度咳払いをして、その指がボタンへと伸びる。ピンポン、と軽い音がして数秒、インターホンから一夏の声が聞こえた。

『はい。て、あれ？セシリアさん？』

「ど、どうも。ご機嫌いかがかしら、一夏さん。ちょうど近くを通りかかったので、少し様子を見に来ましたの」

いつもと同じ口調、涼しげな態度は見せているものの、その内心は穏やかではない。ワクワクと弾む心が声色さえも明るくしている。

「そうですか。せっかくだから上がっていきますか？」

「ええ、はい！ぜひ！あの……実はおいしいと話題のデザート専

門店のケーキを買ってきたんですの」

「すいません、わざわざ。今ドアをあけますね」

「はい！」

実に楽しそうな様子で鉄製格子の扉を開ける。そして一夏が玄関のドアを開けてセシリアを迎え入れる。

「暑い中すいません」

「いえいえ！そんなお気になさらないでく

」

セシリアは一夏の背後にいる人物を見て硬直する。

「き、奇遇きぐいだね、セシリア」

「そ、そうですね、奇遇きぐいですわね。シャルロットさん」

うふふ、あはは、と愛想あいせ笑い。

「さてと、では、僕はケーキを用意してきますね」

座すわって待つててくださいと付け加えられて二人はリビングに行き、ソファに腰掛こしかける。

「セシリアさんは何か飲みたいものはありますか？」  
「飲み物ですか？そ、そうですね……………」

セシリアはテーブルを見てシャルロットの飲み掛けを発見する。

「そ、それじゃあ、アイス・ラテでお願いしますわ」

「わかりました。シャルはどうしますか？他のものにしますか？」

「ぼ、僕も同じのでいいよ」

「わかりました」

一夏はキッチンに戻り、慣れた手つきでコーヒーを淹れていく。

（ど、どうしてシャルロットさんがここに……………。ハッ！？  
もしや、抜け駆けする気では！）

（うつつ、セシリアまで来ちゃったよ……………。せつかく二人つきりだったのに、ああ……………僕が早く行動しないからこんなことに……………）

しばらくして一夏がセシリアのおみやげのケーキを持ってくる。ケーキはそれぞれ苺のショートケーキとレアチーズケーキ、それに洋なしのタルトだった。

「二人は好きなものを選んでください。僕はいいので」

と言って一夏はキッチンに戻っていく。

「もしかして、一夏さんはケーキが苦手ですか？」

キッチンから戻ろうとしたところでセシリアさんに声をかけられた。その顔は今にも泣きそうである。なぜ？

「も、申し訳ありませんでした!!一夏さん!!」

「いえいえ、別に苦手というわけではありません。あまり食べないというだけです。だから安心してください」

笑顔でそう言うと布のコースターの上にコーヒーを乗せて一夏はキッチンへ戻り、洗い物をしていく。

「シャルロットさんはどれにしますか？」

「うーん、セシリアが先に選んで。セシリアのおみやげだし」

「そ、そうですね。では、わたくしはタルトをいただきます」

「えーっと、じゃあ僕は苺のやつにしようかな」

二人はそれぞれのケーキをお皿にのせる。

「その、セシリア、ごちそうさま」

「いえ、どういたしまして」

言葉を交わし、二人はそれぞれケーキを口に運んでいく。

「洋なしのタルトに寒天のコーティング、苺のショートケーキにはスポンジにリキュールといったところかな？」

「！！！！?????」

二人は突然近くで聞こえた声に思わずケーキが喉に詰まりそうになる。咳き込み、アイス・ラテを飲んで自分たちを無理やり落ち着かせる。

「だ、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫では……ありませんわ」

「ど、どうしたの、急に？」

二人は一夏が知らぬ間に近くまで来ていたことに驚いた、そして二人は口元をずっと見られていたという事に激しく狼狽する。実際、一夏が見ていたのはケーキというわけだが。

「作り方を考えていたもので。じろじろと見られては食べずらいですよね。すいません」

一夏は一礼して謝る。そんな一夏は座る様子はない。ちなみに一夏はテレシアで働いているときはお客様の傍で常に直立状態である。自分が座るわけにはいかない。それが今ではすっかり板についている。

「それにしても二人とも随分と早く来ましたね。まだ十時ですよ？」  
「え、ええ。一夏さんは以前早起きと言っていましたから、午前中でも大丈夫かと思ひまして。それに、今日は特に予定もありませんし」「う、うん。僕も今日は一日ずっと暇なんだよね」

本当はこの日のために全ての予定をキャンセルしている二人だったが、それは秘密にしておく。男子の家にどうしても行きたがる女子というのが、それぞれの中であんまりいい印象ではなかったためである。

(な、なんとというか、その……即物的な女と思われたくありませんし……)  
(い、一夏はどう思うかわからないけど、はしたない子って言われたらヤダし……)

とりあえず二人とも一日暇と言うことにしておいた。

「さて、どうしますか？この家はあまり遊ぶものはあまりありませんが、外にでも出ますか？」

「い、いえ！外は暑いですし、せっかくですからここで」

「そ、そうそう！それに、その、できたら一夏の部屋をみたいなあ．．．．．なんて」

「僕の部屋ですか？特に何も無い部屋ですけど」

「そ、それでも！」

セシリアもシャルロットもISを扱<sup>あつか</sup>える以外は普通の女の子だ。意中の相手がこれまで生活してきた部屋には、多分に興味がある。

「ま、まあ、いいですけど」

一夏は妙に強い語調にたじろぐ。

「それじゃあ、行きましようか。僕の部屋は二階です」

その言葉に二人は強い調子でうなずいて、一夏の後をついて行く。いわゆる普通の住宅なので、階段はどこにでもある途中で九十度横に折れたものだった。

（そこまで狭<sup>せま</sup>いというわけではありませんが、ティーセットを運ぶのが大変そうですわね）

（やっぱり僕は豪邸<sup>じゆうてい</sup>よりもこういうお家<sup>うち</sup>がいいな。あたたかさを感じてるっていうのかな）

「つきましたよ。ちなみにあっちが姉さんの部屋です。勝手に入ったら．．．まあ後はどうなるか知りませんが」

「は、はあ。あれがあのだ……」  
「そ、そっか。織斑先生もここで暮らしてたんだよね、当たり前だけど」

あははは、とふたり揃そろって愛想笑いをする。その閉じられたドアが魔窟まくつの入り口のように奇妙な威圧感を放っているように思える。

「ここが僕の部屋です。まあ、何もない部屋ですが、どうぞ」

「お、お気遣い無く」

「お邪魔します」

ドキドキとした心を抱えながら、セシリアとシャルロットは部屋の中に足を踏み入れる。そこには異質な光景があった。一言で表すとそこはオフィスだった。まず目に留とまったのはこつちを向いている書斎しゅさい。最低限の窓、壁には本棚。そして中央にはガラス製のテーブルに対となっている大きめのソファが向かい合っている。高校生の部屋というよりは、どこかの大企業の社長のオフィスといったところだ。

「ベッドがありませんわね」

「ああ。僕は家にいるときはそのソファで寝ています」

「そ、そうなんだ」

ピンポン



「今度は誰だろう。ちょっと出てきますね」

それだけ言い残して一夏は一階へと下りていく。

「  
」

部屋に残されたセシリアとシャルロットは、まじまじとソファを見つめながら一向に動かない。

（一夏さんはどっちのソファで寝ていらっしやるのでしょうか……）

（それにしても一夏がソファで寝てるなんて……え〜つと、座ってもいいのかな……）

そうしてしばらく固まっていると、一階から声が聞こえてきた。

「どうしたんですか、急に？」

「別になんでもいいじゃん。入るわよ？」

家に入ってきたのは鈴だった。

小学校・中学校と何度も訪れた鈴にとって、一夏の家は買って知っ

たる他人の家なので、二階に上がるのも部屋に入るのも躊躇ためらいが無い。しかし一夏の部屋で予想外の二人を見つけ、その動きが固まった。

「な、な、何してんのよ！あんたらは！」

頭に血が上った大声はご近所迷惑この上ない。そしえその声は当然一階まで聞こえて、他の客も二階に呼んでしまった。

「なんだ。何を大声を出している」

「潜入部隊でもいたか？」

ゾロゾロとやってきたのは、箒にラウラだった。

そしていつもの五人が一夏の部屋に集まった。

「なんでみなさん急に來るんですか？連絡ぐらいしてくれれば」

「仕方ないだろう。今朝けさになってヒマになったのだから」

「そうよ。それとも何？いきなりこられると困るわけ？エロいものでも隠す？」

全員が一夏が作ったアールグレイを飲み、サンドイッチを食べている。揚げた肉にソースを絡めたものやチーズと野菜を挟んだサンドイッチなどが。そして全員分のサラダがテーブルに置かれる。野菜は全て一夏の庭で作られたものであり、新鮮であった。ちなみに一夏の昼は十　メ　だった。

「わ、わたくしは、ケーキを屋さんによっていて忙しかったので」「い、ごめんね。うっかりしちゃってて」

実際のところ、全員が全員『来ちゃった』というのをやりたかっただけというのは、この場の女子は互いに理解していた。

「ちなみに私は突然やってきて驚かせてやろうと思ったのだ。どうだ、嬉しいだろう」

しれっとラウラがそう告げる。

(( ((この自信が時に羨ましい・・・)) ))

ラウラ以外の女子四人は、全く同時にそう思うのだった。

「ところで午後はどうしますか？みなさんは外ではなく、あくまで

家の中がいいんですよね？」

こくん、と全員がサンドイッチを口に含んだままうなずく。

(わざわざ一夏が帰省きせいしている日を狙ねらってきたのだ)

(外になんか出たら台無しじゃない、バカ)

(なにか、今まで知ることの無かったことの一つは得たいものですわ)

(四ノ宮京夜のこととは聞けなくなっちゃたけど、他のことも知りた  
いし)

(織斑教官の暮らしていた家としても、興味がある)

そんなことを各々(おのおの)に思いながら、箒に鈴、セシリア、シャルロットとラウラは食べ終える。一夏は再び一人で食器洗い。

「それで、どうするんですか？この家にはあまりみんなで遊べるものはありませんけど」

「まー、そういうだろうと思って、あたしが用意してきたわよ。はい」

そうやって鈴さんが持ってきた紙袋には、トランプから花札、モノポリーに人生ゲーム、その他様々なカードゲームとボードゲームが溢あふれていた。

「あ、でも、あんたがいるならやめた方がいいかもしれないわね」  
「まあ、そうかもしれないな」  
「……………そうかもしれないですね」

鈴はまるで呆れたよう顔をして、箒はうんうんとうなずく。一夏は苦笑しながらそんなことを口にする。他の三人はわからないという顔をしている。

「どづいづいことですか?」

セシリアが一夏に問いかけ、シャルロットとラウラは真剣に聞いている。

「一夏はなぜかわからないけど、昔から勝負運が強いのよ」  
「まあ、そういふことです」  
「トランプは負けるところを見たことが無いな」

残りの三人は信じられないという顔をしている。

「ま、まあ、とりあえずやってみなければわかりませんわ」

そして鈴の持ってきたゲームを取り出し、適当に選んで始める。セシリア、シャルロット、ラウラの三人は鈴と箒が言っていた事をこ

れから理解する。

数時間後。

「はい。また僕が一番ですね」

鈴が持ってきた様々なゲームをひたすらやり続けた。その結果がこれである。

全て一夏の全勝。今はUNOである。

「やはりこうなったか・・・」

「どうしてですか？」

「だからあたしはやりたくないっていったのよ」

「ここまで来ると・・・もう何も言えないね」

「さすが・・・と言いたいが、これは異常じゃないか？」

筭と鈴は諦めて<sup>あきら</sup>んでいるものの、五対一という形に持ち込んでいた。しかし最後まで必ず一夏の逆転。それが延々と続いた。

「もう一度ですわー！」

「セシリア、さすがにもう無理だよ」

「あたしもう<sup>つか</sup>疲れた」

セシリアが六回目のUNOのため、切りはじめたところで、唐突に予想外の人物がやってきた。

「なんだ、賑やかだと思ったらお前たちか」

織斑千冬、その人である。私服姿は白いワイシャツにジーパンという行動的な人柄をよく表しているそれで、服の下では黒いタンクトップが豊満な胸を窮屈そうに押し込めていた。

「おかえり、姉さん」

「ああ、ただいま」

すぐさま一夏は立ち上がって、千冬の側に行く。右肩のカバンを受け取ってかたづけける様はまるで執事のようなようである。

「弁当は食べた？」

「ああ、おいしかったぞ」

「よかった。コーヒーでも淹れようか？冷たいのだったらアイス・ラテとモカがあるけど」

「そうだな。それなら」

と、そこまで言うてから千冬はふと気がつく。教え子のどつにも圧迫された雰囲気と、一夏の世話を羨ましそうに眺める視線に。

「……いや、いい。すぐにまた出る。仕事だ」  
「ん、わかった。アイスケーキを作ったけど」  
「また今度もらうさ。では、着替えてくる」  
「うん。スーツはいつも通りの所に置いてあるから。あと必要なものは全部姉さんのバッグに入れてあるよ」  
「わかった」

いつも悪いな、と言おうとしたが、あえて口にはしない。女子たちの『なんか、夫婦みたい……』という空気を感じ取って、それ以上何かを言えばただただ本人たちのダメージになる気がしたからだ。

ドアを閉じる音がして千冬がリビングを出て行く。そこでやっと呼吸ができるようになったかのように、五人は息を吐いた。

「……あなた、相変わらず千冬さんにべったりね」  
「え？そですか？」  
「あんたもしかして自覚ないの？」

千冬の登場　　というよりは、千冬に対する一夏の態度に対して、鈴は見るからに刺々（とげとげ）しい雰囲気をつつく。同じく幼馴染の筈だったが、昔よりもずっと二人の距離が近い気がして、言いようのない不安が胸の中に渦巻いていた。



(・・・一夏のやつ、前よりシスコンぶりがひどくなっているのではないか・・・?)

そしてセシリアとシャルロットは同じような不安を抱えていた。

(織斑先生、本当に一夏さんのことを弟としてだけ見ているのかしら・・・?)

(な、無いよね？ふたりだけの世界とか、ふたりだけの想いとか、ないよね?)

過去に一度やらかしているラウラは、再度暴れるかと思いきや以前とは違う嫉妬しつとに身を焦こがしている。

(むう・・・。一夏め、私の嫁のくせに・・・。しかし、教官は いや、教官といえど！私の嫁が私以外に愛想あいそ良くするなど、許さん。いやだがしかし・・・。むむう)

そんなこんなでおかしな沈黙が重く停滞ていたいする。

「あの、みなさんどうしたんですか？」

「・・・アイスクーキ」

「え？」

「アイスクーキ、出しなさいよ！ああもう、三時のおやつも出さなかつたくせに、腹立つ！」

「ど、どうしたんですか、いきなり？」

「ゴホン！その、なんだ。私はそれなりに好きで………な  
「はい？」

「あ、味見をしてやるう」

照れ隠しの腕組みをしながら言い放つ筈に押される一夏は、次にラウラに捕まった。

「味見………そうか、味見は必要だな。教官におかしなものはたべさせられまい」

「えーっと、どうしたんですか、ラウラさん？」

「食べてやるうと言っているのだ。持ってこい」

そこに、セシリアとシャルロットも続く。

「そ、そうですね！わたくしも味見をして差し上げます！」

「じゃ、じゃあ僕も………」

「………うーん、まだ試作段階くわくなんだけどな。どうするべきか」

実際は千冬に試食してもらい、桜木にも試食してもらってから誰かにふるまうというのが一夏のデフォルトとなっている。しばらく一夏が悩んでいると、リビングのドアが開いた。

「なんだ、揉め事か？この家にいる限りは仲良くしろ」

スーツ姿が決まっている千冬は、その同姓ですら憧れる格好良さで女子全員の注目を集める。そしてそのまま、テキパキと出かける用意をして二分足らずで玄関へ通じるドアに向かう。

「一夏。今日は帰れないから、後は好きにしる。お前たちはゆっくりしていけ。泊まりはだめだがな」

「あ。待って、姉さん」

千冬がリビングを出ようとしたところで一夏は千冬を引き止める。

「いつてらっしやい」

「ああ」

そう言って、一夏は千冬を見送り、千冬は家を出る。

「好きにしる……か……」

一夏は眩き、しばらく考えたあとに、冷蔵庫を開けてアイスクリームを取り出し、五つの皿に切り分ける。

「お待たせしました」

五人の前にアイスクーキを置いていく。目の前には少し赤みのあるクーキだった。五人はフォークを取り、恐る恐る口にする。

「ふむ、これは・・・スイカか？」

「はい、その通りです」

「どうやって作ってますの？」

「スイカそのものを少し使って、またその果汁をクリームとアイスに少し染み込ませてます」

「相変わらずのクオリティーね。あんた普段何やってんの？」

「主に料理の研究だと思えますけど」

「一夏って他のクーキも作れるの？」

「できないこともないですがクーキに関しては自信がありません」

「教官は毎日手料理を味わっていたわけか。羨ましいなうらやましい」

「僕なんてまだまだですよ」

そう。桜木さんに比べたらまだまだだ。

「ああ、そうだ。夕飯の準備してきますね。みなさんは今日はどうしますか？」

その言葉を聞いて、女子の目がキラーンと光った。

「夜は私が料理を作つてやろう！なに、昼とケーキの礼だ」

「そうね！あたしの腕前も披露ひびょうしてあげちゃおうかしらね」

「じゃ、じゃあ僕も作り側で参加しようかな」

「無論、私も加わろう。軍ではローテーションで食事係があつたからな、期待しろ」

「本来なら私は料理側に回ることはありませんけど、今日は特別ですわ」

「いや、みなさんはここでのんびりしててください。お客様ですから」

一夏は五人に何も言わせないような笑顔でキッチンへ向かう。

(食材は冷蔵庫の中につぱいあるから大丈夫なはずだ)

「お待たせしましたっ」

駅から少し行つたところにある商店街の、その地下にあるバーに息を切らしてやってきたのは山田先生こと山田真耶だった。夕方四時から翌朝八時まで開いているこのお店の名は『バー・クレッシェンド』。フランス製の調度品で統一した大人の社交場であり、千冬が行きつけの場所でもある。

「すまないな、急に呼び出したりして」

「いえいえ。どうせ部屋で通販カタログを眺めていただけですから」

真耶がカウンター席にかけると、すぐに千冬がノーマル&ブラック・ミックスのグラスビールをマスターに注文する。もちろん、真耶の分だ。

「千冬さんも新しいのをお出ししましたよ？」

「そうですね、頼みます」

「かしこまりました」

初老のマスターが一人でやっているこのお店は、その口ひげに白髪  
のオールバックという容貌じやうがいもあって女性ファンが多い。千冬にとっ  
てはその外見が特別好みというわけではないが、マスターの落ち着  
いた声のトーンはお気に入りである。

「どうぞ」

真耶のビールと、それに千冬の黒ビール、それからサービスのキ  
ューブチーズを出して、マスターはふたりから少し距離を置く。間近  
に他人がいたのでは落ち着いて話せないのが人間なので、それをよ  
く知っている長年の経験からなる気配りだった。ふと思う。一夏が  
歳を取るとこういう人間になるのではないかと。

「乾杯」

チン、とグラスを鳴らし、真耶はちびちびと、千冬はゆっくりだが長くグラスを傾ける。大体グラスのビールが半分ほどなくなったところで、真耶は質問を切り出した。

「今日はどうしたんですか？お休みだから、帰省されたんじゃない？」

「そのつもりだったんだがな、家に女子がいてな」

「女子！？おおー、もしかして織斑君のですか？」

「ああ、そうだ。うちの生徒　　というか、いつもの面々だ」

「ということは専用機持ちが六人ですかあ。戦争が起こせる戦力ですね」

「冗談にならないぞ、それは」

そついいながらも、くっくつと千冬は笑いながらチーズを頬ばる。

「織斑先生としては、気になりますか？弟さんがガールフレンドといるのは」

「それなんだがなあ……」

そこでちょうどビールが底をついて、千冬はマスターにおかわりを頼む。四杯目になる黒ビールを一口飲んでから、千冬は話を続けた。

「あいつが誰としようがかまわん。だがな……」

「どうしたんですか？」

「心配なんだ。今日、あいつを見て思ったんだが、どこか他人と距離を置いているように見えてな」

「他人と距離を・・・ですか？あの織斑君が？」

「いや、ただの勘違いかもしれない。しかし・・・前からそう感じることが何度もあった」

ぐいっとグラスを傾け、深いコクの黒ビールを喉で味わう。

「マスター、おかわり」

「はい、ただいま」

再度出されたグラスビールを、一気に半分まで空ける。

「でも織斑君はテレシアで働いてますよね。接客業なら、なおさらじゃないんですか？」

「それはそうかもしれない。しかし、あいつは日常でもそんな感じなんだ」

千冬表情に影が落ちる。その顔は一夏が自分の罪に悩んでいる顔を見ると同じ顔だった。

「それであいつが誰かを・・・傷つけてしまうのではないか  
と思うて」



「……………うーん、そんなに気になるのなら実際に話し合っ  
てはどうでしょうか？」  
「どういふことだ？」

真耶はビールを少しだけ飲み、続ける。

「悩んでいるより本人と直接話し合ったほうがいいですよ。いつで  
も会えるんですから」

「……………テレシアか」

真耶はまた一口飲んで実に楽しそうにしている。千冬は残りのビー  
ルを飲み干した。

「さて、今日は朝まで付き合いますよ」

「ふん、お前も、そういう台詞は男に言ったらどうだ」

「そうですねえ。目の前の人より男前な人が現れたらそうします」

そう言って、イタズラっぽく真耶は千冬を見つめる。

「ではマスターだな。おすすめだぞ」

「千冬さん、年寄りをからかうものではありませんよ」

言いながら、マスターが出したのは黒ビールではなく、ソルティー

ドッグだった。ガラスの縁のつけた塩が、まるで雪化粧のように美しい。

「……まだ頼んでない」

「そろそろ飲みたい頃だと思ひまして」

「ふん……。私の周りはお節介ばかりだ」

憎まれ口を叩きながらも満更ではないような千冬だったが、先読みされているようなムードに少しでも抵抗したくて唇を尖らせてから一口味わう。それはまるで子供が拗ねているかのような顔だったが、真耶もマスターも何も言わない。

「愛されているってことですよ。ね、マスター」

「そうですね」

それじゃあお節介ついでに何か作りますねと言って、マスターは奥のキッチンへと引っ込む。まだ子供じみた様子で拗ねている千冬は、残っていたチーズを全部一気に口へと放り込んだ。

「みんな悩んでるんですね、色々やって、色々あって」

「ぶつ。年寄り臭いぞ」

「な、なんですかつ。もう！笑うなんてひどいですよ」

「悪かった悪かった」

はっはっはつと笑う千冬と、むすーつと頬を膨らませる真耶。そんなふたりをソルティードッグの中の氷が、かららんと音色お奏かなで眺ながめていた。

場所は変わって織斑邸。おりむらてい

「なんてこつたい……………」

らしくもなく一夏は冷蔵庫の前でそう呟つぶやいた。

(迂闊うかつだった……………和食が……………作れない)

一夏は家の冷蔵庫の中を見て挫折せつそくした。中にはテレシア専用、つまりほとんどが洋食用の食材で埋め尽くされていた。女子に合わせて夕食を作る予定だったため、篝や鈴には和食にしようと思っていた一夏だった。

(……………べつすれば……………)

ここで一夏の脳内会議が始まる。

丸いテーブルに三人のデフォルメされた一夏が集まり、三人がイスに座っている。一人はカイゼル髭ひげを生やした一夏、その左には現実世界の一夏、右には四ノ宮京夜がいる。

(どうしますか?このままでは和食が作れません。今から材料を買いに行くべきでは?)

いつもの一夏がそう言う。

(お客様を待たせるなど言語道断。それに今から買いに行くなど夕食の時間がさらに遅れるだけです)

四ノ宮京夜が反論する。ふたりとも言っていることはお客様のためである。どちらの意見も否定はできない。

(君たちの言うことは正論だ。だが君たちは重要なことを忘れている)

今まで黙っていたカイゼル髭ひげの一夏がある本をどこから取り出したかは知らないが、一冊の本を掲かかげる。

(それは……………)

(接客のための100の心得……………)

一夏と京夜はその本を見て立ち上がる。

(接客の本だが、ここには今の私たちにとって重要なことが書かれている)

カイゼル髭の一夏はページをめくり、席から立ち上がって高らかに声を上げる。

(接客のための心得その6！自分が今持てる最善の手で、お客様にとって最良のおもてなしをせよ！)

(……………)

(君たちはもうやるべきことがわかっているはずだ。では……………これにて会議を終える)

そこで脳内会議は終わる。回想時間はおよそ三十秒。

「それでは……………はじめましょうか」

「お待たせしました」

夕食。

一夏が出したのはレストランのフルコース。しかし味は和風といった変わったものだった。

「お、おいしいな・・・」

「随分と食べやすくしてますわね」

「これ・・・だいぶ無理して作ってない？」

「でもすごいよ、これ」

「異様な組み合わせだな」

五人が食事を摂っている間、一夏は打ちのめされたボクサーのようにイスに座って休んでいた。材料が少ない中、短時間で問題を解決した。

（うん・・・これなら姉さんにも、桜木さんにも認めてもらえるかな）

俯うつむきながらそんなことを考えていた。

くくくくくくくくくく

一夏の腹部から情けない音が響いた。

（はずかしい……）

もはや考える力もほとんど残っていないかった。テレシアでは材料に困ることなど一切なく、今日は知識を総動員させた結果がこれだ。

「ほら、立て。だらしないぞ」

「一夏さんも一緒に食べましょう？」

「なんであなたはここまでバカなのよ」

「おつかれ、一夏」

「嫁が食事に同席しないでどうする」

五人が一夏の腕を取って無理やり一夏を立たせ、テーブルへ引っ張っていく。

「すみません……」

こうして全員で食べるということに、暖かな気持ちを抱きながら、夏の夜は過ぎていく。

第二十八話 精一杯のおもてなしを（四巻終了）（後書き）

四ノ宮君は外では悩みの種ですが、脳内では良き相談相手です。無意識ですけどね。ちなみに『バー・クレッツシエンド』のマスターはテレシアのマスターではありません。一応言っておきます。それでは、また。



テレシアにて 織斑千冬（前書き）

今回は駄文となってしまうかもしれませんが、すいません。千冬編です。今回は姉としてです。どうぞ！

## テレシアにて 織斑千冬

夏休みもあとわずか。

つまり、このテレシアで存分に働けるのもあと数日。僕は精一杯働こうと思っていた。今日も『四ノ宮京夜』として。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

どうやら今日来るお客さんはいわゆるビッグゲストらしい。そのため、ある程度テレシアの予定をキャンセルしたとか。どこの大物が来るんだろう。まあそのせいもあって気合が入る。テレシアの入り口の周りには二列に整列したSPたち。僕もそのなかにいる。

今来たお客様がカツンカツンと音を立てながら歩いていく。そして僕の目の前まで来る。顔を上げようとした瞬間だった。

カツン

直接見たわけではないからわからないけど、間違いなく僕の頭の後ろあたりを殴られた。しかし倒れるわけにはいかない。たとえどんなお客様であろうと無様な姿を晒すわけにはいかない。

「………お客様………何を」

ガシッ

そして頭を掴まれる。なんだこの握力。りんごを片手で軽々（かるがる）と潰せる……。いや、それ以上だ。ゆ、指が……。

「何をしているのですか、ブリュンヒルデ！」  
「こいつに用がある」

今まで完全にフリーズしていたSPの一人が声を上げる。……  
・待て。さっきのは幻聴か？ 僕が知っているブリュンヒルデは一人しかない。それに聞き覚えのある声。なぜか手の力が緩められ、今度は優しく頭を撫でられる。当然『四ノ宮京夜』の髪型は崩れ、いつもの『織斑一夏』の髪型に戻る。僕はゆっくりと頭を上げた。

「似合わないな、その口調は」  
「いきなり暴力を振るうのはどうかと思うよ……姉さん」

見上げるとそこには複雑な表情をした織斑千冬、僕の姉さんがいた。

今日、姉さんは学園職員として外部との打ち合わせがあるらしい。なぜここを選んだのか、それは教えてくれなかった。しかし、話ができるだけ内密にしておきたいということで、姉さんはロビーの隅すみにあるソファで誰かと話していた。

「四ノ宮、次はボイラー室の点検をお願いします」  
「わかりました」

マスターからボイラー室の鍵かぎを受け取り、目的地へ向かう。今の僕は高速でテレシア全体を移動中だ。主に掃除。そして異常がないかチェック。どんな埃ほこりも見逃さない。実際自分が働いているところを清潔せいけつにするのはいいことだ。ワーカホリック？最高の褒め言葉ほめごえいです。

「さて、終わったら桜木さんの手伝いでもしようかな」

テレシアを一通り回って、マスターに報告を終えてから桜木さんを探さがす。ちょうど廊下を歩いているところで美雨さんに会った。ちなみに硬派こうぱの方だ。

「ここにいましたか、若」

「どうかしましたか？」

「桜木さんが手を貸してほしいそうです」

「桜木さんが？」

「はい」

意外だった。桜木さんならどんな仕事も一人でこなすと思っていた。でも、ちょうどよかった。

「じゃあ、すぐにでも行きましょうか」

「若、午前中の仕事は？」

「ちゃんと終わらせました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

美雨さんがじーっと見ている。間違いなく疑うたがわれてるな。あの時から少し信用されていないのかもしれない。

「本当ですよ。ほら、桜木さんが待ってますから」

「それは・・・・・・・・・・そうですが」

「美雨さんはどうなんですか？」

「え？」

「午前中の仕事は終わったんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙。美雨さんの方が終わっていなかった。いや、僕より仕事の量が多いとみた。

「とりあえず、まずは桜木さんのところへ行きましょう。それから

美雨さんの手伝いをします」

「いえ、だめです。若に私の仕事をさせるわけにはいきません」

「僕が決めたことです。美雨さんがなんと言おうと僕は手伝います」  
「よ」

僕は美雨さんの返答を待たずに背を向ける。

「桜木さんがどこにいるか教えてください」

「・・・わかりました」

その後桜木さんの仕事を手伝って、美雨さんの仕事を二人で終わらせた。心なしか二人で働いていたときの美雨さんはいつもより、楽しそうに仕事をしているように見えた。

そこには千冬と目の細い男性がいた。その整った顔立ち、細い目、崩れることのない笑み。その男は狐を連想させた。ロビーの隅。ここでは密談が行われ、そのため小声である。

「ではなるべく多くのデータをお願いしますね」

「本人の合意がなければ全てのデータの開示はできません」

「そこは何とかしてください、ブリュンヒルデ」

「無理ですね。言っておきますが、データを悪用すれば貴方がたに

危害が及ぶおよことをお忘れなく」

ブリュンヒルデの気迫きはくをのせて忠告する。実際一夏なつに事情を説明して頼めば、どれだけ大きな組織であろうと三分も経たたずにサイバー方面で壊滅かいめつする。時と場合によるが。

「……わかりました、それではこれで  
「いずれまた」

その男は書類を持って立ち上がりその場を去っていく。千冬は一息つく。

「お疲れ様です」

その言葉と同時に、目の前に紅茶が置かれた。見ると黒髪をアップにして眼鏡めがねをかけた黒服の女性、天野美雨あまのみうがいた。

「ああ、すまない。いただきます」  
「どうぞ」

千冬はティーカップを自分の口へと持っていく。そして一口飲んだ後にふと思った。一夏なつが淹ひれる紅茶によく似ている。いや、一夏の紅茶がこの紅茶に似ている。ある一つの疑問が浮かんだ。

「一夏に料理を教えているのは君か？」  
「違います。それはあなたが一番わかっているはずです、ブリュンヒルデ。いえ……織斑千冬様」

実際、紅茶の味は似ているというだけで少し違った。それに一夏が誰かに料理を教わっているところは見たことがない。全て一夏のオリジナルである。

「申し遅れました。私は若の……織斑一夏の専属のSPである天野美雨です。以後、お見知りおきを」

美雨は丁寧なお辞儀をする。千冬も小さくお辞儀をして美雨を見る。しっかりしている印象を千冬は受けた。しかしまだ疑問が残る。なぜ似ているのか。

「君に料理を教えているのは誰だ？」

「私に料理を教えてくれたのは」

「呼んだかい、美雨ちゃん？」

見ると笑顔でやってくるおばあさんが来た。桜木和子<sup>さくらぎかずこ</sup>である。

「こんにちは、織斑千冬さん。私の名前は桜木和子です」



のんびりした声で挨拶をして、千冬とは反対側のソファに座る。

「美雨ちゃんもここに座ったらどうだい？」

「いえ、私はここで」

美雨はその凛とした態度を崩さず、座らずにただ側にいた。それがSPのルール。桜木はそれをわかっていながらも誘い、断られることもわかっていたため、気にしなかった。

「それで、私に何か御用ですかねえ？」

「……一夏に料理を教えたのはあなたですか？」

「私は料理をふるまっただけなだけどねえ」

ころころと笑いながら桜木は笑顔を崩さない。そしてまるで全てを見透かすように千冬に視線を向ける。

「訊きたいのはそのことではないはずなんですがねえ、織斑千冬さん」

「千冬でかまいません。あなたの言うとおり、わたしが本当に訊きたいことは別のことです」

千冬は深呼吸をし、意を決して言葉を紡ぐ。

「いつから……一夏は他人と距離をとるようになりまし  
たか？」

テレシア最上階にあるレストラン。  
漆黒のドレスを身に纏い、千冬は窓際の二人用のテーブルで外を眺  
めていた。雰囲気を出すために少し暗くされた店内では、その姿は  
神秘的である。当然、周りの注目を集める。

「おい、あそこにいるのは誰だ？」

「ブリュンヒルデでございます、お客様」

「なに、ブリュンヒルデだと？」

「なぜここにいる？」

「いやあ、聞いたとおりの美しい方だ」

千冬は気にせず店内にいるある一人の人物をじっと見ている。

「ほう、君が四ノ宮京夜君かね。うわさは兼ね兼ね聞いているよ」

「恐れ入ります、春野様」

「さて、話というのは商談だね。君の意見を聞かせてほしい」

「僕でよろしければ」

見ると一人の中年の男と一夏（四ノ宮京夜）が話し込んでいた。

「この会社はどうかね？」

「この会社は表ではいい評判ですが、実際は赤字です」

「なるほど、危うく失敗するところだったよ」

「いえいえ、お力になれてよかったです」

「しかしどこから情報を手に入れたのかね？」

「それは秘密です」

笑顔で対応する一夏に苦笑するしかない千冬だった。一夏お得意のハッキングである。

「そうだ。こっちは娘の恵だ。ほら、挨拶しなさい」

「はじめまして、四ノ宮京夜様。私は春野恵と申します」

「こちらこそ、四ノ宮京夜です」

恵はドレスをつまんで丁寧にお辞儀をする。見るからに令嬢といった雰囲気（なごころじやうじやう）の女性で性格も外見的にも悪くない、千冬はそう思った。

「それでどうだね、うちの娘は？」

「とても綺麗な御方（おかた）です」

「ところで、四ノ宮君はお付き合っている女性はあるのかね？」

「いえ、いません。ここで働いているということもあって、そういう交際は全く」

「この際、うちの娘とどうかね？」

「いえいえ、僕にはもつたいない御方です。でも」

京夜は手を前にかざし、強く握りしめた。そしていきなり開いたかと思うと、その手には一輪の花があった。

「またお越しく下さい。いつでもお待ちしております。では、時間ですので」

「うむ、もうそんな時間か。ありがとう」

京夜は恵にその花を渡し、その場を離れる。その後、商談が五件、交際が三件。千冬はそれをずっと見ていたが、突然ウェイターの一人が千冬のテーブルにやってきた。

「お待ちせしました。『サマーナイト』のオードブルでございます」「何も頼んでいないはずだが？」

「いえ、シェフがぜひ召し上がってほしいとのことですよ」

失礼しますと言って、ウェイターは厨房へ戻っていく。その後、合見を見て『ポタージュ』（スープ）、『ポアソン』（魚料理）、『アントレ』（第一の肉料理）、『ソルベ』（冷菓）、『ロティー』（第二の肉料理）、『サラダ』、『アントルメ』（甘い菓子）、『フルユイ』（フルーツ）、コーヒーを持ってきた。食べ終えた千冬の感想は単純なものだった。

(相<sup>あ</sup>変<sup>い</sup>わらず、おいしかったな)

コーヒーを飲みながら時間をつぶしていた。そして時刻は夜の11時。店内には千冬以外の客はいない。

「おまたせ、姉さん」

一夏は千冬とは反対側の席に座って向き合っ。

「こんな時間まで働いていたとは思わなかったぞ」

「それは………謝<sup>あや</sup>る。ゴメン」

「まあいい、許してやる。それで、どうして最初の相手だけに花をやったんだ？」

「え？ああ、あれね。あの人の父親は純粹に娘に幸<sup>しあ</sup>せになっってほし  
いっっていう気持ち<sup>あ</sup>が伝わってきたからだよ」

「他の奴らはどうだったんだ？」

「単純にお金のため、かな？あまり言うつもりはないけど、いやな  
目をしていたよ」

ため息をしながら言う一夏に少し安心する。人を見る目があり、変  
な女に引<sup>ひ</sup>つかかるとい<sup>い</sup>ことがないとわかった千冬は安心した。

「訊きたいのはそのことじゃないよね、姉さん」

一夏は桜木のように千冬の本心を見抜いた。千冬はテレシアの人間には隠し事は通用しないと改めて痛感した。

「一夏、お前は」

一夏は笑顔のまま千冬の真剣な顔を見て構える。

「どうして『四ノ宮京夜になった』？」

「へ？」

どんなことを訊かれても動どうじないつもりの一夏だったが、さすがに驚いた。

「何が……言いたいの？」

「桜木さんや天野から聞いた」

千冬は二人から聞いた事を話した。

「いつから織斑君が距離をとるようになったか……ねえ」

数時間前、桜木は千冬に訊かれて記憶を掘り返すために目を瞑った。考えること数秒、桜木は目を開く。そして笑顔で美雨のほうを向いた。

「いつだったかねえ、美雨ちゃん」

「なぜ私なんですか？」

「いやあ、私よりも美雨ちゃんのほうがあの子を見てると思ったんだけどねえ」

そこで美雨は視線を逸らす。千冬は二人の会話を聞いて呆れた。

(学園の外でも……か)

しばらくすると美雨が真剣な顔で千冬の質問に答えた。

「あの子が……若が変わってしまったのは約三年前、わかりやすく言うと第二回モンド・グロツソのあとです」

「……」

千冬の顔が驚愕に染まる。もう、あのことで一夏は悩んでいないはずである。

「あの時は大変でした。マスターの……このオーナーが話しかけても反応がなくて。ただひたすら他人を避<sup>さ</sup>けていたようにも見えました」

美雨は淡々と続けるがその顔には影が見える。

「それでも時間をかけて本人はこのみなさんと話すようになりました。しかし『織斑一夏』としてではなく、『四ノ宮京夜』としてでした」

「あれか」

千冬は一瞬で見抜いたが、見慣れない人間なら確かに別人である。一部の人間なら気づくかもしれないが。

「期間が長かったのか、それとも何か別の理由なのか、若は他人と正面を向いて話すことはなくなりました。私にも……………」

「でも、最近では本人も悩んでいるようで、私にも相談してくれるようになりました」

「そうか……………」

千冬は一夏に相談相手がいることにほっとした。



「あなたが直接訊いてみたほうがいいと思います」

「私が？なぜだ」

「あなたは若の家族です。あなたが一番あの子を理解できているはずです」

「しかし、私は一夏を一年間ほったらかしにしていたんだ。わたしが解決できるとは思えん」

「それでもです。私より、あなたのほうがあの子は話すと思います」

「で、どうなんだ？」

なぜ『四ノ宮京夜』を名乗っているのか。千冬は説明した後、改めて一夏に訊いた。

「そうだね、世界で唯一ISが使える男である『織斑一夏』がここで働いていると知られたらマスコミとかがテレシアに押し寄せると思ったんだ。そうしたらここにも迷惑をかけることになる。だから偽名を考えたんだ。それが『四ノ宮京夜』。最初はそのつもりだった」

千冬は真剣な顔で一夏の話の話を聞いている。一夏も隠すことはできないと思って話している。

「でも気づいたら『四ノ宮京夜』でいることが多くなった。正体を  
知られないために一定の距離をとって人と接せつするようになったんだ。  
その距離が普通になって、でも誰かに心配をかけることもあった。  
僕は望んでないのにね」

一夏の話聞いた後に、千冬はしばらく思索した後にその席を立ち、  
一夏の隣まで来て

ガン

唐突に一夏の頭を殴なぐった。

777

「………な、なんで？」

「お前はなぜ、はやく他人に相談しない？」

「そう簡単に相談できるようなものじゃないから」

「一人で抱え込むから他人が心配するんだ」

「あ………」

一夏は今更いまさら気づいたような顔をしている。千冬はそれに呆あきれるしか  
ない。

「お前はもう少し他人を頼れ」

「無理は体に毒だからねえ」

桜木が知らぬ間に来ていた。後ろには美雨もいる。

「若、私はただ側そばにいるだけではありません。そこは理解してください」

美雨は当然だと一夏に言うが、本人は難しい顔をしている。

「千冬さん、席は移動できますかねえ？」

「はい、できますが……」

「それなら、晚おそいですがお茶でもしよつかねえ。美雨ちゃん、一夏君、手伝って」

「あ、ああ、はい」

桜木に一夏と呼ばれたことに驚きながらも一夏は美雨と一緒に飲み物を用意する。一夏に用意されたのはホットココアだった。四人のお茶会が始まる。

「一夏、お前は一人じゃないんだ。そのことをよく覚えておけ」  
「………わかったよ、姉さん」

そのココアのぬくもりはココアだけのものではないように思えた。

冬  
終

テレシアにて  
織斑千

テレシアにて 織斑千冬（後書き）

駄文で申し訳ありません。スランプです。

さて今回は五巻。実は困っています。一夏がまじめすぎて会長への反応をどうしたらいいかわかりません・・・orz

書くとしたらどういう展開にしたらいいのか、一夏にどういう反応をさせたらいいのか、アドバイスお願いします。それでは、次回まで。

第二十九話 自分らしく（五巻開始）（前書き）

五巻が始まりました。アレンジが難しいです。今回は戦闘描写だけとなってしまうので短いかもしれません。それでは、どうぞ！

## 第二十九話 自分らしく（五巻開始）

放課後、場所は第三アリーナ上空。  
千冬が白式が第二次形態移行したため、スペックデータを取っておきたいということと呼ばれた。今は白式を展開し、左手に雪片を握っている。一夏は授業のような訓練でもするのかと思っていたが、実際は違った。

「さて、どうしてこうなった？」

雪片を振るいながら弾幕を避ける。いや、弾幕という表現は間違っているかもしれない。その中にはレーザーの類も混ざっているからだ。原因は

「待てえ、一夏！」

「逃がしませんわ！」

「大人しくしなさい！」

「痛くないから！」

「覚悟！」

相手が専用機持ちの五人である。一夏はハイパーセンサーをフル活用し、箒の『雨月』の長身のエネルギーサーベルと『空裂』の炸裂弾を、セシリアのブルー・ティアーズのビットによる射撃を、鈴の衝撃砲を、シャルロットのマシガンとアサルトライフル《ヴェント》の銃撃を、ラウラのレールガンと六つのワイヤーブレードを

小刻みに、しかし正確に避けていた。

(さすがに五人を同時に相手するのはつらいな)

天剣の『イージナス』で金剛剱を使えば零落白夜によりエネルギー兵器を無効化し、そのエネルギーを高密度に展開すれば実弾も弾き返せる。そうすれば戦闘は楽なものになる。しかしそれは零落白夜のエネルギーを大量に使うということであり、シールドエネルギーを短時間で使い果たしてしまう。そのための『実戦モード』である。全てのリミッターを解除し、『システム』によるエネルギー供給を可能にする実戦モードがなければ、白式のシールドエネルギーはあつという間になくなるだろう。しかし今の白式は実戦モードではない。使わないのは千冬に止められているからである。

システムは無条件にエネルギーを生み出す一夏の作ったプログラムだ。機械に組み込むだけで無限のエネルギーが手に入り、エネルギー問題も解決する。聞こえはいいが悪用されれば多大な被害を生む。要は某エタールサイラーである。データを取るといったので使用しないほうがいいと千冬に言われたので実戦モードも使っていない。結果的に一夏は苦戦している。

ちなみに女子五人は、千冬に協力を求められたが反対した。いくら一夏とはいえ、ISを五機同時に相手にするのはさすがに無理だと思ったからだ。しかし千冬の一言で専用機持ちは承諾した。

「織斑に決定打を与えたものに一日、あいつを好きにさせてや





一夏は体を体ひねを捻ひねることにより、最小限の動きでかわす。砲弾を虚むなしくも空を切った。しかし一夏は背後で爆発があつたのを確認する。見ると龍砲を一つ失うしなった鈴がいた。

「ちょっと、ラウラ！なんてことしてくれてんのよ！」

「お前がそこにいるのが悪い！」

鈴は一夏がラウラの相手をしている間に一夏の背後を取り、龍砲で墮おとすつもりだったが、誤って被弾してしまった。二人の態度を見て一夏は一つの仮説をたてた。

(もしかして………連携してるわけじゃない?)

一夏はセシリアの大型BTレーザーライフル『スターダスト・シューター』による射撃を避よけながら、全員の位置を確認し、その位置でわざと隙すきを作る。一夏は箒とシャルロットの対角線上にいた。

「「ここだ!!」」

箒は雨月の突きでエネルギーの刀身を一夏に向けて伸ばす。シャルロットはアサルトライフル《ヴェント》で一夏を狙ねらう。しかし一夏はそれを通常の瞬時加速イケニッション・ブーストでかわす。

「なにっ!?!」  
「うわっ!」

一夏が避けた結果、箒の雨月のエネルギーの刃がシャルロットに向かう。逆にシャルロットの放った弾丸が箒に迫り来る。箒は二つのビットの自動防御による一つの楕円形のエネルギーシールドで銃弾を防ぐ。シャルロットは物理シールドでビームサーベルを防いだ。

「シャルロット!当たったらどうする!」  
「ご、ごめん、箒!でもそんなことを言ったら箒だって悪いじゃないか!」

連携を得意とするはずのシャルロットでさえ文句を言っている。一夏は自分の仮説が正しかったと確信し、頭の中で作戦を考えていた。しばらく考えた後に、一夏は自分の手の平を顔の前まで持つてくる。

(天剣なら大丈夫かな)

一夏自身、現在進行形で天剣の解析を始めていたが、全てを把握しきってはいない。だからデータの表示も不確かになるものだと思っ  
.....使うことにした。

「天剣キュアンティスを復元」  
レストレーション

一夏の手が空を切る。青白い光と黄金色の光が目の辺りに集まり、一夏専用の超高度ハイパーセンサーである白いバイザーとなった。その形は蝶ちようぶのようにも見える。

「キュアンティス、起動。弾道の予測、残存エネルギー、シールドエネルギーの調整、シミュレーションをスタート」

バイザーに大量の情報が表示される。一夏は目配せでその情報を高速で処理していく。

「今がチャンスですわ！」

セシリアがブルーティアーズのビットで雨のようなレーザーを撃つが、次の瞬間、セシリアにとっての惨劇が再び起こった。

「そ、そんな！」

「あんまりですわ！」

「龍砲が！」

「うそっ!？」

「くっ、やられた」

一夏はビットから放たれたレーザーを全身を使い、受け流すように雪片で弾いた。そしてその軌道を変えられたレーザーは正確に残りの専用機持ちを狙う。結果的に、箒はビットによる防御を行い、攻撃用と防御用のエネルギーが底を突いた。鈴は最後の龍砲を爆破された。シャルロットは持っていたアサルトライフルは破壊されたが、本人は物理シールドで身を守った。ラウラはワイヤーブレードのワイヤーの部分がレーザーで焼き切られ、レールカノンもレーザーの被害を受けて使い物にならなくなった。キュアンティスの演算能力による完璧な狙いだった。

「セシリア、お前のせいだ!」

箒はここぞと言わんばかりにセシリアを批判する。

「っ!これが私の主力武器なのですから仕方がありませんわ!文句なら一夏さんに言ってくださいな!」

セシリアはスターダスト・シューターの標準を一夏に合わせて再びレーザーを撃とうとするが、他の女子がやめると言ってセシリアを止めようとする。しかしレーザーはいつまで経っても放たれなかった。

(まさか、わたくしもエネルギー切れですの!?)

セシリアはブルー・ティアーズを見たが、全てのライフルのエネルギー残量がゼロになっていた。残っているのは最低限移動できるだけのエネルギーだった。

「くっ、『インターセプター』！」

セシリアは自分の唯一の近接用のショートブレードを呼び出す。

(エネルギーが尽きたのなら直接切るしかない)

(あまり使い慣れてはいませんが、この際仕方ありませんわ)

(ああもうっ！こうなったのもセシリアのせいよ！今は『双天牙月』そつてんがげつで墮とすしかないわね)

(みんなこれで決めるつもりだろうな。なら、僕も全力で行かないと………)

(限られた選択肢のなかでも最善を尽くす。戦場ではよくあることか)

筈は雨月と空裂を自分の前で斜めに交差させる。セシリアはインターセプターを突き構えを取る。鈴は双天牙月を呼び出してバトンのように振るう。シャルロットはシールドをパージして、『灰色の鱗殻』スケール、通称『盾殺し』シールド・ピアースを呼び出す。ラウラはプラズマ手刀を両腕に出して構える。

(うまくいった)

一夏がキュアンティスでシュミレートした展開と全く同じものになっていた。上空で全員が近接タイプの武器で一夏に向かって接近する。それが一夏の望んだ状況だった。そのために遠距離タイプの武器を全て使い物にならなくさせる必要があった。

緊張が空気を支配する。そして次の瞬間、専用機持ち全員が同時に動いた。

( ( ( ( (これで決め(る) (ますわ)!!) ) ) ) )

一夏に向かって全員それぞれ違う方向から突進する。一夏はそれを確認し、息を整え、小さく呟いた。

(「ごめんなさい」)

『サイハーデン刀争術、水鏡渡り』  
みかがみわた

白式の両手両足の装甲が展開する。白式の四機のウイングスラスターに加え、両手両足のスラスターで同時瞬時加速を行う。ハイパーセンサーの反応速度を超えるほどのスピードで一夏は急降下。轟音と共に地面に着地した。

「消えた?」

専用機持ちたちには突然一夏がその場から消えたように見えた。しかし勢いをつけすぎた五人は止まることができず、お互いに衝突してしまう。五人が一箇所に集まり、のけぞった状態になる。そして五人は見た。無数の青い蝶が自分達の周りを飛んでいる。

「なによ、これ？」

その蝶は青白く輝き、その美しさに全員が見惚れた。しかし彼らのISから伝えられた情報に全員表情が驚愕に染まる。

熱源反応を確認。

「まずい！全員退避だ！」

ラウラが叫んだが遅かった。一夏が指を天に向け、パチンと指を鳴らした。

ドゴオオオオオン

瞬間、蝶が爆ぜた。青白く輝く蝶は零落白夜で作られた小型の爆弾である。一夏はキュアンティスであらかじめ爆弾の威力を調整し、もっとも効率よくダメージを与える方法を考えていた。そのために



全員を一箇所に集めて同時に爆破するのがもつとも効率的だった。そして事前に威力を調整したため、五人に怪<sup>けが</sup>我はない。ただシールドエネルギーをゼロにしなければである。全ては一夏のシミュレーション通り。

爆発と爆音を背に、千冬から一夏の勝利が宣告される。

「勝者、織斑一夏！」

第二十九話 終

第二十九話 自分らしく（五巻開始）（後書き）

ええっと、戦闘描写を細かく書いてみました。最後に戦闘描写を書いたのはいつだったっけ？一月前？随分昔のような気がします。作者はうまく書けているか不安なので、おかしなところがあったら教えてください。

今回は戦闘後のお話。次回から会長です。期待していた方はすいません。また書きます。それでは、次回でまた会いましょう！

### 第三十話 生徒会長と交渉（前書き）

会長ってこんな感じでよかったんでしょうか？実はサブタイトルで悩んでいます。あとはネタかな。まあ、これくらいにして、本編をどうぞ！

### 第三十話 生徒会長と交渉

あの後、五人からずるいだの卑怯だの言われました。現在は寮の廊下。日は沈みかけて夕日が美しく廊下を照らす。それぞれの生徒がまだ部活動に励んでいる時間帯だ。

(ん、少し目眩が……)

視界が一瞬だけぼやける。以前から一夏は白式の操縦者保護プログラムを強化していた。理由は白式の同時瞬間加速で起こるGのためだ。一夏が調整したことにより、体にかかる負担の軽減には成功したが、いまだに立ちくらみなどが起こるときがある。

(あ……)

視界が傾く。体がゆっくりと横に倒れそうになる。

「おっと……」  
「えっ？」

一夏の体が誰かによって支えられた。

「大丈夫？」  
「……すいません」

体勢を立て直しながら、改めてその人を見る。知らない女子だった。セミロングの髪が外側にハネているのが特徴。よく見るとリボン色が二年生のものだ。先輩は楽しそうな笑顔で眺めつつ、どこから取り出したか一つの扇子せんすを口元へ持っていく。全体的に余裕を感じさせる態度。しかし嫌味はなく、どこか人を落ち着けるような大人の雰囲気がある。それとは逆に浮かべた笑みはイタズラっぽく、まるで子供のようにだ。あれ？どこかで見たことがあるような……どこだっけ？

「体の方は頑丈がんじょうそうだけど、あんまり無茶しちゃダメよ？」  
「え？あ、ああ、はい。気をつけます」  
「よろしい。それじゃあね。私は仕事があるからいくわ」  
「はい、ありがとうございました」

先輩は手を振りながらどこかへ行ってしまふ。

(あ、名前を聞くの忘れた)

どこで見たのかを思い出そうとしていたら、すっかり聞き損そとねてしまった一夏だった。

(とりあえず、今日は休もうか)

一夏は部屋に戻り、自分の用事を全て済ませてその一日を終えた。

翌日。

(だめだ、結局思い出せなかった)

S H Rと一限目の半分を使つての全校集会が行われた。内容は今月中程にある学園祭についての話。全校集会ということで周りは女子でいっぱいだ。騒がしい。なんで女子ってこんなに元気なんだろうね。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

生徒会の人だろうか。その声で全員が静かになる。

「やあみんな。おはよう」

「へ?」

壇上<sup>だんじょう</sup>で挨拶<sup>あいさつ</sup>をしている女子。というか昨日あった先輩だった。

「ふふっ」

少し目があつて、笑顔で手を振られる。いや、振られなくても。一応こつちも手を振って返すが、背後に視線が突き刺<sup>さ</sup>さった。いたい、いたすぎる。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識<sup>さらしき</sup>楯<sup>たて</sup>無<sup>なし</sup>。君たち生徒の長<sup>おさ</sup>よ。以後、よろしく」

生徒会長だったのか。につこりと頬笑<sup>ほわえ</sup>みを浮かべて言う生徒会長は、異性同姓を問わず魅了するらしく、列のあちらこちらから熱っぽいため息が漏<sup>も</sup>れた。あ………思い出した。更識という名前。誘拐犯を特定しようと手当たり次第にハッキングをしていた時に見つけた名前だ。顔に見覚えがあると思っただけど、これで納得<sup>なっとく</sup>した。ちなみに怪<sup>あや</sup>しい組織は全てマークしておいた。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは」

閉じた扇子を慣れた手つきで取り出し、横へとスライドさせる。そ





再度、悲鳴にも似たような雄叫びおたけが上がる。

「うおおおおおっ！」

「素晴らしい、素晴らしいわ会長！」

「こうなったら、やってやる……やあああってやるわ！」

「今日からすぐに準備を始めるわよ！秋季大会しゅうきたいかい？ほっとけ、あんなん！」

いやいや、それはだめでしょう。というか、まずい。部活動と言っても放課後には師匠たちと特訓かテレシアで働くかのどちらかだ。さすがにこれ以上増えると……死ねる。

「ちょっと待ってください！僕はOKも何もしてないじゃないですか！」

生徒会長に必死に抗議する。が。

「あはっ  
」

ウインクを返された。お願いですからそれで流さないで下さい。

「よしよしよしっ、盛り上がってきたああー！」

「今日の放課後から集会するわよ！意見の出し合いで多数決取るから！」

「最高で一位、最低でも一位よ！」

僕の抗議も虚しく、女子たちはあれやこれやと言っている。どうしよう、何か解決策を考えないと。

教室にて放課後の特別HR。この一年一組の出し物を決めるため教室では意見が飛び交っている。

「さてと………」

クラス代表として意見をまとめるけど、内容が

『織斑一夏のホストクラブ』『織斑一夏とツイスター』『織斑一夏とポッキー遊び』『織斑一夏と王様ゲーム』………はあ。

「駄目です」

えええええー！！と大音量で周りからブーイングされてしまった。

「あのですね、文化祭とはみんなで作り上げていくものです。こんなで嬉しいんですか？」

一応正論を言ったつもりだったけど、女子の熱気は激しくなった。

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「織斑一夏は共有財産である！」

「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思って！」

「メシア気取りで！」

僕は救世主でも財産でもありません。あと、女子を喜ばせる義務は存在しません。お客様を満足させる義務なら僕にはありますけど。はあ、姉さんさえいてくれればこの場を鎮めることができるのに。

（時間がかかりそうだから、私は職員室に戻る。あとで結果報告に  
来い）

今すぐにでも呼びに行けないかな。

「山田先生、何とか言ってください」

「えっ！？わ、私に振るんですか！？？」

山田先生ならみんなを説得してくれるかもしれないと思って声をかけてみた。

「え、えーと・・・・・・・・うーん、わ、私はポッキーのなんかいいと思いますよ・・・・・・・・？」

やや頬を赤らめながら言う山田先生。・・・・・・・・だめか。夏に仕事を手伝ったときにはしっかりしていたのに。ああ、頭が痛くなってきた。

「とにかく、みんなで出来るものを  
「メイド喫茶はどうだ」

そう言ったのはラウラさん。・・・・・・・・あれ？幻聴？僕、疲れてるのかな。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるのだろうか？それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

いつもと同じ淡々とした口調のはずだった。でもあまりにも本人にのキャラにはそぐわない言葉だったのでクラスのみんなも呆然とし

ている。

「え、えーと……みなさんはどう思いますか？」

みんなの意見を聞かないと始まらないので一応振ってみる。突然聞いたのが悪かったのか、クラスの女子全員がきよとんとしたままだった。

「いいんじゃないかな？一夏には執事か厨房ちゅうぼうを担当してもらえばオケーだよね」

料理は出来るし、と付け加えたシャルだった。

「織斑君、執事！いい！」

「それでそれで！」

「メイド服はどうする！？私、演劇部衣装係だから縫ぬえるけど！」

「……いい雰囲気だね。いつも通り仕事をしているような感じで大丈夫かな。一応気づかれないようにしておかないと。」

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

言ったのはラウラさん。全員目が再び丸くなる。コホンと咳払いするラウラさん。

「シャルロットが、な」

注目されたのがてれくさかったのか、ラウラさんの顔は少し赤い。いきなり振られたシャルは困った顔をしてる。

「え、えっと、ラウラ？それって、先月の………？」  
「うむ」

@クルーズか。もしあの二人がダメだった時には頼みに行こうか。『四ノ宮京夜』としてだけど。

「き、訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでね」  
「「「「「「「怒りませんとも！」「」「」「」「」

こうして、一年一組の出し物メイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』となりました。



「やっぱり意外……ですか？」

「それはそうだ。私はあいつの過去を知っている分、おかしくて仕方がないぞ。ふ、ふふっ、あいつがコスプレ喫茶……ははっ！」

姉さんは目尻めじりの涙をぬぐいながらまだ笑っている。遺伝子強化素体アドヴァンスドに戦績不良。確かにこの過去から考えたら意外かな。姉さんの反応が職員室の先生方にとっても意外な光景だったらしく、目をきよんとさせて眺めていた。

「ん、んんっ。」

さて、報告は以上だな？」

周囲の視線に気づいた姉さんが咳払いせきはいをして語調を整える。

「はい。以上です」

「ではこの申請書に必要な機材と使用する食材などを書いておけ。」

「一週間前には出すように。いいな？」

「はい、わかりました」

申請書をもらって考える。喫茶店ということでは意外と多いかもしれない。

(代表として、仕事はしっかりやらないと)

「一夏。お前はISを使えるということ以外は普通の高校生だ(た



ぶん)。だから楽しめ」

「あ、うん。わかった。でも姉さん、今ちょっと失礼なこと考えてなかった？」

「さあ、どうだろうか？」

姉さんが含みのある微笑を浮かべる。まあ、いいか。姉さんが何を考えているかはわからないけど、まだやるべきことが残ってる。

「織斑、学園祭には各国軍事関係者やIS関連企業など多くの人が入場する。一般人の参加は基本的に不可だが、生徒一人につき一枚配られるチケットで入場できる。渡す相手を考えておけよ」

「はい」

姉さんの報告を終え、一礼をして職員室を出る。さて、これからどうしようか。

「やあ」

「どうも」

職員室を出たところで一人の女子が待っていた。先輩であり、生徒会長だ。

「ちょうどよかった。会長に話があります。更識家十七代目当主、更識楯無さん」

「あら、なんで知ってるの？」

会長の目の色が変わる。なるほど、さすが暗部だ。警戒心が肌で感じられる。

「ちょっと調べただけです」

「うちのセキュリティはそこまで甘くはないんだけどなあ」

「その話は今はいいでしょう。とりあえず、あの件は取り消してください」

「それは無理よ。もうみんなの前で言っちゃったし、それにこの方が楽しいでしょう？」

快楽主義者か。いったいどこのお嬢様ですか。いや、家柄いえからだから仕方がないか。

「とりあえず、立ち話もなんだから生徒会室こに来ない？」

「……まあ、いいですけど」

二人で生徒会室へ向かう。あとでマスターに今日は仕事に行けないと連絡をした方がいいかもしれない。

「それで、どうして僕は今回の文化祭の景品なんですか？」

「それね。キミがどこの部活動にも入らないからいけないのよ。学園長に生徒会権限でどこかに入部させるようについて言われてね」

「放課後は予定があるので」

「ふーん、何をしてるの？」

「……バイトです。高校生にはお金の問題がよく付きまとうので」

嘘は言っていないと思う。この前もノーネームの人たちにおごったり、篝さんのプレゼントも買った。

「どんな仕事？」

「それは言えません」

「えー。あ、わかった！いけない仕事でもしてるんだ！」

「どうしてそう思うんですか」

「えっちなあ」

「誤解されても困るので接客業とだけ言っておきます」

「うーん。そういうことにしておこうかな。ところで織斑一夏くん、IS学園の生徒会長であるということはどっいうことかわかるかな？」

IS学園の生徒会長。世界最強の兵器が集まる場所。そこで人の上に立つということとは

「強くあることですか？」

「おいしいね。ただ強ければいいと言っわけではないの」

疑問に思って首を傾げていると、前方から粉塵ふんじんを上げる勢いで、片

手に竹刀しなを持って襲い掛かってくる。

「覚悟おおつー!!」

「・・・物騒ぶっそうな」

「迷いのない踏み込み・・・いいわね」

会長は扇子を取り出して、そのまま扇子で竹刀を受け流し、左手の手刀で気絶させた。僕はその女子を廊下の壁まで運んで寝かせる。とりあえず終わったかと思うと窓ガラスが破裂した。

「危ない」

会長の顔面を狙い、次々と矢が飛んでくる。とりあえず会長に当たる前に矢を掴んで折っていく。見ると、隣の校舎から和弓わきゆうを射る袴姿はかまの女子が見える。もしかして巻き込まれた？

「ちよっと借りるよ」

倒れている女子の側にあった竹刀を蹴り上げて浮かせ、空中でそれをキヤッチすると同時に投げる。割れた窓ガラスから投擲された竹刀は弓女の眉間に直撃し、撃破した。

「もらったああああ!!」

「どこから出てきてるんですか」

廊下の掃除道具ロッカーの内側から、両手にボクシンググローブを装着した女子が出てきて襲ってきた。

「ふむん。元気だね……織斑一夏くん」

「なんですか」

「IS学園において、生徒会長という肩書きはある一つの事実を証明しているんだよね」

会長は半分開いた扇子で口元を隠しながら、楽しげに話す。その間もボクシング部らしき女子のラッシュを紙一重でかわし続けている。ああ、わかった気がする。

「生徒会長、即ち全ての生徒の長たる存在は」

振り抜きのストレートを円の動きで避け、とんっ……とその足が地面を蹴って身を宙へと躍らせる。

「最強であれ」

そして、突撃槍ランスのようなソバットの蹴り抜き。ボクシング部の女子は再びロッカーの中に叩き込まれて沈黙した。

「……………とね」

ソバットの際さいに手放した扇子を一回転のあとで床に落ちる前に手に取り、ぱんつと開いてスカートすその裾を押さえる。

「見えた？」

「見てません。見たくもありません」

「それはそれでよねーさんは悲しいなあ」

むーつと子供みたいに口を尖とがらせる会長。よくわからないな、この人は。僕は大きなため息をついた。

813

「……………で、これはどういう状況なんですか？」

「うん？見たとおりだよ。か弱い私は常に危機きに晒ひされているので騎士ナイトの一人もほしいところなの」

「さっき自分で学園最強って言っていましたよね？」

「あら、ばれた」

また楽しそうに笑う。というかお嬢様というのは自然と笑い方が上品になるものなんだろうか。

「まあ、簡単に説明するとだね、最強である生徒会長はいつでも襲

つていいのさ。そして勝ったなら、その者が生徒会長になる」

「まあ、理論上はそうですね」

「それでも私が就任して以来、襲撃はほとんどなかったんだけどなあ。やっぱりこれは」

ずいっと詰め寄り、その顔を近づけてくる会長。近いです、会長。

「キミのせいかな？」

「どうしてですか」

「ん？ほら、私が今月の学園祭でキミを景品にしたから、一位を取れなさそうな運動部とか格闘系が実力行使に出たんでしょう。私を失脚させて景品キャンセル、ついでにキミを手に入れる、とかね」

なるほど。でも部活動をやっている時間なんてないし、僕がいても何にもならないと思うけど。

「おそくなっちゃったね。それじゃあ、行こうか」

「はあ」

「その返事は肯定？」

「行きますよ……」

「うむ、よろしい。素直な織斑一夏くんは、おねーさん好きだよ」

「フルネームじゃなくてもいいです」

「そう？じゃあ一夏くん。私のことは楯無と呼んでもらおうかな。たっちゃんでも可」

「ならこれからは楯無さんで」

大きなため息を吐いてまた歩き出す。横を歩く楯無さんの顔を見る。その顔は実に楽しそうだった。

「……………いつまでぼんやりしてるの」

「眠……………夜……………遅……………」

「しゃんとしなさい」

「了解……………」

そんな声がドアの向こうから聞こえてくる。あれ？聞き覚えのある声だ。

「ん？どうしたの？」

「いえ、何でも」

「それじゃあ入るわよ」

楯無さんがドアを開ける。重厚な開き戸は軋みの一つも立てずにゆつくりと開いていく。

「ただいま」

「おかえりなさい、会長」



出迎えたのは三年生の先輩。眼鏡に三つ編み、いかにも『お堅いが仕事はできる』風の人で、片手に持っているファイルが非常に似合っている。そして後ろにいたのは意外な人物。

「わー……………。おりむーだ〜……………」

のほほんさんだった。ということは

「まあ、そこになげなさいな。お茶でも出すから」

「はい」

いつも以上に眠そうなのほほんさんは、僕を確認するとニセンチほど上げた顔をまたべちゃりとテーブルに戻す。

「お客様の前よ。しっかりなさい」

「無理……………。眠い……………。帰宅……………。いい……………」

「……………」

「ダメよ」

もはや単語の羅列である。そんなのほほんさんを三年生の先輩はバツサリと切った。その間に先輩はお茶を用意している。楯無さんは優雅に腕組をして座席にかける。

「のほほんさん、眠いんですか？」

「うん……………深夜……………壁紙……………收拾……………  
……………連日……………」

「とりあえず、大変だったということは伝わりました」

「あら、あだ名だなんて、仲いいのね」

ティーカップを持ってきた先輩が口を挟む。

「お姉さんがいると聞きました。もしかしてあなたがお姉さんですか？」

「ええ。私は布<sup>ほ</sup>仏<sup>ぼつ</sup>虚<sup>つ</sup>。よろしく」

「いえ、こちらこそ。はじめまして、織<sup>お</sup>斑<sup>ぼ</sup>一<sup>いつ</sup>夏<sup>げ</sup>です」

「むかーしから、更<sup>さら</sup>識<sup>し</sup>家<sup>か</sup>のお手<sup>て</sup>伝<sup>で</sup>い<sup>い</sup>さんなんだよー。うちは、代<sup>しろ</sup>々<sup>々</sup>」

話を聞いているうちにどんどん思い出した。確かに調べた資料に布<sup>ほ</sup>仏<sup>ぼつ</sup>虚<sup>つ</sup>を見た。

「ひよつとして、姉妹で生徒会に？」

「そうよ。生徒会長は最強でないといけないけど、他<sup>ほか</sup>のメン<sup>メン</sup>バーは定員数になるまで好きに入れていいの。だから、私は幼<sup>お</sup>馴<sup>な</sup>染<sup>な</sup>のふたりをね」

楯無さんが説明してくれる。

「お嬢様にお仕えするのが私どもの仕事ですので」

できたお茶をカップの一つ一つに慣れた手つきで淹れていく。

「あん、お嬢様はやめてよ」

「失礼しました。ついクセで」

家でもこんな感じなんだろうか。美雨さんもお世話するという面では一緒だけど、本人はどんな気持ちなんだろう。

「織斑君も、どうぞ」

「いただきます」

少し飲んでみる。

「……………おいしいです」

自分ののはよく味見するけどわからない。他人においしいと言われて初めておいしくできたと実感する。

「虚ちゃんの紅茶は世界一よ。ほら、本音ちゃん、冷蔵庫からケ―

キを出してきて」

「はい。目が覚めたら私はすごい仕事ができる子」

不安だ。相変わらずゆっくりとした動作である。眠気が完全には抜けてないのか、足取りがあやしい。なんであれで転んだりしないんだろ。

「おりむー、ここはねー。このケーキはねー、ちよおちよおちよおちよお〜……………おいしいんだよー」

そう言いながら、まず自分の分を取り出して食べ始める。ケーキのフィルムについたクリームを一心不乱に舐めるのほほんさん。お行儀が悪いのでやめましょう。

「やめなさい、本音。布ほんの常識じょうしきが疑うたがわれるわ」  
「だいじょうぶ、だいじょうぶ。うまうま」  
「……………」

「ごちっ！」

あ、のほほんさんが思いつきりグーで叩たたかれた。

「うええっ……………いたあ……………」

「本音、まだ叩かれない？……そう、仕方ないわね」  
「まだ何も言っていないよ。言っていないよ」

のほんさんが涙目だ。僕は蚊帳かやの外。

「はいはい、姉妹で仲がいいのは良かったから。お客様の前よ？」  
「失礼しました」  
「し、失礼、しましたあ……」

そして改めて生徒会メンバーの三人が僕に向き合う。

「それで一夏くんは投票決戦の景品から降りたいんだっけ？」  
「はい、そうです。放課後はこの学園にいるわけではないので、どうにかしてください」  
「でもねえ、どうしようかしら？」

楯無さんは腕を組んで考える。考えること数分。

「ごうしましょう。勝負して、もし私が負けたらなんとかする。でも、もし一夏くんが負けたら大人しく景品になってもらう。どう？」  
「本当にいいんですか？」  
「ええ、構わないわ。元々私が勝手に決めたことだし。それに負けるつもりもないから」

にこりと楯無さんは笑った。自信があるのかもしれない。

「わかりました」

「それじゃあ、決まりね」

「それは本当にISスーツ？」

「ええ、もはやスーツと言えないかもしれませんが」

「それでも髪型が変わるのはおかしくない？」

「それは僕もわかりません」

場所は放課後の置道場<sup>たたみ</sup>。僕と楯無さんは二人で向かい合っている。布仏姉妹は仕事だそうだ。楯無さんは白胴着に紺袴という日本古来からの武芸者スタイル。対して僕はブレスレットに新しく登録されたレイフォン師匠の修練着<sup>しゅうれんぎ</sup>。なぜか髪型はレイフォン師匠に近い髪型。IS起動時はこの髪形になるのはわかってたけど、どうやらこの修練着を着るだけで変わるらしい。第二次形態移行<sup>セカンド・シフト</sup>した際にブレスレットに登録されたからセットなのかもしれない。

「まあ、いいわ。勝負の方法だけど、私を床に倒せたらキミの勝ち」

「え？」

「逆にキミが続行不能になったら私の勝ちね。それでいいかな？」

「え、いや、それはフェアでは」

「

「どうせ私が勝つから大丈夫」  
「・・・・・・・・・・はは」

よほど自信があるのか、僕は苦笑いしかできない。そして僕は営業スマイルを顔に貼り付ける。楯無さんの実力は未知数だ。余裕は持つておいたほうがいい。

「では、レディーファーストということぞ、どうぞ」  
「余裕ね。それじゃあ私から　行くよ」

いきなり目の前に接近される。

（『無拍子』か・・・・・・・・）

人間はリズムで生きている。具体的には心臓の鼓動や呼吸のタイミング。そんな人間の律動を意図的にずらすことで相手の攻め手を崩すのが『打ち拍子』、律動を合わせことで自在に場を支配するのが『当て拍子』。そして律動を一切感じさせることなく、そしてまた感じることなく律動の空白を使う技術が古武術の奥義の一つである『無拍子』だ。

「・・・・・・・・・・」

楯無さんは肘、肩、腹を狙った掌打を打つ。僕はそれをサヴァリスさんとの組み手で鍛え上げた異常な反射神経でその腕を弾く。とういなか顔に笑みを浮かべながら戦うのはサヴァリスさんみたいだと思った。実際やってみてもあの人が何を考えているのかわからない。

「あら、ふられちゃった」

「そんな気持ちで仕掛けたわけではないでしょう」

僕は距離を取って楯無さんを見る。僕と同じ崩れない笑み。一切本当のところを覗かせない、鉄壁の笑み。しかしウソの笑顔というわけでもない。あくまで本心から微笑んでいる。

(少し似てるなあ)

不意に『四ノ宮京夜』と似てると思ってしまった。それでも偽りの心で笑みを浮かべる自分は醜いと思った。

「今度はそつちからどうぞ」

「そんなことを言われなくても」

僕は笑みを崩さずそのまま苦笑する。相手の実力がわからないため慎重にいきたい。さて、どうしようか。こつちからも仕掛けるべきか。



「行きます」  
「いつでも」

篠ノ之流古武術が裏奥義『零拍子』

相手の一拍子目よりも早

く仕掛ける。久しぶりだけどできた。

楯無さん反応が一瞬遅れる。そのまま体勢を低くして足払いをする。楯無さんの体がふわりと宙に浮く。これで床に着けば僕の勝ちだ。

「えーい！」

楯無さんはその体勢から無理やりバク転するように右腕を畳に突き出し、それを軸に回ってカポエラキックをを繰り出した。僕はそれを腕で防ぐ。そしてまた距離を取る。楯無さんは膝をつくこともなく体勢を整えていた。

(マーシャルアーツに古武術にカポエラ。なんてデタラメなんだ)

学園最強というのは、伊達でも酔狂でもない。この人ならISの戦鬪でも強い。そう思った。

「ふう、今のは危なかった」

「無茶苦茶ですね。あの体勢から反撃するなんて思いもしなかった。あのままいけば勝てると思ったんですけどね」

実際はあれで決まればいいと思っていた。その自信もあった。でも楯無さんを侮あなごっていた。楯無さんは想像以上で、そして自分は自惚うぬぼれていた。反省するべき点だ。

「ねえ、一夏くん。一つ訊きいていい？」

「はい、何でしょう」

「どうして本気を出さないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕は笑みを崩さない。でも明らかに動揺していたかもしれない。

「私が女だから？」

「僕は女尊男卑というわけではありません」

できる限り平等に、それが僕の信条だ。

「じゃあ、どうして？」

「さあ？なぜでしょうね」

「私を傷つけたくないから？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「他人を傷つけたくないから？」

僕は黙ることしかできなかった。それもあつたかもしれない。

「そんな顔だったら、他人を傷つけるだけだと思うよ」

「・・・・・・それは、あなたも同じだと思えますけどね」

「どういうこと?」

「あなたは『更識楯無』だ。本当に他人と向き合えていますか?」

「・・・・・・」

今の僕が言えることじゃなかった。今の僕の顔はまさしく『四ノ宮京夜』のものだ。それに、楯無さんにもひどいことを言った。

「ごめんなさい。今は忘れてください」

僕は笑みを崩す。瞳に沈黙を宿し、感情を消す。そして構えをとる。ルッケンスの構えを。

「変わった構えだね」

「・・・・・・」

無言の返答に楯無さんもまた無言で答える。細く鋭い緊張感が張り詰めていく。そして足に力を込めて、僕は動いた。

『サイハーデン刀争術、水鏡渡り』

全力で一夏は楯無の前で踏み込んだ。畳がへこむ。掌底。狙いは腹部。楯無は水鏡渡りのスピードに対して反射で掌打を打とうとしている。楯無は無意識だったのか狙いは心臓。その楯無の瞳は無意識なのか虚ろに近い。楯無の手が先に一夏の左胸に触れそうになる。わずかな差で楯無の反応が早かった。しかし楯無の手の平が一夏に触れようとしたところで、一夏が楯無の目の前から消えた。

「え？」

『疾影』

強力な気配を放つことで一瞬の判断を誤らせる技だ。一夏は本物に近い濃い気配を放ち、直前で楯無の掌打をよけた。そのため放たれた気配の減衰を最小限に留めた。そして一夏は既に楯無の足を払い、楯無が気づいた時には楯無の体は宙に浮いていた。

(どっこ)

楯無は体勢を整えながら一夏を探す。そしてすぐに見つけた。目の前。拳を構えて楯無が空中で無防備な状態を狙っていた。そして技を放つ。

『剛力徹破・突』

拳打の破壊をより深く突きぬけさせ、爆発させるサヴァリスの技。

一夏は自然落下による勢いと腰の捻<sup>ひね</sup>りを加えた全力の正拳を楯無の腹部に叩き込んだ。

(あ……………)

楯無は声を上げることできず、意識が一瞬でブラックアウトする。最後に聞こえたのは「すいません」という一夏の謝罪の言葉だった。

第三十話 終

第三十話 生徒会長と交渉（後書き）

楯無フアンのみなさま、申し訳ありません。m（――）m  
とりあえず楯無は無事なので安心してください。そして中途半端な  
ところで終わってしまったって申し訳ありません。塾があるのでここで  
切りました。すいません、また書きます。

### 第三十一話 複数の仮面（前書き）

最近はネタ切れですね。困りました。そして塾と学校のオンパレード。死ぬ、死ねる。まあ、それは置いといて。それでは、本編をどろぞろ。

### 第三十一話 複数の仮面

ぼんやりとしながら空を見る。透き通るような青。そして目の前にはどこまでも広がる草原。

(いいところね………)

靴を脱いでしばらく裸足はだしで歩いていく。少し足に触れる草が少しくすぐりたい。しばらく歩くと子供たちが遊んでいるところを見かけた。

(楽しそうね、私も遊ぼうかなあ)

それでもやめる。見ると遊んでいるのは全員中学生ぐらいだ。高校生が入り込める雰囲気ではない。

(………座ろうか)

見ると岩が見えた。ちょうど一人一人分の大きさである。その岩にでも座ろうかと思った楯無はその歩みを止める。先客がいる。黒髪で、眼鏡をかけた整った顔立ちの少年がその岩に背をあずけるように、足を伸ばして地面に座って寝ていた。



「……………」

少年がゆっくりと目を開ける。少年は顔を横に向け、起きたばかりの少し虚ろな目で楯無を見上げる。

「こんにちは、お姉さん」

「こんにちは」

歳は中学生ぐらいだと楯無は思ったが、思ったより大人びているその少年に驚いた。

「キミは……………他の子とは遊ばないの？」

「僕はここにいただけでいいんです。みんながどこにいるかわかる。それだけで安心ですから」

少年はどこか悲しそうな目で遊んでいる子供たちを見る。本当は遊びたいのではないかと楯無は思い、少年に声をかける。

「そんなに寂しいなら、みんなと遊べばいいのに」  
「いいんです。僕は……………」

少年はそこを動こうとはしなかった。立ち上がるつもりもない。疲れているのか、その腕はだらりと下げられている。楯無はしばらく考えた後、その少年の横に座った。

「じゃあ、私がいてあげる」

少年を元気づけるように、楯無は柔らかな笑みを浮かべる。

「お姉さんは遊ばなくてもいいんですか？」

「私はいいのよ。だから心配しないで」

楯無はその少年の頭を優しく撫でる。少年は少し恥ずかしそうな顔をして遊んでいる子供たちを見る。楯無も子供たちを見て、ふと思っ

（この状態で一人はさすがに寂しいわね）

少年がどんな気持ちで子供たちを見ていたのか考えた。この距離感  
は………悲しい。

「………ふああ」

不意に可愛らしいあくびが隣から聞こえた。少年が口に軽く手を当ててて必死にあくびをかみ殺している。

「眠いの？」

「……はい。恥ずかしながら」

「おねーさんが肩を貸してあげようか？」

「それは……悪いです」

「いいからいいから」

半ば強引に少年を引き寄せせる。少年は特に抵抗することもなく、引き寄せられた勢いで少年の頭が楯無の肩に乗る。

「……すう」

「早っ」

あまりにも早く寝てしまった少年に楯無は驚く。改めて少年を見て思った。心だけが異様に成長している。そんな印象だった。

「おやすみ」

しばらく少年の頭を撫でていた。暖かく、優しい陽光に楯無も眠くなる。自分の頭を少年の頭に乗せて、その瞼が閉じていく。

(少しぐらい、休んでもいいよね)

心地よい睡魔に身をゆだね、楯無は眠る。

「……………あれ？」

場所は保健室。楯無はベッドの上で寝ていた。

(私……………どうして……………)

「お目覚め？生徒会長さん」

楯無は声がした方向を見る。保健室の先生がカーテンをどける。

「どうして私は保健室にいるんですか？」

「あら、更識さん覚えてないの？そこにいる織斑君があなたを抱きかかえてここまで来たのよ？」

「え？」

見るとすぐ側に一夏がいた。パイプイスに座って腕組みうでぐみをしながら寝ている。

「必死な顔でね、あなたのことを見てほしいと頼まれたのよ。ですごく思い詰めたような顔してたから特に怪我はないって言ったら安心して寝ちゃったのよ」

「は、はは。まるで子供みたいですね」

「そうね。怪我は本当にないから安心して。私はまだ仕事があるから後は任せるわ」

「はい、ありがとうございます」

「それじゃあ、お大事に」

保健室の先生が部屋を出ていく。楯無はそれを見送った後に改めて自分の腹に手を当ててみた。

(痛みはない。でも………確かにあの時、私は………)

楯無は全身を衝撃が襲ったのを感じた。正直死を覚悟した。しかし怪我はないと保健室の先生は言った。自分で見ても何の痕あともなかった。

(もしかして………)

一夏を見る。楯無はその寝顔を見るが、起きる気配はなかった。

「まあ、いいか」

楯無は一夏の頬ほおにそっと触れる。

「ん……あれ、楯無さん？」

「おはよう、一夏くん」

「おはようございます、という時間でもないでしょう。今は」

「そうかも」

「今は夜ですからね。まあ、それはいいとして、その……」

さっきはすいませんでした」

「いいのよ、気にしてないから」

笑みを浮かべて一夏を安心させる。

「そ、そうですね。ところで……楯無さん」

「なに？」

「さっきから何してるんですか？」

「ん？一夏くんの顔はかわいいなって」

「それ理由になってませんよ」

「ふふ、まあいいじゃない」

言いながら一夏の頬をなでる。

(なんだろう。嫌な予感がする)

瞬間、保健室のドアの後ろから人の気配がして一夏はドアの方を見る。そしてドアが開いた。

「一夏、探したぞ！」

ラウラさんだった。僕と楯無さんの様子を見て、その表情がみるみる無表情へと変わっていく。同時に殺気も濃くなっていく。僕何かした？

「目標を撃破する」

指先から順にISを展開していくラウラ。

「ちょっと待ってください、ラウラさん！無許可でのISの展開は禁止されているはずですよ！」

一夏の説得を全く聞かずにラウラは斬り込んでくる。

「ふふっ……」

くすつと笑みを浮かべた楯無さんは、素早く抜き放った扇子をラウさんの額へと当てる。ぎりぎり展開が完了していなかった部分に衝撃を受け、一瞬怯むラウラさん。そして、その隙を逃さないとはかりにベッドから飛び出した楯無さんは、空中で扇子をキャッチして開き、ピンと張った紙でラウラさんの頸動脈を押さえた。

「なっ………!?!?」

あまりの鮮やかな手並み、そして早業に、ラウラさんは驚きを隠せない。すでに絶対防御の保護があるとはいえ、最初から殺すつもりなら楯無さんの方が確実に早かった。敗北を悟ったラウラさんは、奥歯をきつく噛みしめてISを解除する。

「うん、素直でよろしい」

そう言っばんぼんとラウラさんの頭を撫でると、楯無さんは僕の方に向き直る。

「約束通り、私になんとかするから、このことはみんなには内緒よ？」

「あ、はい。ありがとうございます」

「よし。それじゃあ、また後でね」

そう言っば楯無さんはラウラさんを連れて部屋を出て行く。



「大丈夫……そうだ」

怪我をさせてない。傷つけていない。そのことが気掛かりだった。

(部屋に戻ろうか……)

パイプイスを片付けてから保健室を出て、自分の寮室に向かう。

「あら」

「あ、えっと………こんばんは、布のほとけ仏先輩」

偶然、のほんさんのお姉さんである布のほとけ仏さんに会った。

「虚ほつじでいいわ。名字だと、ふたりいるからわかりにくいでしょうっ」

「え、でも………」

「私は気にしないから」

「あ、はい。じゃあ、虚先輩で」

「ええ」

先輩はこくんとうなずく。

(うーん、のほほんさんと鷹月<sup>たかつき</sup>さんを合わせたらこんな感じになるんだろうか)

虚先輩は顔はのほほんさんに似ているけど、性格はクラスで最もしっかりしているといわれている鷹月<sup>たかつき</sup>静寝<sup>しずね</sup>さんのような人だ。なんとも不思議な感じである。

「あの、ちょっと質問してもいいですか？」

「私で答えられることなら構わないわ」

「えっと、じゃあ、楯無先輩はどんな人ですか？」

「どんなって言うത്？」

「いえ、なんとというか、気になったんです」

自分と似てると思った。自分が何者が隠している。なら『更識楯無』以外のあの人を、虚先輩なら知っているんじゃないかと思った。正直訊いてみたい。楯無さんがどういう人間なのか。

「ごめんなさい。私も全部知ってるわけじゃないの」  
「……………そうですか」

代々、仕<sup>つか</sup>えているとのほほんさんが言っていたから訊いてみたけど、虚先輩も楯無さんのことを全部わかっているというわけではなかった。

「でも、一つだけ忠告しておくわ。警戒しても予防しても、絶対振り回されるから。体力だけはしっかりね」

「え？ああ、大丈夫です。体力の方は自身がありますから」

やっぱりそうなのか。虚先輩が言うなら間違いないと思う。

「食事もちゃんとした方がいいでしょうか？」

「その言い方<sup>かた</sup>だと普段ちゃんとしてないみたいよ？でもそれがいいわね。喉<sup>のど</sup>を通れば、だけど」

どれだけ振り回されるのだろうか。ちょっと怖くなってきた。

「それじゃあ、またね」

「あ、はい。また」

そんな挨拶<sup>あいさつ</sup>で別れて寮室へ向かう。

(楯無さんは悩んだりすることってあるのかな?)

楯無さんの顔を思い浮かべる。あの楽しそうな顔を見ると悩みとは無縁むえんに思える。

(僕が悩んでも仕方ないか)

とりあえず自分の部屋に入ろうとドアを開ける。

「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」

パンツ！

あ、いかん。ドアを壊してないだろうか。じゃない、とりあえず落ち着け。落ち着くんた、織斑一夏。ご飯は・・・まだ食べてない。後で何か作ろうか。お風呂は・・・後で入ろう。わたし？なんで楯無さんが僕の部屋にいるんだ？

(えーっと、昨日は何してたっけ？)

五人の専用機持ちと模擬戦、勉強、料理、天剣の解析・・・は結局終わらなかった。というか無理だった。内部構造が複雑すぎ

る。素材もいまだにわからない。

(疲れてるのか、僕)

じゃなきゃ楯無さんが裸はだかエプロンで待ってるなんて幻を見るわけがない。それか心が病んでる。頭を横に振って何かを振り払い、再度ドアを開ける。

「お帰り。私にします？私にします？それとも、わ・た・し？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・それじゃあ、楯無さんで」

「え、うそ？本当に選ぶなんて・・・・・・・・欲求不満？」

「冗談です。どうしてここにいるんですか」

「今日から私、ここに住もうと思ってるね」

「は・・・・・・・・・・？」

裸エプロンの楯無さんが変なことを言った。改めて記憶を掘り返してみても楯無さんが言ったことを思い出した。

(それじゃあ、また後あとでね)

来るのが早すぎる。

「いやあ、みんなに自慢できるなあ。まだふたりしか女子が住んだことのない、一夏くんのお部屋で寝泊り。私つてば三人目の女ね」「ここは僕の部屋です。あなたが泊まっていいいんですか?」「生徒会長権限」

反則だ。というか姉さんに通用するんだろつか。そこが結構気になる。

「一夏くんは面白いねえ」

僕は顔に手を当てて深いため息をつく。楯無さんは僕の様子を楽しそうに見て楽しそうな笑い声を出して、こともあろうか振り向いた。僕は視線を逸らす。

「じゃん 水着でした」

「なんでそんな服装なんですか」

「んふ。残念だった?」

「そんなわけないでしょう。むしろほっとしました」

部屋で女性がこんな服装でいていいわけがない。

「ふふん。夏に乗り遅れた私のささやかな復讐だよ」

胸を張る楯無さん。どうでもいいけど何か着せるものはないのか。そう思つて部屋を見渡すと私物が準備万端にセッティングされているのを見た。

(すでに荷ほどきを終わらせているのか………)

僕は今までにないほどのため息を吐く。疲れた。何か飲み物でも。

コンコン。

「わ、私だ、一夏」

「篤さん？どうしたんですか？」

「お前が夕飯を食べていないと思つてな。差し入れを持ってきてやつたぞ」

「ああ、すいません。今開けますね」

「う、うむ」

一夏はドアノブに手をかけようとして、やめた。

(なんでまた嫌な予感がするんだろう)

保健室での出来事を思い出す。嫌な汗が一夏の背中をなぞる。

「どつした、一夏？」

箒がドア越しに一夏に声をかけたが返事がない。

「……………箒さん」

「ん、なんだ？」

「何を見ても、驚かないでください」

一夏はドアを開けて箒を部屋に入れる。瞬間、裸エプロンの楯無を見て箒の表情が一変する。

「一夏、貴様！」

箒は紅椿あかしはきの武装である日本刀を展開し、一夏にふりおろしたが、既すでに一夏はそこにいなかった。

「どつした……………」

部屋を探すがいない。見ると窓が開いていた。

（まさか……………飛び降りたのか？）



箒は窓から身を乗り出して下を見るが一夏はいない。

「まあまあ、落ち着いて。ゆっくり話でもしましょう?」

「そっか。ねえ、箒ちゃん。紅椿あかつばきの『絢爛舞踏けんらんぶたう』を発動したときの気持ちって覚えてる?」

「え、ええ、まあ……」

「その時の気持ちを再現できれば、ISは応こたえてくれるよ」

「そ、そうですね」

楯無は箒の差し入れであるいなり寿司すしを食べていた。

「箒ちゃん、これは私からの提案なんだけど、私が特訓を見てあげようか?」

「ど、どうしてですか?」

「あの試合見たけど、ひどかったわ。五人がかりなのに」

「あ、あれは……」

「だから私が見てあげる。一夏くんを守られてばかりじゃだめだよ?」

「……はい。よろしくお願いします」

箒は真剣な顔で一礼する。

「ところで、あの……どうしてこの部屋には先輩の私物があるんですか？」

「ん？私が泊まりたいから」

「な、何のために!？」

「一夏くんがどんな人間なのか気になったの」

「そ、それなら私も泊まります！」

「んー。ダメ」

「なぜですか!？」

「ふたり部屋」

「うっ……!」

楯無の正論に箒は折れた。

「大丈夫よ。私は一夏くんに手出ししないから、安心なさい」

「せ、先輩がそう言うなら……」

「一夏くんから手出しするかもしれないけどね」

「やっぱり私も泊まります!！」

「大丈夫よ。一夏くんはそんな子じゃないから。それに、ちょっとイジワルしただけよ」

ぺろっと舌を出して無邪気な笑みを見せられて箒は脱力する。

「なら、いいです」

「うん。一夏くんにも残しておくから安心して。それと、今日も  
うおそ晩いから部屋に戻ったほうがいいわよ」

「はい。そうします」

篤は渋々部屋を出て行く。急に部屋が静かになる。

「……………聞いてるんでしょ、一夏くん？」

「……………ふう」

楯無が座っているベッドの下から一夏が出てきた。

「すごいわね、あの一瞬で。しかも気づかれずに」

「あなたと組み手をした時と同じことをしただけです」

少し乱れた髪を整えながら一夏は楯無を見る。

「どうしてあんな提案をしたんですか？」

楯無さんのメリットがない。僕自身そういったもので動くことはな  
いが、どうしてもか気になった。

「さつきも言った通り、あなたの負担を減らすためよ」

「それだけですか？」

「あら、可愛い後輩の面倒を見るのは先輩の役目よ。それに、楽しそうだから」

快樂主義者、全体的に落ち着かせる態度、人を魅了する優しさ。

(人たらしか……この人は……)

そう思いながら楯無さんの顔を見る。楽しそうだった。その日、楯無さんの一面を見た。

### 第三十一話 複数の仮面（後書き）

どうもうまく書けないです。また時間があつたら書きます。

### 第三十二話 快樂主義者（前書き）

なるべく原作通りにしたと思います。そしてどこまで書けばいいか。まあ、とりあえず書きました。どうぞ。

## 第三十二話 快樂主義者

楯無さんが同じ寮室に住むと言っていた。何が目的なのかはわからなかったけど別に気にしていなかった。けど、大変だった。

寮室。

「ねえ、一夏くん」

「なんです

はあ  
」

とりあえずパソコンで課題をやっていた。終わりがけのところ楯無さんに呼ばれたのでベッドの方を向いた。ベッドの上に寝ころんだ楯無さんが足を泳がせている。しかし問題はその格好である。下着姿にワイシャツだった。

「なんでそんな格好なんですか。服を着てください」

「着てるわよ？」

「ズボンを穿はいてください。ズボンを」

「えー？」

「えー、じゃありません。風邪引きます」

とりあえずパソコンをしまっ。

「実は生徒会の仕事で疲<sup>つか</sup>れてるのよ。だからマツサージをしてちょうだい」

「僕のマツサージはたいしたものじゃありません。虚先輩にでも頼んでください」

「あら、セシリアちゃんが上手だって言ってたけど？」

あまり言いふらさないでほしいことだ。

「……わかりました。ただし」

「きよみ？」

「なんですか、その返しは」

「ん。なんとなく。それで？」

「下に何か穿いてください」

「下？ちゃんとパンツを」

「下着を穿いているのはなしです」

「一夏くんのいけず」

「じゃあしません」

「えー。それはひどいなあ。じゃあ何かズボンのものを穿いてくるわね」

「そうしてください」

楯無さんがベッドから降りて自分の荷物に手を出そうとして、その手が止まる。

「パンツじゃないから恥ずかしく」



「パンツです」

とりあえずちゃんとしたものを穿いてもらわないと困る。じゃないと社会的に殺される。………何に？

「これならいい？」

そう言っぺろんとシャツをめくって見せてきたのはスパッツだった。

「はぁ………いいですよ、それで」

たぶんこれ以上続けていたらこの人は変な方向にエスカレートしていく。絶対に。

「それじゃあ、マッサージよろしくね」

ベッドに寝ころぶ楯無さん。とりあえずテレシアのマッサージ方法でいこうか。

「ふう………始めます」

「ん。お願い。今より美人さんになるようにしてね」

無理だ。できるならそうしますけどね。それに今より美人というのはマッサージだけではハードルが高すぎる。そしてマッサージを始める。

むにゅっ。

とりあえず足を揉んだ。

(うーん。スタイルはいい方、あとしっかり鍛えてある)

「ねー、早くお尻しり。座ってばかりでこってるの」

この人は今マッサージを堪能たんのうしているのと同時にこの状況を楽しんでいる。疲つかれる、本当に。

(……………仕事モードに入ろうか)

僕は感情を消し、瞳に沈黙を宿す。

むにゅっ。

「あん……………」

「変な声出したらやめます」

「だって上手なんだから仕方ないじゃない」

とりあえずマッサージを再開させる。

「本当に上手ね」

「それはどうも」

「もしかして仕事ってマッサージ？」

「秘密です」

こっっている所は入念に、全体をほぐしていく。

「ふあ……………」

(このまま寝てくれると助かるけど)

しばらくすると楯無さんから規則的な寝息が聞こえた。

「お疲れ様です」

布団ふとんをかけて、電気を消して僕も寝た。

翌朝。

早朝、起きる。少しぼんやりした頭で今日の予定を考える。

（さて、まずは顔を洗って、今日は弁当にしようか）

学食で食べる時と自分で作って食べる時があるけど、基本は気分だ。どっちにしろ、姉さんの弁当は僕が作ってるけど。毎回おいしく食べているそうだ。（山田先生の情報）

（作ろうか……）

とりあえず布団をどかす。そこで唾然とした。

（何か柔らかいと思ったら……）

楯無さんがいつの間にかベッドに潜り込んで隣で寝ていた。

「ん、おはよう、一夏くん。早いわね」

「おはようございます、楯無さん。何してるんですか」

「うーん、添そい寝ね？」

「なんで疑問系なんですか」

「なんでだろうね。自分としてはキミの困った顔が見たい」

楽しいから、と付け加えて、にやりと楯無さんは笑みを浮かべた。

(まずい。こんなところを誰かに見られたらまた何か起こる)

とりあえず離れよう。そう思ってベッドから立ち上がるうとして

「え？」

「ふふっ」

楯無さんに手を引つ張られてまたベッドに逆戻り。そして楯無さんは僕のお腹の上に乗った。苦しくはない。

「あなたは何がしたいんですか」

「その困った顔が見たいの」

ドSだ。そう思った。そしてあるうことか部屋のドアがガチャツと開いた。終わった。誰が来るかはわからないけど間違ひなく誤解されて僕が酷い目に遭う。そして入ってきたのは……………織斑千冬こと姉さんだった。いつものジャージだ。

「……………」  
「……………」  
「……………」

長すぎる沈黙。僕は姉さんが来たことに驚いてる。いや、こんな時間帯に起きてるのは学園の中で僕と姉さんぐらいだ。楯無さんも意外な人物に驚いている。姉さんはずっとこっちを見たまま。そんな中、僕の頭に浮かんだのは希望と絶望の二文字。姉さんなら助けてくれるかもしれない。しかし逆に何かの処罰も考えられる。

「部屋から声が聞こえたから来てみれば」

はあとため息を一つして姉さんは僕たちをもつ一度見る。

「更識」

「はい」

「学生としての規則は守れ。いいな？」

「はい」

「では私は見回りに戻る」

背を向けて姉さんは部屋を出る。と思っただら壁から自分の顔を少し覗かせて、簡潔に言った。

「今日も弁当、頼んだぞ、一夏」

「あ、うん。わかった」

誰かに食べてもらって喜んでもらえるのは嬉しい。今日も頑張って作る。

「織斑先生のお弁当って一夏くんが作ってるんだ」

「ええ、まあ」

「じゃあ、私のも作ってくれる？」

「いいですけど」

「やった」

とりあえず、弁当は三つ。それにしても、疲れる。寿命が縮んだ気がした。

教室。

「それでは、皆さん中間テストを頑張ってくださいね」

四時限目、終了。とりあえず自分の弁当を取り出す。下手すると秒シで済ませる時もあるけど、今日は随分と真面目まじめに作った。

「織斑くん、学食行こうよ」

「たまには私たちと食べようよー」

「そうそう。専用機持ち組はずるい」

本来なら専用機持ちに連れていかれるけど、今日は違った。

「お邪魔します」

そう言って入ってきたのは、楯無さんだった。その手には僕が今朝けさ作った弁当の包み。にこにこことこっちに向かってくる。

「たまには教室で食べましょうよ。楽しいわよ、きつと」

当然のように僕の机に弁当箱を置いて、イスを用意する。その間に



他の女子にも声をかけて、あっという間に六人ほどが集まった。楯無さん曰く、大勢の方が楽しいから。

「うわぁ……………、おいしそうですね」

楯無さんが弁当箱を開けて誰かがつぶやいた。

「これって会長が作ったんですか？」

「ううん、一夏くんに作ってもらったの」

ピシリと場の空気が凍った、そして次の瞬間……

「え、え、え……………!?」

「織斑くんと会長つてそういう関係……………?」

「死んだ！神は死んだ！今死んだ！今死んだよ!？」

「こんな不条理が認められていいのか！否、断じて否!」

「会長ズルい！美人で完璧で夫持ちなんて!」

「お姉様！私たちのお姉様が!」

誰ですか、今夫と言ったのは。そんな関係じゃないです。そして皆さん、刀はしまってください。……………逃げないと。

「篝ちゃん」

「なんですか!？」  
「はい、あーん」

篤さんは開いていた口の料理を入れられた。突然のことに驚いていたかと思うと、すくとイスに座り直してもぐもぐと咀嚼する。立ちながら食べるのはマナー違反ではある。一部例外かもしれないけど。

「おいしいわよねえ」

と言いながら楯無さんも食べる。少し多めに作ったほうがよかったかもしれない。

「みんなも食べたい？」

「えっ、それだと会長の弁当が」

「私は一夏くんのをもらうから大丈夫」

「それだと僕の分がなくなります」

「そんな一夏くんにはこれ！」

目の前に現れたのは重箱五段のような包み。どこから取り出したんだ？

「うわ………、超豪華………」

また誰かがそう言った。中身は伊勢エビやホタテが入ってる。少し負けた気分。

「嬉しいですけど、こんなに食べられませんよ」

「あら、一人で食べるつもりだったの？」

にこにここと笑う楯無さん。そうか、これもみんなで食べようということか。

「いただきます」

僕は少しだけもらう。楯無さんは本当に楽しそうな笑みを浮かべて、他の女子たちに食べさせていく。おいしかった。美人生徒会長に食べさせてもらえるということ、みんなが楽しそうにランチタイムを楽しんでいた。

大浴場

食事前に入っていていかと山田先生に頼んだら許可が下りた。これならゆっくり一人でいられる。

(・・・・・・・・・・落ち着く)

楯無さんに振り回され続けた。こんなに疲れるなんて思っていなかった。さすがにここまで来ないだろう。しかし・・・・・・・・・・。

カラカラカラ・・・・・・・・

(嫌な予感がする。前にも似たようなことがあったような・・・・・・・・)

入り口のほうを見る。楯無さんがいた。学校指定の水着である。

「はい。お背中流しに来たわよ」  
「・・・・・・・・・・」

ゆっくりとターン。白式の中にあるブレスレットの機能を使う。僕は水着に設定。

「無視？」

「なんでここにいらっしゃるんですか」

「こっそり」

「どうやって来たのかを訊いているわけではありません」

まさか風呂にまで乱入してくるとは思わなかった。そしてあるうづりとか僕の隣に座った。

「実はね、文化祭の景品の話なんだけどね」

「ああ、はい」

「一夏くんに生徒会に入ってもらおうと思っの」

「はい？」

「あくまで仮よ。忙しいんでしょう？」

「………はい」

「なら仕方ないじゃない」

「すみません。できることなら手伝いをするんですけどね」

「そんなことを言っていると、お姉さんは本気にするよ？」

ずいっと近寄る楯無さん。この人は何を企んでるんだろ？。

「それじゃあ、覚悟しといとね」

不吉な言葉を残して楯無さんは風呂を出た。

「一夏くん」

「なんですか？」

「いいお尻だったわよ」

うふふと笑って去っていく楯無さん。………いつ触った？

食堂。

「ふう」

とりあえず紅茶を飲んでいる。この前来てた夷君<sup>えびす</sup>………式君<sup>しき</sup>だったかな？よく切れる包丁やおいしい紅茶をくれた。そして師匠たちの相手もしてた。サヴァリスさんは笑ってた。感謝しないと。

「一夏、あんた大丈夫なの？」

気づけば鈴さん……と言つよりいつもの五人だ。全員が苦笑いだ。

「僕は大丈夫ですよ」

「ウソね。あんたがこんなに早く風呂に入ったとこなんて見たことないし、こんな時間帯に紅茶を飲んでるところも見たことないわ」

(……………よく見てるなあ)

とりあえず紅茶をもう一口。うん、徐々に疲れが取れていく。ここ数日、楯無さんの相手だけじゃなく文化祭の準備もしてたらかもしれない。食欲はほとんどない。みんなのメニューはおいしそうだけだ。

「それで、あの女はどうしたのだ？」

あの日の敗北以来機嫌の悪いラウラさん。楯無さんのせいで時々僕の部屋に忍び込むことができなくなったのも、イライラの原因だとか。そのたびに姉さんがアイアンクローでラウラさんを捕らえようとすると、それを止めてる僕は悪くない……………はずだ。

「一夏。あの女はどうしたんだと訊いているんだ」

「なんでも生徒会の仕事が忙しいということまで出て行きました」

「そーそー。書類がちょお溜<sup>た</sup>まつてるんだよね」

この間延びした声は間違いなくのほほんさん。仕事は？

「私はね〜、いると仕事が増えるからね〜。邪魔にならないようにしてるのだよね〜」

否定できない自分がいることに気づいた。明らかに人選ミス。そんなのほほんさんのメニューはというと、お茶漬けだった。鮭さけの切り身をどーんとてっぺんに乗せている。豪快だ。

「えへへ、お茶漬けは茶番派？緑茶派？私はウーロン茶派〜」

開いている席に座ってそんなことを訊いてくる。ぐりぐりと箸はしでかき混ぜられたどんぶりは、カオスだった。

「なんとこれに〜」

「・・・はい」

「卵を入れます」

かぱっ。これはおいしいんだろうか。

「〜」



粘りけを増したお茶漬けをさらにかき混ぜて、のほほんさんは幸せそうに顔を緩ませる。まずい。お茶漬けを見てたら何だか吐き気がしてきた。

「食べまーす。じゅるじゅるじゅる……」

「のほほんさん、お行儀が悪いです」

「えー。むりっぽー。ずぞぞっていくのが通なんだよ」

「それはソバだ」

「僕もそう思う」

篤さんが訂正。シャルが肯定。

「善処します〜。ちゅるちゅる……」

少しは静かになった。

「コホン。……一夏さん？」

「なんですか、セシリアさん」

「あの部屋にいるのがつらいなら、仕方なく、人助けということで、武士の情けということ、わたくしの部屋にいらしても構いませんわよ？」

説明しておく、とセシリアさんのベッドが部屋のほとんどを占領して

いる部屋だ。天蓋てんがい付きというのが何ともセシリアさんらしい。

「ちょっとセシリア！待ちなさいよ！一夏、あんたこっちの部屋に来なさいよ。トランプあるわよ？」

「鈴さん、一つ忘れてませんか？」

「うっ、そうだった……」

この前ダウトをしたら全勝だった。具体的にいうと、相手がウソをついているときはすぐに分かる。逆に相手にダウトされても平気。

「とりあえず、部屋に戻ります」

さて紅茶が切れてしまった。部屋でまた作らないといけないと思って食堂を出る。寮室に戻ってドアノブに手をかけた。

「おかえりなさい。お風呂にします？ごはんにします？それともわ・た・し？」

まさかの楯無さん。精神的なダメージ、大。僕は本当に後ろから倒れそうな気持ちだった。

### 第三十二話 快樂主義者（後書き）

ケファイアさん、ありがとうございます。紅茶は一夏がおいしくいただきました。次回は文化祭。今回は短かったので次回はやたら長くなる気がします。学校があるので更新がおそくなりそうです。また頑張ります。

第三十三話 楽しい文化祭・・・になるといいけど(前書き)

忙しいです。ただそれだけ。どうぞ。

### 第三十三話 楽しい文化祭・・・になるといいけど

学園祭当日。

生徒たちのテンションは最初からクライマックス・・・・・・・・ごめんなさい。

「うそ！？一組であの織斑くんの接客が受けられるの！？」

「しかも執事の燕尾服！」

「それだけじゃなくてゲームもあるらしいわよ？」

「しかも勝ったら写真を撮ってくれるんだって！ツーショットよ、ツーショット！これは行かない手はないわね！」

ちなみに一年一組の『ご奉仕喫茶』は盛況で、朝から大忙しだった。と言っても僕が引っぱりだこな状態。慣れてるからいいけど。他のクラスメートはわりと楽しそうにしている。ゲームはというと、ジャンケンと神経衰弱とダーツ。ゲームの結果は皆様の想像にお任せします。

「いらっしやいませ こちらへどうぞ、お嬢様」

とりわけ楽しそうなのがメイド服姿のシャルで、朝からずっとここにこしている。似合ってるとは言ったけど、やっぱりこの前の執事服よりメイド服の方が本人も気に入っているのかもしれない。女の子だからかな？そして接客班はというと、一組にいる専用機持ち全

員だ。僕、篝さん、セシリアさん、シャル。ラウラさんだ。

( 篝さんはこういうのは嫌いだと思ってたけど……… )

実際、接客は不機嫌そうな顔でしている。たとえ営業スマイルだとしても笑うべきなんだけどね。比べてラウラさんは少しだが笑っている。

( @クルーズの時もあんな感じだったのかな？ )

とりあえず問題なさそうなのでよし。一瞬『接客のための100の心得』を読んだのかと思ったがやめた。あれを読んでいると思われると少し恥ずかしいものがある。まあ、それは置いといて。残りのクラスメイトは、大きく分けて二つ。もう片方が調理班でもう片方が雑務全般。うーん、調理したい。ちなみに調理班に回ると言ったらダメの一言で一蹴。それにしても………忙しい。さっき見たけど、ざっと数えて三十人近くの人が並んでいていまだに増えている。

「ちょっとそこの執事、テーブルに案内しなさいよ」

「はい、今すぐご案内いたします」

と振り向いたら鈴さんだった。

「どうしたんですか？」

チャイナドレスの鈴さんがいた。一枚布のスカートタイプで、大胆にスリットが入っている。真っ赤な生地きじに龍のあしらい。金色のラインと凝こっている。

「う、う、うるさい！うちは中華喫茶やってんのよ！」

「いわゆる飲茶ちんちゃですね」

「あたしがウエイトレスやってるっていうのに、隣のアンドのクラスのせいで、全然客来ないじゃない！」

「すみません」

なぜかはわからないけど、とりあえず誤った方が良さそうだ。それにしてもチャイナドレスに……頭の丸いのはシニヨンだったっけ？

「何よ、じろじろ見て」

「その格好、似合ってますね」

「う……。何よ、いきなり……」

素直な感想を言っただけなんだけど、顔が少し赤い鈴さん。照れているのかな？

「それではお嬢様、こちらへどうぞ」

「お、おじよ……!？」

「仮にもお店ですから」

「………なんであんたはあんたでこんなに似合ってるのよ」

「何かいいましたか、鈴さん？」

「な、何でもないわよ!」

「？」

とりあえず鈴さんを空いているテーブルへと案内する。お店の内装はセシリアさんが手配した学園祭とは思えない程の調度品が置かれている。特にテーブルとイスのこだわりがすごく、多分マルがいちに、さん、よん……やめよう。そうなるとティーセットもこだわりの品々で、調理担当のクラスメイトは手が震えないように必死だ。リラックス、リラックス。

「それで、ご注文は何になさいますか？お嬢様」

「そ、そうね……」

調度品の高級感が落ち着かないのか、鈴さんは二回ほど身をよじって座り直す。それからメニューを凝視ゆびしていた。メニューはお嬢様に持たせるわけにはいかないので、こうして手に持ってお見せしている。テレシアでは予約制で、メニューはお客様のオーダーはあらかじめ聞いているからこういうことはしない。新鮮だ。

「この『執事にご褒美セット』って何よ?」



「簡単に言つと、執事に食べさせられるセットです」

ばちくりとまばたきをして、鈴さんはなぜか顔をポツと赤くした。

「な、な、何よ、そのセット……ていうか、金取ってお菓子あげるとか……」

「いや、なぜかそういうセットです」

僕もおかしいと思ってます。はい。

「でも、あたしが一夏に……」

鈴さんがぶつぶつとうーんと唸りながら何かを迷っている。

「僕がパフェでも作ってきましようか？」

「……それも捨てるがた難い！」

血の涙を流している鈴さん。何がそんなに悲しいんですか。

「おい、鈴。早くしろ」

近くまでやってきたのはメイド服の篝さん。そして相変わらずその顔は不機嫌そうだ。

「篝さん、お客様を急せかすのはよくないですよ」

「仕方ないだろう。混こんでいるのだからな」

「わ、わかったわよ。えーっと、うーんと、それじゃあ、パフエで」  
「かしこまりました、お嬢様」

一夏は調理班に事情を説明してパフエを作り始める。説得と調理時間ですべて四分で終わった。

「お待たせしました、お嬢様」

一夏が作ったのはごく普通のパフエだった。盛り合わせはお菓子。器のパフエグラスごと冷やしているため食べている間は冷たいままである。

「ねえ、これって一夏があたしに食べさせてくれるっていうのは・・・」

「お嬢様、当店ではそういうサービスは行っておりません」

トゲトゲしい篝さん。何をそんなに怒ってるんですか。

「ふう………鈴さん  
「な、何よ」

パクッ

「~~~~~つ!!!!!」

「一夏、お前!!」

「サービスも大事ですよ？」

説明するとスプーンを取って、ちょうど開いていた鈴さんの口にパフェをひよいと。テーブルマナーを優先させるべきだったかな？

「三番テーブルで注文があったそうなので行ってきます」

そう言ってその場を去る。いかんいかん。サービス精神全開の『四ノ宮京夜』が出てしまった。これ以上続けたらセシリアさんあたりにはばれそうだ。

「あなたってナチュラルにそういうことするのね」

「………なんでここにいますか」

メイド服の楯無さんが一組に来ていた。いつの間に拝借したのか、このクラスのメイド服だった。

「さて、私もお茶しようかしら」

「接客しないんですか……」

「うん」

「ならなんでその格好を……言っても仕方ありませんね」

何回目になるかわからないため息をする。楯無さんはクスクスと楽しそうにしている。そんな中、ひとときわ騒がしい女子が入ってきた。

「どうもー、新聞部です。話題の織斑執事を取材に来ましたー」

新聞部のエースことまゆすみがあろし薫子先輩だった。ことあるごとに写真を撮りにくるので、今では結構な顔なじみである。たまにどこからともなくこの人のシャッター目線が感じられるのはきつと気のせいだろう。

「あ、薫子ちゃんだ。やつほー」

「わお！ たっちゃんじゃん！ メイド服も似合うわねー。あ、どうせなら織斑くんとツーショットちょうだい」

言いながら、すでにシャッターを切り始めている。楯無さんに至っては「いいい」とピースまでしている。二年生の人みんなこんなに仲がいいのか。

「あたし………帰る！」  
「あ、鈴さん！」

気づいたら鈴さんはすでに部屋を出ていた。一方で写真撮影の状況が変化していた。

「やっぱり女の子も写らないとダメねー」  
「私写ってるわよ？」

「たっちゃんはオーラありすぎてダメだよー。織斑くんも負けてないけどね。あ、どうせなら他の子たちにもきてもらおうかな」

「それいいわね。その間は私がお店のお手伝いするわ」

「うんうん、それでいきましょう。では、写真撮るからメイドさん来てー」

(うん、やりたい放題だ)

というわけで、一人目、セシリアさん。

「えーっと、どうして腕を取るんですか？」

「いいじゃないませんか、写真くらい」

(周囲の女子が突き刺すような視線で見ているのは気のせいなんだろうか………)

(ああ、一夏さんとツーショット。幸せですわ)

少し一夏の顔を見上げる。そこには一夏の笑顔があった。

( やっぱり似てますわね )

四ノ宮京夜。セシリアはちよくちよく会っているのだが、毎回四ノ宮京夜の顔に一夏の顔を重ねてしまう。

「セシリアさん？」

「は、はい！」

一夏がセシリアの方を向いたためお互いに向き合う形になる。少し距離が近いためにセシリアの心臓の鼓動はいやでも早くなる。

「カメラの方を向かないんですか？」

「す、すいません。わたくし、少しボーっとしてて」

「<sup>つか</sup>疲れたんですか？」

「ま、まあ、そんなところですね。おほほ」

「？」

( まあ、今は幸せですわ )

二人目、ラウラさん。

「しかし、なんだな。私とお前ではそれなりに身長差があるな」  
「ん？ああ、そうですね」

一夏は172cm。ラウラは148cmだ。

「……………でもいいぞ……………」

「え？」

「だ、だっこをしても、いいぞ……………」

「ああ、はい。よいしょ」

「なっ!?!」

ちょうど一夏の肩にラウラが乗るようになっていた。一夏はラウラが落ちないようにちょうど脇あたりに手を当てて支えている。

(軽いなあ)

「馬鹿者!?!下ろせ!?!」

「でも今だっこしていいって」

「いいから下ろせ!?!」

ゴスッ

「あだっ」

ラウラのげんこつが一夏の頭に振り下ろされた。

三人目、シャル。

「ね、ねえ、一夏。この服、どうかな？変じゃないかな？」

「そんなに心配しなくても大丈夫です。似合ってますから」

「ほ、本当！？燕尾服えんびふくより似合ってるかなっ？」

「燕尾服はどうかは知りませんが、メイド服の方が可愛いかわいいと思いますよ？」

「か、かわいっ……」

「はい」

「そ、そっかあ。可愛いかあ。えへへっ」

(やっぱり気にしてたのかな)

四人目、篝さん。

「……」

「どうしたんですか？」

「こ、このような格好の写真が残るのは避けたいのだが……」

「大丈夫ですよ。慣れれば大した事ありませんから」

「私はこれを着たばかりなんだが！？」

「大丈夫ですよ。ほら、仕事はまだ残ってますから早くしないと」

「わ、わかった！だから手を握るなっ！」

「篝さんが大人しくしたら放はなします」

「なっ！？」

このまま暴れていた。そんなことを思ってしまった篝だったが……



・クラスメイトの視線がそれを許さなかった。そんなこんなで、やっと全員のメイド・執事のツーショットが撮り終わる。先輩はほくほく顔で、何度もデジカメのプレビューを眺めていた。

「や〜。一組の子は写真映えしていいわ。撮る方としても楽しいわね」

「薫子ちゃん、あとで生徒会の方もよろしくね」

「もっちりん！この先輩にお任せあれ！」

どんつと胸を叩いて答える先輩。文化系の部活動なのにノリが体育会系なのは何故？

「そうそう、一夏くん。私、もうしばらくお手伝いするから、校内を見てきたら？」

「いえ、大丈夫です」

「そんなことないでしょ？さっきから時計ばかり見てるわよ」

まあ、用事があるのは確かなんだけど、ここを離れるとクラスメイトからお叱りを受ける気がする。

「大丈夫よ。私が適当にごまかしておくから」

この人はナチュラルに人の内心を読んてくる。

「それじゃあ、ちょっとお願いします」  
「うん。行ってらっしゃーい」

廊下に出る。相変わらずの長蛇なげの列だったけど、楯無たてなしさんが手伝ってくれているおかげでさっきよりも回転くわんが速い気がした。

「あ、織斑おとづらくんだー」

「ねー、どこ行くのー？休憩？」

「そんなところです」

声をかけてくる女子に返事をしながら、正面玄関へと向かう。

「ちょっといいですか？」

「はい？」

ふと、声をかけられた。それも階段の踊り場で。

「失礼しました。私、こういうものです」

スーツの女性は手早く名刺めいし取り出して渡してくる。

「IS装備開発企業『みつるぎ』渉外担当・巻紙礼子まきがみれいこ……さん」

ふわりとしたロングヘアの女性だった。声をかけてきてからずっとにこにこ笑みを浮かべている。雰囲気は『企業の人間』。

(こんな企業、あつたっけ?)

自分が忘れていただけかもしれないという可能性もある。しかしある程度の組織や企業の名前は頭に入っているはずだ。おかしい。しかしその女性は続ける。

「はい。織斑さんにはぜひ我が社の装備を使っただけなかないかと思ひまして」

(この手の話か……)

世界で唯一ISを使える男の僕が、白式に装備を使ってもらえるというのは、想像以上に広告効果が高いらしい。だから白式に装備提供を名乗り出てくる企業は後を絶たない。なんでも、白式の元々の開発室である倉持くわもち技研ぎけんが未だいまに後付装備を開発できていないということ、各国企業から山のようにお誘いが来ている。

(といっても白式は後付イコライザ装備を一切受け付けないし……)

後付装備に使用される拡張領域パス・スロットは各機体の量子変換容量に依存する。しかし、それ以外にもコアの『好み』のようなものがあり、それによって装備を取り込めるかどうかが決まる。白式はさっきも言ったように、後付装備イコライザを一切受け付けない。贅沢ぜいたくかもしれないけど、天剣さえあれば事足りる。むしろ十分すぎるくらいだ。他の追隨ついでを許さない強度と性能スペック。正直これ以上に優れた後付装備イコライザはないだろう。

「すみません。遠慮しておきます」

「そう言わずに！」

それに、この人の笑顔には違和感を感じる。何か不快なものを。それにしても、いくらなんでもしつこい人だ。仕方ない。少し強引だけど。

「すみません。人を待たせてるんで」

カキン。プシュー。

僕はウエストポーチから催眠手榴弾を取り出して巻紙さんに投げる。巻紙の意識はあっけなく刈り取られる。そして一夏はぐっすりと寝ている巻紙を廊下の壁に預けて、待ち合わせの場所に急いだ。

「ふ、ふ、ふっ……」

IS学園の正面ゲート前で、一人の男子がチケットを片手に笑いをこらえている。一夏の友人である五反田弾ごたんだんだった。

「ついに、ついに、ついにっ！女の園、IS学園へと……  
来たああああー！」

三日前。一夏と共有の友人である御手洗数馬みたらいかずまの家出でベースの練習をしているときに、一夏から一本の電話があつた。内容はIS学園の文化祭への招待。当然、弾は行くことにした。

（ああ、ここからでもたくさんの子が見える……。レベ  
ル高いよなー、正直）

弾は若干気合しやくかんの入った私服を着ているが、それを抜きにしても一般人  
人。それも、十代男子がいるというのは目立つらしく、す  
でに噂うわさになり始めていた。

「あその男子、誰かの彼氏かな？」

「どうだろー。ちよつといいよね」

「えー。私は織斑くんがいいなー」

きやいきやいと女子が姦かしましく話しているのに気がついて、弾は心臓の鼓動を早くしていく。

(うおお、注目されている………。う、う、う、これは、新たな出会いの前触れか!?)

「そのあなた」

「はい!?’」

不意に声をかけられて、弾はびくつと背筋を伸ばす。振り向いた先に立っていたのは、眼鏡と手に持ったファイルがいかにも堅いイメージの布のぼとけうつほ仏虚ぶつこだった。

「あなた、誰かの招待?一応、チケットを確認させてもらっていいかしら」

「は、はいっ」

弾はあたふたと焦あせりながら、握っていたせいでくしゃくしゃになったチケットを差し出す。

「配布者は……あら?織斑くんね」

「え、えつと、知っているんですか?’」

「この学園生で彼のことを知らない人はいないでしょう。はい、返すわね」

(こ、この人、むちゃくちゃ美人……………いや可愛い！なんと  
かお知り合いに……………話題、話題……………)

「あ、あのっ！」

「？何かしら」

「い、いい天気ですね!？」

「そうね」

会話終了。自分のセンスのなさにずーんと落ち込む弾を不思議そう  
に眺めながら、虚は去っていった。

(う、う、俺ってやつは……………俺ってやつは……………)

もし手元にベースがあつたら、哀愁のテーマを奏でたことだろう。  
弾は棺桶かんおけに半分足を突っ込んだような気分で、一夏が来るのを大人  
しく待った。一夏が来るまでにそんなに時間はかからなかった。

「お待たせしました、弾」

「お……………」

返事をした弾は半死にのような有様で、一瞬びくっとしてしまふ。

「ど、どうしたんですか？」

「どうもしない……。俺にはセンスがない……………」

何か大事かと思っていた一夏はほっとして弾を案内する。

「センスは自分で磨くみがものですから、あとからでも遅くはありません。そんなに落ち込まないでください」

「……………ああ、そうだな」

気を取り直して弾は大人しく一夏のあとに付いている。

「鈴さんのところにも行きますか？」

「いや、すぐじゃなくてもいいや。せつかくだし色々見て回らせてえなあ」

「はい、わかりました」

「ところでさ……………何その格好」

「クラスの出し物の制服です。一応」

「あー、なるほど。それじゃ、入ってみますか」

「ようこそE.S学園へ、お客様」

校舎の前で一夏は丁寧にお辞儀をする。



「やめるよ、一夏。友達なんだからそこまで堅くしないでいいから」  
「弾がそういうなら・・・」

二人並んで校舎の中を歩き始める。

「あ、織斑くんだ！やっほ」

「あとで絶対お店行くからね！」

「えへ、執事服の織斑くんを激写！げーっと」

行く先々で女子に声をかけられ、手を振ったり返事をしたりと忙せわしい。そんなことを繰り返していると、隣から弾の低い声が聞こえてきた。

「お前、無茶苦茶やひくやひひ人気あるじゃねーか・・・」

「男が一人いるから珍しいってだけです」

「そうかあ？例えそうでも俺はうらやましいぞ。なあ、入れ替わるうぜ」

「別に構いませんが、ISの訓練は大変ですよ？」

「はっはっはっ！女子に囲まれるためなら例え火の中、水の中！」

「ISの実戦で命を落とすようなことになってもですか？」

「・・・。。。。いのちをだいに」

「そうしてください」

苦笑しながら僕は歩く。まあ、ISを動かせないと話にならないけど。とりあえず手近なところにあった美術部のクラスに入ってみる。

「芸術は爆発だ！」

「……岡本 郎さんは11年間、フランスで過ごしていたそう  
うだ。」

「というわけで、美術部では爆弾解体ゲームをやってまーす」

「ああ！織斑くんだ！」

「男友達も一緒だ！」

「さあさあ、爆弾解体ゲームをレッツ・スタート！」

そう言って強引に爆弾を押しつけてきたのは、部長という腕章をつけた女子だった。この人が部長だと不安だ。激しく不安だ。

「やてと……」

僕は爆弾を両手で掲<sup>かか</sup>げてじっくり見ること数秒、ポイツと爆弾を真上に投げる。

ヒュンッ

風を切る音と共に、爆弾が一つ一つのパーツへと一瞬で分解された。

一夏はそのパーツを全て落とさずに回収した。

「はい、終わりましたよ」

「え？」

あまりの光景に美術部の部長は見入っていた。(元)爆弾を見てみると見事に解除されていた。

「「「「「「「「「「  
「「「「「「「「「「  
「「「「「「「「「「

周りから拍手が聞こえた。少し照れくさい。

「お、おめでとう、織斑くん。これ、景品のぬいぐるみ」  
「ありがとうございます」

もらったのは猫かパンダかよくわからない丸っこい生物。顔は一見猫だが柄が半分パンダ、ただし毛色は白・薄茶・茶で四肢は極端に短い。可愛いのかな、これ？

「これは蘭さんらんにあげてください」

と言って一夏は弾にぬいぐるみを渡す。そんな弾の顔は未だいまに唾然あぜん

としている。

「お前の学校は爆弾の解体処理を勉強するような学校なのか？」

「ええ、まあ」

「………やっぱり俺普通の学校でいいや」

「?どうしたんですか？」

「いや、なんでもない」

よくわからないが弾はIS学園編入を諦めたらしい。

「一夏、なんか喉が渴いたから飲み物飲もうぜ」

「それじゃあ鈴さんのところに行きましようか」

「ああ、飲茶つて言ってたっけ。よし、行ってみようぜ」

部屋を出て、階段を上って一年二組へと入った。

「いらっしゃいませ〜」

「ぶはっ!?!り、鈴、おま、お前つ………な、何してんの?」

「ちよっと!どうして弾がここにいのよ!」

「ちゃ、チャイナドレス………似合わねー。大体、なんで

ぶ!?!」

弾の言葉は強制的に遮られる。それも、鈴さんの投げたお盆で。うん、すっかりとめり込んでる。

「か、か、帰れ！」

「なんだよ、いつてーな！あー、さっき会った可愛い人とは大違いだ」

「はあ？誰それ」

「ふっ、ふっ、ふっ……。教えてやらん」

「一夏、アホが壊れたわよ」

「アホって言うな」

「……………」

「フォローしろよ!？」

当然、二人は二組の生徒に怒られた。とりあえず席に着き、メニューを開く。

「あのさ、一夏」

「はい」

「お前何かしたのか？」

「何ですか、急に」

「なんかさっきから鈴がお前のことを避<sup>さ</sup>けている気がするんだが」

「気のせいですよ、きつと」

「……………まあ、いいか」

「それより、さっき誰かと会ってたんですか？」

「ああ、すっげえ可愛い人がいた」

「可愛い人？上級生だったんですか？」

「おそらく」

「ふーん」

「お前、あの人のこと知らない？」

「特徴を言ってもらわないと僕でもわかりませんよ」

正直、知らない人かもしれない。その時はごめんなさい。

「はい、水！」

「鈴さん、静かに置かないと水がこぼれます」

「そうだそうだ」

「うっさい、弾。ぶつとばすわよ」

「……やめて。お前、テレビで見たけど代表なんたらなん  
だろ？俺、死んじまうよ」

「そうよ。だから敬うやまついなさい」

「ははは。面白いな、それ」

「冗談で言っていないわよ。ったく……」

二人が楽しそうに話しているところを見ると、携帯電話が鳴った。

「はい、織斑です」

（一夏、今どこ？一夏はどこだってお客さんのクレームがすごいから、すぐに戻って）

声からしてシャルだった。

「すみません、すぐに戻ります。隣の部屋なので数秒で戻ります」

(うん。お願いね)

プツン

「しっかり働きなさいよ、執事」

「そうだそうだ」

「はい、行ってきます」

二人の言葉を背に、すぐに一組の教室に戻った。

「ああ、一夏。良かった。すぐに三番テーブルでゲームして。あと、ついでにこっちのオーダーを四番に持って行って」

戻ってすぐ、シャルからトレーを渡される。

「わかりました。………ところで、楯無さんは？」

「生徒会の仕事があるって言ってどこかに行っちゃったよ」

なんて無責任な。任せた僕がバカだった。

「ともかく！お店が大変なんだから、急いで！」

「了解しました」

あっちに行ったりこっちに行ったりと忙しく動き回る。

「お待たせしました、お嬢様」

「きゃー！織斑くんだ〜！」

「ゲーム！ゲームしよ！負けないよ〜！」

「こっちはご褒美セットだから、座って座って！」

文化祭はまだまだ続く。さあ、頑張ろう。

終



第三十三話 楽しい文化祭・・・になるといいけど（後書き）

中途半端なところで終わってしまい、申し訳ありませんm（――）

m

できれば今日中に後半を書くつもりです。すいませんでした。

### 第三十四話 文化祭という名の死刑台（前書き）

すいません、間に合いませんでした。本当にごめんなさい。見捨て  
ないで下さい

m ( ) m

お願いします。えーっと、文化祭編 Part 2。今回は中途半端な  
ところで終わってしまい、誠に申し訳ありません。タイトルが物騒  
ですが物騒なのは最後だけです。では、どうぞ。

### 第三十四話 文化祭という名の死刑台

一時間後。ようやく開放された。

「お疲れ様、織斑くん」

「お疲れ様です、鷹月さん」

クラスのしっかり者こと鷹月静寝さんは今日も忙しそうだ。

「しばらく休憩してきたら？お店も一回体勢整えるのに時間がかかった」

「それなら手伝います」

「それは織斑くんに悪いよ。一時間くらいなら平気だから、女の子と学園祭見てきたら？」

それならお言葉に甘えようかなと思った矢先、ぐいっと腕を引っ張られる。

「では一夏さん！わたくしと参りましょう！」

振り向いた先にいたのはセシリアさんだった。そんな様子を見て、シャルが珍しく大きな声をあげる。

「あああっ！セシリア、ずるいよ。一夏、僕も行きたいなあ」  
「待て！そういうことなら私も行くぞ！」

割り込んできたのは篝さん。目がちよつと怖い。

「行くぞ、一夏」

そして教室のドアの前に立って、すでに行く気満々のラウラさん。  
さすがにこれだけの人数が移動するというのは廊下で邪魔になつて  
しまふかもしれない。うーん………。

「一人十分くらいの持ち時間でそれぞれ順番に行くというのはどう  
でしょう？」

「それはつまり………」

「一夏と………」

「ふ、ふたりきり………」

「………悪くはない」

全員がうんうんとうなづく。何かぼそぼそと言っていたのは聞こえ  
なかったけど、理解してもらえて何より。

「では、誰から」

「

「「「「じゃんけん!」「」」」」

すでに順番決めのジャンケンが始まっていた。

「「「「ぼん!」「」」」」

三人がチヨキ。一人がグー。

「ふっ……」

一番手を決めたラウラさんは勝ち誇った笑みを浮かべて、チャンピオンよろしくグーで天を突いた。

「茶道部ですか……」

「ああ、ここだ」

目の前には茶道部と書いてある看板。僕とラウラさんはその部屋に入る。

「はい。いらっしやーい。……おお！織斑くんだ！写真撮っていい？」

「いいですよ」

「ありがとうございます。この茶道部は抹茶の体験教室をやっているのよ。こっちの茶室へどうぞ」

<sup>たみ</sup>畳の部屋だった。凝<sup>こ</sup>ってるなあ。

「じゃあ、こちらに正座でどうぞ」

僕とラウラさんは靴を脱いで畳に上がる。

「執事とメイドが畳で抹茶ってすごい絵ですね」

「ふ、ふん。格好を気にするなど、女々しいやつめ」

「でも姉さんが来たときは居づらそうでしたよね？」

「う、うるさい！教官は特別だ！」

様子見ということやってきた姉さんはラウラさんのメイド姿を見て、それはもう盛大に吹き出した。そのまま楽しそうに眺めていたのを思い出す。ラウラさんは穴があったら入りたいという感じだった。

「うちはあんまり作法にうるさくないから、気軽に飲んでね」

「あ、はい」

着物姿の部長さんにはっこりと微笑むと、僕とラウラさんに茶菓子をくれた。一口食べると、甘い白あんがさぁっと舌の上に広がって溶けた。

「うっ……」

ラウラさんは茶菓子を口をつけることなく、なにやら難しそうな顔をしている。

「どうしました?」

「こ、これはどうやって食べればいいのだ……」

ラウラさんが取った茶菓子は白あんで作ったウサギで、なかなか愛嬌のある顔立ちをしている。じいっとラウラさんを見つめているかのようなそのウサギは、『僕をお食べよ!』と言っているのか、はたまた『お、お情けを……』と言っているのか。ラウラさんの場合だと、たぶん前者。もしかしたら中途半端に歯形がついたウサギを見たくないのかもしれない。可愛いな。

「ラウラさん」

「な、なんだ!?!」

「気持ちはわかりますけど、食べないと抹茶が飲めませんよ?」

「うっ、うっ……!?!」

意を決してラウラさんはぱくんと一口でウサギを頬ほばる。口の中であの白ウサギが………やめよう。

「………んぐ。うむ、やはり和菓子はうまい」

さっきまでの葛藤はどこへやら。しっかりと茶菓子を味わったラウラさんは、満足そうな顔をしていた。

「どござ」

それから僕とラウラさんの前に抹茶が出される。

「お点前てまえいただきます」

一礼してから茶碗を取り、二度回してから口をつける。抹茶独自の苦味が口に広がり、口内に残った甘い茶菓子の味わいを流していく。すっとした喉越のどしは心地よく、二人揃そろってほう………と一息ついた。

「結構なお点前てまえで」



お決まりの台詞せしごを言って、僕とラウラさんは再度一礼をする。本来なら茶碗を拝見したりするらしいけど、そこまで本格的な茶道ではなく、あくまで『お茶をいただく』ということに重点を置いた茶道教室のようだった。

「よかったらまた来てねー」

部長さんに見送られて、僕とラウラさんは茶室を出た。

「どうでしたか？ラウラさん」

「うむ、そうだな。やはり日本の文化は興味深い」

「興味深いですか。ラウラさんは和服とかは着たことがあるんですか？」

「わ、和服か。そういえば着たことがないな」

和服姿のラウラさんを想像してみる。流れるような銀髪を結った着物姿というのは、絵になると思う。

「み、見てみたいのか………?」

「できれば見てみたいですね。結構似合うと思いますよ」

「そ、そうか！」

珍しくラウラさんはぱあっと表情を輝かがやかせた。それから自分の反応

に気がついたのか、はっとして背中を向ける。

「ま、まあ、機会があればな」

「はい、楽しみにしてます」

そんなやりとりで、ラウラの休憩時間は終わった。

「そういえばセシリアさんってバイオリン弾けましたよね？」

「ええ。ピアノも多少は」

バイオリンは『織斑一夏』の時に一度弾いてもらったのでばれる心配はない。

「じゃあ、吹奏楽部にでも行ってみますか？」

「そうですね。何か面白いものがあるかもしれないわ。でも、

一夏さん……」

「はい」

「楽器はできますの？」

「いえ、あまり」

ウソは言ってないと思う。というかそう願ねがいたい。そんなわけで吹

奏楽部の部屋に入るためにドアを開けると、どうも閑古鳥が鳴いているのか部長だけが部屋の真ん中でぼーっと楽器の手入れをしていた。

「あれ？」

「おかしいですね」

声をかけづらい雰囲気だった。そんなことを考えていると、はっとこちらに気がついた吹奏楽部部长が顔を上げた。

「おお！おお！やっと六人目のお客さんだ！さあさあ、こちらへ！  
つて、織斑くんじゃん！写真撮っていい？」

「はあ、まあ、どうぞ」

「やたっ！」

ぴろりろりん と携帯電話がメロディを奏でる。そのまま画面を眺めてにへにへとしている部長さんに、セシリアさんは咳払いをして切り出した。

「んんっ！こちらでは、どの楽器を体験させてもらえますの？」

「んー。あるやつならどれでも！私のオススメはホルンよ。ホルン  
つて形がすばらしいわよね。うにうにさせて」

「う、うにうに？」

「じゃあ織斑くん、早速どうぞ！」



《ひひーん!》

「ちょっと待って、織斑くん!! いったいどうやって吹いてるの!」  
「?」

「え? 普通に吹いてますけど」

「普通にやったとしてもアニマル音楽になるはずがありませんわ!」  
「!」

「ならセシリアさんがやってみてください」

「わたくしは弦楽器だけで、管楽器はやったことありませんわ」

「でもフルートとか似合いそうですね。深窓の令嬢みたいで」

「深窓の令嬢……」

なぜかぼつりとつぶやいて、その言葉を繰り返すセシリアさん。

「試しにやってみたらどうですか?」

「え、あ、あの、これって、その……」

「?」

「……か、間接キス……」

「すみません。よく聞こえませんでした」

「な、なんでもありません! なんでもありませんわ!」

なぜか焦ったように手をブンブンと振って、セシリアさんはホルンを見つめる。

「で、では、いきます……」

「あ、マウスピース交換するよ。はい、どうぞ」

「あっ……………」

「ん？」

「……………」

マウスピースをひょいっと交換した部長さんを、なぜかぎろりと睨にらむセシリアさん。どうして？

「ちやむ、どじぞっ…」

「結構ですっ」

そう言ってセシリアはホルンを部長に押しつける。

「まったくもう、気が利きかない……………！」

なぜかご立腹のセシリアさんだった。

こうしてセシリアの休憩時間が終わった。

「そういえば剣道部って何やってるんですか？」

「し、知らん」

「せっかくですから行ってみましょう」

「な、なに？」

「えーと、場所は……あつた」

「ま、待て！私は剣道部に行くとは」

「ただでさえ顔を出してないんですから、行きましょう」

「わ、わかつた！だから手を握るな！自分で歩ける！」

抵抗する篤さんを連れて、剣道部が出し物をしている教室へと入る。

「え？」

「いらつしゃいませ」

暗幕の張られた部屋。真っ暗なそこで待っていたのは剣道具に身を包んだ人物だった。

918

「おや。織斑ssscくんssscに、そしてその織斑ssscくん剣道でssscに負けた幽霊部員ssscの篠ノ之ssscくんsssc」

「み、見てたんですか！？部長！？」

「うん、まあね」

負けたって……もしかしてアレのことかな？最初に剣道場で篤さんを戦闘不能にしてしまったアレをこの人は見てた？なんで気づかなかつたんだ？

「そ、それより、この有様は一体……」

「うん。最初は剣道体験コーナーだったんだけどね？それじゃあ票取れないからね？占いの館にチェンジしたんだよね？」

この部長さんはなぜ全部疑問系なんだろうか……………。

「しかしねー。全然ね？お客さん来なくてね？しょうがないから役作りとばかりに剣道具をつけてみたわけだね？」

占いと剣道って関係ないよね？

「じゃあ、占いでモしますかね。あ、座って座って」

勧められるままに僕と篤さんは席に座る。剣道部の部長さんを見ると、その手に持たれているのはなぜか花札。

「あの一……………」

「はいはい？なんですか？」

「普通、花札ではなくタロットとかじゃないんですか？」

「私は花札占いが得意なんだよね？」

「あの、部長？その名前は初めて聞きますが……………」

「うん。さっきつけたからね？」

だ、大丈夫なのか？



「さ。はじめよ？恋愛運でも占つわ？」

「どうやら選択権はないらしい。」

「んーと……織斑くんは雨四光だから、女難の相ありかな？」

「いや、かなって聞かれましても……」

でも合っている気がする。

「今日もなんか色々ありそうだね？同情するよ？」

「そ、そうですか……」

嫌な予感がするのは気のせいだろう。そう思いたい。

「じゃあ、幽霊部員の篠ノ之くんの恋愛運占つね？」

やっぱり出席率の悪い篤さんに怒ってるんじゃないだろうか。表情は面に隠れて見えないけど。

「えーと……篠ノ之くんは月見酒だから、イベントに期待？いいことあるかも？ラッキーポイントは剣道場だよ？」

「いや、あの……二学期はなるべく顔を出しますので……」

「そう？いやあ、嬉しいなあ」

最後はたぶん来てほしいという意味だと思っけど、これで篝さんの占いも終了らしい。

「ああ、そうだ。最後に相性占いでもしようかな？」

「相性占いですか？」

「そ、そうですか！それはいいですね！」

なぜかいきなり勢いよく反応した篝さんは、ずずいつと体を乗り出す。そんな篝さんをまあまあとなだめながら、部長さんは説明をはじめた。

「えーと、それじゃあふたりで手を合わせて？そうそう」

それぞれ右手を出して、顔の前で合わせる。

「じゃあ、そのまま十秒維持して？」

「はあ」

「こ、これで具体的には何がわかるんですか？」

若干緊張じやっかんしているような口調で、篤さんが部長さんに尋ねる。

「さあ?」

「さあって……!」

「いや、ほらね?嫌いな相手だったら手を合わせて十秒とかイヤでしょう?というわけで、ふたりはお互いに嫌ってませんよね?はい、終わり」

な、なんてアバウトなんだ……。

「そ、そうですか……」

どこか嬉しそうにしている篤さん。まあ、篤さんが何か得るものがあつたならいいかな。

「おっと、そろそろ時間ですね。篤さん、戻りましょう」

「そ、そうだなっ」

「あの、篤さん?」

「な、なんだ?」

「そろそろ手を離してもらってもいいですか?」

「そ、そうだなっ!」

言われて気づいてくれたのか、僕の手をきつく握り締めていた篤さんは急いで手を引っ込める。

「どうもありがとうございました」

「はい、おつかれ？ああ、織斑くん、写真撮っていい？」

「はあ、まあ、どうぞ」

「はい、どうもー」

なんでみんな撮りたがるんだろう。よくわからない。

「よし、戻りましょうか」

「………相性はいい。相性はいい………」

「篤さん？篤さん」

「！？な、な、なんだ！」

「教室に戻りませんか？」

「う、うむ！そうだな！」

それからなぜか右手と右足を同時に出して歩く篤さんと教室に戻った。

「僕が………最後………」

なぜか泣きそうな声でしゃがんでいるシャルがいた。

「だ、大丈夫ですか？シャル」

「……………うん……………たぶん……………ぐすっ」

たぶんって……………

「ほら、早く行かないと休憩時間がなくなっちゃいますよ？」

「……………うん……………」

ぐくぐくと自分の目を擦<sup>こす</sup>っていつも通りのシャルになる。といてもまだ目が赤い。

「どこか生きたいところがありますか？」

「……………料理部」

「料理部ですか？」

「うん。日本の伝統料理を作ってるんだって。せっかくだから、作れるようになりたいなあって」

「おいしいですね、シャルの料理」

食べてみてほしいということ何度かお弁当をもらったけど、素材の味を生かすために薄めの味付けにしている。

「い、一夏ほどじゃないよ」

「でも誰かの料理っていうのは嬉しいですよ？」

「そ、そう？じゃあ、また今度作ってあげるね」

「ありがとうございます」

そんな会話をしながら、僕たちは料理部が使っている調理室へと入った。

「へー……すげー」

一言でいうとお総菜の販売だけど。その種類が豊富だ。ずらっと並べられた大皿には、肉じゃがにおでん、その他にも和え物、煮物に焼き物。どれも美味おいしそうだ。

「あ、もしかしてこれが肉じゃが？」

「はい。昔は女性にとってはなくてはならない料理のレパートリーだったそうですよ」

「ふうん。どうして？」

「肉じゃがを美味しく作れる女性と結婚したほうがいいっていう風習だったんですけど、よくわかりません」

「け、結婚……！？そ、そうなんだ……」

シャルは一度びっくりしたあとでじーっと眺めている。食べたいのかな？

「おおっ、織斑つむぎくんだ！そして一度は男子だったと噂うわさのデユノアくんデユノアだ！」

しばらく見ていると、料理部の部長さんらしき人が目の前にやってきた。

「こんにちは」

「ど、どうも」

「どうしたのー？ふたりでデート？執事とメイドの秘密の逢あい引き？っていつてもミンチじゃないわよ？合挽あひびきだけに！なんちゃってなんちゃって」

こ、個性的なひとだ。

「さあさあ、食べて行ってよ。特別にタダでいいわよ？その代わりに、写真撮らせて。あとうちに投票して？」

おっと、いきなりの不正勧誘だ。

「「いえ、ちゃんとお支払いします」」

「ん？」

「あ……」

どうやら同じことを考えていたらしい。しかし、さすがはシャルだ。清く正しい。

「え、えっと、に、肉じゃがいただけますか？」

「はい、どうぞ〜」

保温装置でできた温度を維持している大皿から一杯盛って、シャルに手渡す料理部長。僕も同じものでいいだろうということと頼んで、早速食べてみる。

「ん。これは……」

「おいしいね、一夏」

「はい」

しっかりとした味付けだけどくどくない。いわゆる『いい煮付け』だ。白米によく合いそうだ。

「これってどうやって作ってるんですか？」

「これねー。圧力鍋使って作ってるのよ。時間短縮だけじゃなくて、味付けも決まるからさあ」

なるほど。そういえばテレシアにもあったね。桜木さんはこれで作



ってるのか。そんなことを考えながら、ふとシャルを見ると何か部長さんに訊いている。

「圧力鍋……ほ、他にコツとかあるんですか？」

「ふっふっふっ！。これ以上は秘密よ。知りたければうちに入部してね！」

「料理部かぁ……。い、一夏はさ、僕の料理がおいしいと嬉しい？」

「ん？うーん……。ん？」

「どうしたの？」

「いや、嬉しいんですけど。シャルが頑張っているんで僕も作るうかと思って」

「え？」

「今度食べさせてください。楽しみにしていますから」

「う、うん！わかった！……えへへ」

シャルはにこにこしながら肉じゃがの残りを嬉しそうに頬張ほおっている。

（僕も負けてられないね）

そんなこんなでシャルとの休憩が終わった。

「じゃじゃん、楯無おねーさんの登場です」

シャルと教室まで戻ったところで、教室の目の前に楯無さんがいた。

「今度は何してるんですか？」

「むむ、不機嫌だね。どして？」

「わかつてるはずですけど？」

「まあまあ、細かいことは水に流して」

はあ………もういいや。

「どうしたんですか、更識先輩？」

「楯無でいいわよ、シャルロットちゃん。実はあなたに用があるの」

「僕ですか？でもそろそろお店に戻らないと」

「それなら大丈夫よ。中のみんなには話をつけてあるから」

「は、はあ………」

どうやらシャルに用があるので教室にでも戻ろうか。

「一夏くん、キミはそんなにみんなの着替えが見たいの？」

「………はい？」

教室のドアに手をかけようとしたところで唐突に楯無さんがそんなことを言った。

「えっちなあ」

「いや、待つてください。いったいどういうことか説明してください」

「とりあえずみんな着替えてるのよ。だから入っちゃダメ」

理由はどうやら説明できないらしい。この人はまた何か企たくらんでいるのか？

「あはは。しかし一夏くんってからかうと面白いわよね」

つんと鼻先を押される。

「楯無先輩、僕に用があるんですよね。それなら早くいきましよう」

少し声のトーンの低いシャル。あれ、笑顔なのになんで周りの温度が酷ひどく冷たく感じられるんだろう。

「そうね。あまり時間もないから行きましようか。シャルロットちゃん、すぐに着替えられる？」

「はい、大丈夫です」

「それならよし。一夏くんはシャルロットちゃんが来るまで廊下で待ってなさい」

「……わかりました」

「それじゃあ、シャルロットちゃん。ついてきて。あと急いでね」  
「はい」

とりあえず僕は廊下で待つ。途中でシャルがブレスレットで瞬時に制服に着替えるのが見えて、楯無さんが「便利べんりね、それ」と話しているのが見えた。走る二人の背が見えなくなり、僕は数分待った。

「おまたせ、一夏」

「あ、シャル」

とってシャルのほうを見て、僕は絶句した。黒いレインコートを着ていた。というか全身真っ黒の服を着ている。そして手には黒いグローブ。そして手に持っているのは何かのヘルメット。

「な、何ですか、それ」

「ゴメンね、一夏。楯無先輩に内緒だつて言われてるから言えないんだ」

「は、はあ。言えないならこれ以上訊きませんが、とりあえず中に入れるか確認してくれますか？」

「うん、わかった」

シャルは教室のドアを開けて確認し、入っても平気だと言う。僕は

教室へ入る。あれ？シャルがあんな格好なのに中のみんなはどうして何も言わないんだ？

「みんな、おまたせ」

「遅いぞ、シャルロット」

シャルを出迎えたのはラウラさんだった。そして教室に入った瞬間、さっきの疑問の答えがわかった。なぜか教室には篤さん、セシリアさん、シャル、ラウラさん、それと数人のお客様しかいない。そして専用機持ちの四人が同じ服装をしていたからだ。そしてなぜかそれを何の疑問にも思わないお客様。教室には大きな空中ディスプレイが現れ、そこに映<sup>うつ</sup>っているのは……僕？とその周辺。

「いよいよだな」

「そろそろ時間ですわね」

「負けないよ」

「ふっ。私が一番だ」

「これは………いつたい………」

しばらく困惑していると、突然流れる校内放送。なぜかBGMがKOTOKOの『リル鬼っこ』。いや、古いつて。

「こんにちは、みなさん。本日はIS学園にお越しいただき誠に<sup>まことに</sup>ありがとうございます」

聞き覚えのある声。我らが生徒会長、更識楯無さらしきたてなしさんの声だった。あの人……何をしてるんだ？

「それでは、本日のメインイベント、『リル鬼っこ』を開始します！」

はい？

「ターゲットは……全国の織斑一夏おりむらいちかくん！」

……。

「ルールは簡単！時間内に織斑一夏おりむらいちかくんが逃げ切れれば勝ち。もし鬼に捕つかまればそこでゲームオーバーです！」

『鬼』という言葉で、専用機持ちである四人が持っていたヘルメットをかぶり、レインコートのフードをその上にかぶる。どこか笑っているように見える黒いマスク。そして目に該当する部分は禍々（まがまが）しく、そして赤く、鈍く光っている。まるでラインアイ・

センサーのようだ。

「なお、『鬼』と『織斑一夏くん』はISの使用は禁止されていますが、生徒会から支給されたワイヤーナイフ、電撃グローブ、その他の使用は許可します！」

ギイイイイイイ

バチンッ

レインコートの袖の内側からまるで紐のように柔軟な、それでいて何でも切れそうなキラリと光るワイヤーナイフが引っ張られる。また手にしているグローブの指先から紫電が走った。

「全国の織斑一夏くんは……頑張って逃げてください！」

僕は白式に手を伸ばす。ブレスレットの機能を使う。執事の燕尾服が量子変換の光に包まれ、服を再構築する。僕が選んだ服は、一番動きやすい服であるレイフォン師匠の修練着。いつも通り、髪型もレイフォン師匠のような髪型になる。

「それでは『リル鬼』」

楯無さんの声と同時に四人がそれぞれの得物を取り出す。箒は愛用

している日本刀の緋宵を、セシリアはスナイパーライフル型の麻醉銃を、ラウラは二刀流のタクティカル・ナイフを、シャルロットはその手に手榴弾を持っている。一夏は白式の待機状態であるガントレットに手を乗せたまま、深呼吸をする。まるで祈るように。

「はじまりました！」

まるで片言のように楯無は宣言する。その瞬間、一夏は全速力で教室を飛び出した。ブワツと風が巻き起こる。

「うおおおおおおおおおおおおおおお……！！！！！！！！！！」

普段の一夏からは想像できないほどの、悲鳴にも近いような叫びが廊下に響き渡った。

### 第三十四話 終



第三十四話 文化祭という名の死刑台（後書き）

まずは遅れてしまったことをもう一度お詫びします。本当に申し訳ありませんでした。鬼の服装とマスクは最初の『リル鬼っこ』でお願いします。次回は鬼ごっこからオータム戦の終わりぐらいまで書くつもりです。では、また次回で！



## 第三十五話 黒い感情

現在、僕こと織斑一夏は廊下を爆走中。理由は生徒会長である楯無さんの企画である『リル鬼っこ』に巻き込まれたから。え？廊下は走るな？それもそうですね。では……………

「待てええええええええええ、一夏あああああああああああ  
あ！！！！！！！」

……………無理です。今は走らせてください。現状を説明すると、前方にはいつ回り込んだのか全くわからない、二刀流のタクティカル・ナイフを持ったまま突っ込んでくるラウラさん。そして後方には緋宵を構えながらこっちに向かって走ってくる篤さん。廊下で二人の『鬼』に挟み撃ちになっている。マスクのせいか、機械音声のようになってる。しかし怖いのはその特徴的なマスクもそうだが、最も怖いのは二人の得物が『電撃グローブ』により電気を帯びているところだ。当たったらタダでは済まない……………いや死ぬ。

(さて、どうする……………?)

しかし今は左にも右にも壁があるため、曲がりたくても曲がれない。あるのは教室の壁だ。常人ならまず諦めるところだ。そう常人なら。

( やってみようか・・・ )

一夏は減速するどころか加速する。逃げるどころか向かってくる一夏にラウラは驚愕し、ラウラのスピードが一瞬だけ遅くなる。一夏はその瞬間を見逃さなかった。

「「なっ!?!」」

一夏は壁に向かって飛び、壁に対して垂直に走りだす。簡単に言えば壁を走っている。筈とラウラはあまりの光景に立ち止まってしまふ。一夏はそのままラウラを抜き去り、再び廊下を(床を)走る。そして角を曲がると見えたのは次の『鬼』だった。

「鈴さん?」

その手に持っているのは中国の手裏剣こと飛刀だった。それだけで鈴だと一夏はわかった。

「一夏、覚悟しなさい!!」

鈴は飛刀を一夏に向けて投げる。そして次にワイヤーナイフを鞭のように横に振る。飛刀とワイヤーナイフが一夏を同時に襲う。当然、二つとも電気を帯びている。

（横には避けられない。下に逃げれば下手をすると捕まって『電撃グローブ』の餌食だ。……なら上しかない）

一夏は走ってきた勢いをそのままに、天井ギリギリまで跳躍する。半ば前宙をするように飛刀とワイヤーナイフを飛んで避けて、そのまま鈴の頭上を越える。しかしそれだけでは終わらなかった。

「逃がすかあああああ!!」

鈴はワイヤーナイフを宙にある飛刀に巻きつけ、さらに一夏がいる方向へ飛刀ごとワイヤーナイフを振るう。滞空状態にある一夏にそれを避ける術はない。

「……………」

一夏はこの危機的状況の中で自分が生き延びる方法を瞬時に考える。天剣のサヴァリスと組み手をするときはよくある状況だ。あつては困るが。ふと一夏は楯無の言葉を思い出す。『IS以外の装備は自由に使っていい』。そして一夏は反射的にウエストポーチから掌に収まるほどの四角い物体を取り出す。

（何、あれ……………？）

「レストレション  
復元……」

取り出したのは一夏が天剣のカナリスから受け取ったレイピアの錬金鋼だ。一夏の掛け声と同時に基礎状態からレイピアへとその形を変え、一夏は空中で無理やり体全体を半回転させ、そのレイピアを振り上げ、一閃。この間わずか二秒。鈴の飛刀を上弾く。ドスツ……という音と共に鈴の飛刀は廊下の天井に突き刺さった。一夏はIS学園の従業員に心の中で謝った。

「ぬ、抜けない!?!」

思いのほか飛刀は深く突き刺さり、鈴がワイヤーブレードを強く引っ張っても抜けなかった。鈴は慌ててワイヤーブレードを解くがその間に一夏は錬金鋼を待機状態にもどし、ウエストポーチに戻しながら逃げていた。

（まずいな。このペースだと命がいくつあっても足りないかもしれない……）

そんなことを考えていたら足元に矢が突き刺さっていた。しかも帯電している。刺さっている角度からして上からの射撃。見上げると天井から上半身だけを逆さに出している。スナイパーライフルと酷似したものを持っていることから一夏はセシリアだと判断する。

(当たつたら洒落しゃれにならないぞ、これは………)

(あと、少しでしたのに………)

女子組みにだけ教えられた秘密の景品。それは『一夏を捕つかまえたものに、同室同居の権利を与える』というものだった。このあとに少し条件が変わるわけだが、それは今の専用機持ちにとってはどうでもいいことだった。

(一夏さんなら正確な射撃はむしろ逆効果かもしれないわね。ならー！)

セシリアは麻醉銃を少し乱雑に数発撃つ。しかしその矢やはちゃんと一夏の腕を、手を、胸を、足を狙ねらっている。おまけに逃がさないように一夏の周りにも数発撃っている。かなり撃つたためにカートリッジの弾数がゼロになる。一夏に逃げ場はない。しかし、一夏はそんな状況でも冷静に対処する。ウエストポーチからさつき使ったレイピアの錬金鋼たいとは違う錬金鋼たいを取り出す。そして「復元レストレイション」と呟つぶやく。出てきたのはカナリスと同じく天剣であるカルヴァーンからもらった幅広はばひろの長剣ながけんだった。一夏はその刀身の影に隠れるようにして錬金鋼たいを盾たてにして矢やから身を守る。矢やはカランカランと音を立てて床に落ちていく。

(一夏さんがあんなものを持つてるなんて聞いていませんわ！)

セシリアは文句を言いつつもカートリッジを取り替かえるために、新

しいカートリッジを取り出す。しかし一夏はその隙に幅広の長剣をセシリアに向かってブーメランのように投げる。セシリアは避けるために天井裏に逃げる。一夏が投げた錬金鋼はセシリアには当たらず、一夏はすぐにそれを回収して背に背負う。そして一階へと続く階段へと向かう。

(あと少しで外に出れる……)

一夏は階段を見つけて少し安心するがそれも束の間、なんと目の前に、顔の目の前に手榴弾が浮いている。

「っ!!」

一夏は走っている体勢を無理やり変えてそのままバク宙で後退し、その飛んでいる間に錬金鋼の刀身で手榴弾をはたく。手榴弾は窓に穴を開けて、宙でガスを放出した。再度、IS学園の従業員に謝るが見覚えのあるガスの色。一夏は人の気配を感じて、上の階へと続く階段の先を見る。「鬼」が5〜6個の手榴弾をジャグリングしながら階段を下りてくる。なんともシュールな光景だ。

「シャル、まさか……」

一夏は手榴弾のガスの色からして、自分が作った催眠手榴弾だと確信した。そしてそれを持っているはシャルロットだけである。



「そうだよ、一夏。僕は完成させたんだ。一夏のやつのようにシールドエネルギーは突破できないけど、即効性なら一夏の手榴弾にも負けないよ」

無機質な機械音声でシャルロットは一夏に告げる。

「まあ、多少エルフインやアセブマジンを使っちゃったけど……」

(……やりすぎだ)

一夏は一種の恐怖を覚える。エルフインやアセブマジンはゾウ、ウシ、トラなどの大型動物に使う麻酔薬ますいのことだ。人間には強すぎて使えない。微量とはいえ十分、脅威だ。しかし一夏が催眠手榴弾を作る時は安全なものを使っているため、シャルロットがここまでしてくると思っていなかった。

(どうする……)。僕の催眠手榴弾は、あのマスクのせいの意味がない。どうすれば……あ……)

不意に一夏は何かないとポケットを探った。その手が何かに触れる。それを取り出す。あったのはいつ用意したのかわからない閃光手榴弾だった。

(これなら……！)

一夏はポイツとちょうど自分とシャルロットの間に投げれる。まばゆい光が廊下を満たし、シャルロットの視界を封じる。一夏はその隙に穴の開いた窓を突き破って飛び降りる。再度、(略)。同時に錬金鋼を待機状態にしてウエストポーチにしまう。一夏が着地して逃げ始めようとした瞬間だった。

「さあ！今からフリーエントリー組みの参加です！」  
「え？」

ドドドドドドドドドドドド！バタンガンドンツ！

楯無さんの宣言と同時に、校舎の中からすさまじい地鳴りがあったかと思うと、校舎のドアや窓からすさまじい数の『鬼』が顔を覗かせていた。そして全員が叫びながら一斉に飛び出す。

「  
」  
「  
」  
「  
」  
「  
」  
「  
」  
「  
」  
「  
」  
」

あるものは『電撃グローブ』に紫電を奔らせ、あるものはワイヤーナイフを伸ばし、あるものは運動部の得物(?)を持って、一夏のあとを追う。当然、一夏の実績は一つだけ。逃げることだ。

(どこに逃げればいいんだ?)

とりあえず当てもなく逃げる。しかし一夏は失敗する。多くの『鬼』を連れてなぜか第四アリーナに入った。今思えば周りを囲まれるだけである。しかし現実<sup>モルモット</sup>は違った。なんと第四アリーナが巨大な迷路と化していた。実験動物には一生をかけてもゴールにたどり着けないような複雑な迷路だった。

(いつ作った?)

つつこむところをいろいろと間違っているかもしれないが、一夏の感想はこれだけだった。後ろのほうでは『鬼』が迫ってきているので仕方なく入る。そこが楯無<sup>まく</sup>が作った魔窟<sup>まくつ</sup>だとも知らずに。

一夏は迷路の中を走る。かなり複雑にできているため、何度も行き止まりになる。悩みながらも走ること数分、一夏は何かを踏<sup>ふ</sup>む。

カチツ………

(カチツ?)

奇妙な音が鳴る。そして次の瞬間、壁から矢が飛んできた。

（トラップか！）

一夏は背中を反らして避ける。しかし背後の壁からも矢が放たれ、一夏は慌てて走り出し、角を曲がって回避する。何事もなく矢を回避し、少し落ち着こうということと右手を心臓辺りに、左手を壁に置いた。そして一夏の左手が何かに触れる。

（カチッ）

ドンドンドンドンドンドンドン

何かが迷路の壁を破壊しながら一夏の方へ近づいてくる。そして一夏の目の前にある壁に亀裂が走り、その姿を現した。

（鉄球！？）

真っ黒い鉄球が一夏に向けてどこからかは不明だが発射されていた。一夏はそれを避ける。しかし壊れた壁から『鬼』たちが顔を覗かせていた。

「「「「見つけたあああ!!」「」「」」

一夏はその場からすぐに離れる。捕まれば電撃が襲う。当然、全速力で逃げる。すると一本の長い道が見えた。迷っている暇はないので走り抜ける。しかし………

カチツ

(またか!)

一夏はまたトラップの起動スイッチを踏んでしまう。一夏自身は警戒しているが、見えないように工夫されていた。そして何が来てもいいように身構える。そして何かロープのようなもので吊るされていたモノが振り子の要領で一夏に襲い掛かる。

(今度はギロチン!?)

ギロチンだった。避ける。避けるしかない。さもなければ体の右半分と左半分がさようならすることになる。笑い事ではない。一夏は飛んで避けてギロチンの上に、刃のない部分に乗る。そして振り子の要領で上がるギロチンを足場に、迷路全体を見渡す。

(うわあ………)

迷路のあちこちに、『鬼』がいる。それはもう、数え切れないほど。一夏はその場からどこか安全な場所を探す。

あつた。

隅にある行き止まり。周りに『鬼』が少ない。一夏はそこに向かって飛ぶ。しかし失敗する。周りに『鬼』が大勢いる行き止まりに着地してしまった。

「あつちで何か音がしたわ！」

「こつちよ！」

当然、逃げ場がなくなる。壁は走れるが通路が狭すぎる。一夏はじりじりと追い詰められ、その背中が壁に当たる。そしてその壁が後ろへ倒れる。

「え？」

壁と共に一夏は倒れ、転がる。倒れたドアは一夏の体がその上から離れると、ボタンとまた迷路の壁となる。

(……………ここって、更衣室?)

一夏が転がり込んだのは第四アリーナの更衣室だった。一夏にはブレスレット(の機能)があるため正直使用頻度は皆無だ。そこが更衣室だと気づくのに少しかった。部屋が少し暗いということもあったが。

「お待ちしてました、織斑さん」

後ろから声をかけられる。そこにはニコニコと笑みを浮かべている巻紙まきがみさんがいた。

「どうしてあなたがここに……………?」

「はい。この機会きかいに白式しろしきをいただきたいと思ひまして」

「何を……………?!」

明らかな殺意。一夏はそれを瞬時に感じ取り、即座に後退する。巻紙は蹴るつとしたのか、その足が宙に浮いている。蹴る前だった。

「ちっ！すばしっこいガキだなあ」

ニコニコと笑顔は崩さない巻紙。いや、目の前の人間を一夏は『敵』と判断する。今までの不快感の原因がこのためだったと判断する。

「まあ、いいか。てめえを殺して白式をもらっぜー！」

女がその顔を邪悪な風に歪める。その女の体が光に包まれ、ISを展開する。機体の色は禍々（まがまが）しい黄色と黒の配色。背中に8つの独立した装甲脚がPICを展開しているのか、宙に浮いて刃物のような先端を持っている。蜘蛛を模した異様な容姿をしていた。

「くらえ！」

背中から伸びた八つの装甲脚、その先端が割れるように開いて、銃口が姿を現す。その八つの銃口から女は発砲する。しかし一夏は更衣室を縦横無尽に走り、全て避けていく。

「ISを装備してねえのに、なんなんだてめえはー！！」

「それはこちらの台詞です。あなたは何者ですか」

「ああん？知らねーのかよ、秘密結社『亡国企業』が一人、オータム様って言えばわかるかあ！？」

「！ー！！」



ファントム・タスク  
亡国機業。

裏の世界で暗躍する秘密結社。第二次世界大戦中に生まれ、50年以上前から活動していて、組織は運営方針を決める幹部会と実働部隊の2つに分けられている。ただし、組織の目的や存在理由などの詳細が一切不明の謎が多い組織。一夏がハッキングしていた時目をつけていた組織の一つだった。やたら固いセキュリティだったが、一夏はその組織の情報をある程度、把握することができた。

「この『アラクネ』相手にここまでもつとは、こんなこと聞いてねえぞ！」

オータムは追加でその手にマシンガンを構築。一夏に向かって発砲するが一夏には当たらない。ISのハイパーセンサーで捉えることができるスピードで動いてはいるが、常人からしてみればおかしなスピードである。

「くそっ！これなら捕まえるのも苦労するぜ。納得だ」

「どういう意味ですか」

「気づかねえのかあ？第二回モンド・グロツンでお前を拉致したのはうちの組織だ！」

その言葉に一夏の表情が変わる。激情に駆られたもの変わる。あの時感じたドス黒い感情が一夏の中を満たしていく。まるで白いシ

ヤツに血がじわじわと滲むように。

(この人たちのせいで……僕は……  
姉さんが……!)

今感じられるのは自分でも抑えきれない程の殺意。一夏は拳を強く、自分の手から血が出るほど強く握り締める。すると淡く輝く青い光が一夏の拳を薄く包んだ。一夏はそのまま感情的になり、オータムに向けて飛び出す。

「ハハハハ！感動のご対……面……だ……な……」

オータムは見た。自分に向かって来る一夏を。そしてその背に死神を見た。恐怖でオータムの体が全く動かなくなる。そして一夏の青く輝く拳がオータムの顔面を捉えた。

「ガ……あ……」

一夏の拳がオータムの顔にめり込み、メキメキと嫌な音がする。一夏の拳はISの絶対防御を貫いてオータムにダメージを与えた。そして驚くことにオータムは衝撃でロッカーまで吹き飛ばされる。

「はあ……はあ……はあ……うっ……」

一夏の体は震えていた。一夏は自分の力量を間違えるほど素人しらべではない。『自分は人を殺せるほどの力を持っている』。それはあの日から自覚していることだった。だからこの力で他人を傷つけるようなことはしない。誰かを、自分の大切なものを守るために使うと決めたはずだった。いくら敵とはいえ後悔する。自責の念から一夏は動けなくなってしまった。

「こんのがキがああああ！よくも私の顔を！」

顔半分の至るところから血が出ているオータムが八本の装甲脚を一夏に襲い掛かる。

ドスッ

鈍い音が響いた。しかし一夏には傷一つなかった。一夏はその顔を上げる。

「楯無………さん………？」

「怪我けがはない？一夏くん」

目の前には八本の装甲脚に全身を貫かれた楯無がいた。

「困るのよねえ、一夏くんは私のお気に入りに」

全身を貫かれている楯無は、それでも余裕の表情を崩さない。よく見ると、アラクネの脚が貫いている箇所からは一滴の血も流れていない。

「なんだ、お前……？手応えがないだと……？」  
「うふふ」

にこりと楯無が微笑む。そして、次の瞬間にはその姿が崩壊した。ぱしゃつと音を立てて、楯無の姿をしていたモノが拡散する。

「！？こいつは……水か？」  
「ご名答。水で作った偽者よ」

そのたつぷりと余裕を感じさせる声は、オータムの後ろから聞こえた。振り向くオータムを、楯無はランスでなぎ払う。

「くっ……！！」

「あら、浅かったわ。そのIS、なかなかの機動性を持っているのね」

「なんなんだよ、てめえはよお！」

「更識楯無。そして、IS『ミステリアス・レイディ』よ。覚えて

おいてね」

楯無はにこりと微笑む。そして、身に纏まとったISは一夏が今まで見てきたどの機体にも似ていなかった。

アーマーは面積が全体的に狭く、小さい。だが、それをカバーするように透明の液状のフィールドが形成されていて、まるで水のようなドレスだった。そんな独特の外観を持つミステリアス・レイディの中でもひととき目を引くのが左右一対の状態で浮いているクリスタルのようなパーツである。アクア・クリスタルと呼ばれるそこからも同じく水のヴェールが展開され、大きなマントのように楯無を包み込んでいる。そして手に持った大型のランス『蒼流旋そうりゅうせん』の表面にも水が螺旋状らせんに流れて、まるでドリルのように回転し始めた。

「けっ！今ここで殺してやらあ！」

「うふふ。なんていう悪役発言かしら。これじゃあ私が勝つのは必然ね」

そう言つて楯無はランスによる攻防一体の攻撃を開始する。八本の脚、それに加えて二本の腕で攻撃を繰り出してくるオータムとそのIS『アラクネ』に対し、一つしかないランスでそれら全てを凌しのぎきる。

「くそっ！ガキが、調子づくなあ！」

腰部装甲から二本のカタールを抜いたオータムは、自らの腕を近接

格闘に、背中の装甲脚を射撃モードに切り替えて応戦する。

「そんな雑な攻撃じゃ、水はやぶれないわ」

嵐のような実弾平気を、水のヴェールで全て受け止めて無効化する。弾丸はヴェールに入った瞬間に勢いを失い、水に捕らえられて止まっていた。

「ただの水じゃねえなあっ!?!」

「あら、鋭い。この水はISのエネルギーを伝達するナノマシンによって制御しているのよ。すごいでしょ?」

喋りながらも、その手は止まらない。オータムの巧みなカッター二刀流の攻撃を、ランスで受けては逸らし、必要に応じて脚までも使っては完全に攻撃を封殺していた。

「なんなんだよ、てめえは!?!」

「二回も自己紹介しないわよ、面倒だから」

「うるせえ!」

自分の攻撃を完全にやり過ぎられているオータムは、次第に苛立ちをあらわにしていく。そんな反応も楯無にとってはどこ吹く風で、涼しいげな表情で、しかし的確に相手の攻撃を潰していった。

「ところで知ってる？この学園の生徒会長というのは、最強の称号だということを」

「知るかぁ！」

左手のカタールを投擲し、同時に一気に距離を詰めるべく跳ぶオータム。楯無がカタールを弾いた瞬間に、そのランスを下から蹴り上げた。

「あらら」

「くらえ！」

四本を射撃モード、残り四本を格闘モードにしてオータムの猛攻が始まる。それに対して楯無は蛇腹剣「ラスティー・ネイル」を呼び出して対応する。

「ちょっときついな？」

「ははは！その減らず口、いつまで続くかぁ！？最強だど？笑わせんなよ、ガキが！」

ラスティー・ネイルが蒼流旋よりも小さいために楯無の動作もより速くなる。しかし手数が多さに楯無は次第に押され始める。だが楯無はその笑みを崩さない。

「一夏くん」

「………なんですか」

「私はあなたに何があったか知らない。でも、それがあなたにとって悲惨なことだったことだけはわかる」

「………」

楯無からしてみれば一夏が人を傷つけるということが想像できなかった。そんな一夏が誰かを殴るとするのはよほどの事があったのだろつと楯無は考えた。

「少し頭を冷やしなさい」

「……はい」

「ふん、ガキが！余裕ぶるんじゃねえよ！」

隙をついたオータムが蛇腹剣を楯無の手元から弾く。そして装甲脚で楯無を弾き飛ばす。指先を何かを編むようにして動かす。エネルギー・ワイヤーで構成された塊は、楯無の前ではんと弾けて巨大な網へと変化し、楯無の自由を奪った。

「はあ………はあ………。てごずらせやがって………  
……ガキがつ！」

「うーん、動けなくなっちゃった」

「今度こそもらったぜ………！」

八本の装甲脚を構えて、ゆっくりと楯無に近づいていく。しかし、



楯無はというと焦った様子も怯えた姿もない。

「ねえ、この部屋暑くない？」

「ああ？」

「温度ってわけじゃなくてね、人間の体感温度が」

「何言ってるやがる……」

「不快指数っていうのは、湿度に依存するのよ。」

この部屋って湿度が高くない？」

「!？」

ねえ、

ぎくりとしたオータムが見たのは部屋一面に漂う霧。しかも、自分の体にまとわりつく、異様に濃い霧だった。

「そう、その顔が見たかったの。己の失策を知った、その顔をね」

にっこりと、女神のように微笑む楯無。しかし、その表情には死神の鎌と呼ぶべき、必殺の意図が含まれている。

「ミステリアス・レイディ……『霧纏の淑女』を意味するこの機体わね、水を自在に操るのよ。さっきも言ったように、エネルギーを伝達するナノマシンによって、ね」

「し、しまっ

「遅いわ」

ぱちんつ、と楯無が指を鳴らす。次の瞬間、オータムの体は爆発に飲み込まれた。

「あはつ。何も露出趣味や嫌味でベラベラと自分の能力を明かしているわけじゃないのよ？はつきりこう言わないと、驚いた顔が見えないもの」

霧を構成するナノマシンが、ISから伝達されたエネルギーを一斉に熱に転換し、対象物を爆破する能力「クリア・パッション清き熱情」。限定空間でしか効果的な使用がないとはいえ、全ての行動と同時進行で準備を行えるこの技は、実戦において非常に高い有用性を誇る。

「ぐっ……がはっ……まだ……まだ……まだだ！」

「いいえ、もう終わりよ。そろそろいいみたいだし。ね、一夏くん？」

オータムはすさまじいほどの殺気を感じて、後ろを振り向く。そこで見たのは光が渦を巻くように包んでいる一夏の姿だった。

「行こう、白式。実戦モード起動……」

光が白式を構築してその姿を現す。めいオータムはそれを見て、見たことのない四本脚の装置を取り出した。大きさは四十センチほど。駆

動音を響かせてその脚が開く。

(この際、やるしかねえ！くらえ！)

オータムは構えてその装置を一夏に向けて投げる。しかし一夏は雪片を0.1秒で呼び出して、『零落白夜』を発動させてその装置を雪片を振り上げて切り裂いた。装置は真っ二つに切れて爆散する。

「バカな！《剥離剤》が！」

剥離剤を切った一夏をオータムは見る。そして恐怖した。一夏の瞳に感情の色が見えない。ただ一つ、オータムに対する殺意だけがオータムに向けられている。

「殺しちゃダメよ、一夏くん」

周囲の空気が痛いと思えるほどの殺気に楯無は念のため釘を打っておく。

「……わかってます、楯無さん」

瞬間、一夏の肘から指先までの白式の装甲が輝きだし、青白い光と

こがねいろ  
黄金色の光がそこに集まってゆく。その一夏の脳裏に浮かんだのは  
天剣のサヴァリスと組み手をしていた時の記憶だった。

一夏が再び天剣達のところへ戻って数日、一夏はサヴァリスと組み  
手をしていた。

「やっぱり鈍ってるねえ、つまらない」

一夏の腹にサヴァリスの拳が叩き込まれる。一夏はそのまま壁に飛  
ばされる。そのままずると壁を伝って地面に倒れる。

「ぐっ……げほっ……う……」

「一応、言っておくよ。君は間違ったことはしてないよ、織斑」

一夏が戻った直後に、一夏は練武館にいる全員に事情を説明してい  
た。当然サヴァリスも聞いている。

「何を言っ……」  
「いいかい？ 妬み、怨み、憎しみ、殺意、憎悪、固執、復讐。そう  
いうものだけが人を強くする。人を、人以上のものにするんだ」  
「それは……」

「否定すのかい？でもキミは実際、普通の人が使えないような武器を使った。そうだろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一夏には否定することができなかった。実際、一夏はIS用の近接ブレードである雪片をISの補助なしで、まるで棒切れのように振るっただから。

「それでも・・・・・・・・僕は・・・・・・・・」

一夏は立ち上がる。

「その考えを・・・否定します」

「まあ、キミがどう考えようがどうでもいいんだけどね。さっさとあの頃に、戻ってくれよ！」

サヴァリスと一夏が同時に飛び出す。その日の組み手も地獄のようだった。

(やっぱり、サヴァリスさんの考えには賛同できないな)

一夏は自分の中の黒い感情を自分なりに抑える。外には出さず、出すのは殺気だけ。そして青白い光と黄金色の光が……新たな天剣を作り出した。一夏の肘から指先までの白式の装甲がその形を変えていた。

『天剣クォルラフィンを構築しました』

目の前に空中ディスプレイで青い色を背景に、白い文字で白式から報告される。一夏の腕に出現したのはサヴァリスの天剣だった。一夏はそれを確認して、飛び出す。

「うそ……」

「どうなってんだ、これは!？」

オータムの周りを十二人の一夏が囲んでいた。

『千斬閃』

ルッケンスの秘奥である『千人衝』をレイフォンが参考にした超高速で移動し、自身を数人、数十人へと増加させて全方位から攻撃する到技。一夏は同時瞬間加速で加速と方向転換を同時に実行。元々ISのハイパーセンサーの反応速度を超えるほどのスピードを出せるため、オータムのアラクネにさえ一夏が複数いると認識している。

十二人の一夏が同時に移動しながらオータムを攻撃する。蹴り、殴り、切り裂き、オータムのアラクネの装甲が次々と破壊されていく。あまりの猛攻にオータムは声を上げることできない。アラクネのシールド・エネルギーが一桁となったところで、一夏の攻撃が止む。十二人の一夏がオータムの目の前で一人となる。そして一夏はいまだに『零落白夜』を発動している雪片を、頸動脈まで持っていく。その青白いエネルギーの刀身がオータムの首を狙っていた。

「このまま切れば、あなたは間違いなく死にます。大人しくしてください」

「く……………そ……………」

オータムの肩が落ちる。明らかな戦意の喪失。しばらくの間、沈黙が空間を支配した。

「「「!!」」」

全員のISから三人に知らせる。そして無数の小さな光が部屋を満たした。

「くっ………!!」

一夏はオータムの首から雪片を離し、逆手に持ち直す。そのまま投擲して更衣室の安全な方向に巨大な穴を開ける。そしてオータムをその穴に向けて蹴る。オータムは外に出た。悲痛な叫びが聞こえた気がしている暇はない。

「楯無さん!!」

「一夏くん!!」

二人の手が同時に伸びる。そして更衣室から巨大な火柱が上がった。



更衣室は木っ端微塵こばみじんになった。その瓦礫がれきの中に確かな膨らみふくがあった。

ドン！

音と共にその膨らみが爆ぜた。そこにいたのは楯無を抱かかえた一夏がいた。

「げほっ・・・げほ・・・大丈夫ですか、楯無さん」  
「うん、なんとかね」

最大展開した水のヴェールが二人を包んでいた。爆発の威力が大きかったのか、白式の装甲に少しヒビが入っている。楯無には目立った怪我けがはなく一夏は安心した。

「ところで、楯無さん・・・」  
「うん？なに？」  
「腕を離してもらえると助かります」

楯無の腕が一夏の首に巻かれている状況だった。楯無が一夏に抱き

ついているようにも見える。

「うーん、やだ」

「やだつて、そんなこと言わずに降りて下さい」

「やだやだやだ」

「駄々(だだ)を捏ねないで下さい」

「あー！ー！ー！織斑くんが会長をお姫様抱っこしてるー！ー！ー！」

『鬼』に見つかってしまった。というかISを使っちゃったけど大丈夫なのかな。

「おっと、忘れてた。はい・・・タッチ」

ポンツと楯無は白式の装甲にタッチした。

「何してるんですか？楯無さん」

「実はね、白式にタッチした人が織斑くんと同じ部屋に暮らせるっていう条件だったの」

「もしかして・・・それであんなに女子が必死に？」

「うん」

「・・・何考えているんですか・・・。。大体、僕と暮らしていいことなんてあるんですか？」

「いっぱいあると思うけど？ま、なんにしても、ゲットしたのはわ・た・し」

嫌な予感がする。いや、もうすでに遅いのか。

「当分の間、よろしくね。一夏くん」

色々と気になることはある。さっきのオータムのこと、謎の爆発。でも、さすがに疲れた。だから僕は考えるのを止めた。

### 第三十五話 終

### 第三十五話 黒い感情（後書き）

お休みなさいZZZZZZZZZZ

じゃなかった。実は新しい作品を書こうと思ってます。舞台はIS。オリジナル主人公を一夏達と関わらせていきたいと思います。ただオリジナル主人公が外見上、丁寧な口調でないと違和感があるので困ってます。この作品と被ってしまうのでどうしようかと。しかし設定上性格が悪い？ほうがいいのかと迷ってしまい書こうかどうか迷ってます。できれば意見をお願いします。できればヒロインのほうもm（）（）m

忍び寄る影（五巻終了）（前書き）

二作目をはじめてみました。でも正直に言つとできは最悪。よろしければ評価をお願いします。そしてこれからもISS「白を纏いし Heaven Sword」をよろしくお願いします

m ( ) m

では本編へどっぞどっぞ！

忍び寄る影（五巻終了）

（くそっ！くそっ、くそっ！）

オータムはIS学園の敷地を走りながら、頭の中で何度も毒づいていた。

（なにが簡単な仕事だ！ふざけやがって、あのガキ！）

痛む顔を押さえながら今日のことを思い出すと腹が立ってくる。

（大体あのガキは組織に来たときから気に入らなかつたんだ……  
……！）

いつでも他人を見下したような目をした少女を思い出す。自らの能力の高さと相手の能力の低さを確信している、そんな少女の目。それは《リムーバー》と今回の潜入計画を用意した本人でもある。

（くそっ。作戦は失敗。しかもあのやろうは人を殴なぐったと思えば私を助ける。あいつもバカにしてんのかよ！もういい、あのガキは殺す……！この私によくも泥を塗ってくれたな！）

忌々（いまいま）しさに奥歯を噛みしめていると、やっと自分がI  
S学園から離れた場所にある公園までたどり着いたのだと気づいた。

（クソ……喉が渴いたぜ、どこかに水は……）

左右に視線を動かすと、公園の水飲み場が目についた。ひとまずそ  
こで構わないと思い、オータムは早足で向かう。

（あのガキは絶対に殺す！スコールが何を言おうと知ったことか！）

蛇口をひねり、縦に水が吹き上がった。それを獣のように飛びつい  
て飲みながら、どうやって新参の少女を殺すかを考えていく。

（じっくりと、じっくりとだ……ひひ）

ふと、それまで喉を潤していた水が止まっていることに気づく。

（なんだ？壊れてんのか……？）

そう思って蛇口を見ると、あり得ないことが起きていた。縦に伸び

る水の飛沫。それが、空中で遮られている。

「なっ!?!」

ばしゃばしゃと透明の板に弾かれていたように暴れる水は、オータムの服を際限なく濡らしているが、そんなことはもう気にならなかった。

(こいつは………AICか!)

すぐさま飛び退くようにその場を離れるが、着地しようとした足をAICによって固定されてしまう。そのまま慣性に従って、オータムは背中から倒れた。

「クソッ!ドイツのISだな!?!」

「その通りだ、『亡国企業』」

ラウラの静かな声が響く。それほどもまでも続く氷河のごとく冷たく威圧感を放っていた。

「動くな。すでに狙撃手がお前の眉間に狙いを定めている」

「くっ………!」

「洗いざらい吐いてもらおうか。貴様らの組織について」



軍人でもあるラウラは、かねてからその秘密結社の情報をわずかに持っていた。たとえその情報量が一夏より少ないとしてもだ。そして今回の襲撃。そして、ISによる戦闘。それらのことから、組織が相当に巨大なものだと理解していた。

「お前のISはアメリカの第二世代型だな。どこで手に入れた。言葉」

「言っわけねーだろうが！」

ISコアを製造する技術は一般的には公開されていない。それはつまり、どこかから奪ったものだとということに他ならない。束や一夏が新しく造ったというなら別である。そして、国防に関する重大な過失であるがため、どの国も盗まれたことを公にはできない。ISの強奪計画を企て、それを実行するだけの組織力は、決して小さくないということだった。

「よかるう。私は尋問の心得も多少はある。長い付き合いになりそうだな」

そう言ってラウラが接近しようとした瞬間、プライベート・チャンネルからセシリアの声が響いた。

『離れて！一機来ますわ！』

「何・・・・・・・・・・？」

ラウラがセンサー域を拡大した瞬間に、その右肩がレーザーで打ち抜かれた。

「ぐうつ！？」

急ぎ、ラウラは左目の眼帯を外してハイパーセンサー補助システム『ヴォーダン・オージエ』を発動させる。しかし、続けて撃ち込んできた二発のレーザーを避けるので精一杯だった。

『ラウラさん！下がって！』

セシリアは即座に弾道から飛来位置を割り出し、高速接近する機体へと標準を向ける。

『そんな・・・・・・・・まさか！？』

ロングレンジ用ズームに映し出されたのは、セシリアが見たことのある機体だった。

B-T二号機『サイレント・ゼフィリス』。

シールド・ビットを試験的に搭載した機体であり、その基礎データには一号機であるセシリアのブルー・ティアーズが使われている。機体の色はブルー・ティアーズよりも濃い青色だった。

「何をしている！？セシリア、撃て！」

「くっ……！！」

すぐさまレーザーライフルによる狙撃を試みるが、シールドビットを展開されて、有巧打を与えられない。それならとビットを射出するが、それらは逆に狙撃によって墮おとされた。

（超高速起動下の精密射撃！？それも、こんな連射速度だなんて！）

自分を上回る技量に驚愕おどろするセシリア。しかも、敵機からは通常の射撃ビットが飛来し、セシリアを超える同時六機制御せいぎよで窮地に立たされた。

「それならっ！」

ミサイル・ビットを自身の真下へと射出、空中で制御動作を取らせて資格から襲撃者へと向かわせる。必中を確信したセシリアだったが、次の瞬間信じられないことが起こった。

「なっ・・・・・・・・！！？」

ビームが弧を描いて曲がり、ミサイル・ビットを打ち落とした。

(これはっ・・・・・・・・BT兵器の高稼働時に可能な偏光制御射撃  
！？そんなこと )

信じがたい光景を前に、セシリアは棒立ちになってしまう。

(現在の操縦者ではわたくしがBT適性の最高値のはず。それが、  
どうして！？)

「何をしている！回避行動を取れ！」

「っ ！？」

ラウラがセシリアを突き飛ばし、かわりにビットのレーザー射撃を  
浴びる。シュバルツェア・レーゲンの装甲が飛散するのを見て、や  
っとセシリアは我に返るが、その頃には襲撃者がオータムの側にま  
で移動していた。

「迎えに来たぞ、オータム。それにしてもひどい顔だな」

「うるせえ！私を呼び捨てにするんじゃない！」

飛来した襲撃者はラウラに小型レーザー・ガトリングを浴びせて、オータムへの再接近を許さない。それと同時にピンク色に光るナイフでAICを切り裂き、オータムの自由を確保した。

「この程度か、ドイツの遺伝子強化素体<sup>アドヴァンスト</sup>」

襲撃者の顔はバイザー型ハイパーセンサーに覆<sup>お</sup>われていて、口元しか見えない。バイザーの形は違うが、キュアンティスを使用している一夏も同じだ。しかし、その顔が嘲笑<sup>ちやうしやう</sup>の笑みに歪<sup>ゆが</sup>むのを、ラウラは見た。

「貴様……なぜそれを知っている」

「言う必要はない。ではな」

オータムを掴<sup>つか</sup>み、そのまま飛来した方向へと離脱していく。しばらくの間、ラウラとセシリアを足止めしていたビットは、用は済んだとばかりに自爆する。

「ラウラさん、すぐに学園に連絡を！わたくしは追跡します！」

「やめる！もう追っても無駄だ。それに、追いついたところで今の我々では敗北は目に見えている」

「……………」

悔しさに唇を噛みしめ、セシリアは敵が飛翔していった方向を睨む。  
一切の証拠を残すことなく、風のように去った謎の襲撃者。ラウラ、  
そしてセシリアも、いずれ訪れるであろう嵐の予感を感じ取って  
いた。

翌日。

「みなさん、先日の学園祭ではお疲れ様でした。多少のアクシデン  
トはありましたが無事に終わって何よりです。それではこれより、  
投票結果の発表をはじめます」

楯無が一夏と同じ部屋に泊まることが決まった昨日。とりあえず、  
一夏は生徒会に入るにつれて仕事について色々と説明してもらって  
いた。現在は体育館。織斑争奪戦の結果発表である。集まっている  
全校生徒がつばを飲む音が聞こえた気がするが、事前に説明された  
一夏にはすでに結果が見えている。

「一位は、生徒会主催『リル鬼』っこ『!』」

「……………え?」「……………」

ぼかんと全校生徒が口を開く。一夏を除いて。その数秒後に我に返った女子一同からブーイングが起きた。

「卑怯！ずるい！イカサマ！」

「なんで生徒会なのよ！おかしいわよ！」

「私たちががんばったのに！」

そんな苦情をまあまあと手で制し、楯無は続けた。

「鬼ごつこの参加条件は『生徒会に投票すること』よ。でも、私たちは別に参加を強制したわけではないのだから、立派に民意と言えるわね」

そう。楯無が一夏に説明したのはこのことである。これからのことも。だから一夏は驚かない。

(用意周到というか、なんとというか。さすが楯無さんと言ったところなのかなあ……)

しかし、言ってみればそれだけ多くの女子が鬼ごつこに参加していたということである。『鬼』で溢れた学校を思い出して寒気がした。その女子のブーイングは楯無さんの説明では収まらない。

「はい、落ち着いて。生徒会メンバーになった織斑一夏くんは適宜各部活動に派遣はけんします。男子なので大会参加は無理ですが、マネージャーや庶務しよむをやらせてあげてください。それらの申請書は、生徒会に提出するようにお願いします」

「え？・・・ま、まあ、それなら・・・」

「し、仕方ないわね。納得してあげましょうか」

「うちの部活勝ち目なかったし、これはタナボタね！」

そんな声が周囲から聞こえる。そしてすぐさま、各部活動のアピール合戦がはじまった。

「じゃあまずはサッカー部に来てもらわないと！」

「何言ってるのよ、ラクロス部の方が先なんだから！」

「料理部もいますよ〜」

「はい！はいはい！茶道部はここです！」

「剣道部は、まあ二番に来てくれればいいですよ？」

「柔道部！寝技、あるよ！」

「それでは、特に問題もないようなので、織斑一夏くんは生徒会へ所属、以後は私の指示に従ってもらいます」

楯無がそう締めると、生徒たちからは拍手と口笛がわき起こった。

「これから・・・・・・忙しくなるのかな・・・・・・」

一人ぼそりと、空を見上げながら一夏はつぶやいた。



「てめえ！どついつことだよ！？」

高層マンションの最上階。豪華な飾りで溢れかえっているその部屋で、オータムは少女に詰め寄っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんとか言え！このガキが！」

少女を壁に叩き付け、それでもまだ怒りを収めるには足りないオータムは腰からナイフを抜く。

「その顔、切り刻んでやる・・・・・・・・！」

「やめなさい、オータム。うるさいわよ」

バスルームから出てきたのは美しい容貌の女性だった。薄い金色の髪が、明かりに照らされてキラキラと透明の光を放つ。

「スコール・・・・・・・・！」

「怒ってばかりいると老けるわよ。落ち着きなさい、オータム」

スコールと呼ばれた女性はバスローブのままソファーへと腰を下ろす。そんなスコールを、オータムは悔しそうに見つめた。

「お前は……知っていたのか？こうなるということをして」

「いいえ。でも予感はしてたわ」

「だったらせめて忠告ぐらいしてくれてもいいだろ！私は……  
・私は、お前の！」

「わかってるわ、オータム。ちゃんとわかってる。あなたは私の大切な恋人」

「わ、わかってるなら……いい」

さっきまでの怒りはスコールの笑みにかき消され、オータムは頬ほおを赤らめてうつむく。それはまるで初恋の相手にした少女のようにあどけなく、そんなかわいらしい様子にスコールは嬉うれしくなってまた微笑ほほんだ。

「おいでなさい、オータム。包帯を取り替えてあげる。まだ顔が痛むでしょう？」

「あ、ああ……」

そんなふたりのやりとりを、少女は退屈そうに眺める。

(くだらない。くだらないな……)

馴れ合いも情も否定する少女は、冷めた瞳のままで部屋を出て行く。

「エム、ISを整備に回しておいて頂戴。『サイレント・ゼフィールス』はまだ奪って間もない機体だから、再度調整が必要よ」  
「わかった」

エムと呼ばれた少女は短く返事だけをして、ドアを閉じた。そして通路で一人、胸のロケットを握り締めて瞼を閉じる。

(もう少し……もう少しだ……)

ずっと、待っていた。焦がれた時は、もうすぐ側まで来ている。

(これで私の復讐がはじめられる……。そう、やっと)

やっと、会うことができる。

(……織斑千冬……)

人知れず、少女の口元は邪悪に歪んだ。

生徒会室。

「織斑一夏くん、生徒会副会長着任（仮）おめでとう！」

「おめでとう？」

「おめでとう、これからよろしく、でいいのかしら」

楯無、本音、虚の言葉のあと、ぱぱーんと盛大にクラッカーがなる。

「あまり来れないかもしれませんが、頑張ります」

一夏は三人に一礼。一夏の放課後は忙しい。練武館に行つて天剣の訓練を受けることもあれば突然テレシアに呼ばれることもある。しかし空いている時間があればなるべく来るといった条件で生徒会に入る、ということだった。

（忙しいんでしょ？）

楯無は一夏の事情、といつても放課後はあまり学園にいないという

ことだが、あらかじめふたりに説明してある。

「それで、僕は時間があれば部活動へ？」

「そうですね。派遣先の部活動が決まり次第そちらに行ってください」

「わかりました」

「ところで……ひとつ、いいですか？」

「なんですか？」

虚さんにしては珍しく齒切れが悪い。言いくそうにしながらも小声で訊いてきた。

「学園祭の時にいたお友達は、何というお名前ですか？」

「え？あ、弾だんですよ。五反田ごたんだ弾です。市立の高校に通ってます」

「そ、そう……ですか。年は織斑おとづらくんと同じでね？」

「はい、そうです」

「……二つも年下……」

「？何か言いましたか？」

「なんでもありません。ありがとうございました」

そう言つて虚さんは丁寧ていねいなお辞儀そとぎをする。頬ほが少し赤く見えたのは気のせいかな。

「さあ！今日は生徒会メンバーが揃そろった記念と一夏なつくんの副会長就任しゅいにん（仮）を祝つてケーキを焼いてきたから、みんなでいただきます

よう

「わ。さんせ」

「では、お茶を淹いれましょう」

「ええ、お願い。本音ほんねちゃんは取り皿をお願いね」

「はーい」

作業分担は基本らしく、三人は息のあった連携で準備を進めていく。それから並べられたショートケーキはおいしそうだった。

「それでは……乾杯かんぱい！」

「かんぱーい」

「乾杯」

「乾杯」

一夏は一口ケーキを食べる。

(うん、クリームがしつこくない)

次にティーカップに淹いれてあるお茶を飲むとする。ふと、一夏は天井の隅すみに視線をやる。

「どうしたの、おりむ？」

「あ、いえ……何でもありません」

一夏はティーカップに口をつける。虚が淹れた紅茶はおいしかった。しかし……

(気のせいだったのかな?)

急に感じた視線。一夏は後ろ髪を引かれるような気持ちだったが、生徒会と食事を楽しんだ。

(気づかれたでしょうか……)

オーロラフィールドの中。  
監視用のナノマシンが投影するディスプレイに写る少年、一夏を見ながらヴァティは思った。

(しかし、こちらからナノマシンを送れるということとは……  
つまり)

ヴァティは歩き出す。その先にはオーロラが渦巻いている。そこは篠ノ之束しののたはねがオーロラフィールドに入るときの入り口。ヴァティは試しに自分の腕をその渦に伸ばす。しかし……。

(.....まだ.....無理ですか)

まるで見えない壁に阻はまれているようにヴァティの手は宙で止まっていた。しばらく触れているとヴァティは一つのナノマシンが渦の向こうから来るのを感知した。

(.....こちらの干渉かんじょうを受け付けられない。ということとは.....)

一つのナノマシンがヴァティの近くまで飛んてくる。そのナノマシンからディスプレイが写る。ちょうど人の顔ぐらいのサイズだ。

『やあ、ヴァーチー!』

写っていたのは束だった。その顔がドアップで映っている。おそろく画面に顔をくっつけるような勢いでしゃべっているのだとヴァティは思った。

「お久しぶりです、束」

『うんうん!久しぶりだね!それよりそれより!どう?オーロラフィールドの中でも自由自在に動けるナノマシンを開発したのだ!』  
「すごいですね」



オーロラフィールドを形成するオーロラ粒子は人の思念に反応する。そのため機械に付着した人の思念に反応し、その機械に対して変化を促す<sup>うなが</sup>。だから機械を送り込むことはできない。そんな危ないところに人間が何度も行き来<sup>き</sup>したらどうなるか。しかしヴァティのようにナノマシンに自動生成プログラムを与えていれば人の思念は付かない。だからヴァティは問題ない。

『まあ、四年もかかったけど。ニヤハハハハハハ』

しかしその中でも自由に活動する機械を造ることに束は成功した。その所有権は束にあるためヴァティの干渉は受けなかった。

『でも、ヴァーチーちゃん』

「なんですか？」

『どうしてIS学園を襲撃したの？』

「・・・・・・・・・・」

一夏と楯無を襲った突然の爆発。その正体はヴァティのナノマシンだった。束は誰よりも速くそのことに気がついていた。

『でも謝らなきゃいけないのは私の方かもしれないね。こんなに時間をかけてもまだヴァーチーちゃんをその中から出して上げられないんだもんね。ごめんね』

四年。ヴァティは機械とはいえその期間は長すぎた。二つの世界が  
どれだけ近づいているかもわからない。

「束。一つ質問があります」

「うん？何なにか？」

「あの二体は送れますか？」

「……」

あの二体。ナノセルロイド・マザーIEEE・ドウリンダナとベヒモ  
トである。さすがに二体同時に来られてはまずいと束は思った。

「さささささ、さあ？ど、どうなのかな？」

「……送ります」

「待って！ヴァーチーちゃ

」

ボン！

束のナノマシンが爆発した。オーロラ粒子に対する耐性に問題があ  
ったわけではない。ヴァティがそのナノマシンに干渉し続けること  
により所有権を奪った。

「行きなさい」

無数のナノマシンがその見えない壁を通り抜けようとその渦に向かう。ゆっくりだがナノマシンが見えない壁を通り抜けていくように一夏たちがいるIS学園に向かっていく。

第三十六話 終

忍び寄る影（五巻終了）（後書き）

え、真夜中に更新すいません。なかなか文面が思いつかずm（

ー）m

今度はテレシア編、鈴です。ではまた次回で！

テレシアにて 鳳鈴音（前書き）

テレシアと言ってもホテルじゃないです、今回は。駄文ですいません。鈴と箒の話が全く思いつかないんです。ネタがないと言っかなんと言っか・・・orz。本当に申し訳ありませんm（）（）m

テレシアにて 鳳鈴音

ある夏の土曜日、とある寮室。

「ついに……ついにゲットしたわあああああ！」

ここは鳳鈴音ファン・リンインの寮室。鈴は雄叫びおたけを上げていた。

「あの高級ホテル、テレシアのオーナーが直営する遊園地で樂園とも言われている『ヘブンズゲート』！評判はすさまじいの一言！これはもう、行くしかないわ！」

鈴はそのチケットを天高く掲かげる。その手にあるのは二枚のチケットである。当然、誘う人は決まっている。一夏である。

「えへ……えへへへへへ」

にへへと鈴の顔がとろけるように幸せに歪ゆがむ。ルームメイトのティナはそれをあきれた表情で見ている。

「楽しそうね、鈴」

しかし鈴には聞こえていない。鈴は一夏と遊園地に行く自分を想像してデートの二文字が浮かび上がる。

「よし！早速連絡よ！」

携帯で一夏をコール。しばらくした後に一夏の声が聞こえた。

場所はテレシア。

土曜日ということで一夏は朝から働いていた。今は昼で桜木からもらった弁当を食べている。

(うーん、相変わらずおいしい。まだ追いつける気がしない)

違うのは味付けなのかと考えていると、不意にポケットの携帯が鳴った。一夏は携帯の画面を見て電話をかけてきたのが鈴だと確認する。

「はい、織斑です」

一応、誰であろうと挨拶あいさつはする一夏であった。

『あ、一夏？あたしだけど』

「どうしたんですか、鈴さん」

『あ、あのさ』

鈴は一度、深く深呼吸をする。一夏はそれを聞いて首を傾かしげながら鈴の言葉を待つ。

『明日、遊園地に行かない？』

「遊園地……ですか？」

何をあんなにためらったのだろつと思いながら一夏は訊きなおす。

『うん。その……できれば明日が……いいんだけど』

ダメ？と気弱な声で鈴は一夏に問う。その一夏は行くことに抵抗はないが、困っていた。

(うーん、どうしたのか……)



明日というのは日曜日。普通の高校生ならどこかへ出かけてもおかしくない。しかし一夏はテレシアで働いている。高校生活で忙しく、あまりテレシアに行けないというのに、土日を休むというのは気が引ける。何しろ雇われている身だからだ。悩むこと数分、不意に後ろから声をかけられる。

「どうかしたのかい、一夏くん」

声をかけてきたのは桜木だった。あの相談以来、桜木は織斑くんではなく一夏くんと呼ぶようになった。今では桜木と美雨に対して一夏は仕事以外では『四ノ宮京夜』としてではなく『織斑一夏』として話している。

「いえ、明日遊園地にでも行かないかと誘われまして」

「行かないのかい？」

「明日は仕事ですよ、僕」

「まあ行つてきなさいな。マスターには私の方から言っておくから優しい笑顔を浮かべて桜木は一夏に行くように促す。一夏はしばらく考えた後に、自分からも言っておこうということで行くことにした。

「鈴さん」

「ど、ど、どなのよ……」  
「明日、行きましようか？」

パアアアツと鈴の表情が輝く。一夏も鈴の声色からそれを察<sup>き</sup>している。

「絶対よ！いきなりキャンセルとか言い出したら張り倒すわよ！？」  
「大丈夫です。ちゃんと行きます」  
「言ったわね？よし、よし！それじゃあ、またあとで連絡するわ」

鈴は一方的に電話を切ってしまった。一夏はそれを確認して携帯をしまう。

「いいんですか、桜木さん。本当に」  
「高校生だからねえ、少しは楽しまない」と

それは理由になるのだろうかと考えながら一夏は桜木と一緒にマスターのところへ許可を取りに行った。

翌日。

「  
」  
テレシアのすぐ近くにある『ヘブンスゲート』。その前で鈴は鼻歌を歌いながら一夏を待っていた。

（まだかな）……………）

指定した待ち合わせの時間はまだである。鈴は何度も自分の姿をチエックする。厳選してきた私服。その髪型を。

（お、おかしくないわよね。そうよ。大丈夫……大丈夫……）

嫌でもその鼓動は速くなる。一夏がどう思っているにしろ、鈴にとってはデートである。その鼓動を一つ一つが心地よい。

「お待たせしました」  
「！」

ドクンと心臓が跳ねる。視線の先には一夏がいた。

「お、遅い！」  
「すみません」

しかし待ち合わせの時間よりも大分早く来た一夏に喜びを隠せない。おそらく締めまりのない緩みきつた顔をしている自分の見られないように、鈴は一夏に背を向けて強引に一夏の手を取って歩きだす。

「ほら、さっさと行くわよ」

これからの展開を想像しながら心を躍らせた。

( (すごい・・・・・・・・) )

一夏と鈴はチケットをスタッフに見せて遊園地に入場した。最初の感想がすごい一言だった。

( 規模が違いすぎる・・・・・・・・どこにこんな敷地があるんだろう )

テレシア直営と聞いた一夏は一応、覚悟していたつもりだったがそのアトラクションの数に驚いた。何でもある。しかしそれでいて窮

屈な感じがしない。それだけ広いということである。

(びっくりしてる場合じゃないね)

呆然<sup>ぼうぜん</sup>と立ち尽くしている鈴を揺すって一夏は鈴を現実に戻す。

「……………はっ!?!」

「どこか行きたいところはありますか?鈴さん」

「そ、そうね!せっかく来たんだから楽しまないとね!」

鈴は歩いていく。しかし動作がどうもぎこちないものになってしま  
う。こうして楽しい時間が始まった。

ジェットコースター

人が少なかったので乗ってしまおうということとで最初に乗ったのが  
ジェットコースターとなった。

「楽しみよね」

楽しそうにしている鈴さんを見て僕は不安になった。

「あの、鈴さん？本当に乗るんですか？」

「何を今更言つてんのよ？あ、もしかして怖いのか？」

「いや、そついうわけじゃないんですけどね」

鈴はその時、ちゃんと見ていなかったのか乗って後悔することになる。

三分後。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「鈴さん？大丈夫ですか？」

鈴は膝に手を乗せてうつむいている。一夏はその鈴の背中をさすっている。ジェットコースターはクルリクルリと回転した。一夏は平気だったが、鈴はリバーシそうな気分になり、今はこらえている。一夏の前で吐くわけにはいかない。少し休んでから次のアトラクションに進んだ。

お化け屋敷

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一夏と鈴が向かったのはお化け屋敷だった。しかし道中でタンカで運ばれている人が何人もいた。その全員が白目だった。

「どれだけ怖いんでしょうね」

「まあ、行けばわかるんじゃない？」

とりあえず歩いていく。そして見たのは朝だというのそこだけが真夜中と感ぜられるほど霧囲気のある屋敷、そう城のような屋敷だった。念のため注意事項が看板に書かれているので見てみる。

『体の弱いお客様、心の弱いお客様はどうぞご遠慮ください』

鈴さんとお化け屋敷の出口と思われるところを見る。一人の女性がタンカに運ばれていた。そしてまた一人、また一人、次々に運ばれていく。

「どうします？」

「せっかく来たんだから入るわよ」

僕らはお化け屋敷に入った。

「クオリティ高いですね」

「え、ええ、そうね・・・」





「待つて！一夏！どこにも行かないでええええ！」

「すぐに終わらせてきますから。そこで少しだけ待つててください」

心に響くような澄ん（す）だ声で鈴さんを安心させる。そして従業員用のドアの前に立つ。ドアノブの上にカードの差込口がある。僕はウエストポーチからテレシアのメンバーズカードを取り出してその差込口にカードを入れる。いわゆるカードロック式だ。ピツという音と共にドアが開いた。

（さてと・・・こっちなかな？）

ドアの向こうには狭い通路が右に見えた。鈴さんのいる方向を見ながら歩いているうちにドアを見つけ。そこに書かれている『Staff only』と書かれているドアを開けて中を確認した。そこにいたのはテレシアのSPだった。一夏の予想通りである。

「お疲れ様です」

一夏は一礼してSPたちを見る。SPたちはもはや決まっているのか一夏に敬礼した。

「そろそろ手を離してしてもらえますか？」

なるべくSPたちだけに聞こえるように小声で頼む。すると上に手を伸ばしていたSPたちが手を引く。上では鈴が開放されていることだろう。

「ありがとうございます」

その部屋を後にして一夏は鈴がいる場所に戻る。

「お待たせしました」

「あたしを置いて行くじゃないわよ！バカ！」

「すみません」

このあと鈴さんが一通り文句を言って落ち着いた後に先へ進んだ。途中、こんにやくが飛んできて（どこからか発射されて）、ちょっと古いなあと思ったり。三階に着いたところで次に出てきたのは首なしナイトだった。少し距離があるけど、その手に自分の首を持っているのがわかった。

『あああああああああ！』

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

鈴さんがまた悲鳴を上げている。正直に言つと引っ張られている腕

が痛い。そして首なしナイトの方を見ると振りかぶっていた。ナイトの頭が投げられた。僕はそれを片手でキャッチしてその頭を見る。

『あああああああああああ！』

(よくできてるなあ)

手にした首だけで動いているのを見てびっくりした。本当によくできてると思う。僕は何を思ったのか、その首を鈴さんに近づける。

「あたしにそれを近づけるなああああ！早く持ち主に返しなさいよおおおおお！」

言われたとおりに振りかぶって、その頭を首なしナイトに投げる。首なしナイトはそれをキャッチして一礼してから敬礼。

(ああ、あの人もSPか……)

とりあえず僕も一礼してから先に進んだところで真っ赤な矢印が下を向いていた。

「？」

「下って、どっどこいよ」

バタン！

「！！！」

「！？」

気づくと床がドアのように開いて僕らは落下する。

「なんでこうなるのよおおおおおおお！？」

落ちている間もスプラッタなお化けなど壁から出てくる。それを見ながら落ちていく。その先にあったのは、なぜか巨大なランプリオン。僕らは落ちたところに戻りそうな勢いで跳ねた。元の高さまでは戻れなかったけど、上を見たらそれはそれは大きな蜘蛛くもがいた。僕らの五倍くらいの大きさだ。とてもリアルだ。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

鈴さんの悲鳴が聞こえる。そのまま鈴さんは失神してしまった。僕はこの瞬間、理解した。なぜこの遊園地が『ヘブンズゲート』と呼ばれているのか。確かに天国のような場所だ。でもこのお化け屋敷のせいで天国の扉を見ってしまう人がいるということだ。そのあと、気を失った鈴さんを宙で抱かかえて僕はお化け屋敷を出た。

「うくん？」

「大丈夫ですか、鈴さん」

僕はとりあえず鈴さんをベンチに寝かせて起きるまで待っていた。

「ふう、危うく川を渡るところだったわ」

起きた鈴さんは危ないことを言った。冗談だと信じたけど、どうやら本当らしかった。

「とりあえず何か食べますか？そろそろいい時間だと思いますよ」

「そうね。あ……」

「どうしました？」

「弁当、作るうと思ってたのに」

一夏と一緒に遊園地に行くと思うと他の事がすっかり抜け落ちてしまった鈴だった。

「ならここで食べますか？」

「あ、でもお金は？」

「僕が払いますから」

ということでレストランに入った。人が多く、どうやら食券を買うタイプらしい。その食券を渡しに行こうとして、僕は止まった。食券を受け取り、料理する人が……桜木さんだった。

「はいはい。ラーメン一つに、ナポリタンが一つだねえ」

桜木さんはお客が僕だというのに何の反応もせず、淡々と仕事をこなしていく。五分もしないうちにおいしそうなラーメンとナポリタンが大きいトレーの上に乗せられた。

「お待ちどうぞさまです」

「あの、桜木さん？」

「熱いうちにどうぞ〜」

間延びした声で桜木さんは厨房キッチンに戻っていく。どつやらどつやらと言うつもりはないらしい。

（まあ、待たせるのも悪いか）

そして鈴さんと昼食を済ませた。

楽しい時間はすぐに終わるといっけど、本当らしい。もう夕暮れ時だ。

「ねえ、一夏。ちょっとあれ乗ってみてよ」

鈴さんが指差す方を見る。その先にあつたのはメリーゴーランドだったけど、あれに一人で乗るのはさすがに恥ずかしい。何より鈴さんの意図がわからない。

「それじゃあ、鈴さんも乗ってください」

「い、いやよ！高校生にもなって！」

「僕だつてあれに一人で乗るのは恥ずかしいです」

僕は鈴さんの手を取って、メリーゴーランドまで連れて行く。

「どうです、鈴さん」

「高校生にもなってこれで楽しいとか言う奴の気が知れないわ」

チラリと一夏を見る。一夏が乗っているのは白馬で（鈴が乗れと言った）、言葉通り白馬の王子に見えた。夕暮れのせいなのか、さら

に輝いて見える。

「ねえ、誰？あの人」

「やだあ、かつこいい」

「背、高いよねえ」

「モデルかなあ」

「私もあんな彼氏ほしい」

最後の言葉を聞いて得意気になる鈴だった。

観覧車

空がもう暗い。閉園時間も近くなって最後に遊園地を見下ろそうと  
いうことになった。ライトアップされた遊園地はまるで光の海のよ  
うだった。

「綺麗きれいですね」

「そ、そうね」

狭せまいゴンドラの中で二人きり。鈴の心臓はドクンドクンと大きく鼓  
動する。

「楽しかったですか？」

「あ、あんたはどうなのよ」



「僕は楽しかったです」

「そう、よかった。あたしも楽しかった」

鈴は一夏の中学時代を見て一つ思ったことがあった。ある日を境にさかい一夏にはどこか暗い雰囲気があり、余裕がないことに。その時の一夏は顔は笑顔であるものの、心が非常に不安定ではないのか。そう思う時期が鈴にはあった。そして今ならここでその理由が訊けるかもしれない。今なら自分が一番言いたいことを一夏に伝えられるかもしれない。

「一夏、あのさ」

「はい」

「中学の時、あんたに何があったの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一夏の表情が変わる。笑顔に少し陰りかげが見える。それは夜が暗いからというだけではないだろう。

「一夏、あたしはね・・・・・・・・あんたがあの時、何かがおかしいのは知ってた。まるで誰かを寄せ付けられないようにみんなと接せつしてた。あたしと弾にはなるべくいつも通りにしてたと思うけど。それでもやっぱり気になった」

一夏は鈴の言葉をじっと聞いている。ゴンドラが上へ昇のぼっていく。

「あたしはあなたに何があったか知りたい。たとえどんなことでも受け止める。だったあたしは……あたしは……!」

緊張で喉が渴く。その先を言うことを何か妨げている。不意にゴンドラの中でアナウンスが流れた。

ピンポンパンポーン

「本日は『ヘブンスゲート』にご来場頂き、誠にありがとうございます。本日のラストイベント、『天の川』をご覧ください」

ゴンドラの中が少し明るくなる。外には花火が打ち上げられていた。天高く打ち上げられ、一列に並べられた花火はまるで彦星と織姫星を、アルタイルとベガを隔てる天の川のように見えた。

「どうか………しましたか？」

笑顔を浮かべる一夏に鈴は何も言えなくなった。

「何でもないわ」

今は二人で花火を楽しもう。そう思った鈴だった。

帰り道。雨が降っている。

結局、鈴は一夏に何も訊かなかった。いい雰囲気壊してしまいたくなかったからだ。今は一夏が持ってきた傘の中に二人で入っている。

「昼に降らなくてよかったです」

「というか、なんでこんなに準備がいいのよ。朝の天気予報だと雨は降らないって言ってたのに」

「念のため持ってきたんですよ」

ふと、鈴は気づいた。傘を持っている一夏の肩が濡れていた。なるべく鈴が濡れないように一夏が鈴に傘を寄せているからだ。

(相変わらず……自分より他人ね)

鈴は一夏に腕を取り、自分の方に引き寄せる。

「どうしたんですか、鈴さん」

「あなたの肩、濡れてるから」

「僕は平気ですよ」

「前にも言ってた気がするわね、そんなこと」

「前にも?」

鈴は一夏に小学校の頃ころの話をした。

「ひどい雨……」

小学校の下駄箱げたばこの前で鈴はつぶやいた。外は台風が近いのか、激しい雨が降っていた。

「どうしたんだよ、鈴」

「ああ、一夏。実は傘を忘れちゃって」

この頃の一夏はまだテレシアで働いていなかった。そのため口調も今とは違う。

「なら、これを使えよ」

一夏は自分の傘を鈴に渡す。

「え？でもこれって一夏のじゃないの？」

「そうだけど、鈴が風邪でも引いたら大変だろ？」

「あんたはどうするのよ！」

「俺は平気だって。子供は風の子って言うだろ？」

そんなことを言いながら一夏はダッシュで外に出る。

「ちょっと！一夏、待ちなさいよー！」

「はは。風邪引くなよー、鈴」

雨の中、走り抜ける一夏の背中を、その傘を握り締めながら鈴は見えなくなるまでずっと見ていた。次の日、一夏が風邪を引いて欠席した。

「一夏のバカ……」

そうつぶやきながらも、鈴の顔は真っ赤だった。

「ありましたね、そんなことが」

「覚えてるの？」  
「ぼんやりとですけどね」

一夏は苦笑しながら恥ずかしそうにしている。おそらく風邪を引いたところまで覚えていると鈴は判断した。

「あの頃から無茶する奴だった」

「……すいません」

「いいわよ、でも」

鈴は一夏の温もりを確かめながら、叱るように言う。

「一人で抱え込むのだけはやめなさい」  
「善処します」

ゴスッ

鈴は一夏の足を思いつきり踏んだ。

「イタッ」  
「やめると誓いなさい」  
「は、は、は」

笑顔で鈴は学園に戻った。その思いを膨ふくららませて。

テレシアにて 凰鈴音

終

テレシアにて 鳳鈴音（後書き）

しばらくテスト勉強をするので更新できなくなります。テストなんてなくなればいいのに。ではまたいつか。



第三十七話 沈黙を破る鐘（六巻開始）（前書き）

いよいよ六巻です。さて、うまく文章になりません。困ったもんです。とりあえず、どっぴぞ。

### 第三十七話 沈黙を破る鐘（六巻開始）

北アメリカ大陸北西部、第十六国防戦略拠点。通称『地図にない基地』。本来ならば軍関係者であつても知られることのないそこに、今は銃声が響いていた。

「侵入者確認！6 Dエリアに至急応援求む！繰り返す、侵入者確認！6 Dエリアに至急応援求む！」

鳴り響くアサルトライフルの発射音。屈強な男たちの怒号と軍靴の合奏。それらはすべてたった一人の侵入者に向けられていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

鉄の通路を一人歩く少女。侵入者はたった一人の少女だった。その少女は男たちを笑いもせず、嘲りもせず、ただただ見下している。

「・・・・・・・・展開」

少女の澄んだ声が響くと同時に、その全身に光の輪が集まる。それらはすぐに物質構成を始め、数秒で少女の全身は鮮やかなブルーの装甲に包まれた。

「IS!?!」

「こ、こいつ、まさか報告書にあった組織の者か!?!」

IS 『サイレント・ゼフィルス』を身に纏まとった少女      エム  
は、その右腕だけで長大なライフルを構える。BTエネルギーと物  
理弾の両方が使用可能なその銃は『スターブレイカー星を砕く者』と言う。

「も、目的はなんだ!?!米軍にこれだけのことをしておいて、ただ  
で済むと思うなよ!」

特に返事を期待したわけではないが、エムはバイザー型ハイパーセ  
ンサーに顔が隠されると、意外なことに言葉を紡つむいだ。

「この基地に封印されているIS      『シルバリオ・ゴスペル銀の福音』をいただ  
く。」

次の瞬間、エムの放った凶弾に次々と兵士たちが倒れていく。しか  
しエムはそれが可能であるにもかかわらず、兵士たちを殺してはい  
なかった。もちろん使っているのは実弾だが、ギリギリ致命傷を免まぬが  
れるように狙ねらって撃っている。

(面倒だな……………。殺さないというのは)

しかし、このISを使う条件として組織の女幹部、スコールが出したのは『ISを使つての殺害はしないこと』だったため、エムとしては従わざるを得ない。従順　　というわけではない。エムの体には監視用ナノマシンが注入されており、もし命令違反を犯せば数秒で脳中枢を焼き切られる。これもまたスコールが出した条件だったが、エムはとりあえず従うことにした。

「ぐあっ！」

「ぎゃあっ！」

「くそっ！本部！本部！至急増援を請う！繰り返す！至急増援

がっ！」

やがて狙いを定めるのが面倒になってきたエムは、ふわりと空中に浮き、そのまま突進して敵をなぎ倒すという大雑把おおざっぱな行動に出た。視界に直接送られてくるマップを基に通路を曲がり、下り、進んでいった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ひときわ大きな通路。天井までは軽く五メートルはある。そこに着いて、エムは異変に気づく。

キイイイイイイイ

「!?!」

音と共にハイパーセンサーが奥の暗闇からISの存在を確認し、同時に36発のレーザーの反応を確認する。そのレーザーは羽のような形だった。

「ちっ………!!」

エムは瞬時に反応し、計六機のシールドビットを自分の目の前に射出、展開。前方から放たれたその羽の形をしたエネルギーの矢を防いでいく。しかし何発かがシールドビットの防御範囲をすり抜けエムの肩に、腕に、そして脚のアーマーに突き刺さり、爆ぜた。

「くそっ………!!」

爆発の衝撃で壁に叩き付けられる直前に、体を回転させてスラストを逆噴射する。しかし、その0.5の静止を、相手は見逃さなかった。相手はエムの頭上から迫る。エムはそれを避けてその場から退避する。見るとそこには銀の閃きがあった。踵落としをしたのか、地面がめり込んでいる。エムはその姿を確認し、驚愕する。

「『シルバリオ・ゴスベル』の銀の福音だど?」

「そうよ。私はナターシャ・ファイルス。国籍は米国。『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルのテストパイロット。と言っても、私の中では正式な操縦者だけだね」

自己紹介をしながらも、その砲撃が止むことはない。エムは六機のシールドビットによる防御では限界があると決め、シールドビットを射撃用に切り換える。六機のビットと《スターブレイカー》による射撃で応戦する。

「『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルは凍結処理されたと聞いはずだが」  
「表向きはね」

「どづいつことだ？」  
「それは内緒。なひしひこれはあの彼からの素敵すてきなプレゼントだから」  
「誰のことを言っている？」  
「それも教える気はないわ。それに、たとえ今は抜け殻ぬがらだとしても、あの子は誰にも渡わたさない！」

ナターシャの『銀の鐘』シルバー・ベルによる砲撃が激しさを増す。エムも負けじと超高速起動下の精密射撃で避けながらエネルギーの矢を相殺していく。その均衡はあるポイントで破られる。

「!？」

エムは自分の真下からISが接近していることに気づく。次の瞬間通路の床が轟音を立てて崩れ落ちた。

「引つ掛かったな、『ファントム・タスク亡国企業』！」

煙の中、出現した虎模様タイガー・ストライプのにISは、サイレント・ゼフィルスツカに掴み掛かかるうとする。突然の敵ISの出現にエムは距離を取った。

「アメリカの第三世代型IS『ファンゲ・クエイク』か」

「おう。そして国家代表イーリス・コーリングだ。まさか本当に来るとは思わなかったぜ？」

エムとイーリスが睨にらみ合う。その場に青と銀と虎模様という異質な光景が広がっていた。

「……イーリ」

「なんだ？」

「なんでそんなに楽しそうなの？」

「なんでって、今私はストレス発散用のサンドバックにありつけたからだ」

「……」

はあつとため息をつくナターシャにイーリスは首を傾かしげる。

「その機体もいただくとしよう」

言つと同時に、エムが逆手持ちのナイフで襲いかかる。

「おいおい、お前映画とか見たことないやつかよ。ヒーローが口上くちじょう述べてるときは出番待ちでぼつんと立ってるもんだろが……  
・よー！」

ガキンツ！と派手な音と火花を立てて、イーリスの拳こぶしがナイフをへし折る。根元から折られたそれは、高速回転しながら天井に突き刺さった。

「ナタル、手は出すなよ」

「はいはい。私は見るだけにするわ」

やれやれと思いながらナターシャは首を横に振る。エムはそれを冷たい瞳で見ている。

「……………」

「おい、言っておくが私はつえーぞ。殴殺おうちころされる覚悟はOKか？イギリスからパクったその機体、まだ実験機だろ。そんなんじゃ私にや勝てねーな」

自身も実験機である『フアング・クエイク』を駆るイーリスだった



が、その性能を見る限りでは『甲籠』と同じコンセプト、つまり『安定性と稼動効率』を重視したものだとわかる。

『エム、聞こえるわね』

ISのプライベート・チャンネルでスコールの声が響く。敵を前にしたエムは返事をしなかったが、スコールは問答無用で言葉が続けた。それこそまるで『お構いなしの雨』のように。

『状況はモニターしているわ。第三世代型IS二機を相手にあなたがどこまでできるかはわからないけど、下がりなさいね。せつかくの機体を失うわけにはいかないもの』

自分が負けるとは思っていない。しかし相手は二人とも腕利きのパイロットだ。すぐに決着が付くとは思えない。戦闘が長引き、他のISが応援に来ては面倒なことになる。

「……………了解」

そう判断したエムは、感情のない声で静かに返事をした。

「逃がすかよ！」

「ちよつと…！」

言うなり、イクニッション・ブリスト瞬時加速でエムに迫るイーリス。それを追うナターシャ。同時にエムはスラスタ―全てを前面に向け、後退の瞬時加速を行った。

「器用なやつだぜ」

「感心してる場合？」

感心したように言うイーリスだが、そこに余裕はない。なにせ、エムは後退の瞬時加速を行いながら、高速射撃によってひたすらイーリスを狙い<sup>ねら</sup>続けていた。BTエネルギーによる高速移動狙撃、それと同時に複雑な地下基地の通路を迷い無く最高速で後退していくエム。ナターシャはエムとイーリスを見失わないように二人のあとに続いていた。

「待ちやがれ！」

イーリスは、追いながらも常に自分の関節を狙い撃ってくるエネルギー・ショットを回避しなくてはならなかった。同時に、その流れ弾が<sup>だま</sup>ナターシャに迫りそれをかわしていく。そのため、距離は次第に開いていき、地上まであと一〇〇メートル切った時には、すでに五〇メートル以上離れていた。

（まずい！ここで勝負をかけなけりゃ逃がしちまう！）

スラスタ四機による個別連続瞬間加速を発動させるため、意識を集中する。成功率は四〇パーセントと心もとない数字ではあるが、どのみち今使わなければ意味は無い。

（行くぜ！）

イーリスのアクションに気づいたエムは、すぐさまビットを放出して連続射撃の火力を上げる。ナターシャはイーリスが無茶をするのだと判断し、その言葉を紡ぐ。

「リミッター解除。コード（シグマ）起動。瞬間第二次形態移行、発動！」

Limit break  
Code . . . . . accepted  
Flash Second Shift . . . . . active  
system . . . . . on

ナターシャの瞳に文字が映る。ナターシャの声に反応して福音が青い雷を纏い、その光が球状に輝いて姿を変えていく。頭部の『銀の鐘』がパージする。そして天使のようなエネルギーの翼が生える。同時に胸部から、腹部から、背部から、装甲がまるで卵の殻のよう

にひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる。その姿は間違いなく、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラに苦戦を強いだ福音の第二次形態移行だつた。そして福音から システムにより爆発的なエネルギーがあふれる。

一夏が作った システムには三種類のタイプがある。一つは永久的にエネルギーの供給を行う一夏が使っているタイプ。一つは対象のエネルギーが尽きた時に、少し時間をかけて一度だけエネルギーを全回復するタイプ。最後は福音にプログラムされたものである。一定時間の間、爆発的にエネルギーを増幅させるタイプだ。その膨大なエネルギーが福音の一次的な第二次形態移行を可能にしている。しかし制限時間は三分。これは福音がその膨大なエネルギーに耐え切れないからだ。三分後、福音は強制解除され元に戻る。

ナターシャは第二次形態移行した福音でそのエネルギーを利用し、セカンド・シフト両手両足の計四カ所による同時瞬時加速を使い、マルチ・イグニッション・ブースト個別連続瞬時加速を發動しているイリスに追いつこうとする。

「うらあああああつー！」

イリスが叫ぶ。もう弾を喰らうのはお構いなしとばかりに、イリスは速度を上げていく。アーマーが破損し、シールドエネルギーが削られていくが、それでもイリスは止まらない。距離を詰め、その腕を伸ばす。確実に捕らえられる。そう思った瞬間、イリスの腕はシールドビットのエネルギー・アンブレラに阻まれた。しかも高性能爆薬による自爆で攻撃しようとしている。

「!?!」

しかそのビットが爆発する寸前でイーリスは天使のような翼に包まれようとしていた。イーリスは後ろを振り向くとそこには福音を纏ったナターシャがいた。翼は二人を包み込み、そのエネルギーの翼でできた球体に閉じ込める。その球体はシールドビットの爆発から二人を守った。

「ナタル！お前そいつは……!!」

はっと気づいてイーリスは自分が結局エムを取り逃がした現実に気づく。エネルギーの翼から解放され、太陽の光を見た時には、もう遙か雲の向こう側へと消えていくサイレント・ゼフィルスの後ろ姿だけが視覚補足拡大映像に映し出されていた。

「ああっ、ちくしょう!!」

悔しさに拳を叩く。ファング・クエイクの武装でもあるその拳は手のひらにぶつかった瞬間、鈍く大きな金属音を辺り一帯に響かせる。

「どうしてだ、ナタル！そいつがありながらなぜやつを止めなかった!」

半ば八つ当たりのようにイーリスはナターシャに怒鳴る。しかし返ってきた反応は冷たいものだった。

「私は『この子』を乱暴に使う気は全くないわ」

「お前がそいつを大事にしてんのはわかってる。でも……」

「それに、イーリが手を出すなど言ったのよ？」

「うっ……」

ナターシャの指摘にイーリスは自分が言ったことを後悔する。イーリスが反省しているところを見て、ナターシャは自分のケータイをポケットから出して電話帳を見て番号を確認する。

「誰に電話する気だ？」

「うっん……」

番号を打ち込んでいく。それを終えてナターシャは自分のケータイを耳に当てる。そして満面の笑みを浮かべてイーリスにその相手が誰なのかを告げる。福音が光に包まれて待機状態に戻る。それはネックレスで銀色の鐘が吊るされていた。

「白いナイトさん」

「誰だよ、それ？」

ナターシャは一夏に逐一ちくいち説明した。  
一夏のプログラミングに問題がなかったこと。亡国企業ファントム・タスクが福音を狙っていたこと。無事に追いついたこと。一夏にも気をつけてほしいということ。待機状態である銀色の鐘がチリーンと鳴った。まるで警告するよつに……。

第三十七話 終

### 第三十七話 沈黙を破る鐘（六巻開始）（後書き）

ええと、福音の待機状態を勝手に考えてしまった作者でした。申し訳まりません。さてテスト勉強が全く手に付かないのです。困りました。そして設定を考えるのも何かと苦労しました。意味やつづりが間違っていないといいです。次の更新はテスト後になってしまおうと思います。皆さんの感想お待ちしております。これからもISS「白を纏いしHeaven Sword」をよろしくお願いします。



第三十八話 平和な一時、長くは続かない（前書き）

久しぶりの更新。少し強引だった気がします。すいません。

第三十八話 平和な一時、長くは続かない

「えっ!?!一夏の誕生日って今月なの!?!」

「は、はい。まあ」

寮で夕食。とりあえずいつものメンバーで食事を摂とっていたら、突然シャルが大声をあげた。何をそんなに驚いているのか。シャルにしては珍しく立ち上がっている。

「い、いつ!?!」

「九月の二十七日です。とりあえず落ち着いてください」

「う、うん」

そう言ってイスにかけ直すシャル。

「に、日曜だよね!?!」

今度は立ちはしなかったものの、身を乗り出してくる。顔が近いです。

「そ、そうですね」

「そっか……。。うん、そうですね。うん!」

つぶやきながらうなづくシャルを不思議そうに眺める。<sup>なが</sup>そうしてると隣でビーフシチューを食べていたセシリアさんが話しかけてきた。

「一夏さん、そういう大事なことはもっと早く教えてくださらないと困りますわ」

「すみません」

どこかの平和主義者のようにすぐ謝る。

「とにかく、二十七日の日曜日ですわね」

セシリアさんは純白の革手帳を取り出すと、二十七日の欄にぐりぐり<sup>えが</sup>と二重丸を描いた。そんなに重要でもないと思っけど。

「お前は どうしてそういうことを黙っているのだ」

シャルの隣、僕の斜め右前のラウラさんがむすっとした口調で告げる。

「別にたいしたことではないと思ひまして」

「ふん。しかし、知っていて黙っていたやつもいることだしな」

「うー」「うー」

ラウラさんに一瞥いちぺつされて箒さんと鈴さんが視線を逸そらす。

みんなのメニューはと言うと、ラウラさんが季節のサラダパスタ、箒さんがサンマ定食、鈴さんが麻婆まーぼ定食だった。僕はだし巻き卵定食。ダシがおいしい。今度食堂のおばちゃんにでも創り方を教えてもらおうか。レパートリーが増えるのはいいことだし、何より勉強になるかもしれない。

「べ、別に隠していたわけではない！聞かれなかったただけだ」

「そ、そうよそうよ！聞かれもしないのに喋しゃべるとKYになるじゃない！」

なんか言い訳じみてる箒さんと鈴さんだった。……………なんだろう。

「とにかく！九月二十七日！一夏さん、予定は空けておいてくださいな！」

「えーっと、一応予定があるんですけど……………」

「お前は誕生日に予定があると言うのか？」

「はい、まあ。あ、でもいいのかな」

「何がだ？」

箒さんが訊いてくる。個人的にはいろいろとバレないか心配だ。

「一応、中学のときの友達が祝ってくれる予定で集合場所を決めてるんですけど、みなさんも来ますか？」

「も、もちろん！何時から！？どこで!？」

「四時くらいからです。場所は後日伝えます。当日は確か『キャノンボール・ファスト』がありますから」

全員が「そういえば」と言う顔をする。

ISの高速バトルレース『キャノンボール・ファスト』。本来なら国際大会として行われるそれはIS学園があるここでは少し事情が違う。市の特別イベントとして催され、学園の生徒たちは参加することになっている。でも専用機持ちにアドバンテージがあるため、一般生徒が参加する訓練機部門と専用機持ち限定の専用機部門にわかれることになる。学園外でのIS実習となるこのイベントでは、市のISアリーナを使用する。臨海地区に作られた会場はとても広くて、二万人以上を収容できるらしい。IS用のアリーナだから広いのは当たり前かもしれないけど。

「そういえば、明日からキャノンボール・ファストのための高機動調整をはじめると言っていましたけど、どうしたらいいんですか？」

「ふむ。基本的には高機動パッケージのインストールだが、お前の白式は必要ないだろう」

ラウラさんがプチトマトを頬ほりながら告げる。確かにウイングスラスター四機に両手両足の展開型スラスターがあれば十分だけど、やりすぎたかな？

「その場合は駆動エネルギーの分配調整とか、各スラスタの出力調整とかかなあ。でも一夏は常にやってるから必要ないかもね」

白身魚のフライをかじったシャルが、言葉を続けた。

「高機動パッケージといえば、セシリアさんのブルーティアーズにありましたね」

「ええ！わたくし、セシリア・オルコットの駆るブルー・ティアーズには、主に高機動戦闘を主眼に据すえたパッケージ『ストライク・ガンナー』が搭載されていますわ！」

ふふんと誇らしげにその腕で胸を押さえるセシリアさん。腰に手を当てた格好は相変わらずお嬢様だ。

(でも………落ち込んでないのかな)

最近のセシリアさんは、放課後一人で黙々と訓練を続けている。あとで調べてわかったことだけど、どうやら学園祭の時にオータム以外に襲撃者がいたらしい。そしてセシリアさんが逃してしまったということを聞いた。これはラウラさんに問い詰めて知ったことだけど、自分でも少し強引だった気がする。

『亡国企業』

『ファントム・タスク』

国家に寄らず、思想を持たず、信仰は無く、民族にも還<sup>かえ</sup>らない。ゆえに目的は不明。存在理由は不確かで、規模は所有しているISが三機ということしかわからなかった。裏では亡霊。そんな噂が立っているらしい。標的はISだとか。

(ファントム・タスク・・・・・・・・・・・・・・・・か)

「セシリアはいいわよねえ。うちの国はなにやってんだか。結局『<sup>シエンロン</sup>甲龍』用高機動パッケージは間に合わないし。シャルロットのところは？」

「『リヴァイブ』は第二世代で元々これ以上の開発はないから、増設ブースターで対応するよ。まあ、元々速度関係は増設しやすいようになってるしね。『<sup>ラファール</sup>疾風』の名前は伊達<sup>だて</sup>じゃないって感じかな」

シャルの愛機の正式名称は『<sup>ラファール・リヴァイブ</sup>疾風の最誕』。納得。

「ふーん。あ、ラウラんとはどうすんの？そっちも第三世代でしょ？」

「姉妹機である『シユバルツエア・ツヴァイク』の高機動パッケージを調整して使うことになるだろうな。装備自体はあっちの方が本国にいる分、開発も進んでいる」

ツヴァイク                   ドイツ語で『枝』の意。ラウラさんの『<sup>レーゲン</sup>雨』

と対を成すIS。武装とかは国家機密なんだろうなあ。

「そういえばさ、一夏。あんた生徒会の貸し出しはまだなわけ？」  
「はい。今は抽選と調整をしてるって聞きました」  
「ふーん……」

そう言いながら鈴さんはラー油がたくさん乗った麻婆豆腐まーぼをぱくりと頬ほばる。辛くないのかな。

「部活に入ったって聞きましたけど、みなさんはどの部活へ？」  
「私は最初から剣道部だ」

篤さんは剣道部。幽霊部員だったけど。最近はよく顔を出しているらしい。学園祭の時に部長さんにあれだけ言われたからか。

「鈴さんは？」  
「ら、ラクロスよ」  
「似合いそうですね」

活発なところとか。

「ま、まあね。あたしってば入部早々期待のルーキーなわけよ。ま  
いっちゃっわね」



確かに、専用機持ちといえばその身体能力は一般生徒と一線を画している。そういえば特定のスポーツをやりたいと思っただことがないね。

「シャルは？」

「えっ、僕!？」

「なに部に入ったんですか？」

「え、えつと、その……」

「？」

言いにくいことなのか、シャルはモジモジと指をもてあそぶ。時折<sup>つか</sup>窺<sup>が</sup>うような上目遣いで見つめては、視線を返すとうつつむく。その繰り返し。どうしたんだろう。

「そ、その……料理部」

「料理部ですか。学園祭の時に一緒に回りましたね」

「わあっ、一夏っ!し〜!し〜!」

あれ?なんでシャルは『言わないでよ!』ってジェスチャーをするんだろう。なぜだか後ろのテーブルでがたたと立ち上がる音が聞こえたような気がした。

「どうして料理部に？」

「う、うん。日本の料理も覚えたくて」

「なるほど。何か作れるようになったら食べさせてもらってもいいですか？」

「う、うん！もちろんだよ！」

シャルはそう言って力強くうなずいた。さっき、『声が大きいよ！』というジェスチャーをしていた人物とは思えないほど、その声は大きかった。

「セシリアさんは？」

「わたくしは英国が生んだスポーツ、テニス部ですわ」

「もしかしてイギリスにいたときからやってたんですか？」

「その通りですわ。一夏さん、よろしければ今度ご一緒にいかがですか？」

「僕ですか？でも僕がやるとラケットのガットに穴が開くんですよ」

ちょうどボール一つ分の穴が。と言ったらセシリアさんは苦笑いをしていた。なんでだろう。

「ちなみに私は茶道部だ」

そう言ったのはラウラさんだ。ちょうどパスタを食べ終えたところらしい。僕は食後のお茶を飲んでいる。

「ラウラさんって日本の文化が好きなんですね。そういえば茶道部

の顧問って確か

「

「教官……いや、織斑先生だな」

前にも訊いたけど、やっぱり姉さんが茶道部というのはなんとも不思議な感じがする。聞いた話だと、ファンの女生徒が一斉に殺到して、正座二時間でふるいにかけてらしい。僕としては運動部の顧問でスパルタ指導。こっちの方が想像できる。失礼だけだね。

「ラウラさんは正座とかは平気そうですね」

「無論だ。あの程度の痺れなど、拷問に比べれば容易い」

いや、拷問って。ラウラさんが言つと洒落になりませんか？

「でも茶道部ということは着物を着るってことか」

「見たいのか？」

「似合うと思いますよ？」

「そ、そうか……。い、一着ぐらいはあるといいかもしれないな……。今度買つとしよう……」

「わざわざ買つんですか？」

「気にするな。今後使う機会がないともいえないことだしな」

「そうですね……。さて、僕はそろそろ失礼しますね」

僕は全員に軽く手を振ってその場を後にする。今は廊下。歩いていると不意にポケットのケータイが鳴った。画面を見る。

(未登録に非通知……誰だろう?)

警戒しながら通話ボタンを押す。聞こえてきたのは明るい声だった。

『ハロー、白いナイトさん。今そっちは夜?』

「その声……ナターシャさん?」

『覚えてくれたんだ。嬉しい』

「ちよつと待つてください。なんで僕の番号を知ってるんですか?」

『ブリュンヒルデに教えてもらったのよ?』

納得。でも姉さんが僕の番号を教えるとは思わなかった。あんまり教えていいものだとは思わないけど。

『それでね、少し報告したいことがあるの』

ナターシャの声が真剣なものに変わる。一夏もまじめな顔で聞いている。本人が戦っているときと同じ顔だ。

『ついさつき、アメリカのIS保有基地が亡国企業ファントムタスクの襲撃にあったの。狙いはあの子。福音だったわ』

「それで……状況は」

『無事に撃退。重傷を負った人がいるけど、怪我人だけで死亡者はゼロ。あの子も盗まれずに済んだわ』

「それはよかったです」

一夏はその報告を聞いて安心する。死人が出ていないのは一夏にとつて何よりも朗報だった。

『あなたのおかげよ、一夏くん』

「僕は何もしてません」

『あら、あの子を救ってくれてそのうえ私を信頼して システムなんて世界を変えちゃうようなプログラムを渡したのは誰かしら』  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少しの間の沈黙。一夏はナターシャの楽しそうな声を聞いて、彼女の楽しそうな笑顔を容易に想像することができた。

『何はともあれ、ありがとう。あなたも気をつけてね』

「はい。ありがとうございます」

『お礼は言うのはこっち。それじゃあ長話もなんだから、またね』  
「では、また」

ケータイをウエストポーチにしまう。

(亡国企業の狙いはやっぱりIS・・・・・・・・・・か)

白式も狙われている。もし、自分が本気で亡国企業を潰すというのなら……その時は……

(この学園から出て行く必要があるかもしれない)

ここにいるみんなを巻き込むわけにはいかない。IS委員会や日本政府とは話し合え(多少圧力をかければ白式を個人で所有することが出来る。亡国企業の眼を全て僕に向けさせて自分が出て行けばいい)。

(……今はいいか)

深く考えることを止める。たった一つのことを考えた場合、集中し過ぎて、周りが見えなくなってしまう。一夏の数少ない悪い癖である。そのため常に複数のことを同時に考えるようにしている。とりあえず自室に入る。

「おかえりなさい。あ、お邪魔してるわよ」

「なんでいるのか説明してくれるとありがたいです。楯無さん……」

IS学園生徒会長、更識楯無<sup>オノシキタテナシ</sup>さん。最強の肩書きを持つ一つ上の先輩。自由奔放な快樂主義者。猫みたいな人である。僕の部屋に入り込むのは当たり前のようになっている。楯無さんはベッドに寝転が

ってファッション雑誌を読んでいた。

「……………」

「どうしたの？あ、もしかしてパンツ覗のぞこつとしてる？」

「覗かれるのがイヤならせめてズボンを穿いたらどうですか？」

「それじゃあ一夏くんに見せられないじゃない」

この人は何を言っているんだ？

「問題です。楯無おねーさんの下着の色は何色でしょう？」

「……………知りませんよ」

「今ちよつと見たでしょ？」

「見てません。桃でも食べますか？」

「桃の旬は夏よ？……………ああ、遠まわしにピンクって言いたいのね。……………正解っ！えっちい」

僕は何も見ていない。桃もちゃんとする。まさか合っているとは思わなかった。というか部屋に来るたびにこんなんじゃ身がもたない。

「さて、今日はちよつとお話があつて来たのよ」

「パンツのですか？」

「冗談よ。ちよつと真面目まじめなお話。例の組織まじめについてね」

「……………亡国企業ファントム・タスクですか？」

「察さつしいわね。非公式な情報さつだけど、先刻

「アメリカのIS保有基地が亡国企業ファントム・タスクのメンバーに襲撃された。そ

の狙いは恐らくIS。しかしISは無事なまま」

「あらら？どうして知ってるの？」

「僕が楯無さんのことを知っていた。と言えは伝わりますか？」

本当は現場にいたナターシャさんに教えてもらったというのが正しい。でも楯無さんは納得してくれたみたいだ。

「まあ、私が言いたいのは一夏くんは自分のISが奪われた、なんてことにならないように気をつけて」

「大丈夫です。問題ありません」

降りかかる火の粉は払えばいい。それだけだ。

「よろしい。男の子はそうでなくちゃね」

私が惚れちゃうくらいいい男になってね、と付け加える楯無さん。無理だ。そもそも楯無さんの理想というものが想像できない。そもそも楯無家は家柄だ。跡継ぎあとつぎに関しては厳しいはず。どんな相手なら認めてもらえるんだろう。全然思いつかない。どこかのお偉いさんぐらいか。

「あら、おねーさんの心配？大丈夫よ。私だってただの女なんだから、収まる場所に収まるものよ」

「そうですね」



「案外、一夏くんを好きになったりしてね」

「ははは。何を言っているんですか」

「あー、なによその反応。傷つくわねえ」

「でも楯無さんに限ってそれは」

「そついうこと言う子には、くすぐり地獄が必要かしらねー」

手を握ったり開いたりしている楯無さん。その目は獲物えものを見つけた猫ねこよろしく細められている。

「さーて、一夏くんの体を堪能たんのうしようかしら？」

ワキワキと動かしている手を僕に伸ばしてくる楯無さん。・・・  
・逃げないと。

コンコン。

「一夏、ちよっといい？」

突然のノックとともに聞こえてきたのはシャルの声だった。

「あ、はい。鍵は開いているのでどうぞ」

部屋の前で待たせるわけにはいかないので一夏はシャルロットを部屋に入れた。

「え、えと、お邪魔します」

「いらつしゃーい」

「え………」

微笑を浮かべる楯無さんを見て、シャルが固まる。きよとんとした顔は見る間に表情を失っていき、恐ろしい無表情へと変わっていった。

「一夏、なにしてたの………?」

「え〜っと……ざ、雑談です」

「ふうん………。じゃあ僕に入っていって言ったのはなんぞ?」

「なんでって………シャル、もしかして何か怒ってますか?」

「どうして?そんなことないよ。僕は全然怒ってないよ」

シャルの顔は僕が敵対関係の相手にする時の顔に非常によく似ていた。要するに無表情だけど怒っていたり、憎んでいた。とりあえずシャルは怒っていないと言いながら本当はすごく怒っていることがよくわかった。

「じゃあ私はそろそろ帰るわね。シャルロットちゃん、ごゆっくり」

「はい」

元凶の楯無さんはまるで逃げるようにさっさと部屋を出て行ってしまった。相変わらず無責任だ。

「……………」  
「……………」

き、気まずい。

「とりあえず、どこかに座ってください。紅茶でも淹れます」  
「うん。でも紅茶はいいや。一夏も座ったら?」  
「わ、わかりました」

とりあえず僕はベッドに座る。すると意外なことにシャルは正面ではなく隣に座ってきた。

「え、えつと……………」  
「なに?」  
「え、いや、その……………」

何かを話していないとすぐ気まずい。シャルはずっと黙っていて、無言の圧力というものがある。何かないのか。

「……………」  
「そ、そういえばシャルは何か用事があったんですか？」  
「……………」  
「夏」

「はい」  
「意気地なし」

グハッ！

「す、すいません……………」

なんだろう。すごくクル物があった。言われるとすごく落ち込む。  
僕は頭を伏せた。

「ぶっ」

突然、シャルは可笑しおかそうに吹きだした。

「あはは。一夏ったらおもしろい」

「………それで、なんで怒ってたんですか？」

「一夏が楯無さんとはっかり仲良くしてるからだよ」

「そんなことはないです。楯無さんは基本、誰とでも仲良くしてま  
す」

「………そういう意味じゃないんだけどなあ………」

あれ？シャルが何か言ったような気がするけど、小声だったからわ  
からなかった。

「そ、それでさあ、話なんだけど」

今度は急にモジモジと شدしたシャルが、指を弄もてあそびながら横目で僕  
に訊いてきた。

「一夏って何か誕生日にほしい物ってある？その………あんな  
まり思いつかなくて」

「ほしい物ですか？うーん………」

考えてみる。正直ほしい物なんて特にない。

「シャルのプレゼントなら僕は何でもいいですよ」

「でもどつぜなら一夏がほしい物の方がいいし。だ、だから・・・!!」

シャルはぐぐつと顔を寄せて告げた。

「今度の週末に駅前に見に行こうよ。僕も服とか見に行きたいし」  
「今週末は・・・ちよつと・・・」

土曜日は一日中テレシア、日曜日は休もうと思えば休めるけど今週の日曜日は少し出かけないといけない。はつきり言つと僕がそこへ行かないとこの国が滅んでもおかしくない。それだけ重要な用事がある。

「・・・土曜日は？」

「テレシアで仕事です」

「日曜日は？」

シャルの声はその温度を失っていく。

「ひ、人に会わないといけないので」

「まさか他の子と」

「ち、違います。本当に行かないとまずいんです」

「・・・」

「今度埋め合わせをします。だから・・・」

と言って僕は手を合わせてシャルに謝る。シャルは少し考えた後、仕方ないといったようなため息をして僕に言った。

「それじゃあ、いつでもいいから……僕をテレシアに招待して」

「え？」

「その時は一日中……僕の……」

何が恥ずかしいのはわからないけど、シャルは顔を真っ赤にして俯うつむいてしまった。

「わかりました。いいですよ」

「ほ、本当！？絶対だよ！や、約束だからね！」

さつきとは全く違い、シャルの勢いはすさまじいものだった。そして、はいと小指を差し出してきた。日本の風習で指切りを教えてから、シャルは妙にこれがお気に入りらしい。予定が合わなかったのは僕が悪いので喜んでそれに付き合う。

「指切りげんまん、ウソついたらクラスター爆弾のーますっ」

ただこの決まり文句はやめてほしい。怖い。シャルって怒ると一番

怖い気がする。

「指切った」

「はい」

「えへへ。いつになるのかなあ」

早めにしたほうがいいだろう。下手するとクラスター爆弾が僕の胃にダイブすることになる。

「い・ち・か〜！起きてる？起きてるわよね！今週末だけ一緒に

」

バーンとドアを開けて入ってきたのは鈴さんだった。しかし、至近距離で並んで座るシャルを見てぴしりと顔を引きつらせた。

「何してんの？」

「………何もしてませんよ」

一夏が普段と全く変わらない笑顔で鈴に答える。シャルロットは一夏がテレシアに関してバレないように必死になっていることを感じ取り、苦笑いしそうになった。

「ふーん………」



鈴は一夏とシャルを交互に見ながら探りを入れた視線で一夏を見る。

「まあ、いいわ。それより週末は空あいてるの、一夏

「いえ、今週末は空いてないです」

「そう。……………わかったわ」

一夏は鈴のあつさりした反応に違和感を感じた。シャルロットと同じように何かを頼まれると思ったからだ。

「それじゃあ、また今度にするわ。じゃあね、一夏

「はい。すみません」

鈴は一夏の部屋を出ようとする。しかしまるで何か思い出したように振り返り、シャルロットの方を見る。

「シャルロット、ちょっと話があるから来て」

「え？僕？」

「そうよ。ほらさっさと行くわよ」

そう言って鈴はシャルロットの手を取って一夏の部屋を出て行く。少し歩いて鈴はシャルロットの手を放はなしてシャルロットに向き直る。

「どうしたの？鈴」

「少し……提案があるんだけど」

「提案？」

「そう。シャルロット、一夏が週末に何をしてるか気にならない？」

「それは……気になるけど」

実際、シャルロットは一夏がテレシアで働いていることは知っている。しかしそれを知っているのは自分だけでいいと思っている。ちよっとした乙女のがままである。

「だからさ、今度の週末に一夏を跟けてみない？」

「え？」

にやりと鈴の唇が楽しそうに歪む。シャルロットはあまりの提案に驚くことしかできなかった。

「実は一夏が週末に忙しそうにしてるのはあたしが中学の頃からなのよ。もうその時から気になって気になって……」

「でも跟けるってそれはいわゆるストーキングだよ？いいの？それに一夏なら気づきそうだけど……」

「痛いこと言うわね。でも、あたしはやる。やってやるわ。昔からはぐらかされてきたけど、さすがに限界だわ」

ここまで隠してきた一夏に苦笑いしかできないシャルロット。

「あなたはどうするの？別にあたしだけでもやるけど？」  
「………僕は」

シャルロットは一夏の仕事を具体的には知らない。それを知りたいと思う。結果

「僕も行くよ、鈴」

誘惑に負けるのであった。

「じゃあ、決まりね。土曜日はあたしの高機動パッケージの<sup>セッ</sup>実装と<sup>ト</sup>インストール  
量子変換、それに<sup>ト</sup>試運転で忙しいから日曜日ね」

「え？日曜日なの？」

「なによ、都合でも悪いわけ？」

「う、ううん。全然、大丈夫」

「そう？あなたがそう言うならいいけど」

土曜日ではなく、日曜日。つまり一夏が誰かと会うという日である。テレシアでの一夏を見ることはできないが、一夏がどうしても会わないといけない人というのはやっぱり気になる。跟<sup>っ</sup>けることに関しては罪悪感があるシャルロットだった。

「それじゃあ、決まりね」  
「……………うん」

ここに織斑一夏調査隊（ストーカー隊）が結成された。

第三十八話 終

第三十八話 平和な一時、長くは続かない（後書き）

はて、なぜこうなった？ 鈴ってこういうキャラだった？ と何度も自問した作者でした。 次回はどのようになるかは頭の中にはあるんですけど、文章にならないのが作者の悩みです。 とりあえず、次回も頑張ります。 では次回まで。

第三十九話 追跡、そして偶然（前書き）

更新が遅れてすみません。とりあえず本編です。どうぞ。

### 第三十九話 追跡、そして偶然

日曜日、朝の七時半。織斑一夏の自室。

「これで……よし」

ウエストポーチのベルトをきっちり締めたのを確認し、一夏は自室から出る。校舎を出て、IS学園のゲートへ向かい、受付の人に（形だけの）手続きを終わらせて外出許可を取る。ゲートを出て一夏は白式のプレスレットの機能を使って瞬時に私服に着替えた。

「……あ、出てきた」

「やっぱり出るの早いわねえ」

「どこへ行くんだらうな」

「やっぱり彼女のところじゃない？」

影から一夏を見ている人物が四人いる。そう、四人だ。シャルロット、鈴、ラウラ、楯無である。織斑一夏調査隊（ただのストーカー軍団）はいつの間にか四人に増えていた。

「で、なんでラウラと生徒会長さんがいるわけ？」

怪訝けげんな表情で鈴がふたりに訊く。

「朝シャルロットがなにやら挙動不審にしていたからな。ついてきたらここにいた」

「なんか鈴ちゃんとのふたりがすっごく楽しそうにしてたのよ？これはついて行くしかないじゃない」

バツと扇子を開く楯無。そこには『娯楽』・・・と書かれていた。

「まあ、いいけど・・・」

来てしまったのなら仕方ない。そう自分に言い聞かせて鈴たちは歩き出す。一夏を追って・・・。

街中。

一夏は目的地に向かって進む。

「あ・・・そうだ」



一夏はポケットから携帯を取り出し画面を開く。何を書くか考えながらデータを添付させてメールを送る。

(これでよし………)

今度は電話帳を見て目的の相手のケータイに電話をかける。数回のコールでその相手は電話に出た。

「あ、織斑です。もう少し時間がかかると思いますが」

『ああ、大丈夫大丈夫。ゆっくり来なさい』

「わかりました。では、失礼します」

簡単にまとめてケータイをポケットにしまう。

「ん？」

ふと感じた視線。少し後ろを振り返る。見えるのは町を<sup>ゆ</sup>行き<sup>か</sup>交う人々たち。日曜日だというのに朝から人が多い。

「………まあ、いいか」

一夏は気にせず進む。目的地まであと少し。

とあるお店。

そこには一夏の友人である五反田<sup>ごだんだ</sup>弾<sup>だん</sup>の妹である五反田<sup>ごだんだらん</sup>蘭<sup>らん</sup>がいた。

彼女のバックの中のケータイがメールの着信音を奏でる。いつも待っているその着信音。それをバックから取り出して蘭は改めてその相手を確認する。

「一夏さん……！！」

慌てて白と黒の縞<sup>ストライプ</sup>パンツを棚に戻す。ちょうど商品入れ替えセール  
のそれは機能性に優れながらも三枚三千円と言うお値打ち価格だっ  
た。彼女がいるのは女性用下着売り場だった。好きな相手のメール  
をパンツを持ちながら見るのはよろしくない。画面を開いてその内  
容を確認する。

こんにちは、蘭さん。

この前は学園祭の招待券を渡せなくて申し訳ありませんでした。

代わりというわけではありませんが、今月行われる『キャノンボール・ファスト』の特別指定席のチケットのデータを添付しておきます。

よかつたら見に来てください。当日は警備員の一人に見せれば入れると思います。では、また。

蘭はデータを確認して一人ガッツポーズをした。蘭は学園祭には来れなかったが、あとで女子特有情報網ティーンズ・ネットワークで得た情報で執事服の一夏が接客しているという情報を得た。まず弾がチケットを持っていたことを知ってから一回。執事の写真を見てから一回。計二回弾に渾身のパイルドライバーを（どうやったかは知らないが）決めた。

（そういえば、この日って一夏さんの誕生日よね）

ケータイを両手で胸の前で強く握り締める。

（プレゼント、何にしようかな）

その胸に確かな恋心を抱きながら蘭は一夏の誕生日プレゼントを考えた。

「一、二！一、二！」

「たああああ　　！」

「目標補足！撃ちます！」

IS第三アリーナ。そこでは休日にも関わらず、上昇志向の強い生徒たちがIS訓練に明け暮れている。

「はあ………はあ………」

その一角で息が上がっているのはセシリアだった。何度もビット連動の高速ロール射撃を行っては、そのレーザーに曲がれと念じる。しかし、一度もBT偏フレキシブル向射撃は成功しておらず、その顔には刻一刻と疲労の色が濃くなっていく。

「………」

再度、意識を集中し、B Tライフル『スターライトmk?』をセシリアは構える。水のイメージを連想し、バルーンの上方向へと射撃を行った。

( 曲がって! )

しかし、セシリアの思いもむなしく、レーザーはまっすぐに突き進み、遮蔽シールドに当たって霧散した。

「……大丈夫か、セシリア?」

聞き覚えのある声にセシリアはその声のした方を見る。そこにいたのは紅椿を身に纏った箒がいた。

「箒さん……」

「顔色が悪いな。少し休んだらどうだ?無理は体に毒だぞ」

自分に近づいてくる箒を見てセシリアはふと思った。

( そつえば……箒さんのあのビットはシールドビットにもなりましたわね。なら…… )

「篝さんはどうしてここに？」

「私か？私は実戦形式で紅椿のエネルギー分配を考えるつもりだ。本当は第六アリーナを使いたかつたんだが、満員でな」

「そうですか。ではわたくしと模擬戦をしてくださいな」

「構わないが。お前……今の状態で大丈夫なのか？」

「問題ありませんわ。これでも代表候補生なので」

セシリアは『スターライトmk?』を再び構える。

(篝さんの紅椿のシールドビツトは自動防御機能付き。シールドビツトを相手にするならこれ以上いい相手はいませんわ)

周りで訓練をしていた生徒たちは専用機持ち同士の模擬戦を見るため一度その場を離れる。

「では……いくぞ？」

「いつでも……！」

ふたりが同時に飛び出す。

(負けられませんわ。この学園の誰にも！)

自分を奮い立たせてセシリアはスターライトmk?を放つ。今度こ

そのあの襲撃者に、サイレント・ゼフィルスの操縦者に勝つために。

場所は戻って街中。

(気づかれた?)

(わからない。こっちをチラッと見ただけだし・・・)

(やはり鋭いな、さすが師匠だ。しかしいったい誰と連絡を取ったんだ?)

(彼女と話してるようには見えないわね。結構真剣な表情だったし)

鈴、シャルロット、ラウラ、楯無は物陰に隠れながら一夏を追っている。しかしこの四人の美少女が固まって歩くとどうも目立ってしまふ。

「ねえねえ、キミたち」

「今日ヒマ?今ヒマ?どっか行こうよ」

するとこういった『遊び人』といった風体の男が声をかけてくることが起きる。今のご時勢、女性優遇制度の各国では男性の地位は限りなく低いものとなってしまった。しかし、それなりの容姿があれば権力者、女性から愛される、俗に言うホストやアイドルなどは以前にも増してかわいがられるようになった。

「すみません。今私たち忙しいので」

極めて穏便に済ませようとシャルロットは柔和な態度で答える。しかしこの間に一夏を見失ってしまったことに腹を立てていた。

「えー？いいじゃん、いいじゃん、みんなで遊びに行こうよ」「俺、車向こうに駐<sup>と</sup>めてるからさあ。どっかパーツと遠くに行こうよ！フランス車のいいところいっぱい教えてあげるから！」

フランスの　　というところで、びっくりとシャルロットが反応した。

「日本の公道で燃費の悪いフランス車ですか。ふうん」

拒絶一〇〇パーセント、作り笑顔全開のシャルロットが吐いた毒に、ふたりの男が若干たじろぐ。

（なんか、シャルロットちゃんて結構黒い時があるわよねえ）

（ええ。たぶんあたしたちの中で一番黒いと思いますよ）

（今頃得意の『ラピッド・スイッチ』で男たちをどうやって蜂<sup>はち</sup>の巣にするか考えているんじゃないか？）



小声で話している鈴たちが考えていることは当たっていた。シャルロットは男たちをどういう風に撃つか想像して、五回ほど虐殺をイメージしていた。そんなシャルロットの表情が『脈アリ』に見えたらしい男の一人が、その肩に手を置こうとしていた。

「いでででででっ!?!?」

シャルロットは触れられる寸前で身をかわし、その腕をねじ上げる。いわゆる総合近接格闘(CQC)というやつだった。

「触らないでくれますか?そのきつい香水の匂においが移ると困るので」「な、な、ななっ……!?!?」

(止めに行く?)

(あたしは遠慮しておきます)

(鈴に賛成だ)

そんな中、混乱しながらもチャラ男Bが相方を助けようとする。

「お、おい!離し　　がつ!!--!」

ゴキリ

と嫌な音がした。見るとチャラ男Bの肩に踵かかとが入っていた。踵落とした。しかもそれを決めた人物はなんと宙に浮いていた。その人物は専用機持ち四人にとって見覚えのある人物に見えた。

(( ( (一夏く!?) )) )

宙に浮いている人物は一夏に似ていた。しかしどこか違う。髪は茶色で目は藍色。その人物は着地すると瞬時に四人の視界から消える。次の瞬間にはチャラ男A（シャルロットに腕をねじ上げられている方）の後頭部に手刀を決めていた。チャラ男Aはドサリと地面に倒れる。

「……………誰？」

楯無がその男に訊く。男は優しそうな笑顔で名乗ろうと口を開く。しかしそれは少し遠くから聞こえた声で遮おさえられた。

「レイフオーン！」

四人はその声のした方向を見る。同時にその男がレイフオンであるということを知った。その女性はラウラのように眼帯をしているがそれは右目。社交的な雰囲気だがその顔は今では怒っているように見える。しかし同時に心配していることがわかった。

「どうしていきなり飛び出したの!」

「いや………なんか困っているように見えたから」

「それでも一声かけて!心配するでしょう!」

「ごめん、リーリン」

リーリンに頭を下げるレイフォン。そのふたりを四人はただ呆然とふたりを見ていた。しばらくするとリーリンが四人のほうを向いた。

「まずは挨拶あいさつからですね。私はリーリン・マーフェスです。よろしく」

「あ、どうも。あたしは鳳鈴音フヤン・リン・イン。鈴でいいです」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「更識楯無。IS学園の生徒会長よ」

「シャルロット・デュノアです。さっきはありがとうございました」

「いえいえ。はじめまして、僕はレイフォン・アルセイフです。よろしく」

その時、四人はリーリンとレイフォンに出会った。後に四人は自分たちが知りたがっていたこと知ることになる。

### 第三十九話 追跡、そして偶然（後書き）

久しぶりなのに短くて申し訳ありません。忙しい。はあ。平穩がほしい。まあ愚痴は程々にしないとだめですよ。よし。本編の話を書きます。

あのシーンが一夏ではなくレイフォンです。シャルロットは惚れません。一応。自分としては助け方がレイフォンらしくなかったかと悩んでいます。おまけに文章が思いつかない。書けないんです。こんな感じに一週間以上空けることがあると思います。すいません。それでも、この作品を楽しんでいたけると嬉しいです。それでは、また次回で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6683s/>

---

IS「白を纏いしHeaven Sword」

2011年10月30日03時17分発行